

釜石市 東日本大震災 検証報告書

【地 域 編】

(平成 26 年度版)

平成 27 年 3 月

釜 石 市

はじめに.....	1
第1章 検証の概要.....	2
第1節 検証の目的.....	2
第2節 検証の方法.....	2
第1項 検証の体制.....	2
1 「釜石市東日本大震災検証委員会」の設置	2
2 外部有識者からの助言体制	2
3 庁内の体制	3
4 事務局の体制	3
第2項 検証の方法.....	3
1 検証の対象	3
2 検証の方法	3
(1) 庁内検証委員会での検証作業.....	3
ア 資料収集・整理	4
イ 資料の分析	4
(2) 検証委員会での検討.....	4
第2章 避難行動に関する整理分析.....	6
第1節 「避難行動」に影響する要因について.....	6
第1項 避難をうながした要因（避難行動促進要因）	7
1 知識・伝承・経験から素早い避難に結びついた事例	7
(1) 地震直後、津波が来ることをすぐに思い浮かべ避難した事例	7
(2) 小さい頃からの祖父母、親からの言い伝えや地域で共有していた情報が生きた事例	8
2 地震直後の「情報」や「避難誘導」が避難に結びついた事例.....	9
(1) 家族・住民・地域（消防団・消防等）等からもたらされた情報、避難誘導により避難し、助かった事例.....	9
(2) 津波の状況（目から入る情報（目視））により避難、更に高台へ逃げた（二度逃げした）事例.....	10
(3) 地域の方が避難しているのを見て、つられて避難した事例（目視）、手助けがあり避難できた事例.....	11
(4) 防災行政無線やテレビ・ラジオからの情報により避難した事例	11
3 その他	11
第2項 避難をさまたげた、又は避難が遅れた要因（避難行動阻害又は遅延要因）	12
1 知識・伝承・経験が、マイナスに作用した（避難に結び付かなかった）事例.....	12

(1) 過去の浸水・災害実績・伝承が、安心材料となって被災又は避難が遅れた事例...	12
(2) 防災構造物への過信、ハザードマップ等の信用により、結果として被災又は避難が遅れた事例.....	14
2 地震後の情報が「マイナス（避難行動に結びつかなかった）」に作用した事例（「情報」を頼りにして、結果として被災又は避難が遅れた事例）.....	15
3 一度避難していながら、何かしらの理由で戻る、あるいは外出先から家に戻るなどして被災又は避難が遅れた事例.....	16
4 別なことに気を取られて、あるいは何かをしていて被災又は避難が遅れた事例.....	16
5 様々な理由から避難を躊躇して被災又は避難が遅れた事例.....	17
6 避難誘導、水門閉鎖等に携わった方、身体が不自由、歩行困難な方あるいはその支援（避難補助）者が被災又は避難が遅れた事例.....	17
第3項 その他、様々な要因から被災又は避難が遅れた事例等.....	18
1 車で移動中に被災又は避難が遅れた事例.....	18
2 海の様子を見に行く、あるいは海の様子がわからなかったことなどから、被災又は避難が遅れた事例.....	18
3 避難した場所・避難ルートに津波が押し寄せ被災又は避難が遅れた事例.....	19
4 その他の事例（複合的な要因を含む）.....	19
第2節 見解がわかれた事項あるいは留意事項.....	20
第1項 防災行政無線について.....	20
第2項 避難訓練について.....	21
第3項 避難場所について.....	21
第4項 「避難をしない」方、津波の怖さについて実感がない方について.....	22
資料：地域の避難行動実態にみる津波避難の教訓.....	23
第3章 各地域における震災前・震災時の状況（概要）.....	30
第1節 東部地区.....	31
第1項 沿岸地区（新浜町、東前町、魚河岸・浜町）.....	31
1 震災前（備えほか）.....	31
(1) 津波記念碑.....	31
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	31
(3) 平成23年3月3日の避難訓練.....	31
(4) 自主防災組織.....	31
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）.....	32
(1) 避難行動.....	32
(2) 避難所.....	32

第2項 市街地区（港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町）	32
1 震災前（備えほか）	32
(1) 津波記念碑	32
(2) 地域・世代間における言い伝え	32
(3) 平成23年3月3日の避難訓練	33
(4) 自主防災組織	33
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	33
(1) 避難行動	33
(2) 避難所	34
第3項 嬉石・松原・大平地区	34
1 震災前（備えほか）	34
(1) 津波記念碑	34
(2) 地域・世代間における言い伝え	34
(3) 平成23年3月3日の避難訓練	34
(4) 自主防災組織	35
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	35
(1) 避難行動	35
(2) 避難所	35
第2節 平田地区	37
第1項 平田地区（大字平田第1～6地割）	37
1 震災前（備えほか）	37
(1) 津波記念碑	37
(2) 地域・世代間における言い伝え	37
(3) 平成23年3月3日の避難訓練	37
(4) 自主防災組織	37
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	38
(1) 避難行動	38
(2) 避難所	38
第2項 尾崎白浜地区（大字平田第7～8地割）	38
1 震災前（備えほか）	38
(1) 津波記念碑	38
(2) 地域・世代間における言い伝え	38
(3) 平成23年3月3日の避難訓練	38
(4) 自主防災組織	38
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	39

(1) 避難行動.....	39
(2) 避難所.....	39
第3項 佐須地区（大字平田第9地割）	39
1 震災前（備えほか）	39
(1) 津波記念碑.....	39
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	39
(3) 平成23年3月3日の避難訓練.....	39
(4) 自主防災組織.....	40
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	40
(1) 避難行動.....	40
(2) 避難所.....	40
第3節 鵜住居地区.....	40
第1項 鵜住居地区（鵜住居町第1～19・23・24地割）	40
1 震災前（備えほか）	40
(1) 津波記念碑.....	40
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	40
(3) 平成23年3月3日の避難訓練.....	40
(4) 自主防災組織.....	40
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	42
(1) 避難行動.....	42
(2) 避難所.....	42
第2項 根浜地区（鵜住居町第20～22地割）	42
1 震災前（備えほか）	42
(1) 津波記念碑.....	42
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	42
(3) 平成23年3月3日の避難訓練.....	42
(4) 自主防災組織.....	42
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	43
(1) 避難行動.....	43
(2) 避難所.....	43
第3項 両石地区（両石町第1～3地割）	43
1 震災前（備えほか）	43
(1) 津波記念碑.....	43
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	43
(3) 平成23年3月3日の避難訓練.....	43

(4) 自主防災組織.....	43
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	44
(1) 避難行動.....	44
(2) 避難所.....	44
第4項 水海地区（両石町第4地割）	44
1 震災前（備えほか）	44
(1) 津波記念碑.....	44
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	44
(3) 平成23年3月3日の避難訓練.....	44
(4) 自主防災組織.....	44
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	45
(1) 避難行動.....	45
(2) 避難所.....	45
第5項 片岸地区（片岸町第1～9地割）	45
1 震災前（備えほか）	45
(1) 津波記念碑.....	45
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	45
(3) 平成23年3月3日の避難訓練.....	45
(4) 自主防災組織.....	45
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	46
(1) 避難行動.....	46
(2) 避難所.....	46
第6項 室浜地区（片岸町第10地割）	46
1 震災前（備えほか）	46
(1) 津波記念碑.....	46
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	46
(3) 平成23年3月3日の避難訓練.....	46
(4) 自主防災組織.....	46
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	47
(1) 避難行動.....	47
(2) 避難所.....	47
第7項 箱崎白浜地区（箱崎町第1～3地割）	47
1 震災前（備えほか）	47
(1) 津波記念碑.....	47
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	47

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練.....	47
(4) 自主防災組織.....	47
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	48
(1) 避難行動.....	48
(2) 避難所.....	48
第 8 項 仮宿地区（箱崎町第 4 地割）	48
1 震災前（備えほか）	48
(1) 津波記念碑.....	48
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	48
(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練.....	48
(4) 自主防災組織.....	49
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	49
(1) 避難行動.....	49
(2) 避難所.....	49
第 9 項 箱崎地区（箱崎町第 5～12 地割）	49
1 震災前（備えほか）	49
(1) 津波記念碑.....	49
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	49
(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練.....	49
(4) 自主防災組織.....	49
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	50
(1) 避難行動.....	50
(2) 避難所.....	50
第 10 項 桑の浜地区（箱崎町第 13 地割）	50
1 震災前（備えほか）	50
(1) 津波記念碑.....	50
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	50
(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練.....	50
(4) 自主防災組織.....	50
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	50
(1) 避難行動.....	50
(2) 避難所.....	51
第 4 節 唐丹地区.....	51
第 1 項 花露辺地区.....	51
1 震災前（備えほか）	51

(1) 津波記念碑.....	51
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	51
(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練.....	51
(4) 自主防災組織.....	51
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	51
(1) 避難行動.....	51
(2) 避難所.....	51
第 2 項 本郷地区（本郷・大曾根・桜峠）	52
1 震災前（備えほか）	52
(1) 津波記念碑.....	52
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	52
(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練.....	52
(4) 自主防災組織.....	52
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	52
(1) 避難行動.....	52
(2) 避難所.....	52
第 3 項 小白浜地区.....	53
1 震災前（備えほか）	53
(1) 津波記念碑.....	53
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	53
(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練.....	53
(4) 自主防災組織.....	53
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	53
(1) 避難行動.....	53
(2) 避難所.....	53
第 4 項 片岸地区.....	54
1 震災前（備えほか）	54
(1) 津波記念碑.....	54
(2) 地域・世代間における言い伝え.....	54
(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練.....	54
(4) 自主防災組織.....	54
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	54
(1) 避難行動.....	54
(2) 避難所.....	54
第 5 項 荒川地区（荒川・下荒川）	55

1 震災前（備えほか）	55
(1) 津波記念碑	55
(2) 地域・世代間における言い伝え	55
(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練	55
(4) 自主防災組織	55
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	55
(1) 避難行動	55
(2) 避難所	56
第 6 項 大石地区（大石・向・屋形）	56
1 震災前（備えほか）	56
(1) 津波記念碑	56
(2) 地域・世代間における言い伝え	56
(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練	56
(4) 自主防災組織	56
2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）	56
(1) 避難行動	56
(2) 避難所	56
関 係 資 料	58
第 4 章 「証言」から得られた地域の伝承、震災時の動き等（詳細）	59
第 1 節 東部地区	60
第 1 項 沿岸地区（新浜町、東前町、魚河岸・浜町）	60
1 新 浜 町	60
2 東 前 町	62
3 魚河岸・浜町	65
第 2 項 市街地区（港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町）	68
1 港 町	68
2 只越町	71
3 天神町	75
4 大只越町	76
5 大 町	78
6 大渡町	81
7 鈴子町	84
8 駒木町	86
第 3 項 嬉石・松原・大平地区	87

1 嬉石町	87
2 松原町	90
3 大平町	93
第2節 平田地区	94
第1項 平田地区（大字平田第1～6地割）	94
第2項 尾崎白浜地区（第7～8地割）	98
第3項 佐須地区（第9地割）	100
第3節 鵜住居地区	102
第1項 鵜住居地区（鵜住居町第1～19・23・24地割）	102
第2項 根浜地区（鵜住居町第20～22地割）	108
第3項 両石（両石町第1～3地割）	110
第4項 水海地区（両石町第4地割）	113
第5項 片岸地区（片岸町第1～9地割）	115
第6項 室浜地区（片岸町第10地割）	118
第7項 箱崎白浜地区（箱崎町第1～3地割）	120
第8項 仮宿地区（箱崎町第4地割）	122
第9項 箱崎地区（箱崎町第5～12地割）	123
第10項 桑の浜地区（箱崎町第13地割）	126
第4節 唐丹地区	128
第1項 花露辺地区	128
第2項 本郷地区（本郷・大曾根・桜峠）	129
第3項 小白浜地区	131
第4項 片岸地区	134
第5項 荒川地区（荒川・下荒川）	136
第6項 大石地区（大石・向・屋形）	138
第5章 地域の伝承・震災時の動き等に関するとりまとめ	141
第1節 東部地区	143
第1項 沿岸地区（新浜町、東前町、魚河岸、浜町）	143
1 被災状況	143
2 震災以前の地域の伝承・備え	143
（1）津波記念碑	143
（2）津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	143
（3）市指定の避難場所他と対象地域	144
（4）地域の備え—自主防災組織と避難訓練	146

ア) 自主防災組織	146
① 新浜町婦人消防クラブ	146
② 東前町内会自主防災会	146
③ 浜町3丁目連合会自主防災会	147
④ 浜町1丁目町内会自主防災会	148
⑤ <参考>尾崎町町内会自主防災会 (震災後に設立)	148
イ) 避難訓練	149
(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと	149
ア) 「釜石市戦災資料館」	149
3 震災時の地域の動きと避難行動	149
(1) 住民(個々人・家族等)の行動	149
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	149
ア) 消防団第1分団第1部	149
イ) 消防団第1分団第2部	150
ウ) 消防団第1分団本部	150
エ) 新浜町婦人消防クラブ	151
オ) 東前町内会自主防災会	151
カ) 浜町3丁目連合会自主防災会	152
キ) 浜町1丁目町内会自主防災会	153
(3) 施設・団体等の避難行動	153
ア) 釜石市戦災資料館	153
第2項 市街地区(港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町)...	154
1 被災状況	154
2 震災以前の地域の伝承・備え	154
(1) 津波記念碑	154
ア) 「三陸大海嘯溺死者弔祭之碑」	155
イ) 「海嘯記念碑」	156
ウ) 「海嘯災死追悼」	158
エ) 「海嘯萬人供養塔」	159
オ) 「海嘯惨死者追吊記念銅像之記」	160
カ) 「(碑銘不明)」	162
キ) 「(碑銘不明)」	164
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	166
(3) 市指定の避難場所他と対象地域	168
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練	170

ア) 自主防災組織	170
① 港町日の出通り振興組合	170
② 大渡町内会自主防災会	171
③ 只越自主防災会	172
④ 鈴子町内会自主防災会	172
イ) 避難訓練	173
(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと	173
ア) ふれあい機能訓練デイサービス（大渡町）	173
イ) すくすく親子教室（大町 青葉ビル）	174
ウ) 釜石市民文化会館（大町）	174
エ) 「大町駐車場」	174
オ) 青葉ビル（大町）	175
3 震災時の地域の動きと避難行動	175
(1) 住民（個々人・家族等）の行動	175
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	176
ア) 消防団第1分団第3部	176
イ) 消防団第1分団第4部	177
ウ) 港町日の出通り振興組合	178
エ) 大渡町内会自主防災会	178
オ) 只越自主防災会	178
カ) 鈴子町内会自主防災会	179
(3) 施設・団体等の避難行動	179
ア) ふれあい機能訓練デイサービス	179
イ) すくすく親子教室	179
ウ) 「釜石市民文化会館」	180
エ) 「大町駐車場」	180
オ) 「青葉ビル」	181
第3項 嬉石・松原・大平地区	182
1 被災状況	182
2 震災以前の地域の伝承・備え	182
(1) 津波記念碑	182
ア) 「嘯没者追弔塔」	182
イ) 「海嘯横没精霊」	184
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	186
(3) 市指定の避難場所他と対象地域	186

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練.....	188
ア) 自主防災組織	188
① 松原町自主防災会	188
② 大平望洋ヶ丘町内会自主防災会	189
イ) 避難訓練	189
(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと	190
ア) 住民（個々人・家族等）の行動.....	190
イ) 地域の動き	190
① 消防団第3分団第1部	190
② 消防団第3分団第2部	190
③ 松原町自主防災会	191
④ 大平望洋ヶ丘町内会自主防災会	191
第2節 平田地区.....	192
第1項 平田地区（大字平田第1～6地割）	192
1 被災状況	192
2 震災以前の地域の伝承・備え	192
(1) 津波記念碑.....	192
ア) 「海嘯記念碑」	192
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	194
(3) 市指定の避難場所他と対象地域.....	195
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練.....	196
ア) 自主防災組織	196
① 上平田ニュータウン町内会自主防災会	196
② 平田町内会自主防災会	197
③ <参考>上平田町内会自主防災会（震災後に設立）	197
イ) 避難訓練	198
(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと	198
ア) 特別養護老人ホームあいぜんの里.....	198
イ) グループホームもみじ苑.....	199
ウ) 平田地区生活応援センター.....	199
3 震災時の地域の動きと避難行動	200
(1) 住民（個々人・家族等）の行動.....	200
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	200
ア) 消防団第3分団第3部.....	200
イ) 消防団第3分団本部	200

ウ) 上平田ニュータウン町内会自主防災会.....	201
エ) 平田町内会自主防災会.....	201
(3) 施設・団体等の避難行動.....	203
ア) 特別養護老人ホームあいぜんの里（特養あいぜんの里指定居宅サービス事業所 あいぜんの里デイサービスセンター）.....	203
イ) グループホームもみじ苑.....	204
ウ) 平田地区生活応援センター.....	205
第2項 尾崎白浜地区（第7～8地割）.....	206
1 被災状況	206
2 震災以前の地域の伝承・備え	206
(1) 津波記念碑.....	206
ア) 海嘯横没者供養塔	206
イ) 三陸大津波犠牲先祖供養塔.....	207
ウ) 大津波犠牲先祖霊位	208
エ) 中村重兵衛閼歴	209
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	210
(3) 市指定の避難場所他と対象地域.....	210
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練.....	211
ア) 自主防災組織	211
① 尾崎白浜婦人消防協力隊	211
② 尾崎白浜町内会自主防災会	212
イ) 避難訓練	212
3 震災時の地域の動きと避難行動	213
(1) 住民（個々人・家族等）の行動.....	213
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	213
ア) 消防団第3分団第4部.....	213
イ) 尾崎白浜婦人消防協力隊.....	213
ウ) 尾崎白浜町内会自主防災会.....	213
第3項 佐須地区（第9地割）.....	214
1 被災状況	214
2 震災以前の地域の伝承・備え	214
(1) 津波記念碑.....	214
ア) 海嘯記念碑	214
イ) 佐須浜海嘯記	216
ウ) 海嘯罹災者之墓	217

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	219
(3) 市指定の避難場所他と対象地域	219
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練	220
ア) 自主防災組織	220
イ) 避難訓練	221
3 震災時の地域の動きと避難行動	221
(1) 住民（個々人・家族等）の行動	221
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	221
ア) 佐須町内会自主防災会	221
第3節 鵜住居地区	222
第1項 鵜住居地区（鵜住居町第1～19・23・24地割）	222
1 被災状況	222
2 震災以前の地域の伝承・備え	222
(1) 津波記念碑	222
ア) 吊祭碑	222
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	224
(3) 市指定の避難場所他と対象地域	225
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練	226
ア) 自主防災組織	226
① 鵜住居仲町内会自主防災会	227
② 新田・神の沢町内会防災会	227
③ 長内自主防災会	228
④ 鵜住居上町内会自主防災会	229
⑤ 川原町内会自主防災会	229
イ) 避難訓練	230
(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと	230
ア) 養護老人ホーム 五葉寮	230
イ) グループホームございしょの里	231
ウ) やまざき機能訓練デイサービスホーム	231
エ) 障害者福祉サービス事業所 わらび学園（鵜住居分園）	232
3 震災時の地域の動きと避難行動	232
(1) 住民（個々人・家族等）の行動	232
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	232
ア) 消防団第6分団第1部	232
イ) 消防団第6分団第5部（川目）	234

ウ) 消防団第 6 分団第 8 部 (新田)	235
エ) 消防団第 6 分団本部	235
オ) 鵜住居仲町内会自主防災会.....	236
カ) 新田・神の沢町内会防災会.....	236
キ) 長内自主防災会	237
ク) 鵜住居上町内会自主防災会.....	237
ケ) 川原町内会自主防災会.....	237
(3) 施設・団体等の避難行動.....	238
ア) 養護老人ホーム五葉寮(五葉寮いきいきデイサービスセンター)	238
イ) グループホームございしょの里(ございしょの里デイサービスセンター)	238
ウ) 障害者福祉サービス事業所わらび学園鵜住居分園.....	239
第 2 項 根浜地区(鵜住居町第 20～22 地割)	240
1 被災状況	240
2 震災以前の地域の伝承・備え	240
(1) 津波記念碑.....	240
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	240
(3) 市指定の避難場所他と対象地域.....	240
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練.....	241
ア) 自主防災組織	241
イ) 避難訓練	242
3 震災時の地域の動きと避難行動	242
(1) 住民(個々人・家族等)の行動.....	242
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	242
ア) 根浜親交会防災部	242
第 3 項 両石(両石町第 1～3 地割)	244
1 被災状況	244
2 震災以前の地域の伝承・備え	244
(1) 津波記念碑.....	244
ア) 「両石海嘯記念碑」(「紀」は石碑の写真ママ)	245
イ) 「海嘯記念碑」	247
ウ) 「津浪記念碑」	248
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	249
(3) 市指定の避難場所他と対象地域.....	250
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練.....	251
ア) 自主防災組織	251

① 両石婦人消防クラブ	251
② 両石町自主防災組織	251
イ) 避難訓練	252
3 震災時の地域の動きと避難行動	252
(1) 住民（個々人・家族等）の行動.....	252
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	252
ア) 消防団第6分団第2部.....	252
イ) 両石婦人消防クラブ	255
ウ) 両石町自主防災組織	255
第4項 水海地区（両石町第4地割）	256
1 被災状況	256
2 震災以前の地域の伝承・備え	256
(1) 津波記念碑.....	256
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	256
(3) 市指定の避難場所他と対象地域.....	256
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練.....	257
ア) 自主防災組織	257
イ) 避難訓練	257
3 震災時の地域の動きと避難行動	257
(1) 住民（個々人・家族等）の行動.....	257
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	257
第5項 片岸地区（片岸町第1～9地割）	258
1 被災状況	258
2 震災以前の地域の伝承・備え	258
(1) 津波記念碑.....	258
ア) 「南無妙法蓮華経八大竜王鎮座」	259
イ) 「津浪記念碑」	260
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	261
(3) 市指定の避難場所他と対象地域.....	262
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練.....	263
ア) 自主防災組織	263
イ) 避難訓練	264
(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと	264
ア) あお空グループホーム釜石 あお空小規模多機能センター釜石.....	264
イ) かまいしワーク・ステーション.....	265

3	震災時の地域の動きと避難行動	265
(1)	住民（個々人・家族等）の行動	265
(2)	消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	265
	ア) 消防団第6分団第4部	265
	イ) 片岸町自主防災会	267
(3)	施設・団体等の避難行動	267
	ア) あお空グループホーム釜石（あお空小規模多機能センター釜石）	267
	イ) かまいしワーク・ステーション	268
第6項	室浜地区（片岸町第10地割）	269
1	被災状況	269
2	震災以前の地域の伝承・備え	269
(1)	津波記念碑	269
	ア) 「海嘯記念碑」	269
	イ) 「津浪記念碑」	270
(2)	津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	271
(3)	市指定の避難場所他と対象地域	272
(4)	地域の備え—自主防災組織と避難訓練	273
	ア) 自主防災組織	273
	イ) 避難訓練	274
3	震災時の地域の動きと避難行動	274
(1)	住民（個々人・家族等）の行動	274
(2)	消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	274
	ア) 消防団第6分団第7部	274
	イ) 室浜自主防災会	276
第7項	箱崎白浜地区（箱崎町第1～3地割）	276
1	被災状況	276
2	震災以前の地域の伝承・備え	277
(1)	津波記念碑	277
(2)	津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	277
(3)	市指定の避難場所他と対象地域	277
(4)	地域の備え—自主防災組織と避難訓練	278
	ア) 自主防災組織	278
	イ) 避難訓練	279
3	震災時の地域の動きと避難行動	279
(1)	住民（個々人・家族等）の行動	279

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	279
ア) 消防団第 6 分団第 6 部.....	279
イ) 白浜町内会自主防災部.....	280
第 8 項 仮宿地区（箱崎町第 4 地割）	281
1 被災状況	281
2 震災以前の地域の伝承・備え	281
(1) 津波記念碑.....	281
ア) 「明治廿九年六月十五日海嘯横死」	282
イ) 「明治廿九年六月十五日 海嘯溺死小林勝蔵精昊」	284
ウ) 「明治廿九年六月十五日 海嘯横死無縁塔」	285
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	286
(3) 市指定の避難場所他と対象地域.....	286
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練.....	287
ア) 自主防災組織	287
イ) 避難訓練	288
3 震災時の地域の動きと避難行動	288
(1) 住民（個々人・家族等）の行動.....	288
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	288
ア) 仮宿町内会自主防災会.....	288
第 9 項 箱崎地区（箱崎町第 5～12 地割）	289
1 被災状況	289
2 震災以前の地域の伝承・備え	289
(1) 津波記念碑.....	289
ア) 「忠烈永芳」	290
イ) 「津浪記念碑」	291
ウ) 「津波海難歿死無縁者追善供養塔」	292
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	293
(3) 市指定の避難場所他と対象地域.....	294
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練.....	295
ア) 自主防災組織	295
イ) 避難訓練	296
3 震災時の地域の動きと避難行動	296
(1) 住民（個々人・家族等）の行動.....	296
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	296
ア) 消防団第 6 分団第 3 部.....	296

イ) 箱崎町自主防災会	297
第 10 項 桑の浜地区（箱崎町第 13 地割）	298
1 被災状況	298
2 震災以前の地域の伝承・備え	298
(1) 津波記念碑.....	298
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	298
(3) 市指定の避難場所他と対象地域.....	298
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練.....	299
ア) 自主防災組織	299
イ) 避難訓練	299
3 震災時の地域の動きと避難行動	300
(1) 住民（個々人・家族等）の行動.....	300
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	300
第 4 節 唐丹地区.....	301
第 1 項 花露辺地区.....	301
1 被災状況	301
2 震災以前の地域の伝承・備え	301
(1) 津波記念碑.....	301
ア) 「大海嘯・遭難者追哀碑」	301
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	302
(3) 市指定の避難場所他と対象地域.....	302
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練.....	303
ア) 自主防災組織	303
イ) 避難訓練	304
3 震災時の地域の動きと避難行動	304
(1) 住民（個々人・家族等）の行動.....	304
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	304
ア) 消防団第 8 分団第 3 部.....	304
第 2 項 本郷地区（本郷・大曾根・桜峠）	305
1 被災状況	305
2 震災以前の地域の伝承・備え	305
(1) 津波記念碑.....	305
ア) 「海嘯遭難記念之碑」	305
イ) 「昭和八年津浪記念碑」	308
ウ) 「海嘯遭難者納骨之所」	310

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	311
(3) 市指定の避難場所他と対象地域	312
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練	313
ア) 自主防災組織	313
イ) 避難訓練	313
3 震災時の地域の動きと避難行動	314
(1) 住民（個々人・家族等）の行動	314
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	314
ア) 消防団第8分団第2部	314
第3項 小白浜地区	315
1 被災状況	315
2 震災以前の地域の伝承・備え	315
(1) 津波記念碑	315
ア) 「昭和八年津浪記念碑」	315
イ) 「海嘯溺死霊供養碑」	318
ウ) 「海嘯記念碑」	319
(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	320
(3) 市指定の避難場所他と対象地域	321
(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練	322
ア) 自主防災組織	322
① 小白浜町内会自主防災会	322
② 唐丹駐在所連絡協議会防災部会	322
イ) 避難訓練	323
(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと	323
ア) いきいき唐丹デイサービスセンター	323
3 震災時の地域の動きと避難行動	324
(1) 住民（個々人・家族等）の行動	324
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	324
ア) 消防団第8分団第1部	324
イ) 消防団第8分団本部	324
ウ) 小白浜町内会自主防災会	324
エ) 唐丹駐在所連絡協議会防災部	325
(3) 施設・団体等の避難行動	325
ア) いきいき唐丹デイサービスセンター	325
第4項 片岸地区	326

1	被災状況	326
2	震災以前の地域の伝承・備え	326
(1)	津波記念碑	326
ア)	「海嘯溺死碑」	326
(2)	津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	327
(3)	市指定の避難場所他と対象地域	327
(4)	地域の備え—自主防災組織と避難訓練	328
ア)	自主防災組織	328
イ)	避難訓練	329
(5)	施設等の備え・避難先等の決めごと	329
3	震災時の地域の動きと避難行動	329
(1)	住民（個々人・家族等）の行動	329
(2)	消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	329
ア)	消防団第8分団第5部	329
第5項	荒川地区（荒川・下荒川）	330
1	被災状況	330
2	震災以前の地域の伝承・備え	330
(1)	津波記念碑	330
(2)	津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	330
(3)	市指定の避難場所他と対象地域	331
(4)	地域の備え—自主防災組織と避難訓練	332
ア)	自主防災組織	332
イ)	避難訓練	333
3	震災時の地域の動きと避難行動	333
(1)	住民（個々人・家族等）の行動	333
(2)	消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	333
ア)	消防団第8分団第6部	333
イ)	荒川町内会防災部会	334
第6項	大石地区（大石・向・屋形）	335
1	被災状況	335
2	震災以前の地域の伝承・備え	335
(1)	津波記念碑	335
(2)	津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと	335
(3)	市指定の避難場所他と対象地域	336
(4)	地域の備え—自主防災組織と避難訓練	337

ア) 自主防災組織	337
イ) 避難訓練	337
3 震災時の地域の動きと避難行動	337
(1) 住民（個々人・家族等）の行動.....	337
(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き	337
ア) 消防団第8分団第4部.....	337
根 拠 資 料 一 覧.....	340
1 証言・証言集・インタビューに関する根拠資料	341
2.21 東日本大震災・津波体験集 3.11 その時、私は 第三集	341
2.22 未来へ語り継ぐ証言 東日本大震災・大津波.....	342
2.23 東日本大震災の教訓.....	342
2.24 3・11 慟哭の記録	343
2.25 つなみ 被災地の子どもたちの作文集.....	343
2.26 未来へ伝える 私の3.11 語り継ぐ震災声の記録①	344
2.27 証言記録 東日本大震災Ⅱ.....	345
2.28 東日本大震災アーカイブス 明日へ～支えあおう～.....	345
2 (石碑・伝承・自主防災会・消防団等に関する主な根拠資料.....	346
[津波記念碑].....	346
[市指定の避難場所他と対象地域].....	346
[避難訓練].....	346
[地域の動き].....	346
[施設].....	346
[自主防災組織] ※市の内部資料を含む。.....	347

はじめに

平成 23 年 3 月 11 日、14 時 46 分に発生した東北地方太平洋沖を震源とする M9.0 の巨大地震とそれに伴う巨大津波は、当市において死者、行方不明者を合わせ、1,040 名に及ぶ人的被害をもたらしました。

ここに、あらためて犠牲となられた方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、ご遺族の皆様に心からお見舞いを申し上げます。

当市では、東日本大震災の惨事を二度と繰り返すことがないように、震災に関わる記録を保存し、後世に伝えるとともに、震災から何を学び、何を未来に生かすのか、市民目線による教訓として取りまとめるため、「釜石市東日本大震災検証委員会」を設置して検証作業を進めてまいりました。

特に平成 26 年度については、庁内に検証委員会を設け、住民の津波避難行動、学校・子ども関連施設、避難所運営など様々な視点から検証作業を進めているところです。

本検証報告書は、これらの検証成果をもとに、浸水地域となった東部（沿岸地区及び市街地区）、平田、鶴住居及び唐丹地区を対象として、市、関係機関、町内会、個人等が所有する地域の伝承・備えや震災時の地域の動き及び避難行動に関する資料を収集整理し、地域単位で起こった出来事を明確にする検証作業を行いました。

これらの検証を通じて、震災を後世に引き継ぐ地域文化の醸成を図ってまいりたいと考えます。

平成 27 年 3 月

釜石市長 野 田 武 則

第1章 検証の概要

第1節 検証の目的

平成23年3月11日に発生した東日本大震災（以下、「震災」という。）に伴う市内浸水地域（以下、「地域」という。）において、当該地域の被災者等の証言など震災関連資料を整理分類することにより、地域の伝承・備えや震災時の地域の動き及び避難行動（以下、「地域の伝承、震災時の動き等」という。）を明らかにし、もって、震災を後世に引き継ぐ地域文化の醸成を図るものとする。

第2節 検証の方法

第1項 検証の体制

1 「釜石市東日本大震災検証委員会」の設置

- 東日本大震災の惨事を繰り返すことがないように、震災に関わる記録を保存して後世に伝えると共に、震災から何を学び、何を未来に生かすのかについて、市民目線による教訓として取りまとめるため、被災地域の住民等を主体とした釜石市東日本大震災検証委員会（以下、「検証委員会」という。）を設置した。

また、住民目線から、地域の伝承、震災時の動き等を確認するとともに、今後の課題、方向性等の提言を行うため、検証委員会に「避難所・地域部会」を設置した。

2 外部有識者からの助言体制

- 検証にあたって、国立大学法人岩手大学地域防災研究センターから指導と助言をいただいた。

国立大学法人岩手大学地域防災研究センター

南 正 昭 センター長

越 谷 信 副センター長

越 野 修 三 教授（検証委員会委員長 災害対策本部部会長）
菊 池 義 浩 特任助教（学校部会長）
柳 川 竜 一 特任助教（避難所・地域部会長）

3 庁内の体制

- 震災に伴う市の対応状況について、公助の視点から事実関係、課題を明らかにするため、釜石市東日本大震災庁内検証委員会（以下、「庁内検証委員会」という。）を設置した。
また、地域の伝承、震災時の動き等を確認する具体的な検証作業を進めるため、庁内検証委員会に作業部会を設置した。

4 事務局の体制

- 事務局は、市総務企画部総務課震災検証室のもと、調査委託先の一般社団法人三陸アーカイブ減災センターが担当した。

第2項 検証の方法

1 検証の対象

- 震災において、浸水地域となった東部（沿岸地区及び市街地区）、平田、鵜住居及び唐丹地区を対象とした。

2 検証の方法

（1）庁内検証委員会での検証作業

- 庁内検証委員会事務局において、下記の作業を行い、本検証報告書の原案を作成した。

ア 資料収集・整理

- 釜石市、関係機関、町内会、個人等が所有する地域の伝承、震災時の動き等に関する資料について、本報告書に示した根拠資料一覧（以下、「震災関連資料」という。）により収集し、その整理を行った。
- 震災時、釜石市が所管する公共施設のうち、一般来場者の入退があった地域の施設（以下、「公共施設」という。）の避難誘導の実態について調査した。

イ 資料の分析

- 釜石市東日本大震災検証報告書（平成 23 年度作成）（以下、「検証報告書（平成 23 年度版）」という。）及び釜石市東日本大震災検証報告書【津波避難行動編】（平成 25 年度版）（以下、「検証報告書【津波避難行動編】」という。）を基盤として、平成 26 年度に作成した釜石市東日本大震災検証報告書【学校・子ども関連施設編】（平成 26 年度版）（以下、「検証報告書【学校・子ども関連施設編】」という。）、釜石市東日本大震災検証報告書【避難所運営編】（平成 26 年度版）（以下、「検証報告書【避難所運営編】」という。）の検証成果、実施した新たな資料収集・整理成果を追加した。

(2) 検証委員会での検討

- 検証委員会の避難所・地域部会において、庁内検証委員会での検証結果を踏まえ、地域の伝承、震災時の動き等を確認するとともに、課題、対応策等の提言を行った。
- 避難所・地域部会の開催時期については、次のとおりである。

■ 検証委員会（避難所・地域部会） 開催一覧

名 称	開催日
釜石市東日本大震災検証委員会 全体会	平成 26 年 11 月 19 日 平成 27 年 3 月 23 日
同委員会 避難所・地域部会	平成 27 年 2 月 6 日 平成 27 年 2 月 27 日

第2章 避難行動に関する整理分析

本章では、震災直後の地域の避難行動について、震災関連資料から、主に「証言」に当たる部分を基盤として、整理分析をした。

第1節 「避難行動」に影響する要因について

地域の震災直後の避難行動等について、震災関連資料からは、人が避難行動を起こすには、個人のおかれた環境やきっかけ、知識・経験等により避難をするか否か判断が分かれた。

震災時における避難行動について、震災関連資料を基に以下の区分により整理分析を行った。

- 避難をうながした要因（避難行動促進要因）
 - 避難をさまたげた又は避難が遅れた要因（避難行動阻害又は遅延要因）
 - その他、様々な要因から被災した事例等
- ※「避難の判断」をする場合、それぞれの要因は単独ではなく、相互に作用していると考えられる。

【参考事項】

- そもそも、ふだんと異なる状況・情報がもたらされても「自分は大丈夫」と、自分にとって都合の悪い情報を無視又はその危険性を過小評価してしまう人の特性、心理現象（＝正常化のバイアス（偏見））があることが知られている。
- 一方で、災害時に様々な情報を基に災害による危険性の大きさと、その危険が自らに降りかかる可能性を予測するとともに、避難をする場所や手段等を勘案した上で避難を開始するが、その過程で避難することや避難場所への不安を感じるなど、その場所にいたほうが安全と考えれば、避難することはなくその場にとどまると考えられる。
- まして、津波災害では、今回の震災のように地震から津波来襲まで、ごく短い時間内に「避難をする」という意思決定をする必要が出てくるため、避難には、強い動機、働きかけが必要になると推測できる。

第1項 避難をうながした要因（避難行動促進要因）

「避難行動」を起こすことができた心理的・社会的要因、個人の持つ過去の津波災害に関する知識や経験、危機意識、また、外部からの情報等について、どのように個人の「避難行動」に結び付いたか（＝「プラス」に作用した）などについて、項目ごとに整理した。

収集された証言から、特に避難行動に結び付いていた事象として、近所などからもたらされる「避難をうながす強い声かけ」、日ごろから付き合いのある方から直接もたらされた情報などの「強い働きかけ」であった。

「海の様子」「津波の様子」「近所が避難する様子」などの目から入ってくる情報も、避難行動に結び付くための「強い働きかけ（情報）」となっている。遠目ながらはっきりと目視できる津波に対しては、避難行動をとることができ、多くの方が助かっている。

1 知識・伝承・経験から素早い避難に結びついた事例

(1) 地震直後、津波が来ることをすぐに思い浮かべ避難した事例

- ・祖父母、両親から伝えられた事柄から、すぐに「津波」の襲来を想起した。
- ・「大きな」「いつもと違う」「長い」揺れから、津波を想起した。
- ・海岸近くの住民は、「地震＝津波」ということが常に頭に入っている。
- ・地震の大きさから「津波だ」とすぐに分かった。
- ・津波の襲来を直感したので、近隣の体の不自由な高齢者を早めに避難所まで移動させた。
- ・大津波の情報は聞こえなかったが、長く強い揺れだったので「これはただごとではない」「すぐに避難したほうがよい」と想起
- ・「これは絶対にとんでもない大津波が来る」と直感しました。ふだんは「私たちの住宅地は津波の来る場所ではない」と考えていたが、この大地震と、三陸沖の津波は 78 年もの長い期間来っていないことも考え、「この場所も絶対に大丈夫という保証はない」と思い、近所の人たちと一緒に

に避難準備をして、いつでも高い場所に上られるように待機した。

- ・大きな地震が来れば津波が襲来するという認識はあった。
- ・震度3以上の地震が発生したら、津波が来ると思っている。そして、すぐに船を比較的安全な場所に移動させるようにしている。
- ・潜水作業中に、腹部に衝撃を感じ地震を想起（地上より早い）、スピーカーで「地震だ」と伝え、急いで引き上げてもらう。海が濁っていることから津波がくると想起。同乗者に高台へ逃げるよう指示し、自身は船を操舵し沖に向かって、青い海、青い海へと避難し、午前2時頃港へ戻る。
- ・自宅前の片岸川が茶色に濁っているのを目にして「絶対、津波が来る」と思い避難

(2) 小さい頃からの祖父母、親からの言い伝えや地域で共有していた情報が生きた事例

- ・ブロック塀が倒れ、水が出ていた。近所の人「そこは昔、井戸だった所。これは津波が来る」という話を聞いたことから、避難行動に結び付いた。
- ・感じたこともない地震だったので、「きっと津波は来る」と思い、傍にいた娘とすぐに避難した。子どもの頃から、津波は恐ろしいものと話に聞いていた。また、命でんでんこの言葉はすぐに思い出した。
- ・小さい頃から「地震があったときは川や海に近づくな、とにかく逃げろ」と母から家訓のように言い聞かされてきた。
- ・先輩や親からは、「大きい地震が来たら逃げろ」「明治・昭和の津波はここまで襲来した」という言い伝えを聞いていた。
- ・明治三陸津波・昭和三陸津波の話を聞いており、津波に対する危機感があった。多くの住民が、少しでも高い場所に逃げるという意識を持っていた。
- ・お父さんから「津波は3倍で来る」と聞いていたので、当日には「津波警報が3mと聞いたら、9m来るぞ」と皆で話し合っていた。
- ・観世音神社の鳥居まで行けば大丈夫と、祖父母から聞いていた。（室浜）
- ・室浜ではすぐ裏手に山があるので、「地震が来たら遠くに行くのではなく高い所に駆け上がる」と聞いていたし、話をしていた。
- ・明治三陸津波で高台に避難したという話を先祖から聞いたことがあり、

津波が来たら、とにかく高い所へ逃げるという意識はあった。

- ・祖母から「強い地震によって、海の方で音がしたら、津波が来るから逃げるように」と聞いていた。当時も海のほうで「ドガン」という音を3回聞いたので、「津波が来る」と思って逃げた。
- ・佐須に住む先代から「大津波のときは山が鳴る」と聞いていた。今回も山が鳴った。
- ・避難している時に「ドーン、ドーン、ドーン」と3回爆発したようなものすごい音が、海の沖の方から聞こえてきた。一緒にいた人たちが、「今の音は何だべ」と言っていた。母親から「昭和8年の津波の時、大きな爆発がした音がした」と聞いていたので、3回も花火を上げる時のような音がしたので、「これは大きな津波が来るかも」と思った。
- ・第1波で自分の家まで津波が来ていないのが分かっていたとしても、第2、3波で時間があつたとしても何かを取りに行かないと、小白浜の方たちは分かっていたので、人的被害が意外と小さかった理由だと思う。

2 地震直後の「情報」や「避難誘導」が避難に結びついた事例

(1) 家族・住民・地域（消防団・消防等）等からもたらされた情報、避難誘導により避難し、助かった事例

- ・家族、近所、近くにいた人による声掛けがきっかけとなった。（多数）
- ・まさかここまで来ると思わず自宅付近で避難すべきか迷っていたが、市役所方向から「逃げろ」という叫び声が聞こえ、我に返って避難した。
- ・声掛けの例としては、「津波だ、逃げろ」「津波だ」「津波がすぐそこまで来ている」「津波が来るよ」「水が来たぞー」「上がれ、上がれ」など、切迫した状況を伝えられ、慌てて避難をした事例が多数見られた。
- ・第1報が約3mと聞き、5mの防潮堤が守ってくれるものと思い、すぐに避難も想定していなかったが、「津波が来た」との声で郵便局から避難し一目散で庵寺に向かった。
- ・釜石小学校での防災教育の成果により、津波襲来時に子どもに避難を促されて行動した住民もいた。
- ・消防車が矢の浦橋から来て大津波警報を聞いた。以前の警報と違って緊急を感じて避難所へ向かった。放送のおかげで助かった。

- ・家の中を見ると、洗面台等が倒れており、後片付けを行っていたが、消防団の方の「水が来たぞ、逃げろ」の一声で、慌てて外に出て、何も取らずに高台へ避難
- ・消防団は、津波が来襲を叫び、消防車でサイレンを鳴らして避難を呼び掛けた。その避難の指示を聞いて、すぐに避難を開始し助かった。
- ・沖へ船を出そうとした方、あるいは沖から自宅へ戻ろうとした方の中には、危ない状況にあった方もいたが、消防団員の誘導で回避した。
- ・住民でない工場の若い従業員たち等が民生委員から津波のことを伝えるなど強く促されたことから避難に結び付いた。
- ・駅前を通過し、大渡方面と松原方面に向かう信号の所で、何やら騒がしく手招きをしている人が見えた。止まって窓を開けたら「車を置いて逃げろ！」との声。津波が来たのを見て、車を捨てて避難した。
- ・市職員の複数回に亘る誘導で、旧釜石第一中学校の校庭に避難した。
- ・下校途中に地震に遭い、近くにいた先輩の指示で中学校に戻る。間もなく市職員が中学校に来て「大津波が防潮堤を越えた」ことを告げられ、すぐに中学校裏の国道へ避難した。
- ・自宅は昭和8年の復興地であり、12.5mの高い防潮堤もあるので心配はないと、自宅にいたが、近くの工場の従業員が上に上がってきて「早く上がれ」と声をかけられ、急いで避難した。

(2) 津波の状況（目から入る情報（目視））により避難、更に高台へ逃げた（二度逃げした）事例

- ・津波が来ることを見て、逃げた。津波の様子を見ながら、更に上に逃げた事例が複数あった。
- ・海岸方向からの叫び、異常音、土煙等から危険を察知して避難を開始する住民もいた。
- ・自宅に到着後、館山神社に移動したが、津波が見えたので、更に高台の夏山という所まで移動した（※二度逃げ）。
- ・地鳴りに始まった大地震で「必ず今まで想像もつかない津波が襲ってくる」と感じすぐに避難を開始した。津波の様子から、身の危険を感じて20m以上高台の大杉神社へ走って逃げた。
- ・海の動きに異変を感じ「大津波が来るのでは」と予感して避難所へ急い

だが、消防団からすぐ近くまで津波が来たことを大声で知らされ、再び高台へ移動した。

- ・防潮堤を越える波を見て、更に高い所に上がった。
- ・地震の大きさと、川の水が引いているのを見て、旧道に上がり助かった。

(3) 地域の方が避難しているのを見て、つられて避難した事例（目視）、手助けがあり避難できた事例

- ・ほかの方たちがもっと上に真剣に走っていくのを見て、自分もつられて駆け上がった。
- ・津波が来るなんて思っていなくて自宅にいたが、若い方たちが高台まで避難していく姿を見て、つられて上がっていった。
- ・差し迫った津波の危険を感じとれなかった一部の高齢者は、地域の方が避難するのを見て、その流れに合流して避難することもあった。
- ・通りがかりの車を呼び止め、要援護者を同乗させて高台へ避難するように依頼する場面もあった。

(4) 防災行政無線やテレビ・ラジオからの情報により避難した事例

- ・停電の中でポケットラジオの電源を入れたその時、「第一波が来襲している」との情報により一目散で避難所へ避難した。
- ・大きな揺れと護岸の亀裂を見て大きな津波が来るのではと直感したが、そのうち釜石市の防災無線で「津波警報が発令、3 mくらいの津波が来る」と放送があった。避難の準備をしているうちに、次に「津波が6 mくらいまで来る」との放送になり、直ちに軽トラックで護岸から逃げた。
- ・テレビで「大津波発生」と3回繰り返し、その後、停電。すぐ避難を開始した。

3 その他

- ・津波てんでんこの言い伝えは知っており、てんでばらばらに高台に避難することを徹底した。

- ・高台から比較的遠い方たちは、高台に近い方たちよりも早くに避難していた。海に近いことを意識していたからこそであるし、意識を向上させるためにも避難訓練の重要性を改めて感じた。
- ・大部分の住民が避難できたことから、これまでの避難訓練は無駄ではなかったと感じる。（ただし、同じ地域で相反する意見あり）
- ・88 歳のおばあちゃんは、当時、家に一人で留守番をしていたが、一人で避難をして無事だった。いつも避難訓練に参加し、どこに避難しなければいけないか、知っていたから。津波のことは頭になかったが、地震が恐くて逃げたといっていた。常日頃の訓練のおかげと思っている。

第2項 避難をさまたげた、又は避難が遅れた要因（避難行動阻害又は遅延要因）

「避難行動」を起こすことができなかった、躊躇した、危険を感じなかったなど、過去の浸水・災害実績・伝承などが、安心材料となって「避難しなくてよい」と思うに至った要因、あるいは結果として避難が遅れた（＝「マイナス」に作用した）要因について、項目ごとに整理した。

例えば、過去の津波災害を経験し、既に安全な高台に移転したから「大丈夫」という思い込みや、何かしらの理由で「家に戻ってしまった」事例などがあった。

また、避難誘導あるいは水門閉鎖等のため、身体の不自由な方や高齢者を補助していて一緒に被災した事例などがあった。

1 知識・伝承・経験が、マイナスに作用した（避難に結び付かなかった）事例

(1) 過去の浸水・災害実績・伝承が、安心材料となって被災又は避難が遅れた事例

- ・過去に津波浸水がなかった山側の地域住民で、ここまで津波が来ないと思い避難せず、自宅ごと流された方がいた。

- ・ここまで津波は来ないと思い避難せず自宅ごと津波に流されなくなった方がいた。
- ・過去の津波で被害のなかった民家等に避難した方がいたが、浸水し犠牲となった。
- ・親から、過去の津波は、家の前の通り（天神町と只越町の境界）まで来たと聞いたことがある。自宅はそこから数件分、高台側にあるので大丈夫だと思った。
- ・チリ地震津波等の浸水実績からより高台に建てた家に津波は来ないと思い、避難をすることなく流された方もいた。
- ・チリ地震津波等の様子を伝え聞いていて、町内の被害が余りなく、津波とはこんなものと思い込んでしまった。今回その予想をはるかに超えた。
- ・過去の津波災害（十勝沖地震津波等）の経験から津波は引き波があつてからやってくると思っていて、周辺住民の避難支援を優先して危険な経験をした。
- ・高齢者はチリ地震津波等の経験にとらわれて、浸水実績より高台に建てた家には津波は来ないという思い込みで避難をすることなく流された方もいた。
- ・チリ、十勝沖地震では、養殖施設が被害を受けた程度だった。津波が来ることは完全に予想したが、防潮堤もあったので、多少油断していた。
- ・明治の津波で津波に流されていない場所に家が建っていたので、こんな大津波が来るとは余り思ってなかった。
- ・昭和8年の津波は、地域周辺まで来なかったと聞いていた。ここまで来るとは思わなかった。チリ地震、十勝沖地震津波被害は、海岸周辺だけだった。津波を甘く見ていた。
- ・過去の津波は、この地域まで上がって来たことは聞いたことがある。ただし、防潮堤のほか、国道、鉄道等の盛土があることから、まさか津波がここまで来るとは思わなかった。
- ・地震直後、高台の一部住民では、ここまで津波は来ないと思い自宅に留まり、自宅ごと津波に流され亡くなった方がいた。海側の地区よりも山側や高台の区域で人的被害が多い。
- ・一部の比較的高台に住む住民では、ここまで津波は来ないという思いが強く、自宅ごと津波に流され亡くなった方が多かった。

- ・ 自宅は、昭和8年の三陸大津波の後、復興地として高台に建てられた小白浜商店街のほぼ中央に位置していた。高い所に住んでいるという安易な考えから、「まさかここまでは津波が来ないだろう」と自分勝手に決めこんでいたが、自宅1階は浸水した。
- ・ 引き潮がないこと、明治の津波では自分の家まで到達しなかったことに油断をし、十数分は自宅にいた（その後避難誘導等）。

(2) 防災構造物への過信、ハザードマップ等の信用により、結果として被災又は避難が遅れた事例

- ・ 湾口防波堤と防潮堤が完成していたので、まさかあんなに大きな津波が来るとは思っていなかった。また防災無線も冷静に3mを超える津波と情報を流していたため「湾口防波堤と防潮堤が守ってくれる」ものと思い、のんびり構えていた。
- ・ チリ地震津波の際には、防波堤を波が越える程度であったため、住民内で津波に対する警戒心が薄れていた。
- ・ 過去の津波が、地域に襲ってきたのは聞いていた。湾口防波堤も完成したので、津波が来ても床上程度と思っていた。
- ・ 湾口防波堤の完成により、津波は来ないと日頃から言っていた方もいた。
- ・ 湾口防波堤への過信や津波は来ないという思い込みから、避難することを躊躇する大人もいた。子どもが受けた防災教育を通じて、家族で津波避難の重要性に改めて気付かされた。
- ・ 津波警報が3mと聞いたが、自宅の海拔が10m程度だったので、大丈夫と思って安心して避難せずにいた。その後、友人からの避難の声掛けがあつて、指定避難場所まで移動した。（ぎりぎり避難できた）
- ・ 防災マップの浸水シミュレーションでは、津波が来ても、せいぜい長内橋付近までだと思っていた。
- ・ 震災以前からハザードマップで浸水範囲や避難場所を確認していた。しかし、ハザードマップに記載されている浸水範囲から1.8kmほど離れていたため、ここまで来ないと思いこんでいた。そのため、余震を心配して皆で建物の外に出ていた。ラジオから聞こえてくる情報から状況把握に努めていたが、「釜石に4mの津波」が来たというのを聞いた矢先に、家や車を巻きこんだ津波が迫ってくるのが見えた。

2 地震後の情報が「マイナス（避難行動に結びつかなかった）」に作用した事例（「情報」を頼りにして、結果として被災又は避難が遅れた事例）

※防災行政無線を聞いていない方、内容を聞き取れていない、内容が分からないといった方もいた。これらについては、第2節に詳細を記す。

- ・ 大津波警報 3 m 以上という防災無線の情報を信じて、避難場所から駐車場へ戻って車で移動する、会社や所用先から自宅へ戻るなどの行動により被災した。
- ・ 湾口防波堤も完成して、3 m の津波と聞いたので、津波が来たとしても、せいぜい膝程度までだと思った。
- ・ 3 m という情報が安心感につながり、まさか津波は来ないだろうと判断してしまった。
- ・ 防潮堤だけでなく、防災放送で流れてきた「津波の高さ 3 m」も併せて過信して安心してしまった。
- ・ 釜石の放送は、大津波と言わずに 3 m と言ったので油断したのではないか。
- ・ 3 m という波高の情報を信じ、12.5 m ある防潮堤は安全だと思い、そこへ避難した方が多くいた。
- ・ 3 m という大津波警報の情報を聞いて、大した津波でないと判断して自宅に戻った方もいた。
- ・ 予想される津波の高さが 3 m であるという無線放送を聞き、避難しなかった。
- ・ 3 m という情報を聞いて、避難せずに自宅に留まり流された。
- ・ 「ただごとではない」と直感した直後にラジオから、大津波警報が出た。岩手県は 3 m 以上、宮城県は 6 m 以上でした。釜石市の防災無線も「岩手県は 3 m 以上の大津波が来るので避難するように」との放送だった。3 m 以上の津波と聞いて、一時安心したのは確かだ。その後、その放送を信じて行動した。水位がぐんぐん上がり海岸の倉庫が水没、家に戻り妻を乗せて車を発進したときに店のサッシが壊れる音を耳にした。あの時、なぜ中央からの正確な震度と、大きく訂正された 10 m 以上の津波が来ると放送されなかったのか、悔しく感じてならない。今、家を流されて、仮設に入っ

て思うのは、放送を信じて行動をとった自分の浅はかな態度を反省している。

- ・予想される津波の高さが3 mであるという情報で安心してしまい、あらかじめ甚大な被害を予想できなかった。無線は途中で聞こえなくなった。

3 一度避難していながら、何かしらの理由で戻る、あるいは外出先から家に戻るなどして被災又は避難が遅れた事例

- ・一度は避難したが、寒いので布団を取りに行く、自宅にまで津波が来ないと判断して、戸締り、ガス栓を閉める、車や貴重品等を取りに行くなどといった理由で自宅に戻った。
- ・地震後、自宅に帰宅して休憩中に流された。
- ・高齢の家族を高台に避難させた後、津波襲来まで時間があつたので自宅に戻った。
- ・一度避難したものの、家族を心配し、自宅に戻り流された。
- ・外出先から避難する際に指定避難所に直行せず、自宅に立ち寄って（戻って）逃げ遅れた。
- ・一度避難場所へ逃げたが、ペットが心配になり自宅に戻った。
- ・海が少し見えて、何となく異変を感じ、もう一度、息子に危険を知らせなくてはと自宅に戻った（車に乗ったまま流されたが運良く助かった）

※「『避難後、絶対に戻ってはいけない』という先人の教訓を守らなかったことが逃げ遅れた原因として挙げられる」とする意見があった。

4 別なことに気を取られて、あるいは何かをしていて被災又は避難が遅れた事例

- ・事業所で落下物等の片付けのため避難をしない、あるいは避難が遅れた。
- ・家の片付けをしていて、気を取られていた。
- ・漁船の手入れ中に流された。
- ・路上での立ち話や、避難する際も急いで避難しなかった。
- ・商店経営者が仕事のため避難が遅れた事例、商店で顧客とともに避難が遅れた。

5 様々な理由から避難を躊躇して被災又は避難が遅れた事例

- ・地域の避難場所は、全て屋外にあるため、これまでも悪天候、夜間時の避難行動が遅れがちになった。
- ・寒さ
- ・「大丈夫」という家族の意見に押しきられた。

6 避難誘導、水門閉鎖等に携わった方、身体が不自由、歩行困難な方あるいはその支援（避難補助）者が被災又は避難が遅れた事例

※水門閉鎖は、消防団だけでなく地域の方も関わっている地域が多い。

- ・消防団員が住民への避難誘導の呼び掛けに時間を要してしまい、流された。
- ・高齢者や体が不自由な方などを助けていて、一緒に避難をしていて（遅れた）。
- ・一旦避難するものの、人を助けるために戻って流された。
- ・歩行困難な高齢者の避難を補助する過程で、消防団や近隣住民が犠牲になる事例が発生していた。（避難補助者は、近隣の方に避難の呼び掛け、一旦、高台に避難したが、避難の補助が必要と集落の下まで降りてきて避難支援を行っていた）
- ・他の住民に避難誘導の声掛けをして、流された方もいた。
- ・身近にいた方の安否を気遣い、ともに被災した。残しては逃げられなかった。
- ・体の不自由な方が避難に間に合わず亡くなった。
- ・高齢かつ歩行困難で避難が間に合わなかった事例
- ・体の不自由な方が避難できずに流された。また、避難させようと戻った救助者も流された。
- ・体の不自由な方を安全と思われる場所まで車椅子で移動させたが、その場所が浸水して流された。
- ・水門内側に駐車している車が次々と移動するため、最後に閉鎖した水門では5分から10分くらいの時間を要し、消防団の避難が遅れた。

第3項 その他、様々な要因から被災又は避難が遅れた事例等

その他、被災した事例の中でも、本人が気づかぬうちに「危険な行動を取っていた」事例や、不可抗力で不幸にも津波に巻き込まれた事例などについて、項目ごとに整理した。

たとえば、車中にいて渋滞に巻き込まれた、通常と変わらないルート（浸水の可能性がある場所）を通ったことから危険を伴った事例などがあつた。

1 車で移動中に被災又は避難が遅れた事例

- ・ 堅牢な自宅の2階に待機していれば助かったのに、避難所への移動中に流されてしまった方もいた。
- ・ 車で他地域へ避難中、車ごと流された。
- ・ 渋滞中の車を津波が襲い、車ごと流された。
- ・ 身体の不自由な方が車で避難しようとして流された。
- ・ 地震後、職場から車で帰宅中、渋滞に巻き込まれ流された。
- ・ 津波が渋滞中の車を襲い、車内に留まった方が流された。
- ・ バス乗車中に被災した。

2 海の様子を見に行く、あるいは海の様子がわからなかったことなどから、被災又は避難が遅れた事例

- ・ 津波の状況確認のため、海岸に出かけた。
- ・ 海の様子を見に行く、海の様子を見に行った家族を呼びに行行って流された。
- ・ まさか津波がここまで来るとは思わずに、高台で津波を見ていた。その後、津波が防潮堤を越えてくるのを見て、皆が「逃げろ」となり走ったが、パニックになっていたためか、お寺の山間に逃げる人について行ってしまい、おかげで津波に飲まれた。（15人くらい波に飲まれたが全員助かった）
- ・ ぎりぎりまで様子を見ていて逃げ遅れた。
- ・ 防潮堤が高く、海の様子が見えない分、不安を感じる住民もいた。
- ・ 「明治・昭和三陸津波を受けて、造成された高台で流された方が多かった。山の影で海が見えなかったことも被害が出てしまった要因だと思う」とす

る意見があった。

3 避難した場所・避難ルートに津波が押し寄せ被災又は避難が遅れた事例

- ・ 鶴住居地区防災センターは、本来の避難場所ではないのに訓練時に使用していたことなどから、主に仲町と上町町内の一部の方が身を寄せた。
- ・ 津波避難場所ではなく、親類・知人宅に避難したため津波に流された。
- ・ 避難所や自宅に「戻る」ことだけが頭にあった。
- ・ 後から考えると、国道を平田球場のほうに歩いて行けばよかったのだが、避難場所は平田小学校校庭とインプットされていたので、いつもの訓練どおりに行動をとっていた。（結果、助かった）
- ・ 訓練通りに鶴住居地区防災センターに避難することにした。（幸いにも助かった）

4 その他の事例（複合的な要因を含む）

- ・ 津波の危機意識が薄く、警報も聞こえず、また、建物で直前まで波が見えず、また音もなく静かに波が押し寄せたこともあり、路上で立ち話をしていた津波に流されたり、避難する際も急いで避難しない事例や、避難する必要が分からなかった方が多かった。
- ・ 恐怖等のため、身動きできずに流された。
- ・ 気が動転している高齢者がいた。
- ・ 足下に水が来ているのに佇んだまま、流された。
- ・ 声を掛けたが、家族とともに逃げるため、自宅に留まり待つ方もいた。
- ・ 地区の漁業者の方々は、まだ海岸の作業所にいる者、防潮堤の上にいる者もありましたので、「おい津波が来るぞー、早く逃げろよ」と声を掛けしたが、この方々から多くの犠牲者が出た。
- ・ 私の家では宮城県沖地震が必ず来るだろうということで常に津波の話はしていた。子どもたちは学校で「てんでんこ」を学び、私は父から昔の津波の話を聞いていた。（それでも高台にある我が家まで津波が上がってくるとは想定外）
- ・ 夜に救助された後、低体温症で亡くなった。
- ・ 常日頃から避難訓練に参加していない高齢者も亡くなった。

- ・避難訓練に毎年参加していたが、地震があったら津波を想起できるようになっていなかった。
- ・3月3日の避難訓練は形式的・表面的になってしまい、重要であるという認識が薄れていた。（同地域で、相反する意見あり）
- ・避難訓練に参加しない人の多くが亡くなった。避難せず家の中にいた。

第2節 見解がわかれた事項あるいは留意事項

避難行動に対して「プラス」、「マイナス」の両方に影響があった要因について整理した。

第1項 防災行政無線について

- 予想される津波の高さ「3m」が、受け取る人によって、迅速避難をする動機にも、避難をしないという安心材料にもなっていた。
- 防災行政無線については、以下のような意見が寄せられた。
 - ・無線は、聞いていない。
 - ・放送の内容が分からなかった。
 - ・動転していて内容が理解できなかった。
 - ・サイレンは聞こえたが、放送の内容は余り理解できなかった。
 - ・耳に入らなかった。
 - ・余裕がなかった。
 - ・波高のみ聞こえた。
 - ・サイレンなども鳴らなかった。
 - ・海岸付近では聞こえない場所がある。
 - ・地域に無線が一つしかなく、日頃から聞こえづらい場所があった。
 - ・以前から天候次第で聞こえる場所と聞こえない場所があった。

なかでも「放送の内容が理解できなかった」という意見については、放送を受けても、どう行動すべきかを理解できない可能性がある。

⇒ 情報の有無に関わらず（情報に頼ることなく）、迅速な避難を徹底する。

⇒ 各地域でどういった行動をするべきかといったことを、地域の中で共通の認識としてもっておく必要がある。

第2項 避難訓練について

避難訓練についても、その評価について相反する見解が示された。

その理由として、そもそも地域の特性あるいは参加者の属性、その目的等により、異なった訓練内容で訓練が実施されていたためと考えられる。

一方、地域によっては、住民が「参加しやすい」あるいは「寒くない」「屋根がある」施設等で訓練は実施したいという要望があり、訓練時のみの使用や、避難場所を高台から移動に負担のかからない身近な場所へと変更した事例も見られた。

⇒ 「災害時は、普段やっているとおりのことしかできない」ことから、地域で毎年実施される訓練の目的・内容を見直すことが必要である。

⇒ 大規模な津波災害を想定し、このたびの経験を生かした実践的な訓練を実施することが必要である。

⇒ 避難訓練では、実際に使われる「安全な避難ルート」を通り、実際に使用する安全な避難場所・避難所への避難を訓練として実施することが必要である。

第3項 避難場所について

震災では、海の様子、津波の状況を見ながら、避難場所から更なる避難（二度逃げ）をした事例があった。

また、地域によっては、高齢者や身体が不自由な方が、避難場所が遠く移動することが困難なことなどから下へ下へと変更した事例や、適切な避難場所・避難所が周辺にないことなどから、地域で話し合い、3階以上の民間施設を避難場所としていた事例があった。

⇒ 地域で、適切な避難場所を相談・取り決めておくことが必要である。

⇒ 迅速かつ円滑な避難行動に結びつけるためにも、訓練の機会を有効に活用することが必要である。

第4項 「避難をしない」方、津波の怖さについて実感がない方について

「この家が流されるならば、避難をする意義を感じない」などと考え、避難をしない方がいる。

また、内陸部からの移住者、勤務者の中には、震災時に、津波の危険を察知できず迅速な避難等が困難であった事例があった。

⇒ 地域、企業等との連携を図りながら、津波に対する知識を学び、迅速な避難行動に結びつける取り組みが必要である。

資料：地域の避難行動実態にみる津波避難の教訓

平成25年度に開催した釜石市東日本大震災検証委員会では、地域懇談会などを通じた避難行動の聞き取り調査などの結果を踏まえ、「地域の避難行動の実態に見る津波避難行動の教訓」案を取りまとめた。

教訓は、前文及び4項目に分類され、各解説文が付属している。

地域の避難行動の実態に見る津波避難行動の教訓

(検証報告書【津波避難行動編】 p. 3-49 から抜粋)

各地域の“3.11 東日本大震災の避難行動”と“震災以前の私たち釜石市市民の津波に対する意識や備え”のあり様を検証した結果を踏まえ、今度こそ津波による犠牲者を出さないようにするために、それを教訓として以下のようにとりまとめました。

教訓は、以下に示す前文と4つの項目に分類してとりまとめました。

【前文】

地震・津波に備えることは、この地に住む人々の“心得”。海の恵みを享受する釜石の豊かな暮らしを継続するために、いたずらに海を恐れず、市民全員でこの教訓を日頃から心がけ、後世に継承する。

1) 元来、自然は予想外の災害をもたらすもの。

地震・津波に対しては“自分の命は自分で守る”という意識を堅持し、日頃からの備えを怠らない。

2) “命てんでんこ”の本質は、互いの信頼。

それぞれが自分の命を守り、それを信じ合えることが、本当の絆。

3) 被災した直後の思いを語り継いでいくことには限界がある。

“避難する”ことを実践し続けることで地域の文化をつくり、それを後世に継承する。

4) いざというときは、想定にとらわれず、最善を尽くし、率先して避難する。

【解説】

1) 元来、自然は予想外の災害をもたらすもの。

地震・津波に対しては“自分の命は自分で守る”という意識を堅持し、日頃からの備えを怠らない。

(1-1) 生活の様々な場面を想定し、非常持出品や水・食料などの備蓄をしておく

(1-2) 家族や友人などと、様々な状況を想定して津波避難方法を相談しておく

(1-3) 地域、職場、学校などでも、津波避難方法を話し合う機会を持ち、訓練などを通じて確認しておく

＊解説

(1-1)

- ・地震はいつでもどこにいたときに発生するかわかりません。そのため、非常持出品や水・食料などの備蓄は、自宅だけでなく、普段の生活の様々な場面（例えば職場など）を想定し、そこで必要となるであろうものを考えて備えておきましょう。
- ・東日本大震災の際には、非常持出品を用意していたにもかかわらず、大きな揺れに動揺してしまい、それを持って避難することができなかった方もいたようです。準備しておくだけでなく、定期的に保管してある場所の確認や地震が発生した際の対応を考えておくことが必要です。

(1-2)

- ・東日本大震災のように、地震は自宅で家族と一緒にいるときに発生するとは限りません。そのため、日頃から家族や友人などと、通勤や通学の途中、家族が別々の状況にいるときなど、様々な状況を想定して、安全な避難場所を考えたり、避難経路を確認したりしておきましょう。
- ・東日本大震災の際には、地震発生後、家族の様子を確認するために、外出先から避難せずに帰宅してしまったため、危険な目にあったり、津波に流されてしまった人も少なくありませんでした。

(1-3)

- ・自宅以外の場所にいるときに地震が発生する場合があります。そのため、家庭だけでなく、地域、職場、学校など、様々な組織や単位で、日頃から津波避難方法を検討するとともに、訓練を通じて、しっかりと確認してお

くことを定期的に実施していくことが必要です。

- ・なお、避難訓練を実施する際には、実際に災害が発生した場合と同様の状況を想定することが必要です。「訓練のときはこうするけど、実際に災害が発生した場合には違う」という対応はすべきではありません。
- ・東日本大震災の際には、津波で犠牲となった方の中に、震災前に避難訓練に参加していなかった方が少なくないようです。避難所では、犠牲者が確認されると、「あの人、避難訓練に参加したことなかったな」といったような会話もあったそうです。
- ・また、事前に避難方法を検討し訓練をしていた企業では、地震発生後すぐに従業員みんな高台へ避難することができた一方で、それらの検討を行っていなかった企業では、従業員が帰宅途中で津波に流されてしまった事例もありました。
- ・そして、市内の小中学校、幼稚園などでは、震災以前から防災教育や避難訓練を実施していたため、甚大な被害を免れることができました。

2) “命てんでんこ”の本質は、互いの信頼。

それぞれが自分の命を守り、それを信じ合えることが、本当の絆。

- (2-1) 家族が別々の場所にいるときに地震が発生したとしても、お互いに「一人でもちゃんと避難しているはず」と思えるような家族間での信頼関係を構築しておく
- (2-2) 学校や会社などとも、日頃から地震発生時の対応を相談しておくことで、津波避難に関する信頼関係を構築しておく

*解説

(2-1)

- ・東日本大震災は、平日の日中に発生したため、家族が別々の場所にいる状態で地震に遭遇した人も少なくありませんでした。そのような方の多くが、家族や自宅の様子を見に、外出先から帰宅していました。そして、その途中や帰宅後に津波に遭遇し、犠牲となったり、命の危険を感じる経験をしたりしていました。
- ・このように、大きな地震の後に、家族の安否を心配し、できることなら様子を見にいたり、助けにいたりしたいと思うのは、ある意味では当然の感情です。しかし、その行動によって津波犠牲者がでてしまうことも事実です。

- ・そのため、今後は、日頃から家族で津波避難方法についてちゃんと相談しておき、たとえ家族が別々の状況で地震にあったとしても、お互いに一人でもちゃんと避難する、避難しているはず、という信頼関係を構築しておく必要があります。

(2-2)

- ・東日本大震災の際には、学校や幼稚園、保育園に子どもを引き取りに行く保護者もいました。
- ・そのため、学校や園は、子どもを預かっているときに地震が発生した場合には、彼らの身の安全をしっかりと確保することができるように、日頃からしっかりと備えておくとともに、家庭からも信頼されるようにしておく必要があります。
- ・同様に、企業と家庭についてもいざというときの対応について信頼関係を築いておく必要があります。

※ “命てんでんこ”

1) 名称（呼び名）について

東日本大震災以後、一般的には“津波てんでんこ”と言われることが多いようですが、震災以前から釜石市に伝わっていた呼び名には、“命てんでんこ”の他に、“命てんでん”、“命てんでっこ”、“命てんでんっこ”や命を付けずに、単に“てんでんこ”などと言われていました。このように様々な呼び名があったことを踏まえた上で、本教訓（案）では、“命てんでんこ”を統一して用いることとしました。

2) 意味について

“命てんでんこ”にはたくさんの意味が込められています。「津波襲来時には、一家全滅を免れるために、家族のことも構わずに、てんでばらばらに逃げろ」という種を絶やさぬための地域の非情な掟として伝えられたり、津波によって家族を亡くし、一人生き延びてしまった方や、津波襲来時に逃げ遅れた家族を助けに行こうとする方を慰めたり制止したりする言葉「津波のときは“てんでんこ”、仕方なかったんだ」として伝えられてきました。また、“命てんでんこ”は、「てんでばらばらに逃げる」という点だけをとらえ、高齢者などの避難困難者の支援をあきらめる、という意味で解釈されることもあります。このように様々な意味、様々な捉え方があることを踏まえた上で、本教訓（案）では、「いざというときに家族のことを心配してしま

うのは当たり前だからこそ、普段からてんでばらばらに避難することができるようにしておくことが必要」という立場で教訓をとりまとめました。

3) 被災した直後の思いを語り継いでいくことには限界がある。

“避難する”ことを実践し続けることで地域の文化をつくり、それを後世に継承する。

(3-1) この度の被災経験だけでなく、過去の全ての津波の様子や津波避難のあり方を後世に伝えていく

(3-2) 語り継ぐだけでなく、「揺れたら逃げる」という行動をとり続ける

(3-3) たとえ避難が必要なほどの津波が来ないことが何度続いたとしても、繰り返し避難する

*解説

(3-1)

- ・東日本大震災の際には、過去の津波の様子を聞いていた人やチリ津波を経験した人の中には、「ここまで津波は来ない」、「津波はゆっくりと水位が上がってくる」など、過去の津波襲来時と同じような津波が来ることしか想像することができなかった人もいたようです。そして、そのために十分な避難を行わず、津波に流されたり、命の危険を感じる経験をされた方も少なくありません。
- ・そのため、この度の経験を後世に伝える際には、東日本大震災時の様子だけでなく、それ以前に起こった過去の津波の話もするなどして、話を聞いた後世の人たちが、「津波とはこういうもの」という固定概念を持たないようにし、「相手は自然、何が起こるかわからない」ことを伝えることが必要です。

(3-2)

- ・明治や昭和の津波を経験した先人たちは、後世に同じ経験をさせないために、当時の様子や津波からの避難のあり方を言い伝えてきました。しかし、その言い伝えは、3.11 東日本大震災が発生した当時、どれほどの釜石市民にちゃんと伝わっていたのでしょうか？
- ・大震災を経験した私たちは、被災直後の今、後世にこの経験や教訓を言い伝えていこうと考えています。しかし、先人たちがそうであったように、その思いだけでは、次の津波が襲来するであろう次の次の世代まで経験や教訓を正しく言い伝えていくことには限界があるのではないのでしょうか？
- ・そのため、今後は、この度の経験や教訓を次の世代に語り伝えていくだけ

でなく、今からできることとして、「揺れたらすぐに高いところに避難する」という行動を実践していくことが必要です。

(3-3)

- ・地震が発生し、揺れを感じるたびに避難していたとしても、多くの場合は被害が生じるような津波は襲来しないでしょう。この空振りを繰り返すことで、震災以前の私たちは、警報が発表されても「どうせ大きな津波はこないだろう」と思うようになってしまっていたのではないのでしょうか？
- ・しかし、避難の空振りに負けずに、私たちが“避難する”ことを実践し続けることで、次の世代には、この行動が「当たり前」になり、ゆくゆくは釜石市の文化となります。言葉だけでなく、行動を引き継いでいくことで、津波避難のあり方を継承していくことが必要です。
- ・また、「揺れたらすぐに高いところに避難する」という行動をとることが当たり前となるような社会の仕組みをつくることも必要です。例えば、小中学校における防災教育などです。これを継続していけば、将来の釜石市市民は全員津波防災について教育を受けた人になります。継続することが地域の文化をつくることにつながります。

4) いざというときは、想定にとらわれず、最善を尽くし、率先して避難する。

- (4-1) 大きな揺れを感じたり、津波警報が発表されたら、とにかく高いところへ避難する
- (4-2) 揺れの大きさや予想津波高さ、過去の津波浸水範囲やハザードマップなどの情報から「ここまで津波は来ない」などと勝手に判断しない
- (4-3) 避難する際には、周辺の人同士、声をかけあいながら避難する
- (4-4) 避難の呼び掛けを受けたら、素直に呼び掛けに従って避難する
- (4-5) 避難の途中で、自宅や家族の様子を見に行くなどの寄り道をしない
- (4-6) 渋滞に巻き込まれ、避難が遅れてしまう可能性があるので、徒歩による避難を原則とする
- (4-7) 一度高いところへ避難したら、津波が来なくなるまでそこから動かない

＊解説

(4-1) & (4-2)

- ・東日本大震災の際には、過去の津波の浸水域や事前に公表されていた津波ハザードマップ、そして、地震発生後に発表された「予想津波高さ 3m」や湾口防波堤の存在などから、「ここまで津波は来ない」と判断し、避難し

なかったり、避難が遅れてしまったりして犠牲となった方もいます。

- ・そのため、「相手は自然であって、どんな津波が来るのかはわからない」ので、大きな揺れを感じたり、津波警報が発表されたりしたら、とにかくすぐに高いところに避難するようにしましょう。

(4-3) & (4-4)

- ・避難するかどうか迷っていたり、自宅にとどまっていたりした人の中には、近隣住民からの避難の呼び掛けや「津波がきたぞ」という声を聞くことで、避難することができたという人がたくさんいました。
- ・その一方で、隣人が避難の呼び掛けにきてくれたにもかかわらず、それに従わず、避難の呼び掛けをしにきてくれた人とともに、津波に流されそうになってしまった人もいました。
- ・そのため、避難する際には、隣近所みんなで声をかけあうようにしましょう。また、避難の呼び掛けをうけたら、素直に従って避難するようにしましょう。

(4-5) & (4-6)

- ・東日本大震災の際には、直接高台へ避難せず、自宅の様子や家族の安否を確認に行ってしまったために、被災してしまった方も少なくありませんでした。
- ・さらに、避難する際や自宅の様子等を見に行く際に、自動車を利用した人の中には、渋滞に巻きこまれ、津波に流されてしまった方も少なくありませんでした。
- ・そのため、避難する際には寄り道をせずに高台へ避難する必要があります。その際には、車を利用することを控え、原則として徒歩で避難することが必要です。
- ・そして、自動車を利用しなければ避難することができない人がいる場合には、普段から地域で津波避難時の自動車利用方法について検討しておくことが必要です。

(4-7)

- ・また、一度高台へ避難したにもかかわらず、第一波到達後に自宅や家族の様子を見に戻ってしまい、そこで被災してしまった方も少なくありませんでした。
- ・そのため、今後は、一度高台へ避難したら、津波が来なくなったことが確認できるまで、その場所にとどまり続けることが必要です。

第3章 各地域における震災前・震災時の状況（概要）

地域の伝承、震災時の動き等について、関係資料第4章及び第5章に掲げる項目を基に、下記の項目により各地域の概要を掲載した。

1 震災前（備えほか）

- (1) 津波記念碑
- (2) 地域・世代間における言い伝え
- (3) 平成23年3月3日の避難訓練
- (4) 自主防災組織

2 震災当時の動き（避難行動・避難所ほか）

(1) 避難行動

各地域の避難行動について、下記の区分により別冊の各地域（被災地域）の避難行動マップ（以下、「地図」という。）にその内容を記載した。

ア) 地域の避難行動

検証報告書【津波避難行動編】の記載事項を基本とし、震災関連資料により作成した地域住民の震災後の避難行動

イ) 施設の避難行動

検証報告書【学校・子ども関連施設編】に掲げる学校施設及び子ども関連施設（以下、「学校施設及び子ども関連施設」という。）並びに検証報告書【津波避難行動編】に掲げる高齢者福祉施設等、障がい児通所支援事業所及び障がい者援護施設等（以下、「高齢者福祉施設等」という。）の震災当日の避難行動

ウ) 公共施設の避難行動

本編第4章及び第5章の記載事項により作成した公共施設の震災直後の避難行動

(2) 避難所

検証報告書【避難所運営編】に掲げる避難所の開設及び運営の概要

第 1 節 東部地区

第 1 項 沿岸地区（新浜町、東前町、魚河岸・浜町）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 当該地区に津波記念碑は確認できていない。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 両親、祖父母から津波や地震が来たらすぐに逃げる事等が伝えられていた方が複数いた。その一方で「このあたりには津波は来ない」との話を聞かされていた方、親から津波の話が少なかったという方もいた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 新浜町・東前町で 11%（66 人）、浜町・魚河岸・只越町・港町・東前町で 7%（149 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 新浜町婦人消防クラブは、昭和 63 年 11 月 26 日に設立。新浜町 1、2 丁目を活動地域として、地域の避難道路の通行状況調査の実施や、独自に緊急一時避難場所を確保するための交渉のほか、平成 22 年 12 月には、地域の災害時要援護者を把握する調査を実施した。
- 東前町内会自主防災会は、平成 8 年 10 月 30 日に設立。東前町内会加入世帯で構成され、組織編成は、町内会長以下、防災部長、防災副部長、防災委員といった役員のほか、情報班、消火班、避難誘導班、救出救護班、食料班などであった。平成 9 年度には、補助金で資機材を購入した。
- 浜町 3 丁目連合会自主防災会は、平成 19 年 11 月 15 日に設立。浜町 3 丁目を活動地域とする。役員は会長、副会長、部長（情報部長、避難誘導部長及び救出救護部長）、監事が置かれ、会長は、浜町連合会会長が担当し、部長は各防災部の長として部の運営に当たっていた。
- 浜町 1 丁目町内会自主防災会は、平成 21 年 5 月 27 日に設立。浜町 1 丁目を活動地域とし、組織内では役割分担や高齢者等の避難支援体制などの準備のほか、平成 21 年度に補助金により資機材を購入した。

- 自主防災組織としての活動ではないが、平成 22 年 12 月、尾崎町町内会の一部有志により、地域の災害時要援護者を把握する調査を実施していた。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-1 を参照
- 施設の避難行動については、地図 3-2 を参照
- 公共施設の避難行動については、地図 3-3 を参照

(2) 避難所

- 避難所として、幸楼や尾崎神社のほか、市営釜石ビルや多くの民家が開設された。沿岸地区の避難者数は最大 389 人（3 月 28 日）にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、釜石市地域防災計画（平成 22 年 3 月策定）（以下、「市地域防災計画」という。）上位置づけがあったのは、市営ビル（避難者収容施設）で、東前集会所や新浜町地区コミュニティ消防センターは被災して利用されなかった。
- 市職員の配置は、幸楼のみであった。応援職員の配置はなかった。

第 2 項 市街地区（港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊、祈念として、石應禅寺の境内に 6 基、港町に 1 基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 複数の家庭で、明治の津波の状況や、津波の恐ろしさが祖父母、親から子どもへと伝えられている。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 松原町・港町で 18%（103 人）、浜町・魚河岸・只越町・港町・東前町で 7%（149 人）、只越町・大町で 8%（102 人）、大町・大渡町・駒木町で 5%（61 人）、鈴子町で 15%（14 人）、大町・大渡町・駒木町で 5%（61 人）、対象地区が駒木町で 30%（37 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 港町日の出通り振興組合は、平成 3 年 5 月 12 日に設立。港町日の出通りに居住又は事務所等を有する振興組合員で構成され、役員は、会長、副会長、監事、監査役からなり、会長は港町日の出通り振興組合長が当たる。訓練は 5 年間のうちで 2 回、消火訓練、避難・誘導訓練を実施していた。
- 大渡町内会自主防災会は、平成 6 年 3 月 24 日に設立。大渡町 1～3 丁目を活動地域とし、大渡町内会に居住する世帯で構成され、役員は会長、副会長、監事、会計、会計監査で、防災実践組織として情報班、消火班、避難誘導班、救出救護班、給食給水班などがあるほか、訓練は 5 年間のうちで 2 回、消火訓練、避難・誘導訓練を実施した。平成 7 年度に補助金で資機材を購入した。
- 只越自主防災会は、平成 17 年 11 月 30 日に設立。只越町 1 丁目の商店街通りエリアを活動地域とし、平成 22 年 10 月に自主防災会独自の防災アンケートを実施、防災学習会等防災知識の啓発活動などを行ったが、スタッフの大半が商店従事者のため、訓練や講習の計画が困難であった。平成 17 年度の補助金で資機材を購入したほか、震災前には、3 階以上の建物 4 か所に防災備品用具を設置した。
- 鈴子町内会自主防災会は、平成 23 年 2 月 15 日に設立。組織編成は、本部、情報班、消火班、避難誘導班、救出救護班、給食給水班であった。この地域の災害特性としては集中豪雨、浸水が挙げられるため、平成 24 年度に補助金で資機材を購入した。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-1 を参照
- 施設の避難行動については、地図 3-2 を参照

- 公共施設の避難行動については、地図 3-3 を参照

(2) 避難所

- 避難所として、旧釜石第一中学校や釜石小学校のほか、釜石市保健福祉センターや多くの施設が開設された。市街地区の避難者数は最大 2,769 人（3 月 11 日（想定値））にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、市地域防災計画上位置づけがあったのは、大只越集会所・仙寿院・釜石市保健福祉センター・釜石市教育センター（避難者収容施設）、釜石小学校（拠点避難所・避難者収容施設）で、釜石市民文化会館や只越福祉集会所、港町集会所、釜石市港湾会館、青葉ビル（1 階）、大渡集会所は被災し、第一幼稚園は危険性有で利用されなかった。
- 市職員・応援職員の配置は、旧釜石第一中学校、大只越集会所、釜石パシオン、仙寿院、釜石市保健福祉センター、釜石小学校であった。また、市職員のための配置は、裁判所、石應禅寺、釜石市教育センターであった。

第 3 項 嬉石・松原・大平地区

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊として、嬉石に 1 基、松原に 1 基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 父又は母から津波や地震が来たらすぐに逃げることを伝えられていた方が複数いた。また、地震があったときは川や海に近づいてはいけないことを伝えられていた方もいた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 嬉石町で 13%（114 人）、松原町・港町で 18%（103 人）、対象地区が大平町 3 丁目で 0%（0 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 嬉石町では、平成 23 年 4 月に自主防災会の設立を予定し準備していたが、震災のため未だに設立に及んではない。
- 松原町自主防災会は、平成 9 年 1 月 18 日に設立。組織編成は、会長・総括、副会長、救出・救護班、避難・誘導班、避難所班、現場救護班、情報班などであった。平成 13 年度に補助金で資機材を購入しているほか、平成 14 年に土砂災害が発生し被害を受けたことから、独自に防災マニュアルを作成。平成 19 年には、土砂災害防災訓練に参加するなど地域全体で防災活動に取り組んでいた。また、避難訓練や防災学習会は毎年実施し、3 月 3 日の津波避難訓練では松原公園、松原神社への避難を行っていた。平成 21 年 8 月に奥州市の自治会の受け入れ、自主防災活動研修会の対応を行った。
- 大平望洋ヶ丘町内会自主防災会は平成 16 年 7 月 1 日に設立。この地域の災害特性は火災、土砂崩れが想定されるため、備えとして、物資を備蓄していた。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-4 を参照
- 施設の避難行動については、地図 3-5 を参照

(2) 避難所

- 避難所として、釜石市民交流センター、白山小学校、松原地区コミュニティ消防センター、大平集会所、釜石市鉄の歴史館、大平中学校、釜石商工高校、旧カマイシ観光センターで開設された。嬉石・松原・大平地区の避難者数は、最大 1,072 人（3 月 17 日）にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、旧カマイシ観光センター以外の施設は、市地域防災計画上位位置づけがあり、避難者収容施設となっていた。釜石市民交流センター、白山小学校、大平中学校は、更に拠点避難所となっていた。嬉石地区集会所は被災して利用されなかった。
- 市職員の配置は、釜石市民交流センター、白山小学校（昼のみ）、大

平中学校（昼のみ）であった。また、応援職員の配置は、旧カマイシ観
光センターであった。

第2節 平田地区

第1項 平田地区（大字平田第1～6地割）

1 震災前（備えほか）

（1）津波記念碑

- 教訓として、館山神社前に1基の石碑が確認されている。

（2）地域・世代間における言い伝え

- 両親、祖父母から過去の津波の様子や逃げ方について伝えられていた方が複数いた。また、各家庭で様々な津波に関する伝承が伝えられ、津波の前には「いわしの大漁」、「沖合いから共鳴する発破のような音をする」、「二回揺れ返し」、津波のときには「川沿いには行ってはいけない」、「竹の根で地割れしないから竹やぶに逃げろ」などがある。

（3）平成23年3月3日の避難訓練

- 大字平田第3～6地割で9%（110人）が参加していた。

（4）自主防災組織

- 上平田ニュータウン町内会自主防災会は、平成6年4月1日に設立。大字平田第2地割の高台に位置する上平田ニュータウンを活動地域とし、組織編成は、本部（会長、副会長）、総務（情報班）、消火班、救出救護班、避難誘導班、給食給水班などであった。平成12、13、15年に、初期消火訓練、119番通報訓練、心肺蘇生法実技等の訓練を実施したほか、平成12年度に補助金で資機材を購入し整備をしていた。
- 平田町内会自主防災会は、平成21年10月1日に設立。大字平田（下平田）を活動地域とし、組織編成は、本部、情報班、避難誘導班、初期消火・救出救護班、給食給水班などがあった。平成21年度に平田集会所を避難所とした自主防災訓練を行ったほか、平成21年度に補助金で資機材を購入した。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-6 を参照
- 施設の避難行動については、地図 3-7 を参照
- 公共施設の避難行動については、地図 3-8 を参照

(2) 避難所

- 避難所として、上平田ニュータウン集会所、旧釜石商業高校、日顕寺、あいぜんの里、ホテルシーガリアマリンで開設された。平田地区の避難者数は最大 569 人（3 月 11 日（想定値））にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、市地域防災計画上位位置づけがあったのは、上平田ニュータウン集会所（避難者収容施設）で、釜石・大槌地域産業育成センターは被災し、平田小学校・平田幼稚園は、危険性有で利用されなかった。
- 市職員・応援職員の配置は、旧釜石商業高校のみであった。

第 2 項 尾崎白浜地区（大字平田第 7 ～ 8 地割）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊、祈念として、尾崎白浜に 4 基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 佐須に住む先代から「大津波のときは山が鳴る」と伝えられていた方や、父親から「津波は 3、40 年周期で襲来してくる」と伝えられていた方がいた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 大字平田第 7 ～ 8 地割で 18%（60 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 尾崎白浜婦人消防協力隊は、昭和 62 年 7 月 7 日に設立。消防屯所を拠

点に大字平田第7～9地割を活動地域とし、防災学習会等防災知識の啓発活動や防災訓練の実施、組織内外の会議、打ち合わせ等の会合、心肺蘇生法に係る講習などのほか、防災訓練（避難・誘導訓練、消火訓練、心肺蘇生法等）は毎年実施していた。

- 尾崎白浜町内会自主防災会は、平成22年10月25日に設立。大字平田第7～8地割を活動地域とし、組織編成は、本部、情報班、消火班、救出救護班、給食給水班などがあった。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図3-9を参照

(2) 避難所

- 避難所として、旧尾崎小学校が開設された。尾崎白浜地区の避難者数の総数は、最大371人（3月11日（想定値））にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、市地域防災計画上位置づけがあった施設はなかった。尾崎白浜地区コミュニティ消防センターは、被災して利用されなかった。
- 市職員・応援職員ともに、配置はなかった。

第3項 佐須地区（大字平田第9地割）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊、教訓として、佐須に3基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 地域・世代間における言い伝えに関する情報は特になかった。

(3) 平成23年3月3日の避難訓練

- 大字平田第9地割で54%（53人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 佐須町内会自主防災会は、平成 22 年 8 月 20 日に設立。大字平田第 9 地割（佐須）を活動地域とし、組織編成は消火・救出救護・避難誘導・給食給水などの班があるほか、平成 22 年度に補助金で資機材を購入し整備した。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-10 を参照

(2) 避難所

- 避難所としての開設はなかった。
- 佐須集会所は危険性有で利用されなかった。

第 3 節 鵜住居地区

第 1 項 鵜住居地区（鵜住居町第 1 ～19 ・ 23 ・ 24 地割）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊として、常楽寺敷地内に 1 基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 第 1 波より第 2 波の方がはるかに大きいと伝えられていた方がいた。
また、大槌町から移り住んだ方は、三陸の津波は地震から約 30 分後。とにかく「逃げる」そして「戻るな」・物より命を守ることを伝えられていた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 鵜住居町第 11～12、14～19 地割で 24%（330 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 鵜住居仲町内会自主防災会は、平成 7 年 5 月 1 日に設立。鵜住居町第

16 地割の一部（国道 45 号、JR 山田線、長内川を境界とした区域）を活動地域とし、組織編成は、会長、情報班、消火班、救出救護班、避難誘導班、給食給水班などがあった。防災訓練は震災前の 5 年の間に 2 回実施した。

- 新田・神の沢町内会防災会は、平成 15 年 4 月 1 日に設立。鵜住居町第 7～8、10、12 地割及び第 13 地割の一部（常楽寺参道を境とする区域）を活動地域とし、組織編成は、本部及び本部付、消火班、避難・誘導班、救出・救護班、情報・伝達班、給食・給水班などがあった。平成 15 年 11 月に、鵜住居町 13 地割内（常楽寺・五葉寮付近）で、林野火災を想定した訓練を実施した。
- 長内自主防災会は、平成 21 年 7 月 23 日に設立。鵜住居町の日向・新川原を活動地域とし、組織編成は、本部、情報班、避難誘導班、初期消火・救出救護班、給食給水班などがあった。住民の安否確認体制や避難支援体制（高齢者等）の備えのほか、自主防災訓練は毎年行っており、情報伝達訓練の実施、安否札の配布、地下水調査を実施。また、平成 21 年度に補助金で資機材を購入、平成 22 年 10 月 3 日には、独自に防災運動会を実施した。震災の 10 日前には、炊き出し訓練を実施し、日赤の指導を受けて炊き出し袋 2,000 枚を購入し備えていた。
- 鵜住居上町内会自主防災会は、平成 21 年 6 月 28 日に設立。上町を活動地域とし、組織編成は、本部、情報班、避難誘導班、初期消火・救出救護班、給食給水班があった。防災訓練としては消火訓練、救助救護訓練、避難誘導訓練、給食給水訓練などを実施していたほか、平成 21 年度に補助金で資機材として発電機を購入、平成 22 年 8 月 8 日に防災訓練を実施し、10 月 24 日には上町内会独自で防災運動会を実施していた。
- 川原町内会自主防災会は、平成 21 年 9 月 3 日に設立。鵜住居町の川原地区を活動地域とし、組織編成は、本部、情報部、避難誘導・初期消火・救出救護部、給食給水部があった。平成 21 年 10 月 12 日の自主防災会発足式では初期消火訓練、AED・心肺蘇生法、応急炊出し訓練等の防災訓練を実施、平成 22 年 7 月 10 日に応急手当手法に係る講習、テント、拡声器等の紹介、津波・土砂災害への備え等の訓練を実施していた。平成 21 年度には、補助金で資機材を購入した。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-11 を参照
- 施設の避難行動については、地図 3-12 を参照

(2) 避難所

- 避難所として、長内集会所、日向アパート、外山集会所、やまざき機能訓練デイサービスホーム前広場（旧 JA 集配センター広場）で開設された。鵜住居地区の避難者数は、最大 281 人（3 月 17 日）にも及んだ。
（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、市地域防災計画上位置づけがあったのは、長内集会所（避難者収容施設）、外山集会所（避難者収容施設）で、鵜住居地区防災センターや鵜住居小学校、釜石東中学校などは被災して利用されなかった。
- 市職員の配置は、長内集会所のみであった。

第 2 項 根浜地区（鵜住居町第 20～22 地割）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 当該地区に津波記念碑は確認できていない。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 父親から「津波は 3 倍で来る」と伝えられていた方がいた。また、当該地区の方においては、高台への避難と、海を見ることが重要であることを認識していた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 根浜地区で 10%（17 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 根浜親交会防災部は、平成 15 年 1 月 3 日に設立。鵜住居町第 20～22 地割（根浜）を活動地域とし、組織編成は、防災部長、防災副部長、防災

部事務局、一班、二班、三班があった。避難・誘導訓練は、毎年実施していたほか、防災部では事前に各家庭に乾パンなどを配布した。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-13 を参照

(2) 避難所

- 避難所として、宝来館で開設された。根浜地区の避難者数は最大 72 人（3 月 17 日）にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、市地域防災計画上位置づけがあった施設はなかった。根浜レストハウスや根浜海岸健康福祉センター、根浜集会所は被災して利用されなかった。
- 市職員・応援職員ともに、配置はなかった。

第 3 項 両石地区（両石町第 1 ～ 3 地割）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊、教訓として、恋の峠付近の国道 45 号線脇に 3 基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 過去の津波の様子について伝えられていた方が複数いた。また、縦揺れが来たら、津波が来ると伝えられていた方もいた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 両石町で 16%（99 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 両石婦人消防クラブは、昭和 58 年 7 月 3 日に設立。両石町第 1 ～ 5 地割を活動地域として、組織内の役割分担、避難訓練などを実施した。両石婦人消防クラブは両石町自主防災組織の防災委員として、初期消火班

に組み込まれている。

- 両石町自主防災組織は、平成 22 年 12 月 1 日に設立。両石町第 1 ～ 4 地割（水海、女遊部地区を除く）を活動地域とし、組織編成は、本部、情報収集伝達班、初期消火班、避難誘導班、緊急搬送班、救出・救護班、炊き出し班、避難所管理班があり、他に要援護者搬送委嘱者が 12 班あった。防災関係諸行事の実施する時期に併せて防災知識の普及啓発を実施していたほか、物資の備蓄、住民の安否確認体制、避難支援体制（高齢者等）、ワイヤレスハンドマイク等を備えていた。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-14 を参照

(2) 避難所

- 避難所としての開設はなかった。
- 市地域防災計画上位置づけがあった両石漁村センターは被災して利用されなかった。

第 4 項 水海地区（両石町第 4 地割）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 当該地区に津波記念碑は確認できていない。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 過去の津波について自宅付近の浸水域を伝えられていた方がいた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 水海地区にあっては情報なし

(4) 自主防災組織

- 両石地区にある両石婦人消防クラブは水海地区も管轄している。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-15 を参照。

(2) 避難所

- 避難所としての開設はなかったが、近隣の女遊部集会所の避難者数は、最大 253 人（3 月 11 日（想定値））にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、市地域防災計画上位位置づけがあった施設はなかった。水海集会所は被災して利用されなかった。
- 女遊部集会所での市職員・応援職員の配置はなかった。

第 5 項 片岸地区（片岸町第 1 ～ 9 地割）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊、教訓として、館稻荷神社山裾標高 10m に 2 基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 両親、祖父母から津波前に海が濁ることが伝えられていた方が複数いた。また、津波が過去に来たことを示す地名があることを伝えられていた方も複数いた。他に、津波の 2，3 波の方が大きいと伝えられていた方もいた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 片岸町で 16%（105 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 片岸町自主防災会は、平成 16 年 4 月 1 日に設立。片岸町第 1 ～ 9 地割を活動地域とし、組織編成は、本部の下に消火班、避難誘導班、救出救護情報班、給食給水班などがあった。住民の安否確認体制、避難支援体制（高齢者等）にも備えていたほか、平成 21 年度には補助金で資機材を

購入していた。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-16 を参照
- 施設の避難行動については、地図 3-17 を参照

(2) 避難所

- 避難所として、古廟坂高台、北光水道倉庫跡で開設された。片岸地区の避難者数は、最大 26 人（3 月 17 日）にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、市地域防災計画上位位置づけがあった施設はなかった。片岸集会所や釜石職業訓練校片岸校は被災して利用されなかった。
- 市職員・応援職員ともに、配置はなかった。

第 6 項 室浜地区（片岸町第 10 地割）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊、教訓として、県道吉里吉里釜石線の脇（沿道）の標高 10m 地点に 2 基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 地震が来たら遠くに行くのではなく高いところに駆け上がることや、観世音神社の鳥居まで行けば大丈夫と伝えられていた方がいた。また、自宅は高所にあるから心配ないと伝えられていた方もいた。ほかに、明治三陸津波の来襲前に大漁の日が続いたという逸話もある。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 室浜地区で 41%（80 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 室浜自主防災会は、平成 22 年 7 月 1 日に設立。片岸町第 10 地割（室浜）

を活動地域とし、組織編成は、本部、情報班、消火班、避難誘導班、救出救護班、給食給水班などがあった。防災訓練は毎年実施しており、平成 22 年 11 月 7 日には消防署鶴住居出張所の対応の下で避難訓練、消火訓練等を実施したほか、平成 22 年度には補助金で資機材を購入した。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-18 を参照

(2) 避難所

- 避難所として、室浜民宿シーサイドで開設された。室浜地区の避難者数は、最大 23 人（3 月 17 日）にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、市地域防災計画上位置づけがあった施設はなかった。鶴住居公民館室浜分館は、被災して利用されなかった。
- 市職員・応援職員ともに、配置はなかった。

第 7 項 箱崎白浜地区（箱崎町第 1 ～ 3 地割）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 当該地区に津波記念碑は確認できていない。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- チリ地震津波（浸水域・鮑を採ったこと）について伝えられていた方が複数いた。また、津波の時に川に近づかないように伝えられていた方もいた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 箱崎白浜地区で 17%（66 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 白浜町内会自主防災部は、平成 14 年 8 月 2 日に設立。箱崎町第 1 ～ 3 地割を活動地域とし、組織編成は、部長、副部長、総務（情報）班、消

火班、救護救出班、避難誘導班、給食給水班などであった。物資の備蓄、住民の安否確認体制等の備えのほか、平成 18 年度には補助金で資機材を購入した。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-19 を参照。

(2) 避難所

- 避難所として、白浜集会所、旧白浜小学校で開設された。箱崎白浜地区の避難者数は、最大 30 人（4 月 27 日）にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、市地域防災計画上位置づけがあったのは、旧白浜小学校（拠点避難所・避難者収容施設）で、白浜漁村センターは被災して利用されなかった。
- 市職員・応援職員ともに、配置はなかった。

第 8 項 仮宿地区（箱崎町第 4 地割）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊として、大仮宿の海岸近傍の山腹標高 15m の位置に 3 基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 地震の後、沖に船を出す対応について伝えられていた方がいた。また、潮が引いた後にウニを採り、津波が来襲してからもゆっくり避難することができたという逸話が伝わっていた方もいた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 仮宿地区で 31%（25 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 仮宿町内会自主防災会は、平成 22 年 10 月 12 日に設立。箱崎町第 4 地割（仮宿）を活動地域とし、組織編成は、本部、仮宿分館管理担当、救護班、給食給水班、消火・災害復旧班などがあつた。市実施による 3 月 3 日の避難訓練に参加したほか、町内会、消防団でも自主的に避難訓練を実施した。平成 22 年度に補助金により資機材を購入していた。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-20 を参照

(2) 避難所

- 避難所としての開設はなかった。

第 9 項 箱崎地区（箱崎町第 5 ～12 地割）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊、教訓として、沿道の標高 15m の位置に 2 基、標高 11m 位置に 1 基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 先輩や両親から、「大きい地震が来たら逃げろ」「明治・昭和の津波はここまで来襲した」と伝えられていた方がいた。その一方で「このあたりには津波は来ない」との話を聞かされていた方もいた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 箱崎地区で 10%（74 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 箱崎町自主防災会は、平成 22 年 7 月 17 日に設立。箱崎町第 5 ～12 地割を活動地域とし、組織編成は、対策本部、避難・誘導班、消火班、救出班、救護班、給食・給水班などがあつた。平成 22 年 11 月 13 日には、箱

崎町自主防災会防災訓練として、初期消火訓練、応急手当訓練、心肺蘇生・AED 訓練、講話等を実施した。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-21 を参照
- 施設の避難行動については、地図 3-22 を参照

(2) 避難所

- 避難所として、多くの民家が開設された。箱崎地区の避難者数は最大 264 人（3 月 17 日）にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記民家のうち、市地域防災計画上位位置づけがあった施設はなかった。箱崎漁村センターや旧箱崎小学校は被災して利用されなかった。
- 市職員・応援職員ともに、配置はなかった。

第 10 項 桑の浜地区（箱崎町第 13 地割）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 当該地区に津波記念碑は確認できていない。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 地域・世代間における言い伝えに関する情報はなし

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 桑の浜地区で 25%（30 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 当該地区では自主防災組織は設立されていなかった。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-23 を参照

(2) 避難所

- 避難所として、多くの民家が開設された。沿岸地区の避難者数は、最大 18 人（3 月 11 日（想定値））にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記民家のうち、市地域防災計画上位位置づけがあった施設はなかった。
- 市職員・応援職員ともに、配置はなかった。

第 4 節 唐丹地区

第 1 項 花露辺地区

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊として、県道桜峠平田線の脇標高 30m の位置に 1 基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 地域・世代間における言い伝えに関する情報はなし

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 花露辺地区で 45%（95 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 当該地区では自主防災組織は設立されていなかった。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-24 を参照。

(2) 避難所

- 避難所として、花露辺漁村センターで開設された。花露辺地区の避難者は最大 151 人（3 月 17 日）にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）

- 上記施設のうち、市地域防災計画上位置づけがあったのは、花露辺漁村センター（避難者収容施設）であった。
- 市職員・応援職員ともに、配置はなかった。

第2項 本郷地区（本郷・大曾根・桜峠）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊、祈念として、県道桜峠平田線脇に3基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 明治・昭和の大津波などの過去の津波について伝えられていた方が複数いた。

(3) 平成23年3月3日の避難訓練

- 本郷・大曾根地区で23%（105人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 当該地区では自主防災組織は設立されていなかった。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図3-25を参照。

(2) 避難所

- 避難所として、本郷地区コミュニティ消防センターで開設された。本郷地区の避難者数は、最大250人（3月17日）にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、市地域防災計画上位置づけがあったのは、本郷地区コミュニティ消防センター（避難者収容施設）で、本郷地区生活改善センターは被災して利用されなかった。
- 市職員・応援職員ともに、配置はなかった。

第3項 小白浜地区

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 祈念、慰霊として、盛巖寺の敷地内に3基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 海岸側に住む住民は昭和8年の津波後の造成地を横断する「敷地通り」まで逃げれば安心だという意識があった。また、イロリにはスリバチをかぶせること（火災防止）や津波あがりのタコ、タラ、ウニは食うなどいうことを伝えられていた方がいた。

(3) 平成23年3月3日の避難訓練

- 小白浜地区で8%（45人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 小白浜町内会自主防災会は、平成17年10月1日に設立。活動としては防災学習会、防犯知識の啓蒙活動を実施していたほか、住民の安否確認体制を整えていた。また、市の助成金を活用し、消火栓を整備したほか、震災後の平成25年度の補助金により資機材を購入した。
- 唐丹駐在所連絡協議会防災部会は、平成15年4月1日に設立。唐丹駐在所管内の町内会・自治会で構成され、唐丹駐在所勤務員が運営担当となっている。部会制となっており、防犯部会・交通部会・防災部会・社教部会・事務所部会の5部編成で組織され、防災部会には消防団第8分団が入っていた。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図3-26を参照
- 施設の避難行動については、地図3-27を参照

(2) 避難所

- 避難所として、唐丹公民館（生活応援センター）、いきいき指定唐丹

居宅介護支援センターが開設された。小白浜地区の避難者数は最大 105 人（3 月 17 日）にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）

- 上記施設のうち、市地域防災計画上位位置づけがあったのは、唐丹公民館（生活応援センター）（避難者収容施設）で、唐丹中学校は被災して利用されなかった。
- 市職員の配置は、いきいき指定唐丹居宅介護支援センターのみであった。応援職員の配置はなかった。

第 4 項 片岸地区

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 慰霊として、標高 20m の天照御祖神社参道脇に 1 基の石碑が確認されている。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 祖母から一度避難したら絶対戻らないことを伝えられていた方、揺れ返し後に津波が来ると伝えられていた方がいた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 片岸地区で 15%（43 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 当該地区では自主防災組織は設立されていなかった。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-26 を参照
- 施設の避難行動については、地図 3-27 を参照

(2) 避難所

- 避難所として、天照御祖神社、片川集会所で開設された。片岸地区の避難者数は、最大 51 人（3 月 17 日）にも及んだ。（避難所運営対策班資

料より)

- 上記民家のうち、市地域防災計画上位置づけがあった施設はなかった。
唐丹小学校は、被災して利用されなかった。
- 市職員・応援職員ともに、配置はなかった。

第5項 荒川地区（荒川・下荒川）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 当該地区に津波記念碑は確認できていない。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 揺れ返し後に津波が来ることを伝えられていた方が複数いた。また、
てんでんこ（家を途絶えさせないために親子であろうとてんでに逃げる）
について伝えられていた方もいた。

(3) 平成23年3月3日の避難訓練

- 荒川・下荒川・上荒川地区で15%（53人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 荒川町内会防災部会は、平成9年2月23日に設立。唐丹町字荒川・上荒川・下荒川を活動地域として、組織編成は、防災部長、防災副部長、防災部事務局、防災部会計、会計監査、防災本部、情報班、消火班、避難誘導班、救出救護班、給食給水班などがあつた。平成14年度には、補助金で資機材を購入しているほか、平成14年11月17日に初期消火訓練、今年度配備の防災資機材の説明、心肺蘇生法実技等の訓練を実施。平成18年6月25日、平成19年6月24日、平成20年11月30日、平成21年6月21日には、初期消火訓練、消火器・AEDの使用法、家具の転倒防止、住宅用火災警報器、土砂災害防止月間等の訓練を実施していた。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図3-28を参照。

(2) 避難所

- 避難所として、荒川集会所、荒金集会所が開設された。荒川地区の避難者数は、最大 103 人（3 月 17 日）にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）
- 上記施設のうち、市地域防災計画上位位置づけがあったのは、荒川集会所（避難者収容施設）、荒金集会所（避難者収容施設）であった。
- 市職員・応援職員ともに、配置はなかった。

第 6 項 大石地区（大石・向・屋形）

1 震災前（備えほか）

(1) 津波記念碑

- 当該地区に津波記念碑は確認できていない。

(2) 地域・世代間における言い伝え

- 明治三陸津波・昭和三陸津波について伝えられていた方がいた。また、避難経路について伝えられていた方もいた。

(3) 平成 23 年 3 月 3 日の避難訓練

- 大石・向・屋形地区で 52%（63 人）が参加していた。

(4) 自主防災組織

- 当該地区では自主防災組織は設立されていなかった。

2 震災当時の動き（避難行動、避難所ほか）

(1) 避難行動

- 地域の避難行動については、地図 3-29 を参照

(2) 避難所

- 避難所として、大石地域交流センターで開設された。大石地区の避難者数は、最大 101 人（3 月 11 日（想定値））にも及んだ。（避難所運営対策班資料より）

- 上記施設のうち、市地域防災計画上位位置づけがあったのは、大石地域交流センター（避難者収容施設）で、唐丹林業センターは被災して利用されなかった。
- 市職員・応援職員ともに、配置はなかった。

關係資料

第4章 「証言」から得られた地域の伝承、震災時の動き等（詳細）

地域の伝承、震災時の動き等について、検証報告書（平成23年度版）、検証報告書【津波避難行動編】及び震災関連資料にある「証言」に当たる部分を基に、下記の項目により、各地域に抽出し、整理・分類をした。

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

- 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況
- これまでの備え・よかった点・課題ほか

<震災時の地域の動きと避難行動>

- 避難のきっかけ・避難誘導
- 水門・陸閘の閉鎖
- 当時の状況（目視の範囲）
- 主な避難行動の状況（特徴的な事項）
- 防災行政無線・情報について
- 高齢者福祉施設等及び公共施設の避難行動
- 救助の状況
- 亡くなった方・行方不明となっている方について
- その他

注）「流される」という表現は、アンケートや証言等で市民が話されたことに由来する。

第 1 節 東部地区

第 1 項 沿岸地区（新浜町、東前町、魚河岸・浜町）

1 新 浜 町

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・昭和 63 年 11 月に新浜町婦人消防クラブが設立された。
- ・震災の前年(平成 22 年)11 月の片田先生の講演を受けて、婦人消防団が中心となり、12 月にアンケートをとって各家庭の家族構成や災害時要援護者の把握のほか、地域の避難道路の通行状況を調査、また緊急避難できる建物として使うことの交渉を行っているところだった。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・今後、新たな避難場所や標識の整備が必要である。
- ・非常持ち出し品
- ・地震による家の中の被害なくてほっとしていた。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・ご近所の方の声かけ（危うく難を逃れた方も）

○ 防災行政無線・情報について

- ・津波の波高に関する情報は聞こえたが、すぐに切れてしまった。
※以前から無線が聞こえない状況にあった。
- ・（強い揺れの地震を受けて）必ず津波がくると思った。（複数）
- ・消防車が浜町方面から地域を巡回して、避難を呼びかけていた。（すべての消防団）

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・消防団、地域住民が水門や陸閘を閉鎖
- ・水門や陸閘は通常どおり閉鎖することができたが、数が多いため時間

のかかる作業であった。

※水門は町内会が市の委託を受けて管理していた。数か月に1度の割合で、水門の清掃、油差しなどの整備をしていたため、女性でも閉めることができた。

※新浜町には水門が多いため、津波が来そうなときは近場の水門を自分が閉めなくてはという意識がみなにあった。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・ 2丁目の沢（岬林道側）、1丁目の沢（滝の沢）の住民は、概ね近隣の1次避難所へ避難した。カメイ石油から東前町寄りの住民の中には、東前町の不動沢等の避難場所や、浜町方面の実家等に車で移動する方もいた。
- ・ 海岸に下がり、海の様子を観察している方もいた。津波が襲来する数分前まで海の近くにおり、急いで近くの高台へ一気に駆け上がった方もいた。
- ・ 堤防に遮られて、海の様子がよく分からなかった。海岸沿いにある事業所の関係者も、津波が襲来する直前まで仕事をしており、急いで避難した方が多かった。

○ 救助の状況

- ・ 隣の息子さんがきて「裏口から早く逃げないと危ない、時間がない、すぐ後ろの山へ逃げよう」と、自分の手を引っ張って山へ10m以上登ったところで、津波に飲みこまれてしまった。息子さんが細い木につかまって、自分の手をしっかりつかんで放さなかったのが、助かることができた。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・ 近隣の神社付近は浸水し、階段付近で3名の高齢者が流され亡くなった。階段の幅が狭く、高齢者の避難者を引き上げようとしている最中に流された。

※神社については、一次避難場所となっている佐々木家稲荷神社沢との誤認識が考えられるため、地域の方の証言内容にあう神社（町境）を採用した。

- ・ 1丁目が全部流され、若い方々が避難道路に上がろうとして流されてしまった。滝ノ沢でもアパート等が流され、死者が出ている。
- ・ 自宅に留まり、避難が遅れて流された方、呼びかけても避難しない方もいた。
- ・ 一度高台に避難したが、再度自宅に戻って、流された。
- ・ 体の不自由な方が避難できずに流された。また、避難させようと戻った救助者も流された。
- ・ 被害にあった住民の多くは高齢者、一人暮らし世帯が多く、人的被害の内訳は、高齢かつ歩行困難者およびその避難補助者が多く、他は、陸閉閉鎖後に避難途中で被災した方、他区域外へ車で避難途中で避難した方、一旦避難後に家族を探しに行って被災した方もいた。

2 東 前 町

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・ 平成8年 10 月に自主防災組織を設置したが、地域単独で津波避難に関する訓練は行っていなかった。
- ・ 消防団の呼びかけで初めて訓練に参加する方も多く、津波避難への関心度は比較的薄かった。
- ・ 過去に経験したチリ地震津波等では大きな被害もなく、危機意識も薄れており、避難訓練への積極的な参加は少なかった。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・ 地域の避難場所は、全て屋外にあるため、これまでも悪天候、夜間時の避難行動が遅れがちになった。寒さや風雨をしのげる避難場所、焚き火ができる場所、夜間のためのライトなどの設置が必要である。
- ・ 地区内に陸閉が多数あり、避難後に閉鎖確認に行った消防団員が流されそうになるなど危険性が高いため、閉鎖すべき陸閉を減らす必要がある。
- ・ 海岸近くの住民は、「地震＝津波」ということが常に頭に入っている。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・地震直後、高齢者に対し「家の中に入るな。玄関先に座っている」と呼びかけて回り、避難を促した住民がいた。
- ・はまっこ児童公園の約2 m下まで津波が迫ったため、住民や消防団が300mほど高いアスレチック公園に避難誘導した。

○ 防災行政無線・情報について

- ・3 mの大津波警報は聞いたが、その他は余り記憶にない。サイレンが鳴りっぱなしだった。
- ・東前町内でも、特に不動沢は無線が聞こえなかった。
※地域に沢が多く、高台に多数設置しても山に反射して聞こえにくいため、海岸から山側へ向けての設置が必要。高台から大音量で放送するとかえって、音が混信し、内容が把握できない。
- ・市の広報巡回車等が地域を回り、高台へ避難するよう呼びかけた。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・水門や陸閘は消防団のほか、その他の地域の方と協力して閉鎖した。
- ・水門内側に駐車している車が次々と移動するため、最後に閉鎖した水門では5分から10分くらいの時間を要し、消防団の避難が遅れた。
※今後の水門の閉鎖については、遠隔操作で行うようにしたい。常時点検及び作動状況の確認が重要である。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・尾崎神社に上る道路には、避難させた車が多数並んでいた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・地震後、多くの住民は、外に出て周りの様子を見ていた
- ・防災無線を通じた避難の呼びかけのほか住民相互による緊密な声の掛け合いなどにより、高齢者等の避難を補助しつつ、住民の多くは、はまっこ児童公園、樋ヶ沢下の駐車場等高台に集まった。
- ・尾崎アスレチック公園、不動沢、樋ヶ沢下の住民の多くは高台に住んでいることから、特に避難はしなかった。海の様子を見るため下がって

くる住民もいた。

- ・地域の道路が狭いため、徒歩で避難した住民が多かった。一方、海岸部の市場、工事関係者の一部は、車で地域、地域外に移動した。
- ・津波が目前に迫り、裏山へ避難した住民や従業員もいた。急傾斜地に設置されたフェンスをよじ登って難を逃れた高齢者もいた。
- ・浜町の幸楼で避難者の受け入れをしているという情報があり、避難した方もいた。
- ・室内で作業をしていたため、目前まで津波の襲来を知ることができなかった住民もいた。
- ・ペットを連れて逃げた。
- ・自宅の階上に避難をした。
- ・海が少し見えて、なんとなく異変を感じ、もう一度、息子になんとしても、危険を知らせなくてはと自宅に戻った。（車に乗ったまま流されたが運良く助かる）

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・一度は避難したが、自宅にまで津波が来ないと判断して、車や貴重品等を取りに自宅に戻るなどして、流された方がいた。
- ・陸門閉鎖後、疲れて自宅に戻り休息していて流された。
- ・避難を数回にわたり呼びかけたが、自宅に留まり流された。
- ・過去に津波浸水がなかった山側の地域住民で、ここまで津波が来ないと思い避難せず、自宅ごと流された方がいた。
- ・被害があった方のほとんどが高齢者かつ歩行困難者およびその避難補助者の避難困難による事例であった。

○ その他

- ・東前町内会自主防災会では、生存者の確認、衣服の提供、被害を受けなかった民家に被災者を分散して受け入れて各家庭で面倒を見るなど、地域が協力して乗り切った。
- ・消防団の活動により孤立化はなかった。

3 魚河岸・浜町

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・平成 21 年 5 月に設置した。町内役員で、避難を呼びかける担当ゾーンをあらかじめ決めていたが、今回の震災では機能する暇がなかった。
(浜町 1 丁目)
- ・震災後の平成 24 年 12 月に設置した。3 月 3 日の防災訓練には、地域で 20～30 名参加していた。避難訓練に際して地元青年会も協力していた。
(浜町 2 丁目（尾崎町）)
- ・平成 19 年 11 月に設置した。主な災害想定は、土砂崩れ、台風被害であった。町内会、消防団では、釜石漁協まで怪我人を担架で搬送する訓練を過去に行ったことがある。(浜町 3 丁目)
- ・避難場所のアスレチック公園は高台にあり、3 月 3 日の避難訓練は時期的にも寒いことから、高齢者には訓練参加が負担と感じていた。
(浜町 3 丁目)
- ・避難訓練の実施時期が冬であったため、高齢者はほとんど参加していなかった。(浜町 3 丁目)
- ・避難訓練の際に、避難場所を指定避難場所以外にして実施してしまっていた。(浜町 3 丁目)

○ これまでの備え・よかった点・課題等・伝承ほか

- ・高い確率で津波が来るチラシを配布するなどして、防災意識を高めることができたが、更に避難する方を増やさなければ駄目だと感じていた。その意識が芽生えた矢先に今回の震災となった。(浜町 1 丁目)
- ・拡声器、リヤカーなどを備蓄していたが、流出した。(浜町 1 丁目)
- ・震災後、住民同士が協力しあい、更に地域の絆が深まった。日常から継続した避難訓練は、大切だと感じた。(浜町 2 丁目（尾崎町）)
- ・地域で防災に取り組むためには、常日頃の声掛け、お茶っこ飲みなどのコミュニケーションが大切だと感じた。(浜町 3 丁目)
- ・避難先には、寒さや風雨をしのげるような屋内施設の設置が必要である。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・声をかけあいながら、各自で避難した。（浜町1丁目）
- ・消防団、地域全体で避難を呼びかけあった。津波直前には、魚市場方面から津波襲来を知らせる叫び声があがった。（浜町2丁目（尾崎町））
- ・周囲の高齢者等に「アスレチック公園に上がれ」などと呼びかけた方もいた。（浜町3丁目）

○ 防災行政無線・情報について

- ・サイレンは聞こえたが、放送内容は聞き取れなかった。避難することで精一杯だった。
- ・3mという大津波警報の情報を聞いて、大した津波でないと判断して自宅に戻った方もいた。
- ・震災前にスピーカーの位置を高くしたため、スピーカー下の住家では聞こえづらくなったと感じる。（尾崎町）

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・浜町1丁目町内会自主防災会により、水門閉鎖がなされた。
- ・消防団が閉鎖の確認を行った。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・建物の階上、屋上等に避難する方がいた。指定避難所より、建物の階上に避難すればよいという認識があった。（浜町1丁目）
- ・多くの住民は、津波襲来直後、各自の判断で「はまっこ児童公園」に緊急避難した。津波の襲来は、ある程度予測できたが、まさかここまで大きな津波だとは思わなかった。高齢者等を背負って避難する住民もいた。津波が避難所付近まで押し寄せてきたので、更に高台の尾崎アスレチック公園に移動避難した。
- ・避難の途中で、体調を崩した住民もいた。看護師がいたため、一命を取りとめた。
（以上、浜町2丁目（尾崎町））
- ・地震後、消防団等の呼びかけにより、浜町の住民の多くは尾崎アスレ

チック公園、尾崎神社方面、避難道路浜町東側口等の高台に移動した。その後、尾崎神社、幸楼等に集まった。集まった住民は、1波目の津波による土煙があがるのを見てから、さらに背後の高台へと避難した（二度逃げ）。避難道路を通じて、市役所や旧一中に避難する住民もいた。尾崎神社の高台方面の道路に車で避難する方も多くいた。（浜町3丁目）

- ・消防団員は会社勤めが多く、震災時には約7割が不在であった。（浜町3丁目）
- ・88歳のおばあちゃんは、当時、家で一人で留守番をしていたが、一人で避難をして無事だった。いつも避難訓練に参加し、どこに避難しなければいけないか、知っていたから。津波のことは頭になかったが、地震が恐くて逃げたといっていた。常日頃の訓練のおかげと思っている。

○ 高齢者福祉施設等及び公共施設の避難行動

- ・釜石市戦災資料館では、職員2名、来場者はゼロであったが、隣室にいた高齢者を避難道路に誘導するとともに、近所の方20名あまりを4階に誘導した。職員2名は、津波襲来直前に車で教育センターへと向かった。

○ 救助の状況

- ・自主防災組織で登録した災害時要援護者世帯に、市職員が救助にあたった。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・避難の呼びかけがあったにもかかわらず、自宅や事業所に留まって流された。
- ・地震後、自宅に帰宅して休憩中に流された。
- ・一旦避難するものの、人を助けるために戻って流された。
- ・体の不自由な方が避難に間に合わず亡くなった。
- ・過去の津波で被害のなかった民家等に避難した方がいたが、浸水し犠牲となった。
- ・常日頃から避難訓練に参加していない高齢者も亡くなった。

- ・車で移動中に流された。
- ・高齢かつ歩行困難で避難が間に合わなかった事例、声かけにも「ここまで津波は来ない」と考え避難しなかった事例、事業所で片付けのため避難が遅れた事例、車で他地区から自宅に戻る途中や車で避難する途中に被害にあった事例（複数件）があった。

○ その他

- ・孤立し、幸楼、尾崎神社、個人宅 10 軒他が避難所となった。
- ・幸楼には、一番多いときで 400 人近くが入り、二次災害の恐れを感じたときもあった。

第 2 項 市街地区（港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町）

1 港 町

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・今回の震災以前のシミュレーションでは、中番庫は浸水想定外とされていたため、避難所にするように市に依頼していたが、認められなかった。
- ・2丁目住宅街とグリーンセンター側の境界には段差があり、上に上がるための通路が両端に2か所あった。避難訓練時にはその通路を使って逃げるようにと町内会長が呼びかけていた。
- ・地形上周囲に高台がなく、矢の浦橋方面へ行くのも栈橋方面へ行くのも川があり危ないことから、避難訓練の際にはバス停前のゲートボール場を避難場所としていた。
- ・町内会では陸中海岸グランドホテル、グリーンセンターに対して一次避難場所の協力を口頭でお願いしていた。リヤカーを買って避難支援に使うなど、地域で津波避難を円滑に行うために様々な検討をしていた。
- ・釜石港湾事務所では避難のための外付階段を設置する予定があり、そのことを震災直前の津波避難訓練時に住民に周知していた。そのこと

が、今回の震災時において同所に住民が集まる契機になった。

- ・港町日の出通り振興組合は、震災後に解散した。（アンケートは未提出）

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・円滑に避難できる津波避難ビルや、夜間や祝日の避難ビルへの避難が可能になるような取り組み・対策が必要である。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 地震直後の行動・心境等

- ・湾口防波堤と防潮堤が完成していたので、まさかあんなに大きな津波が来るとは思っていなかった。また防災無線も冷静に3mを越える津波と情報を流していたため「湾口防波堤と防潮堤が守ってくれる」ものと思い、のんびり構えていた。

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・避難時、周りの住民に自主的に声がけをする方がいた。このことにより、数名の方が行動をともにして避難した。
- ・ほとんどの住民が地震直後に相互に緊密に声を掛け合い、高齢者等の避難を補助しつつ避難をした。
- ・港湾事務所職員も避難誘導を行っていた。
- ・（逃げていると）市役所の人が「津波がくるぞ～」「上にのぼれ」と叫んでいた。

○ 防災行政無線・情報について

- ・防災無線は、通常どおり聞こえた。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・第1分団第3部が水門の閉鎖の確認を行った。委託された方たちにより公共埠頭の一番大きな水門が閉められたが閉鎖が困難だったため、消防団が補助をした。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・多くの住民は、地震直後に相互に緊密に声を掛け合い、車に同乗させる等して高齢者等の避難を補助しつつ、迅速に釜石港湾事務所等、高層階の建物や屋上へ避難した。
- ・Uターンした車が来てくれたので、足の悪い方を乗せてもらい港湾事務所に避難した。
- ・2丁目の住民の多くは、釜石港湾事務所へ避難した。1丁目の住民のうち数名は陸中海岸グランドホテルへ、その他はグリーンセンターや中番庫内の石炭山等に避難した方もいた。
- ・地震後、いち早く車で他地区に避難する方もいた。

○ 救助の状況

- ・地区内の事業所の勤務者のなかには流され4～5人が石炭山に漂着・救助された。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・亡くなった方は、身体の不自由な方ではなく健常者であった。
- ・一部住民は、ここまで津波は来ないと思い避難せず、自宅ごと津波に流されなくなった方がいた。
- ・高齢かつ歩行困難な方のほか、海を見に行って被災した方があった。
- ・港湾事務所の監視塔の職員がスピーカーで、「津波が来ました。急いで避難してください」と呼びかけるが、道路には人や車が残っていた。
- ・漁船の手入れ中に流された人もいた。

○ その他

- ・チリ地震津波の際には防波堤を波が越える程度であったため、住民内で津波に対する警戒心が薄れていたと考えられる。

2 只越町

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

【只越自主防災会】

- ・活動地域は只越町1丁目で、町内組織というよりは商店街通りエリアとしての活動だった。

【只越町内会】

- ・3月3日の津波避難訓練に参加するほか、特に町内で取り組んでいることはなかった。地域のかさ上げ、河川の浚せつなどハード施設の充実を要望してきた。

【只越中央通町内会】

- ・町内会として、これまで避難訓練に取り組んだことはなかった。
- ・3月3日の訓練参加を回覧版により呼びかけていた。訓練は、避難場所の人数を確認する程度で、避難の途中で笑ったりするなど緊張感に欠けていた。参加さえすればよいと思う程度だった。
- ・3月3日に実施された市の防災訓練に参加してきた。旧釜石小学校跡地、只越避難道路、市役所本庁舎が避難場所であった。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

【只越町内会】

- ・今後の課題として、屈曲している水路を真直ぐにすること、自然排水への切替え、浸水高さの標示、高台へ上る階段等、ハード面での設備が必要である。

【只越中央通町内会】

- ・避難訓練は、大切なことだと改めて感じた。日頃から訓練に参加すべきだった。
- ・只越町全域には屋内避難施設がない。今後の課題としては、風雨や寒さをしのげるような屋内避難施設の設置が必要である。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・市職員の2回にわたる誘導で、旧釜石一中の校庭に避難した。

【只越町内会】

- ・消防車が巡回して避難を呼びかける等避難誘導しつつ、高齢者1名をポンプ車に同乗させ仙寿院に上がった。
- ・消防団がポンプ車にて避難広報活動を行った。
- ・数名に声がけをした住民もいたが、大部分の住民は、各自の判断で避難した。
- ・高台に避難した一部の住民が、早急に高台に上るよう、呼びかけをした。
- ・危険を察知した住民の一部が「津波だ」と周囲に呼びかけたが、直ちに誰も逃げない場面もあった。
- ・足下に素早く忍び寄る津波に気づかない住民に対して、車のクラクションで注意を促す住民もいた。
- ・津波が音もなく足下に素早く広がる場所もあり、避難行動が遅れた住民もいた。一方、海岸方向からの叫び、異常音、土煙等から危険を察知して避難を開始する住民もいた。

【只越中央通町内会】

- ・津波の襲来を直感したので、近隣の体の不自由な高齢者を早めに避難所まで移動させた。
- ・建物等の高所にいた住民が、目前に迫る津波を見て、津波襲来の叫び声を上げた。
- ・まさかここまで来ると思わず自宅付近で避難すべきか迷っていたが、市役所方向から「逃げろ」という叫び声が聞こえ、我に返って避難した。

○ 防災行政無線・情報について

【只越町内会】

- ・防災行政無線の音は聞こえたが、内容は理解できなかった。気が動転していた。

【只越中央通町内会】

- ・防災行政無線の音は聞こえたが、耳に入らなかった。内容が聞き取れなかった。

※今後の課題として、緊急時の放送はまず第一に重要内容、次にそれに対応の仕方、そして個々人の対応が必要である。例えば、単純に「早

く逃げろ」と放送した方がよい場合もある。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・消防団は、水門閉鎖を確認のため直ちに出勤し、港町の公共埠頭水門閉鎖困難のため補助をした。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・白いものが見えたので最初、火事だと思った。それは襲ってくる津波の水飛沫だった。
- ・3時過ぎに信号が消えたが、それ以前は国道の信号は作動していた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

【只越町内会】

- ・多くの住民は、目前に迫る津波を確認するまで、避難行動を取らなかった。
- ・避難する意識より、海の様子を確認することが目的で、高台に集まってきた住民もいた。
- ・大通りが車で渋滞していることから、裏通りを選び、そこを通過して避難する住民もいた。
- ・自宅等の階上に避難する住民もいた。
- ・野外の避難場所を避けて、屋内施設に避難を求める住民もいた。

【只越中央通町内会】

- ・地震後、近隣同士の住民が集まって、周りの様子を伺っていた。地下水の異変、液状化現象等を目撃した一部の住民の中には、津波の襲来を確信した方もいた。ただし、大規模な津波の襲来を予想できず、大部分の住民は、迅速に高台への避難をしなかった。自宅の階上に避難した住民もいた。津波が目前に迫った瞬間に初めて気づき、各自の判断で避難した。
- ・町内会100世帯中、約20名が死亡した。津波襲来の直前まで避難行動を取らない、あるいは取れなかった住民がいた。
- ・主な避難先は、避難道路方向（天王山口、高架橋口）、市役所第1庁舎、旧一中方向（寶樹寺、仙寿院）であった。逃げる途中、後ろを振り返ったら、津波が来ていた。

- ・湾口防波堤も完成して、3 mの津波と聞いたので、津波が来たとしても、せいぜい膝まで程度だと思った。
- ・昭和8年の津波震災後、震災復旧事業の一環として、宮沢薬局から魚ていに至る道路が舗装された。地域では、「モダン道路、セメント道路、コンクリ道路」などと呼んでいた。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・津波が来ると思わず、自宅1階に留まったり、商店・事業主のなかには、地震後の片付けなどにより避難しない、または逃げ遅れて流されたり、亡くなったりした方も多かった。
- ・津波の危機意識が薄く、警報も聞こえず、また、建物で直前まで波が見えず、また音もなく静かに波が押し寄せたこともあり、路上で立ち話をしていた津波に流されたり、避難する際も急いで避難しない事例や、避難する必要がわからなかった方が多かった。
- ・高齢かつ歩行困難な方の被害割合が最も高かった。
- ・青葉ビルや大只越公園に避難した避難者では、津波を見てから別の避難場所に再避難を行っている。
- ・青葉ビルに、50～60名の避難者が逃げ込み、その後、病院へ移動している。（大町の聞き取りでは、市民会館に避難をしようとした人が、ここは避難所ではないので青葉ビルに行ってほしいといわれ避難をしたが、階段がわからず津波にのまれ犠牲になった）

【只越町内会】

- ・自宅に留まって流された。
- ・一時自宅の階上に避難するものの、階下に移動して流された。
- ・逃げ遅れた方を救助しようとして流された。
- ・地震後の後片付けに手間取り流された。
- ・体の不自由な方が、避難に遅れて流された。
- ・恐怖等のため、体が身動き出来ずに流された。

【只越中央通町内会】

- ・片付けなどの作業に手間取るなど避難が遅れて、避難の途中で流された。
- ・一旦避難したが、自宅に引き返して流された。
- ・地震後、外出先や職場から自宅に戻り、避難が遅れて流された。

- ・勤務明けで自宅休息中に流された。
- ・病人、要介護者がその家族、介助者とともに流された。
- ・避難するように声がけをしたが、自宅から出てこなかった。避難に応じなかった。
- ・買い物等の用足しにいった家族の帰りを待っていた。
- ・高齢の家族を高台に避難させた後、自宅に戻って流された。津波襲来まで時間があつた。
- ・予想される津波の高さが3 mであるという無線放送を聞き、避難しなかった。

3 天神町

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・避難についての取決めは、特になかった。
- ・3月3日の訓練は、各自の都合で参加した。通年7、8人程度の参加であった。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・高台の避難した住民の中には、目の届いた住民に対して避難を呼びかけた方、津波の襲来を叫んで伝える方もいた。
- ・公園に留まった方の中には、高台の仙寿院からの「津波だ。逃げろ」の声を聞いて、旧一中に避難した方もいた。
- ・職場から出ると、通行人から3～4 mの大津波が来ることを知らされて、その大きさに驚いて急いで仙寿院に向かった。途中、消防車の避難指示を見聞きし、これはただ事ではないと思った。

○ 防災行政無線・情報について

- ・防災行政無線については、放送の内容が分からなかった。聞いた記憶がない。響いて聞こえづらかった。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・地震後、一部の住民は、近隣の天神児童公園に集まり、周囲の様子を見ていた。その後、公園に留まった方、家の片づけをするため自宅に戻った方もいた。地震直後から、旧一中、仙寿院に避難する方もいた。高台に避難していた家族が見えたので、合流するため移動した方もいた。
- ・概ね地域の方は、仙寿院に避難した。地域外の方も大勢、避難していた。
- ・ここまで津波は来ないと思っていたので、避難する緊迫感、危機意識が薄かった。
- ・津波が来たとしても、ここまで来ると思わなかった。幼稚園に避難する程度で大丈夫と思った。すぐ自宅に戻れると思った。

○ 救助の状況

- ・自宅に留まった方は、2階に避難して、後に救助された。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・避難を呼びかけたが、自宅に留まり流された。
- ・仙寿院の入り口まで一緒に避難をしてきた同僚の一人が、「松倉の自宅に戻る」と言って別れ、帰らぬ人となった。

○ その他

- ・震災後、地域の見通しがよくなり、改めて海が近くにあることが分かった。

4 大只越町

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・自主防災組織は設置していなかった。地域では津波防災はほとんど考えられてこなかった。これまで主に火災や大雨等の災害が懸念されていた。
- ・震災以前の一次避難場所は、大只越公園（青葉公園）と薬師公園。大

只越集会所は指定ではなかった（実際には、その時々状況に応じて開設される「避難者収容施設」に指定されている）が、そこを避難訓練では使っていた。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・震災後、地域の見通しが良くなり、改めて海が間近にあると気付かされた。
- ・市が配布する防災マップに従った避難をすると、自宅より低い場所に避難することに疑問を持っていた。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・「高さ3m」という情報、サイレンの音は聞こえた。放送内容は余り理解できなかった。
- ・津波を見て（津波が目前に迫って）から避難した方もいた。
- ・買い物を済ませたあと、薬師公園の前を通っているときに避難している方を見て、「もう避難するのか」と感心をしながら自宅に帰った。そして、大只越公園（青葉公園）に避難しようとしたが、ほかの方たちがもっと上に真剣に走っていくのを見て、自分も釣られて駆け上がった。
- ・青葉ビル、大只越公園（青葉公園）に避難してきた方は、津波がそこまで到達してしまったため、更に高台へ避難した。
- ・地震発生後、すぐに危険を感じて避難を呼びかける住民は少なかった。ただし、公衆浴場等では来客者に迅速な避難を呼びかける場合もあった。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・地震発生後、只越町方面で土煙が上がっているのが見えた。
- ・トラックが流れて来て、クラクションが1時間ほど鳴りっぱなしになっていた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・大部分の住民は、「大只越町は避難先である」という認識を持ってい

た。そのため、地震後も自宅に留まった方が多く、速やかな避難行動に結びつきにくかった。

- ・ 玄関戸の隙間から水が上がって来るのを見ても、すぐに津波であることが分からない方もいた。
- ・ 津波到達の波打ち際は勢いが弱かったことから、津波が目前に迫ってから避難した方もいた。一時退避したものの再び戻り、津波の様子を見ていた方もいた。
- ・ 市街地に近いこともあり、地域外の住民も、数多く町内の指定避難場所に避難してきた。

○ 救助の状況

- ・ 津波で流されて来て自宅2階に流れ着き、窓が開いていたため助かったという話を聞いた。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・ 人的被害はなかった。

5 大 町

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・ 地域として、自主的な避難訓練を実施したことはなかった。3月3日の避難訓練に参加する程度であった。
- ・ 釜石小学校では、群馬大の協力により防災教育を行っており、防災講演会に参加していた。
- ・ 民生委員の会議では、高齢者の一人暮らしに関わるテーマが多く、日頃から関心を寄せていた。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・ 湾口防波堤への過信や津波は来ないという思い込みから、避難することを躊躇する大人もいた。子どもが受けた防災教育を通じて、家族で津波避難の重要性に改めて気付かされた。
- ・ 防潮堤があるということで安心しきってはだめだと思った。津波の危

険性があったら、それを越えるかもしれないと考えて避難しなければならない。

- ・本地区には、市街地のため地区外の住民が多く、また高い建物も多い一方で、津波避難ビルなのかどうか地区外の住民には分かりにくかった。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・地震発生後、消防団員は消防車で地域を巡回中、甲子川が溢れると判断したため、住民に避難を呼び掛けた。体が不自由な高齢者の避難を手助けした。
- ・一度避難したものの、ガスの元栓などが気になり自宅に戻った住民に対して、注意又は制止した住民もいた。
- ・あれほど大きな揺れを感じたにもかかわらず、津波の襲来を想起せず、避難の開始が遅れた住民が多数いた。
- ・家に取り残されていた子どもに対して、屋根へ上がるように指示した方もいた。
- ・目前にがれきが流れてくるのを見て、高所にいた住民の一部は、下の通行人に注意を促したが、がれきが押し寄せる轟音にかき消されて聞こえなかった。
- ・ハンドマイク、消防車のスピーカーなどから避難を呼び掛ける切迫した声を聞いた方がいた。
- ・釜石小学校での防災教育の成果により、津波襲来時に子どもに避難を促されて行動した住民もいた。

○ 防災行政無線・情報について

- ・途中から無線の呼び掛け方が変わったため、危機感を持って避難した。
- ※消防団のポンプ車は3台のうち1台しか無線が使えない状況にあったため、市の防災無線が広範囲に聞こえるように、対策を講じるべきである。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・はじめ、津波は見えなかった。大通りのアーケードの高さ一杯まで、

がれきがバリバリといった異常な音を立てながら迫ってきた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・ほとんどの地区住民は地震直後に屋外や路上に出て、相互に緊密に声を掛け合い、高齢者等の避難を補助しつつ徒歩で迅速に高台などへ避難した。海側の地区で特にこの傾向が強く、避難も迅速であった。また、地区には3階以上の建物も多く、建物内で避難した人も多かった。
- ・避難訓練で使用していた青葉ビルに一度は避難していたが、津波が来たから高台へ移動した方もいた。
- ・地震発生後、一部の住民は、比較的早めに青葉児童公園、薬師公園などの避難場所に避難した。地震から30分余り経過したことから、家の戸締まりなどが気になり自宅に引き返した方もいた。
- ・がれきが目前に迫っているのに、振り向くことなく、通常の歩行スピードで避難している方がいた。呆然と立ちすくんでいる方もいた。
- ・渋滞中、がれきが迫るのを見て、急いで車を乗り捨てて、高台に避難する方もいた。
- ・家族を先に避難させて、民生委員としての職務として町内の見回りをしてから車に乗らずに走って避難した方がいた。

○ 高齢者福祉施設等及び公共施設の避難行動

- ・釜石市民文化会館は、地震・津波の際の対応、避難指示等が出たときの対応に関しては、市からの指示とマニュアルがあった。避難場所は石應禅寺境内だった。津波襲来前に職員等15名、来場者50～80名いたが、大津波警報発令前に来場者を館外へと退去・避難させ、続いて職員等の避難に移ろうとした矢先に津波が襲来。職員9名、消防団・近隣住民各1名は、会館の上階に避難し孤立、13日には教育センターに避難した。
- ・大町駐車場（基本的に無人）は、避難場所は大只越集会所だったが、一般の来場者は不明である。
- ・青葉ビルの避難場所は大只越公園（青葉公園）と把握。平成22年以降は、大只越公園（青葉公園）に避難した後に青葉ビルへの誘導を行っていた事実があったが、職員からは「寒いから便宜上青葉ビルだが、実際には大只越公園（青葉公園）」という説明はなされていた。当時、

青葉ビルにいた市職員等 2 名は、うち 1 名が大只越公園に移動し避難誘導にあたり、他 1 名は地震で割れたガラスの安全対策を行うために青葉ビルに残っていた。（その後、被災）

- ・ 青葉ビルのすくすく親子教室には職員 4 名と子ども 4 名は、職員がすぐに子どもたちを誘導し石應禅寺境内へと避難、また子育て支援センターには職員 2 名と 3 組の親子のうち 2 組は帰宅、職員と親子 1 組は、裏側の高台（ただし、大町子育て支援センターの報告書では、市営アパートの上となっている）へ避難した。

○ 救助の状況

- ・ 買い物中に地震があり、その後自宅に帰った。徒歩で避難を開始したが、途中で津波に飲まれた。流されてしまったが、木に挟まっているところをアーケードに引き上げて助けてもらった。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・ 青葉ビルは避難場所ではないが、訓練のときは寒さをしのぐために建物の中に入っていた。今回の震災のときも同じように行動していて、高い階に移動がすぐにできない建物であったため、また上の階に上がる階段が判りにくかったこと等から、逃げ遅れて犠牲になった方がいた。
- ・ 一度避難するものの、家族を心配し、自宅に戻り流された。
- ・ 自宅の階上に一時避難するものの、階下に下がり流された。
- ・ 堅牢な自宅の 2 階に待機していれば助かったのに、避難所への移動中に流されてしまった方もいた。
- ・ 湾口防波堤の完成により、津波は来ないと日頃から言っていた方もいた。
- ・ 一部の地区外の住民で市民会館に避難しようとしたが、市営住宅ビルへの避難するようにいわれ、市営住宅ビル 1 階で犠牲となった方がいた。

6 大渡町

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・平成6年3月に自主防災組織を設置して、日頃から地域一体となって防災活動に取り組んできた。群馬大学の講演や、ハザードマップにおける自然災害に関するシミュレーションなどを通じて、河川を遡上する津波の危険性、率先避難の重要性を地域で共有していた。
- ・3月3日の避難訓練では、町内会で参加を呼びかけていた。また、釜石小学校が津波避難訓練を実施する際には地域で協力していた。
- ・自主防災組織では事前に災害を想定し、食料、外部環境衛生、燃料、救援物資、防災担当等、各班の具体的な役割分担を決めていた。また、分かりやすい組織図を作成し、関係者で情報を共有していた。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・地域、学校が一体となった防災教育の積み重ねが、迅速な避難行動に結びついた。祭事等を通じた地域交流が、避難所運営等その後の復旧活動を円滑なものにした。
- ・講演会等を通じて防災の知識が事前にあり、大きな津波の襲来を予測できた。避難訓練に参加していた方の多くは、震災初期の段階で避難していた。
- ・釜石小学校敷地内に備蓄していた防災用品は、被災せず十分活用された。
- ・湾口防波堤があるため、まさかあれほど大きな津波が襲来し、防波堤が壊れるとは思わなかった。
- ・避難訓練に毎年参加していたが、地震があったら津波を想起できるようになっていなかった。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・地震直後から、民生委員等地域の方がそれぞれ近隣の高齢者等に声掛けをして、釜石小学校や高台への避難を誘導した。
- ・差し迫った津波の危険を感じとれなかった一部の高齢者は、地域の方が避難するのを見て、その流れに合流して避難することもあった。
- ・大津波の情報は聞こえなかったが、長く強い揺れだったので「これはただごとではない」「すぐに避難したほうがよい」と想起。

- ・毎回の津波警報のことだと思い、今回、逃げるとか避難なんてことは、頭になかった。たまたま当日、長男が外へ遊びに出ていたので、長男を探しに行くついでに高台へ行っただけだった。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・消防団により河川の水門閉鎖の指示がなされていた。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・物の倒壊でほこりが発生し、町が少し暗くなっていた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・消防団はポンプ車で、住民に対し避難指示の広報・避難誘導を行った。
- ・この地区は市街地であるため、地区外の方も多かったが、住民は、地区内を徒歩や自転車で走り回って避難の呼びかけを行った。
- ・地区には3階以上の建物も多く、建物内で垂直避難した人も多かった。
- ・地震の揺れがある程度収まった後、多数の住民が家の外に出てお互いの無事を確認した。甲子川が近接していることから、遡上する津波の襲来を直感し、多くの住民は、互いに声を掛け合い、高齢者等の避難を補助しつつ徒歩で、比較的速やかに高台の避難所・釜石小学校に避難した。自宅の階上に避難する方もいた。
- ・市街地のため、地域外を含む車で通行者等も多数おり、津波襲来直前、大通りでは車が渋滞した。車から離れて高台、近隣建物の階上へ移動した方、バスの屋根に避難して一命を取り留めた方もいた。
- ・小学校には、地震直後から100名以上の徒歩避難者、その後、車両避難者、周辺の避難場所からの避難者を含め、夜間には一時的に700名にもおよんだとされる。
- ・薬師公園の避難者は、津波後に保健福祉センターに誘導・受け入れがなされるほか、山道を通して小学校に移動した方もいた。

○ 救助の状況

- ・避難が遅れて家の2階にとどまっていたところ、「助けて」という声がした。助けを求めている人は目が不自由な人だったが、声をかけながら二人で家にあった長い棒で引き寄せ、ベランダから引き上げるこ

とができた。

- ・「助けてー！」という声を聞き、隣の屋根の 80 歳くらいの男性を自分の家の窓へ引っ張り、担いで中に入れた。

○ 市が所管する公共施設・福祉施設の避難行動（小中学校と子ども関連施設を除く）

- ・ふれあい機能訓練デイサービスは、旧釜石一中に避難することにして、いた。当時、職員は 3 名、利用者 4 名が施設にいて、14 時 55 分頃送迎車に乗車、近隣の住民 2 名とともに 15 時 5 分に旧釜石小学校校庭に避難し待機。16 時 30 分頃、釜石第一中学校体育館へ移動した。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・地震後も自宅や店舗に留まり、流された。商店街関係者が多かった。
- ・甲子川の様子を確認して、自宅に戻り、流された。
- ・自宅の 2 階へ避難したが、物を取りに 1 階へ下がったため、流された。
- ・町内会からの避難の声掛けに応じず、地震後も自宅や店舗に留まり、流された方も多かった。
- ・バスなどに乗車していた数名が流された。車の中からは、地域外の身元の遺体が多数確認された。
- ・その近所のおばあちゃんを置いていけないから説得したが、「ここまで津波は来ないから」「大丈夫」と言い張るもので、断られてしまい置いて避難してきてしまった。
- ・近所の人たちが、向かいの一人住まいのおばあさんを連れて行こうと何度も声をかけていましたが、「足が悪いから」と言って行かなかった。
- ・川沿いに位置するため避難の意識は高いが、商店経営者が仕事のため避難が遅れた事例、商店で顧客とともに避難が遅れた事例等が散見された。

7 鈴子町

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・震災直後の4月に自主防災組織を設立する予定であった。主に集中豪雨等の水害を想定していた。駅前のJR陸橋付近では、度々増水被害が発生しており、ふだんから水害に対する関心が高かった。
- ・3月3日の避難訓練では、一世帯から一人は参加することが慣習となっていた。
- ・避難訓練をしていたため、避難がスムーズにできていた。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・居住地域が限られ、世帯も少ないことから、日頃から住民同士の連絡が行き届く環境にあり、避難時の安否確認ができた。
- ・国道に「浸水想定区域」の標識が設置されていたことから、津波襲来の可能性があるとは思っていた。
- ・湾口防波堤があったことから、津波の被害が鈴子地区で止まったと感じている。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・地域住民の多くが、お互い声をかけあって、避難場所のシープラザ遊に移動した。
- ・教育センター、シープラザ職員等が、高齢者や体の不自由な方の避難を誘導した。

○ 防災行政無線・情報について

- ・無線は聞こえていたが、内容は記憶にない。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・地震直前、国道は渋滞していた。
- ・駅前付近の国道には、10数台の車が水没していた。駅前ロータリー付近にも車が流されて集まっていた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・地震直後、多くの住民は家屋の外に出て、比較的早い時期にお互い声をかけあいながら、避難場所のシープラザ遊に移動した。一部の高齢

者のみの世帯等では、自宅に留まっていた方もいた。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・死亡者なし

8 駒木町

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・3月3日の避難訓練には、積極的に地域で参加していた。特に川沿いの住家では、大部分の方が参加していた。町内会として、避難に関して特別な取決めはしてなかったが、比較的世帯数が少ない町内会なので、お互いの連絡が行き届いていた。
- ・少数世帯の町内会のため、日頃から住民同士の緊密な交流があり、震災後もお互いの安否を確認できた。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・地域に若年層がいないため、今後、一人暮らしの高齢者等の避難方法について考える必要がある。
- ・現在、屋外避難場所しかなく、地域に集会施設もないため、避難時に暖をとる場所がない。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・地域でお互いに呼びかけながら避難した。一人暮らしの高齢者等に声をかけた方もいた。
- ・川沿いにある地域なので、津波の遡上はある程度予想していた。しかし、湾口防波堤も出来たことから、まさかここまで来るとは思わなかった。

○ 防災行政無線・情報について

- ・最初、無線の音は聞こえたが、後は全く機能しなかった。サイレンも聞こえなかった。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・真黒い波が河川を遡上し大渡橋を越えた。まもなく堤防を乗り越えて一気に襲来した。同時に、車、ガレキも流れて来た。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・地震後、近隣の住家同士、駐車場等の広場に集まり、甲子川の様子を見ていた。川沿いの住家では、比較的早い時間に指定避難場所や高台に移動する方もいた。ただし、津波到達まで時間があつたことから、再び自宅に物を取りに戻った方や、川沿い付近まで下がり、津波が遡上する様子を見ていた方もいた。
- ・地震後、指定避難場所ではなく、高台にある知人の家へ避難した方もいた。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・仕事先、外出先で亡くなった。

第3項 嬉石・松原・大平地区

1 嬉石町

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・市指定避難場所のほか、町内会単独で、住家周辺の高台3箇所（公園、嬉石地区集会所、コミュニティ住宅5号棟前）を一時避難場所としていた。3月3日の避難訓練時にも、この避難場所に集合していた。町内会報を通じて参加の呼びかけをしていた。参加者は固定する傾向にあった。
- ・震災の年の4月から、自主防災組織の設立を予定して、準備をしていた。
- ・警察、消防、医療関係者、町内会等のほか市が協力して、トリアージなどの防災訓練を過去に実施したことがある。
- ・東日本大震災の数年前、地域内で台風、土砂崩れなどがあり、人的被害もあつたことから、住民の防災に関する意識が高まっていた。

- ・ トリアージ訓練等を通じて、避難後も地域としてどのような「動き」をすればよいのか、把握することができた。
- ・ 町内会等を中心として、地域の交流が日頃からあり、安否の確認ができた。
- ・ 要援護者の名簿を町内で作成するにあたり、要援護者の対象が独居高齢者等に限られることから、対象者・希望者が少なかった。個人情報守秘義務が厳しくなっていることから、具体的な状況を認知できていないというジレンマがあった。個々の状況、時間帯により、要援護の対象となる場合もあった。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・ ここまで大きな津波が来るとは思わなかった。
- ・ 高い所から様子を見ていたが、第1波から第2波までは5分程度で、絶対に戻ってはダメだと改めて分かった。
- ・ 記念碑を建てることも大事だけれど、どこまでどれほどの津波が襲来したのか分かるような記録に触れる機会を、毎年1回ある総合防災訓練と併せて作るべき。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・ 地震発生後、消防団、町内会、民生委員等は、それぞれ避難を呼びかけた。津波が来るぞという住民の声を聞き、近隣の要援護者の在宅高齢者宅等を巡回した。通りがかりの車を呼び止め、要援護者を同乗させて高台へ避難するように依頼する場面もあった。
- ・ 長い時間揺れたので、これは津波が来ると思った。そのあとすぐに高い所に逃げた。

○ 防災行政無線・情報について

- ・ 3mという波高の情報は聞こえていたが、記憶にない。パニック状態であった。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・ 消防団員は水門を訓練どおりに閉鎖した。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・ 白い飛沫を上げながら、津波が襲来してきた。道路が川のようになった。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・ 地震発生後、一部の住民は、自宅前の道路に出て周りの様子を伺っていた。東日本大震災の2日前にも地震があったが大きな被害もなく、住民の緊迫感は余り感じられなかった。そのため、11日の地震後、急いで避難する様子も見られなかった。
- ・ 免許センターに訪れていた免許更新者等は、地域の方により迅速に避難誘導が行われた。
- ・ 市民交流センターや白山小学校など指定避難所に直接避難した方のほか、町内で取り決めていた一時避難場所に集まった後、指定避難場所に移動する方もいた。
- ・ 市民交流センターでは、地域の高齢者又は地域外の方、白山小学校では、児童又は保護者が主な避難者であった。
- ・ 高台にある親類又は友人宅に避難する方もいた。
- ・ 一部には地震後、海岸に下がって海の様子を見ていた住民もいた。
- ・ 各自が避難することで精一杯だったとするが、一方で、地区の住民がお互いに声を掛け合って高齢者等の避難を補助しながら徒歩で高台へ避難し、津波襲来後は、市民交流センターの体育館、白山小学校等に移動している。
- ・ 車で避難しようとした方が国道の渋滞に巻き込まれてしまった。
- ・ 渋滞時、いち早く車から離れる判断した方が、一命を取り留める場合があった。
- ・ 市営アパートで、地震後避難を呼びかけて歩いたが、高齢者で足腰の弱い方や「3階、4階にいれば大丈夫」と考えて避難しなかった方々が10名ほどいたので一緒にいた。（全員無事）

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・ 自宅に留まり、避難せずに流された。
- ・ 地震後、地域外の職場から車で帰宅中、渋滞に巻き込まれ流された。

- ・一度避難したものの、貴重品等を取りに自宅に戻り、流された。第1波と第2波間に戻り、流された方もいた。
- ・体が不自由な方が、自宅から避難を呼びかけたが、間に合わずに流された。寝たきりの方を救出するため流された方もいた。
- ・地域外の勤務先等で流された。津波を見て、それから逃げた方が流された。
- ・避難後、低体温症で亡くなった方もいた。
- ・歩行困難な高齢者の避難を補助する過程で、消防団や近隣住民が犠牲になる事例が発生していた。避難補助者は、近隣の方に避難の呼びかけをしたり、いったん高台に避難していたが、避難の補助が必要と集落の下まで降りてきて避難支援を行っていた。
- ・亡くなった方は、高齢かつ歩行困難な方および避難補助者で避難が遅れた事例が多く、その他、地震で家具の下敷きになった事例も複数件みられた。

○ その他

- ・避難後、各避難所では、町内会、民生委員等が協力して名簿を作成して状況把握に努めた。
- ・日中、地域は高齢者のみの世帯が多くなる。多数の家族等が町外の勤務地から自宅に戻って来て、家族の安否を確認した。

2 松原町

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・過去、町内で土砂崩れ災害があったことから、住民の防災意識は高かった。消防団も参加した自主防災組織を設置し、救護班、情報伝達、交通誘導等の役割を決めていた。
- ・3月3日の避難訓練では、指定避難所の松原公園、松原神社の階段付近に集まっていた。
- ・松原町会の以前の取り組みとして、避難訓練や防災学習を毎年実施していた。避難訓練を充実させるために担架やリヤカーを使った避難訓練を行っていた。土砂災害に遭った地域であったので、訓練について

は関心の高い方たちが多い地域であったと思う。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・土砂災害の経験が、住民の意識の中に安全な所に避難する心がけが生まれた。
- ・日頃の町内会、自主防災活動の成果が、避難後の地域ぐるみの救援活動を可能にした。
- ・今まで体験したことのないような大きな揺れだったので、土砂崩れが起こるか、外壁が崩れるのではないかという懸念を感じていた。
- ・松原町のなかで高台から比較的遠い方たち（3丁目）は、高台に近い方たち（1丁目や2丁目）よりも早くに避難していた。海に近いことを意識していたからこそであるし、意識を向上させるためにも避難訓練の重要性を改めて感じた。
- ・過去の津波災害（十勝沖地震津波等）の経験から津波は引き波があったからやってくると思っていて、周辺住民の避難支援を優先して危険な経験をした。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・地震後、近隣で声をかけあいながら避難した。町内の国道が渋滞したことから、町内の高台方向に車を誘導する住民の方がいた。
- ・津波が来るなんて思っていなくて自宅にいたが、若い方たちが高台まで避難していく姿を見て、つられて上がっていった。
- ・大きな揺れだったので、津波が来ることを直感し、すぐに高い所へ避難した。
- ・停電の中でポケットラジオの電源を入れたその時「第一波が来襲している」との情報により一目散で避難所へ避難した。
- ・家の中を見ると、洗面台等が倒れており、後片付けを行っていたが、消防団の方の「水が来たぞ、逃げろ」の一声で、慌てて外に出て、何も取らずに高台へ避難。

○ 防災行政無線・情報について

- ・消防車が矢の浦橋から来て大津波警報を聞いた。以前の警報と違って

緊急を感じて避難所へ向かった。放送のおかげで助かった。

- ・防災無線では、津波の高さは3 mと何度も放送していた。サイレンも鳴っていた。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・消防団により全水門を閉鎖するのに10分くらいかかった。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・地震後、町内の各所では、近隣の方が寄り集まり、周囲の様子を見ていた。海岸付近に住む3丁目の住民は、比較的早く町内の高台に徒歩・車で避難を始めた。
- ・地震後、松原公園より高台に住む一部の住民は、周辺の片付けをした後、周りの様子を見るため、避難所である松原消防コミュニティセンターまで下がってきた。
- ・津波の襲来を想起し、すぐに避難を開始したが、中妻方面へ車で避難するという危険な避難行動をしてしまった住民もいた。
- ・避難者輸送のためか、頻繁に町内を車で行き来している住民もいた。
- ・津波で流される車内から脱出し、船に乗り移り一命を取り留めた方もいた。
- ・国道方向から、高台に向かう町内の道路は、車で避難した車で一杯になった。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・津波が渋滞中の車を襲い、車内に留まった方が流された。
- ・避難を住民に最後まで呼びかけた方が亡くなった。
- ・体が不自由な方が、自宅から避難できずに流された。
- ・3 mという情報を聞いて、避難せずに自宅に留まり流された。
- ・避難後に、低体温症で亡くなった。
- ・遠野から嫁いできた兄嫁に、「地震があったときは川や海に近づくな、とにかく逃げろ」という家訓のような母の言葉を教えていたが、地震があったときは兄嫁一人だったらしく気が動転して避難ができなかった。
- ・「この家は大丈夫だから」と、2階に上がろうとした矢先に横の扉が

破壊され一瞬のうちにのみこまれた。

3 大平町

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・平成 16 年 7 月に自主防災組織を設置した。火災防火等の取り組みを主体としており、特に津波避難についての取り組みはなかった。また、高台の地域のため、3 月 3 日の避難訓練には参加していなかった。
- ・傾斜地であることから、土砂崩れなどの二次災害の危険性も懸念されていた。
- ・望洋ヶ丘の地域では西風が強く、数年前には民家の屋根が飛ばされたこともあった。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・日頃の町内会活動の積み重ねにより、各住民がお互いに安否確認をしあうなどの結束が見られた。
- ・町内会で備蓄していた水や食料等を活用することができた。
- ・少数の若者や高齢者に対する避難訓練への参加の促しが必要である。また、高齢化への対処が必要である。
- ・発災時における近隣町内会との連携の在り方について、事前の協議が重要である。
- ・指定避難場所への災害弱者（身体障がい者、高齢者等）の搬送手段（人員確保、車両等）の検討が必要である。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・海岸部の鉄工団地地区では、従業員を率先して高台へ誘導していた。
- ・望洋ヶ丘町内会では高台へ避難した従業員を集会所に受け入れ、町内会で備蓄していた水や食料等を提供した。
- ・ブロック塀が倒れ、水が出ていた。近所の人が「そこは昔、井戸だった所。これは津波が来る」という話を聞いたことから、避難行動に結びついた。

○ 防災行政無線・情報について

- ・音が聞こえているという認識はあったが、パニック状態のため内容がよく理解できなかった。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・水門は2か所を閉鎖した。嬉石町の管轄下であったことから嬉石町消防団が対応した。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・津波襲来の前、国道45号線は車で渋滞した。矢の浦橋付近では、平田方面に向かう道路は空いていたが、市街方面の国道や道路は渋滞していた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・多くの住民は高台の地域に居住しているため、避難しなかった。一部の住民は、海の様子が見える場所に集まった。
- ・鉄工団地地区の事業所では迅速な避難行動が見られた。津波経験がない多くの外国人従業員は、車で高台に避難した。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・勤務先から自宅へ車で向かう途中で津波に遭い、流された。
- ・災害弱者を避難させようとして、自ら避難できずに流された方もいた。

第2節 平田地区

第1項 平田地区（大字平田第1～6地割）

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・自宅の場所により、概ねの避難場所は各自で定めていた。
- ・震災前の取り組みとして、避難所は平田集会所と決めていた。また、21年度に整えた防災組織は、当日皆平田地区がおらずバラバラであっ

たことと、商業高校で防災訓練をやっていたものの、慣れていなかったり経験がなかったりしたために、機能しなかった。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・消防屯所に保管してあった合羽、半纏、毛布類は被災せず、避難場所
で利用された。
- ・無線等は整備保管していたが、保管場所が浸水してしまった。
- ・今後、避難を呼びかけるためのハンドマイクが必要だと思われる。
- ・何もとらずにまず高台へ逃げろ、寝床のそばに着替えを置いて、揺れ
が長い時は大きくても小さくても大津波が来ると思え、津波は 20～30
分で来るから、揺れが大きい時は瓦などが落ちてくるので少し弱まっ
たらすぐ逃げろ（座布団で頭を守る等）、日常の生活の中で虫、動物
の行動が変だなと思う時は気を付けろなど、多大にある。
- ・「これは絶対にとんでもない大津波が来る」と直感しました。ふだん
は「私たちの住宅地は津波の来る場所ではない」と考えていたが、こ
の大地震と、三陸沖の津波は 78 年もの長い期間来ていないことも考え、
「この場所も絶対に大丈夫という保証はない」と思い、近所の人たち
と一緒に避難準備をして、いつでも高い場所に上げられるように待機し
ました。
- ・後から考えると、国道を平田球場の方に歩いていけばよかったのだが、
避難場所は平田小学校校庭とインプットされていたので、いつもの訓
練どおりに行動をとっていた。逃げる途中、まだ家の前でうろうろし
ている人がいたので「何してるの！ 逃げて！」「早く逃げてよ！」
と叫びながら校庭に走った。すると、三陸鉄道の駅の方から「来たぞ
ー！ 逃げろー！ 戻るな！ 戻るなー！」と叫ぶ大勢の声が聞こえ
た。安心する間もなく三鉄の土手を助けを借りながら駅まで上がった。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・消防団から「第 1 波が来た」と聞いて、自宅（旧商業高校のグランド
脇）を目指した。
- ・テレビもラジオもなかったので、大家さんに言われて避難をした。
- ・岩手県水産技術センターで、車での避難を相談していたところ、屋上

へ通じる階段を駆け上がる他の部の人たちが見えて、それにならって避難をした。

○ 防災行政無線・情報について

- ・防災行政無線は聞こえたが、耳に入らなかった。聞き取れなかった。余裕がなかった。
- ・消防無線が津波襲来後の救護活動の連絡等に重要な役割を果たした。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・水門は、消防団員によって、訓練通りに閉鎖された。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・津波襲来直前は、国道が東門から松原まで渋滞していた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・消防団員の一部は、水門閉鎖後、軽トラックで避難の途中、高齢者等の要援護者を荷台に乗せて、避難先の平田幼稚園に移動した。
- ・地震後、町内各所で数人の住民が集まり、周りの様子をうかがっていた。
- ・海岸付近に居住する住民は、津波避難に関する意識が高く、比較的早くから最寄りの高台等に避難した。また、住民同士で協力しあい、怪我人や車椅子の利用者等、体が不自由な方の避難を補助し、旧釜石商業高校等の避難場所への移送を繰り返した。
- ・自宅の屋根に上って、一命を取り留めた方もいた。
- ・自宅に到着後、館山神社に移動したが、津波が見えたので、さらに高台の夏山という所まで移動した。
- ・高齢者等の避難の声がけをしていた民生委員も波に追われての避難となった。

○ 福祉施設・地区生活応援センターの避難行動

- ・あいぜんの里では、当時施設には職員 41 名と、長期入所者 71 名、短期入所者 17 名、デイサービス利用者 18 名がいた。地域住民のほかに、災害応援協定を結んでいた 2 施設（グループホームもみじ苑・釜石保育

園平田分園）が避難して来た。施設の一部の破損があったが、施設はそのまま利用ができたがガス供給や水がストップし、平田地区としては孤立した状態におかれた。日頃から備えていたことは特になかったが、震災当日の午前中、たまたま業者から向こう 1 週間分の食材が届いたばかりであったため、数日をしのげた（運が良かった）。

- ・グループホームもみじ苑は、津波の想定ではなく主に火災を想定し、事前にあいぜんの里と災害時の協力を締結していたことから、当時ホームにいた職員 3 名、長期入所者 9 名は、15 時頃から車であいぜんの里に避難を開始し、15 時半頃にはあいぜんの里に到着し、あらためて協力を依頼し相談した。
- ・平田地区生活応援センターでは、地震発生時。職員 2 名、うち 1 名は他地域で活動中であった。来所者はおらず、職員は施設に施錠し、近所の高齢者 2 世帯に避難の呼びかけを行いつつ平田幼稚園へ徒歩で向かった。平田幼稚園では、消防団から「津波が来たのもっと上へ上がれ」との指示があり、地元の方にしかわからないような道を通して旧商業高校まで避難した。

○ 救助の状況

- ・釜石駅周辺に津波が来てプールのように水が溜まっていた。そこで溺れている方がいたので、飛び込んで助け上げた。（三鉄の線路の上に上がった）
- ・自主防災活動を行っていた地区代表者で、避難が遅れ危険な避難となった事例が見られた。（水門操作や啓開活動していた消防団員が津波にさらわれたが救助された。）

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・自宅に留まり逃げなかった。逃げ遅れた。
- ・体の不自由な方を安全と思われる場所まで車椅子で移動させたが、その場所が浸水して流された。
- ・一度避難したが、ペットが気になり自宅に戻って流された。
- ・避難の準備に手間取り流された。
- ・いままではチリ地震津波のように津波到達まで時間があると思い、自宅に物資を取りに戻ったりした方が多かった。

- ・ここまで津波は来ないと考え避難せず、犠牲者や避難が遅れて津波にのまれながらも避難した方、建物に取り残されて救助される事例が多数発生していた。
- ・亡くなったのは、高齢かつ歩行困難者及びその避難補助者(家族)が最も多かったとされる。

第2項 尾崎白浜地区（第7～8地割）

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・平成22年10月に自主防災組織を町内会で設置した。
- ・震災前、要援護者の避難支援の担当者を決めていた。地区での自主的な訓練を計画していたが、その前に震災に見舞われた。震災当日は地域での組織的な避難誘導まで頭が回らなかった。
- ・震災以前の取り組みとして、避難訓練は実施していた。参加者数は90～100名。避難場所は旧尾崎小学校校庭であった。
- ・震災の少し前に、自主防災の組織図をつくって割り当てを決めていたが、それを確認する訓練等はしたことはなかった。
- ・過去の津波犠牲者の法要を毎年、地区住民の全員参加で行うなど、津波避難意識は高かった。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・大部分の住民が避難できたことから、これまでの避難訓練は無駄ではなかったと感じる。
- ・3月3日の避難訓練は形式的・表面的になってしまい、重要であるという認識が薄れていた。
- ・海岸近くの消防屯所の2階には毛布等を備蓄していたが、津波で流出した。
- ・50～60歳代の住民は古老から津波の話を聞いていた。近年、甚大な被害をもたらした津波がなかったことから、徐々に低い土地にも家ができてしまった。若い世代に伝承することが必要と感じる。
- ・チリ津波のあと、海沿いの自宅を高台に移転した。（今回の津波で被災しなかった）

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・津波が来ることを直感した。
- ・余りに地震が大きかったので、尾崎神社まで移動して海を見ていた。
- ・地震が大きいのので、必ず津波が来ると思って様子をみながら、尾崎神社に移動した。
- ・揺れている間、「大きな津波が来る」と思った。
- ・両親の様子を見に行こうとしたが、組合の職員に「海の近くには戻るな」と言われた。

○ 防災行政無線・情報について

- ・防災無線は波高に関する情報のみ聞こえた。サイレンなども鳴らなかった。
- ・3mという情報が安心感につながり、まさか津波は来ないだろうと判断してしまった。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・水門は3か所ある。消防団員のほか、地域で協力して閉鎖した。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・消防団や住民が互いに協力しあい、水門の上から車避難者に迂回を呼びかけた。
- ・多くの住民は地震と同時に家から出て、周りの様子を見ていた。海の様子を見ていた住民もいた。船の様子も見ていた方もいた。
- ・相互に声をかけあって、高齢者等の避難を補助しつつ、高台へ徒歩で避難した。その後、暗くなったため被害のない旧小学校、民家へ移動している。
- ・避難の説得に時間がかかり、高齢かつ歩行困難者で、消防団員に背負われて高台に駆け上がった事例もあった。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・体の不自由な方（高齢者ではない）が介護者とともに流された。

- ・ 周りが声がけしたが、家に留まり、逃げなかった方もいた。

○ その他

- ・ 当日、海岸ではカキの解体、若布の間引き作業をしていた。船で沖に出ている方もいた。
- ・ 夜間にも何度か大きな津波が襲来したと聞いた。

第3項 佐須地区（第9地割）

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・ 平成22年8月に自主防災組織を設置した。
- ・ 毎年、3月に行われる避難訓練には約50～70名の方が参加した。各自で参加を心がけていた。
- ・ 被災前も避難訓練をしていた。当初、地域内の一番の高台であるトンネル周辺が避難場所であったが、避難訓練を重ねるたびに地域住民が参加しやすいように、高台の納屋、集会所と、避難場所が下がってきってしまった。
- ・ 地区では、訓練は年一回だが、過去の津波犠牲者の法要を毎年、地区住民の参加で行っていた。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

- ・ 祖父母から津波のことを聞かされたように、今回の津波のことを後世に伝えていかなければならないと感じた。
- ・ 各自で出来るだけ高い場所へ避難するべきである。高い場所へ逃げても、更に高い場所へ避難する習慣を身に付けることも必要である。
- ・ 今後の課題として、佐須集会所が一時的な避難所としての機能を果たしたとしても、長期間の避難に適した避難所であるかどうか、再考が必要である。
- ・ 人間は自然に逆らうことができないということを感じた。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・消防団が中心となり、避難を呼びかけ、佐須集会所へ誘導した。
- ・沖へ船を出そうとした方、あるいは沖から自宅へ戻ろうとした方の中には、危ない状況にあった方もいたが、消防団員の誘導で回避した。

○ 防災行政無線・情報について

- ・防災行政無線は、海岸付近では聞こえない場所があるため、今後の対策が必要である。

○ 水門・陸間の閉鎖

- ・水門は、訓練どおり短時間（約 10 分）で閉鎖した。

※水門閉鎖後、夜間に沖から戻った方を避難させるため、門扉を開けざるを得ない状況があった。消防団員の水門操作は、常に危険が伴う作業だと感じた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・地区内に指定避難場所（神社、集会所）や地区で独自に定めた避難場所（空地、トンネル前路上）もあったが、あまり使用されず、津波を見てから裏山に上がるなどの避難行動が多かった。
- ・地震発生後、大部分の住民は佐須集会所に集まった。集会場付近にも津波が到達したことから、更に高台の民家に車、徒歩で移動、高齢者を車へ乗せて佐須トンネル付近へ避難した。消防団員の避難誘導により、佐須集会所からスムーズに短時間で避難できた。（約 20 分程度）
- ・津波に流された方（助かった）、怪我をした方が数名おり、佐須トンネルの広場まで移動させた。
- ・地区内には、地震発生後に津波が襲来するまでの間に、釜石から佐須まで帰ってきた方が 3 人いた。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・人的被害はなかった。

○ その他

- ・全住民が夕方、隣接地区（尾崎白浜）の旧小学校へ移動している。

第3節 鵜住居地区

第1項 鵜住居地区（鵜住居町第1～19・23・24地割）

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

【上 町】

- ・防災センターが設置される以前は、常楽寺を避難場所として訓練していた。避難訓練時、常楽寺を利用した回数は多かったが、震災のほぼ1年前に防災センターが完成したことから、「避難所」としての印象が強かった。防災センターでは、救急措置等屋内で行う訓練を行っていた。防災センターには鍋、釜又は食料等の防災備蓄品があり、多くの住民はここに避難すれば大丈夫と感じていた。
- ・町内会では、地域の防災意識、避難訓練の参加率を高めるため、救急担架の搬送、消火訓練を想定したバケツリレーなどを取り入れた防災運動会、町内会主催の避難訓練を実施したことがある。

【新川原】

- ・町内会では震災以前、災害時の炊事班、救護班等の役割を決めた防災訓練を実施する予定だったが、台風が重なって中止となったため、実施に至らなかった。
- ・通常の避難訓練では、本行寺の避難場所に集まっていた。

○ これまでの備え・よかった点・課題ほか

【上 町】

- ・避難訓練を実施していたことにより、どこが避難場所であるかなどは周知できていたと思う。
- ・「訓練が重要である」との思いが欠けていた。訓練が形式的になっており、ただ参加するだけでよいと思っていた。「体が動かない」という理由で、訓練に参加しない高齢者も多くいた。今にして思えば、訓練が重要であるという強い思いを伝えておきたかった。

【川 原】

- ・鵜住神社に乾パン、ロープなどの防災備品が備蓄されており、今回の

災害でも有効に活用された。

- ・避難訓練に参加していた方は、日頃から避難場所を理解していたと感じる。ただし、これまでの避難訓練の参加率は低かった。

【新川原】

- ・懐中電灯とラジオを持って避難しろという取り決めがあった。
- ・災害時要援護者の名簿を作成していたが、今回の津波では、緊急に各自で避難することが必要だったので、十分に活用されなかった。
- ・津波が来るかどうか分からなかったが、避難訓練のとおり行動した。このことが結果的に良かった。
- ・通常の3月3日の避難訓練には、約10名程度の参加に留まっていた。
3月3日の訓練は、寒い時期の早朝に実施することから、出勤者や高齢者等は大変であった。訓練日を休日に変更するよう何度か要望したこともあった。
- ・震災以前からハザードマップで浸水範囲や避難場所を確認していた。しかし、ハザードマップに記載されている浸水範囲から1.8kmほど離れていたため、ここまで来ないと思いこんでいた。そのため、余震を心配して皆で建物の外に出ていた。ラジオから聞こえてくる情報から状況把握に努めていたが、「釜石に4mの津波」が来たというのを聞いた矢先に、家や車を巻きこんだ津波が迫ってくるのが見えた。
- ・三陸自動車道が封鎖されてしまっていたため、三陸道に入る手前の広場が避難先となった。結果的に助かったからよいものの、地震のみしか考慮していない対応であったため、場所によっては津波からの避難先は限られた所もあるので、三陸道等でも有事の際には誰でも入れるようにする対応も必要だと思った。
- ・自分の行動で反省すること
非常持出は常に準備していた。避難訓練の時は背負って訓練していたのに慌てて考えも気づきもしなかった。何のための準備していたのか反省です。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・鵜住居の住民でない工場の若い従業員たち等が民生委員から津波のことを伝えられるなど強くうながされたことから避難に結びついた事例

があった。

- ・指示を受け、消防団員が鶴住居小学校に行き、「逃げろ」と避難をうながして避難させた。
- ・避難が遅れ、津波を見て逃げ、ぎりぎり助かった事例、波にのまれたが運よく助かった事例、倒れた家や物の間を泳いでなんとか助かった事例等がみられた。
- ・親や配偶者、避難をしている人等から「逃げよう」「鶴住居駅方向に行ったらだめ」等とうながされたために避難あるいは引き返した事例や、「津波だ」「津波がすぐそこまで来ている」「津波がくるよ」「水が来たぞー」「上がれ、上がれ」など、切迫した状況を伝えられ、あわてて避難をした事例が多くみられた。
- ・大きな揺れから津波を想起し、すぐに避難行動にうつした事例が複数事例みられた。
- ・NHK のテレビが「大津波発生！」（こう聞いた）と三回連呼したところで停電。直感的に「これが以前から警告されている三陸沖地震か」と察し、即避難行動を開始した。
- ・地震直後、防災無線から「3 mの大津波警報」と聞いて、すぐに準備。近所の人から「避難をしたほうがいい」と声をかけられすぐ高台にある山田線に登った。
- ・今度はテレビで「大津波発生」と3回繰り返し、その後停電。すぐ避難を開始

【上 町】

- ・周囲の高齢者等に声をかけあいながら避難した。声をかけても避難しない（動かない）住民もいた。
- ・座り込んでいる高齢者等には、避難場所に移動するよう呼びかけた。

【川 原】

- ・声をかけながら避難した。体が不自由な方がいたので、地域で助けあって搬送避難した。
- ・消防団員が、消防車で巡回中、家にいた方、車内にいた方にマイクで避難を呼びかけたが、直ちに避難行動をとる方は少なかった。

【新川原】

- ・近隣の高齢者、事業所等に声をかけながら避難した。声をかけたが、家族とともに逃げるため、自宅に留まり待つ方もいた。率先して避難

した方につられて避難した高齢者もいた。

○ 防災行政無線・情報について

【上 町】

- ・内容は、よく聞き取れなかった。サイレンが鳴るのは聞こえた。

【川 原】

- ・気が動転していて、聞こえたかどうか分からない。
- ・聞こえた。

【新川原】

- ・大津波警報の放送を聞いた記憶はある。これほどの津波が来るとは予想できなかった。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・消防団が、鵜住居川の堤防の防水扉、釜石東中学校裏の水門、長内川の成ヶ沢水門、日向の水門を閉鎖した。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・鵜住居保育園前まで来たときに、車が渋滞
- ・やまざき機能訓練デイサービスホームに向かう途中、車が停滞

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・多くの住民は、地震直後に積極的に声がけしながら、高齢者等の補助をしつつ迅速に避難した。しかし、その道中に外で会話をしながら避難を迷っている方や、その後たとえばガスの元栓を閉めに自宅に戻る事例、あるいはここまで津波は来ないと考え自宅でとどまる事例、また家の片付け、割れた食器等に気を取られ避難が遅れる事例が目立った。
- ・少し離れた一次避難場所まで駆け上がる時間がなく、3階建の自宅屋上や近隣の建物の上階に上がって助かった事例があった。
- ・周囲に声をかけながら鵜住神社や常楽寺に逃げた。
- ・避難の補助・支援をしていて逃げるのが遅くなり流され、運良く助かった事例があった。
- ・すぐに避難を開始し、車が渋滞していたところからは車椅子に障害一

級の主人を乗せ坂道を上っていた。途中、若い男性やお母さんが車椅子を押すのを手伝ってくれた。

- ・訓練通りに防災センターに避難することにした（幸いにも助かった）。

【上 町】

- ・地震後、多くの住民は、家の前に立って周囲の状況をうかがっていた。地震の揺れがただごとではなかったことから、比較的早い時期からリュックサックを背負い、避難場所に避難した方もいた。避難すべきかどうか、迷っているように感じる方もいた。
- ・地域の住民は、概ね常楽寺境内及び鶴住居地区防災センターに避難した。仲町の住民は防災センターに避難したと考える。
- ・常楽寺境内に避難後、津波が襲ってきたので、車に相乗りするなどして、更に高台に避難した。一部の高齢者は這いつくばって避難した。

【川 原】

- ・地震が大きかったことから、一部の住民は、比較的早く避難した。避難の途中、「津波が来る、来ない、来たとしても少しだろう」などと話しあっていた住民もいた。
- ・一部の消防団員は、高齢者を背負うなどして避難を支援した。

【新川原】

- ・新川原では、地震直後、多くの住民が高台に逃げようとした。大きな揺れだったため、外に出なければいけないと思ったが、まさかここまで津波が襲来するという意識はなかった。

○ 高齢者福祉施設等及び公共施設の避難行動

- ・養護老人ホーム五葉寮は、地震直後は、入所者に対して居室で待機を指示し、避難して来た地域住民を集会室に案内した。カーラジオで大津波警報の情報を聞き、施設長の指示で建物裏山の作業所へ避難誘導を開始。誘導中に施設に浸水が始まり、途中入所者1名が死亡した。地域住民とあわせて130名位で作業所に避難し、翌日消防団、地域住民の協力により徒歩で山道30分、バスで5～8km離れた3箇所に分散して避難。13日には基幹集落センターに入所者48名、デイサービス利用者20名、職員21名が集合した。
- ・グループホームございしよの里は、当日職員3名、長期入所者18名、デイサービスは職員7名、利用者18名がいた。15時頃に職員が入所・

利用者を2階へ避難誘導し、津波が襲来後、ヘドロの除去をすることになった。（入所・利用者は2階でそのまま待機）

- ・ 障害者福祉サービス事業所わらび学園（鵜住居分園）は、当日職員1名、利用者6名、市内新日鐵構内に職員1名と利用者5名、のぞみ病院に研修で職員2名がいた。地震後外にいた職員等を含め全員が3台の車に分譲したが、間違えて1台は大槌の本園へ、1台は近隣の日向にある公園に向かうという分離避難となった。前者は「蕨打直集会所」に避難し3日目に帰宅、後者は、さらに奥野県営アパート付近にて車で一晩を過ごし、12日に利用者を家に送り届けた。

○ 救助の状況

- ・ 押し寄せた津波や川から引き上げられた事例や、夜間にがれきの中から救出・保護される事例、避難が間に合わず流されて屋根の上などから救助される事例等があった。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・ 鵜住居地区防災センターは、本来の避難場所ではないのに訓練時に使用していたことなどから、主に仲町と一部上町町内の方が身を寄せ、多くの方が亡くなった。
- ・ 人的被害の内訳の詳細は不明だが、ここまで津波は来ないと考え自宅で津波に流された事例、津波に追われ自宅の二階に駆け上がるが自宅ごと流される事例、高齢者等及びその避難補助者の避難困難による事例が多かったとされる。
- ・ 足下に水が来ているのにたたずんで、そのまま流されて亡くなった。

【上町】

- ・ 住民が一緒に逃げようと声がけしたが、家に留まりそのまま流された。
- ・ 車で他地域へ避難中、車ごと流された。
- ・ 高齢者、一人暮らしの方が流された。

【川原】

- ・ 高齢者が流された。健康な方も含まれていた。防災マップの浸水シミュレーションでは、津波が来ても、せいぜい長内橋付近までだと思っていた。まさかここまで来るとは予想できなかったのではないかな。
- ・ 渋滞中の車を津波が襲い、車ごと流された。

【新川原】

- ・寝たきりの方の避難に手間取り、それを手助けした方もともに流された。
- ・高齢の家族を背負って避難した家族がともに流された。

○ その他

【上 町】

- ・常楽寺の境内広場付近は、避難した車で一杯だったが、津波で流された。
- ・最初、津波は海の方に霧が立ちほだかるように見えた。
- ・家ごと流されている屋根の上に避難した方が、引き波、寄せ波で行き来していたが、なすすべがなかった。

【川 原】

- ・まさか、J Rの線路より西側まで、津波が来ると思わなかった。来たとしても、長内川の鉄橋付近で止まると思っていた。

【新川原】

- ・釜石市街地に津波が襲来したことをラジオで知ったが、その時点で鶴住居地区に津波は押し寄せていなかった。
- ・まさかここまで津波が来るとは考えられなかった。避難後すぐに帰宅できると思っていた。

第2項 根浜地区（鶴住居町第20～22地割）

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・平成15年1月に自主防災組織を設置し、津波に対する様々な取り組みを実施した。
- ・震災の5～6年前から、避難訓練の際には一時避難場所へ避難していたものの、実際に避難する時は各自近くの高台へ逃げるということを徹底した。その後、避難場所へ集まるということを地域で取り決めていた。
- ・指定避難所はあったが、そこは危険と認識していて、近場の高台（裏山）に上がると話しあっていた。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・非常用持出袋が各世帯に配布されていたが、持ち出す暇もなく流出してしまい、活用することができなかった。
- ・片岸・箱崎方面等、多方向から跳ね返りの波が襲来したため、被害が大きくなった。
- ・震度3以上の地震が発生したら、津波が来ると思っている。そして、すぐに船を比較的安全な場所に移動させるようにしている。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・住民同士で声がけしながら、それぞれ近くの高台に避難した。
- ・津波の騒音で、避難を呼びかける声が聞こえなかった。
- ・津波警報が3mと聞いたが、自宅の海拔が10m程度だったので、大丈夫と思って安心して避難せずにいた。その後、友人からの避難の声がけがあつて、指定避難場所まで移動した。（ぎりぎり避難できた）
- ・お父さんから「津波は3倍で来る」と聞いていたので、当日には「津波警報が3メートルと聞いたら、9メートル来るぞ」と皆で話しあっていた。

○ 防災行政無線・情報について

- ・防災行政無線は、一度も聞こえなかった。記憶がない。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・水門：12月から3月の冬季期間、大部分の水門はあらかじめ閉めている。水門は第6分団が管轄していたが、震度4以上の場合については町内会で自主的に閉鎖する場合もあった。
- ・震災当日は、地震直後に消防団が水門閉鎖を行っている。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・東の沢周辺は地形的に海の状況を確認できる場所なので、海の様子を見ながら避難することができた。
- ・地震発生後、持ち船を心配し、海岸に下がった方もいた。
- ・避難の途中、動けないお年寄りがいたので、一緒にいた方たちとそのお

年寄りを抱えて、藪の中を歩いた。

- ・集まった畑からの見晴らしがよく、海の様子が確認できた。堤防を越えたのを見てから、一斉に指定避難所へ移動した。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・一度避難したが、物を取ろうと家に戻り、流された方もいた。
- ・他の住民に避難誘導の声がけをして、流された方もいた。
- ・避難訓練に参加しない人の多くが亡くなった。避難せず家の中にいた。
- ・過去の津波を経験した高齢者が亡くなった。
- ・すぐに高台への避難をせず何分か時間があつたときに、高齢の女性が自宅に戻ってしまい犠牲になってしまった。
- ・チリ地震津波等の浸水実績からより高台に建てた家に津波は来ないと思い、避難をすることなく流された方もいた。
- ・一部の比較的高台に住む住民では、ここまで津波は来ないという思いが強く、自宅ごと津波に流され亡くなった方が多かった。

第3項 両石（両石町第1～3地割）

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・平成22年12月に自主防災組織を設置した。
- ・市が実施する津波避難訓練への参加率は20%前後であったが、平成23年3月3日の避難訓練は早朝であること、また避難訓練の機運が高まっていたこともあり、99名もの住民が参加した。ただし、高校生以下の参加率が低かった。
- ・敬老会、明治三陸大津波100回忌慰霊式典等を実施することで、先人の教訓や津波避難の重要性を学び、率先避難・早期避難に徹するという避難意識の醸成を図ってきた。
- ・「両石の津波を語る会」を発足させ、地区の小・中学校の防災学習に寄与してきた。
- ・軽トラックを利用した救助作戦「15分ルール」の取り決めに計画しており、大震災が発生する1か月前の2月に回覧板による周知を行った。そして、3月11日には要援護者を救護避難したが、残念ながら5名の方が

犠牲になってしまった。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・あらゆるものが流出したことにより、物理的な「備え」は役に立たなかった。しかし、地震後の避難率が高いことから、これまでの啓蒙活動は役に立った。また、今後の課題として、集落が壊滅状態にもかかわらず、至急の支援がなく孤立した。
- ・我が家まで津波は来ないといった防波堤、防潮堤への過信があった。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・消防団は屯所に参集し、それぞれ率先避難をした。
- ・町内会役員の男性は、旧両石保育園で要援護者を軽トラックに乗せ、搬送救護した。
- ・町内会長が5名の要援護者を見守った時には、造成2号地の実家へ避難する準備ができている方や、指定避難場所であるあさひ公園への避難が済んでいた。
- ・町内会長が漁村センターへ向かう途中、四軒町地区の主婦数名と会った際に、海が動いたため津波が来ることを伝え、同町の避難場所である千島墓地前広場への避難を誘導した。
- ・あさひ公園から駐車場へ戻り車を移動しようとした方で、戻るなど喝を入れられ、一命を取り留めた方もいた。
- ・町内会長があさひ公園へ出向き、自主防災用の大型ハンドスピーカーで津波襲来の様子を住民に伝え、早急に避難するよう呼びかけた。
- ・強い地震から「これはただならぬ事態が起こる」ことを感じ、すぐ高台に上った。

○ 防災行政無線・情報について

- ・放送していたことは理解できたものの、災害時に周囲の騒音に消されたり、走り回っていて内容が分からないことがあった。また、パニック状態から屋内では聞こえないことがあった。
- ・巨大津波が襲来しているときに3 mから6 mへ情報の訂正があり、迷惑だった。車のラジオで情報を知った方が多かった。

- ・防災無線の3mの津波高の情報を信じて、判断が鈍った。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・消防団は午後3時前に防潮堤の閉門を完了した。
※今後の課題として、消防団にかかわらず、住民が対応できるような操作研修の必要性が挙げられる。
※ただし、「東日本大震災一釜石市消防団活動記録 ふるさとを守る」によると、消防団が手動の水門を閉めに行くと既に消防0Bや漁師の方が閉めてくれていたとの記載がある。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・第1波は自動車整備工場付近まで襲来し、その後は高架橋の下まで到達した。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・大津波警報3m以上（くらい）との防災放送により、過去の津波のことから命の危険性はないと判断し逃げ遅れた方は数名いたものの、近所の呼びかけや率先避難により地震発生後、25分前には99%避難した。
- ・明治・昭和三陸大津波後に造成された場所（2号地から4号地まで）の住民は自宅が高台にあるため、津波を甘く見ていた部分があった。また、国道沿いや海岸付近の住民のうち約30名が2号地にある実家や親戚のもとへ避難し、犠牲となった。
- ・第1波が想定内の規模であったことにより、第2波以降の津波に対する油断があった。
- ・漁村センターから海岸付近までの地域は迅速に避難したが、センターの上にある地域はしばらく避難しなかった。
- ・町内会では避難訓練を通じて、命でんこにおける率先避難及び早期避難の重要性を伝えてきたため、多くの住民が危機感を持ち、率先して避難に徹することができた。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・犠牲者の内訳としては、避難行動をせずに亡くなった方が22名で、最も多かった。次いで、避難途中で犠牲になった方が12名であった。避難先

で犠牲になった方が6名（うち5名は2号地（明治・昭和三陸津波を受けて、昭和10年に造成された高台・2号地から4号地までである）にある実家や親戚のもとへ避難し、犠牲となった。他1名については鵜住居地区防災センターへ避難して犠牲となった）であった。また、大津波警報3m以上という防災無線の情報を信じて、避難場所から駐車場へ戻って車で移動したり、会社や所用先から自宅へ戻るなどの行動をとり、犠牲になった方が5名であった。

- ・「避難後、絶対に戻ってはいけない」という先人の教訓を守らなかったことが逃げ遅れた原因として挙げられる。
- ・両石には、明治・昭和三陸津波を受けて、昭和10年に造成された高台があるが、第1波は到達しなかったが、第2波で到達してしまった。その高台で流された方が多かった。山の影で海が見えなかったことも被害が出てしまった要因だと思う。
- ・車で避難しようとした方は犠牲になり、車で避難しなかった方が助かる傾向にあった。
- ・第1波が想定内の規模であったことにより、第2波以降の津波に対する油断があった。
- ・背後の高台に上がるのではなくわざわざ津波避難所に避難しようとして、その途中で津波に流される事例が多く見られた。（津波がくる方向に向かって避難となっていた）
- ・地震直後、高台の一部住民では、ここまで津波は来ないと思い自宅に留まり、自宅ごと津波に流され亡くなった方がいた。海側の地区よりも山側や高台の区域で人的被害が多かった。
- ・人的被害の内訳は、海側・山側地区ともに、高台区域に住む方で、高齢のため近所の避難の声がけもあったが、ここまで津波は来ないと考え、自宅に留まった又は避難が遅れた事例、または高台の知人宅に避難してそこで津波に流された事例、高齢かつ歩行困難者及びその避難補助者(家族)の避難困難による事例がほとんどであった。わずかではあるが、避難後、自宅に物を取りに行った事例、船を避難させようとして被災した事例も1例ずつあった。

第4項 水海地区（両石町第4地割）

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・津波が襲来するという意識もなく、避難場所も決まっていなかったため、3月3日の避難訓練には参加していなかった。御在所沢の上流を避難場所として指定するように、これまで市とも協議した経緯があった。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・住民が各自で避難した。高台へ車で避難していた一部の住民が、徒歩避難者を同乗させて、避難した。それぞれが避難するのに精一杯であった。

○ 防災行政無線・情報について

- ・「3m」という波高の情報は聞いたが、その後は記憶にない。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・消防団第6分団第2部が水海水門の遠隔操作室に向かったが、機械の故障のため遠隔操作ができず、4つの水門を手動で閉鎖した。事前に手動での閉鎖訓練を行ってはいなかった。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・地区のほとんどの住民は地震直後に屋外や路上に出て様子を見ていたが、地区外から急ぎ車で戻ってきた住民の方が、ほとんどの住民に大声で津波の来襲を知らせ、自らの運転するトラックに載せて、集落北側の高台（路上（トンネル下））に避難させたため、地区住民に犠牲者はなかった。
- ・地震発生後、速やかに両石インターの高台方面へ避難する住民もいた。地震後、数人で集まり、様子を見ていた方もいた。多数の住民は、屋外で水海川を遡上する津波を見て、それから各自で高台に率先避難した。避難の途中、津波で足が浸された方等はいなかった。
- ・地域の指定避難所は、海岸の水海公園の高台にあり、海水浴客等を主に対象としていた。集落の住家付近に指定避難場所がないため、近くの高台や女遊部方面へ車で避難した方もいた。
- ・地域にある事業者は、地震後の比較的早い時間に、工事中の三陸道路の高台等に車で避難した。
- ・地区内には、平時から100名を超える従業員や集客のある事業所があっ

た。一部の事業所では、迅速に内陸(女遊部)方面へ車やバスで避難し多くの従業員等は無事な事例もあったが、複数の事業所の建物内で津波に流され犠牲となった事例や、建物の中や屋上で津波のあとに取り残されて救助された事例があった。

- ・各自、一時的に裏山や高台等に避難した後、女遊部の集会所や被災を免れた住家等に集まった。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・人的被害はなかった。

第5項 片岸地区（片岸町第1～9地割）

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・平成 16 年4月に自主防災組織を設置した。あらかじめ役割分担を明確にした組織体制が構築されていたが、地域独自の実践的な訓練は実施していなかった。
- ・市の実施による定例的な避難訓練には積極的に協力し、参加した。
- ・県のモデル防災会に指定された際には、防災マップ作成ばかりでなく総合的な研修を実施した。
- ・避難訓練時には、指定避難所ごとに集合し、話しあいの機会になった。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・非常持出品の準備は充分でなかった。
- ・海で作業していた方にとって、堤防のソーラーは波が上下する度に点灯するので、便利だった。
- ・今後はトランシーバーやハンドマイクなどの備品が検討されるべきである。
- ・浸水はしなかったものの、近くまで津波が迫った場所だったので、3.11 後、場所をより高い場所に変更した。
- ・震災以前に指定されていた避難場所のうち、階段が急すぎて避難場所として不適切と思い、そういった場所は外した。地域住民だけではなく、近辺の住民の生活道路の一つが通る地域だったら、地域住民ではない方

でも避難場所が分かるようにするといった、地域の実状に合った避難場所の指定をするべき。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・ 消防団は水門、スライド式ゲート 3 か所を閉鎖後、消防ポンプ車で周辺に避難を呼びかけた。その後、危険が迫ってきたため、道地沢団地に避難した。
- ・ 地域で組織的な避難誘導の実践はなかったが、住民同士が互いに声をかけあい、国道 45 号の通行者、周辺企業の従業員にも避難を促し、人命救助を行った。
- ・ 避難先の高台から津波の襲来が視認できたため、下の車列に急いで避難するように呼びかけたが、声が届かなかった。
- ・ 揺れのあとすぐ、避難を開始した。
- ・ 潜水作業中に、腹部に衝撃を感じ地震を想起（地上より早い）、スピーカーで「地震だ」と伝え、急いで引き上げてもらう。海が濁っていることから津波がくると想起。同乗者に高台へ逃げるよう指示し、自身は船を操舵し沖に向かって、青い海、青い海へと避難し、午前 2 時頃港へ戻る。

○ 防災行政無線・情報について

- ・ 大津波警報の数値をかさ上げた後の放送は道地沢団地周辺が聞いていたが、その時に既に 10m 近くの津波が襲来し、集落全体がプール状態になっていた。
- ・ 消防車の鳴らすサイレンと重なり、防災無線が聞こえづらい場面もあった。
- ・ 初期の段階で無線の非常用バッテリーも含めて使用不能となった。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・ 消防団でもあり、すぐに水門の閉鎖を行い、一緒に水門を閉鎖した人にすぐに高台へ避難するように指示した。
- ・ 片岸の消防団は地区の水門を閉めることもしなければならなかったが、ほかの場所に人員を割かなければならなかったり、昼間のため人員が余りいなかったりした。

- ・自動で閉鎖する水門が動かず、手動で操作した。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・地震直後、多くの方が指定避難場所へ避難した。津波浸水直前に危険を予知し、更に高台に移動した。
- ・車で避難した方もおり、犠牲になった方が多かった。
- ・迅速に避難した徒歩避難者の多くは、夕方には帰宅できるという思いがあったため、非常持出品の携行も少なく、着の身着のままで避難した。
- ・自動車学校の受講者や周辺企業の従業員は避難先を熟知していなかったように思われる。
- ・海が見える避難場所では、海から津波が来ることが見えたため戻った方はいなかったが、海が見えない避難場所では「まだ来ないだろう」と思い戻った方が何名もいた。
- ・地元民ではない大槌の方は、避難所の看板を見て、車を捨てて神社への階段を駆け上がり避難した。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・障がい者の介護のため、一旦自宅に戻り、避難が遅れたり、そこで流された方もいた。
- ・買い物や用事のために出かけ、車で帰る途中で津波に流された。
- ・外出先から避難する際に指定避難所に直行せず、自宅に立ち寄って（戻って）逃げ遅れた。
- ・家の中に留まっていたり、2階へ避難して流された。
- ・避難場所から一旦自宅に戻ったため、逃げ遅れた。
- ・津波の状況確認のため、海岸に出かけた。
- ・指定避難所以外の場所に避難し、そこが浸水したため犠牲となった。
- ・訪問介護で来ていた新人職員は体の不自由な方を見捨てられずに犠牲になったという話があった。
- ・災害時要援護者の避難支援のために、避難が遅れて犠牲になった方がいた。
- ・「逃げて」と声をかけたが、そのまま家に残っていて亡くなった方がいた。

○ その他

- ・ 3月12日から生存者の搜索が地元消防団の手で始まった。未使用の道地沢団地の建物に遺体安置所を設け、計5体を収容した。消防団屯所は流出し、機材も消失している状況下で、山火事対策にも参画するという困難な活動であった。
- ・ 各一時避難場所への避難者は、大槌町の山林火災の延焼危機にさらされることとなり、退避の呼びかけが始まった。町内会と消防団で調整し、上栗林集会所の使用が可能と判明したため、13日夜、上栗林集会所に移動を開始し、自宅避難者にも退避を促した。当初、30名ほどの移動が考えられたが、最大ピーク時には70世帯、153名が第2次避難所で避難生活を送ることとなった。これを契機に市内外の親戚へ避難することを選択する家族も増え、片岸町内の半数が上栗林集会所に入る結果となった。

第6項 室浜地区（片岸町第10地割）

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・ 平成22年7月に自主防災組織を設置した。救護係等の担当も決めていた。同年11月には、鶴住居の消防に協力してもらい、避難訓練や消火訓練を実施した。
- ・ 訓練の時には、主に公民館前（観世音神社の階段下）、室浜稻荷神社、一本松公園の3か所に集合していた。高齢者の方たちが参加しやすいように、地区の中心にある公民館を避難場所としていた。
- ・ 避難訓練では指定避難場所への避難よりも、とにかく高い所に逃げる訓練をしていた。その際、高台の住民は海側へ下がってはいけない、また海側の住民は高台へ声がけをして避難するように取り決めていた。
- ・ 町内会では避難時、高齢者に声がけする担当者を決めていたが、震災が平日であったため、担当者が不在であった。そのため、休日のみならず平日の場合を想定した取り組みが必要と感じた。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・ 公民館に備蓄していた防災資機材等は全部流された。1か所に備品を保管することは問題がある。今後、各世帯への配布の検討も必要である。

- ・今後の取り組みとして、体が不自由な方をどう援護するかを検討すべきである。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・水門閉鎖後、消防団は避難誘導のためポンプ車で集落内を3回程度回り、高台への避難を呼びかけた。

○ 防災行政無線・情報について

- ・予想される津波の高さが3mであるという大津波警報の情報は聞こえたが、内容については余り記憶がない。地域に無線は1か所しかなく、日頃から無線が聞こえづらい場所があった。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・3か所全ての水門を閉鎖した。
- ・消防団が水門閉鎖を行った

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・多くの住民が、地震直後に指定避難場所へ避難したが、津波浸水を受け、一部の避難者は、より高台へ逃れた。
- ・海側の地区では迅速に避難しているが、比較的高台の地区では、ここまですべて津波は来ないと考え、避難しなかった場合もあった。
- ・車で避難した方も数名いた。一本松公園まで車で逃げて流された方もいた。
- ・チリ津波の経験から、室浜公民館まで浸水するとは想定できなかった。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・犠牲になった方の多くは家の中にいて、流された。（家の中にいて情報を得られないから逃げられなかったのではと推察）
- ・避難先である指定避難場所が浸水してしまい、流された。
- ・身体の不自由な方が車で避難しようとして流された。
- ・一度避難したが、自宅へ戻ってしまい、流された。

○ その他

- ・ 3月 11 日は大漁で、多くの漁師が午前中に自宅に帰っていた。沖に出ていた船は一艘もなかった。
- ・ 波は海底からブクブクと盛り上がってくるように見えた。

第 7 項 箱崎白浜地区（箱崎町第 1 ～ 3 地割）

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・ 平成 14 年 8 月に自主防災組織を設置した。消火、炊き出しの訓練を過去に行ったことがある。
- ・ 3 月 3 日の避難訓練には全面的に協力していた。要援護者の聞き取り調査をしていた。しかし、具体的な支援方法についての取決めはなかった。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・ 白浜小学校に発電機、ヒーター、毛布等の資機材を備蓄していたので、震災後も活用することができた。毛布はあっても下に敷くものがないという声も出ていたので、今後は発砲スチロール等の備蓄も必要である。
- ・ 今後の課題として、高齢者用の音響機器の普及、避難所への無線設備の導入、離乳食やおむつの備蓄、太陽光による蓄電等の対策が必要である。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・ 住民が互いに声をかけあい、高台へ逃げるように誘導した。高齢者の中には避難を呼びかけても応じない方もいた。

○ 防災行政無線・情報について

- ・ 3 m、あるいは 6 m の波高に関する情報は聞こえた。ただ、無線が聞きにくい地域もあった。
- ・ 大きな揺れと護岸の亀裂をみて大きな津波がくるのではと直感したが、そのうち釜石市の防災無線で「津波警報が発令、3 m くらいの津波が来る」と放送があった。避難の準備をしているうちに、次に「津波が 6 m くらいまで来る」との放送になり、直ちに軽トラックで護岸から逃げた。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・消防団は、10 分以内には訓練どおり水門を閉鎖することができた。その他に閉鎖を手伝う住民もいた。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・当地域は地形上、傾斜地に家屋等が立地し、それぞれに石垣の段差があるが、勢いのある高い波が石垣を一気に乗り越えて襲ってきた。
- ・第1波は防潮堤の手前で留まったが、津波の第2波で家屋の多くが破壊された。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・地形上、海の様子が各自宅から見えるので、大部分の住民は自宅におり、津波襲来の寸前まで避難しなかった方が多かった。
- ・海岸部で作業をしていた方は、防潮堤の上で海の様子を見るのが習慣化していた。津波が襲来したのを見てから、急いで車で高台に移動した。偶然にも命を取り留めた方もいたが、車ごと流されて犠牲になった方も多くいた。
- ・海岸部の住民の多くは車で避難し、高台の住民は徒歩で避難した方が多かった。
- ・海の様子が気になり、海側へ下がる方もいた。津波に対する危機感がなかった。
- ・明治三陸津波や昭和三陸津波の浸水被害を基準として考えていたため、まさか津波がこれほど早く来るとは思わなかったという方が多くいた。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・周辺の住民からの避難の呼びかけに応じなかった方や、体の不自由な方が自宅で流された。
- ・体の不自由な方が自宅で動くことができず、流された。
- ・一度避難したが、再び海側に下がってしまい、流された。
- ・消防団員が住民への避難誘導の呼びかけに時間を要してしまい、流された。
- ・地区の漁業者の方々は、まだ海岸の作業所にいる者、防潮堤の上にいる者もおりましたので、「おーい津波が来るぞー、早く逃げろよ」と声を

かけたが、この方々から多くの犠牲者が出た。

- ・ 115 世帯、270 人のうち、死亡者 41 名（消防団員 3 名、漁協職員 2 名、流失居宅の中で 8 名、海岸避難中 28 名）、12 月 1 日現在、行方不明者 17 人。このように、白浜発祥の歴史上で最大級の大津波となった。

○ その他

- ・ 町の至る所でガスの臭いがしており、ガス漏れではないかと不安になった。

第 8 項 仮宿地区（箱崎町第 4 地割）

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・ 平成 22 年 10 月に自主防災組織を設置した。
- ・ 市が実施した 3 月 3 日の避難訓練に参加していたほか、町内会、消防団で自主的に避難訓練をしていた。
- ・ 他地域に比べて人口が少なく、高齢者の多い集落であるため、隣近所で支えあうコミュニティが築かれていた。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・ 備えているものは特になかった。
- ・ 夜に電気がなかったのが困ったので、今後の課題としては電気の備えが必要である。
- ・ 海岸部では若布を採る準備作業をしていた。
- ・ 高台に家があっても油断しては駄目だ。地震があつたらすぐに逃げる必要があると感じた。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・ 軽トラックで高台に避難する途中、徒歩で避難する方を荷台に乗せながら逃げた。

○ 防災行政無線・情報について

- ・地震発生時、スピーカーからザーっという異常音が出て、他に何も聞こえなかった。
- ・震災前から放送が聞こえづらい場所があった。
- ・地域の漁業無線放送についても故障していた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・地震後、住民の多くは自宅にいた。あるいは近所の家に数人で集まった。
- ・海岸部に近い住民は、比較的早く高台へ避難した。
- ・ふだんから地震が来ても海の様子が気になり、海岸部に下がってしまうという習慣があった。高台へ避難する際にも、海岸を眺めながら避難していた。
- ・車で避難した方が多かった。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・避難せずに自宅に留まっており、そのまま流された。
- ・避難の途中で家に引き返してしまい、流された。
- ・船に乗っていた方が流された。

第9項 箱崎地区（箱崎町第5～12 地割）

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・平成 22 年 7 月に自主防災組織を設置し、組織図を総会で確認していた。発電機やテントなどの必要な備品について整備計画を立てていた。
- ・避難訓練は、3 月 3 日の市が実施している避難訓練のみで、町内独自の訓練は実施していなかった。（参加者 70～80 名）

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・震災以前より、津波襲来時、高台避難と呼びかけているのに、なぜ高台に居住している方が下の避難場所に集合しなければならないのか。避難場所である森屋根へ避難する道路が整備されていないことや、平地がないとの意見もあった。
- ・震災以前より、町内会の防災本部の設置場所が漁村センターで大丈夫か

という声があった。さらに、高台に備蓄する場所を要望してはどうかという意見もあった。

- ・防災備蓄を兼ねた集会施設を高台に設置するなど、震災時に住民が避難できる安全な場所が必要と考える。
- ・箱崎地域の避難場所は、震災前には4箇所（屋外広場3箇所と箱崎庵寺）あったが、震災後に屋外広場はより高い所に変更した。
- ・私は小学校3年の時にチリ津波、高校生の時に十勝沖、大人になって宮城県沖(S50年代)、そして度々小さい50cm程度の津波を経験してきた。長年漁協で働いていたため、津波は30～50cm程度でも、養殖施設には大きな被害があるので、津波の恐ろしさを十分認識していた。地震＝津波と覚えていて、体が避難します。でも、こんなに巨大な大津波が来るとは予想だにしていなかった。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・地震による室内の状況を見て津波の危険を感じ、すぐに箱崎にある自宅へと向かった。
- ・地震の大きさと、川の水が引いているのをみて、旧道に上がり助かった。
- ・「津波が向かって来たから早く逃げろー！」という人の声が耳に入り、避難を開始した。
- ・消防団は、水門を閉鎖した後、消防車で町内を巡回し、住民への避難誘導を行った。
- ・避難場所では、津波を見て危険を察知し、近所の一人暮らしや体の不自由な方を回って声を掛け合い、また皆で更なる高台避難を呼びかけあった。「ここまでは津波が来ない」という高齢者を周辺住民と説得してどうにか車に乗せて山に登ったケースもあった。
- ・隣近所に声をかけて連れ立って避難した。身近にいた方の安否を気遣い、ともに被災した。残しては逃げられなかった。
- ・民生委員は、高齢者（寝たきり）の避難を呼びかけたが、全員とまでは行かなかった。
- ・津波が来ることを見て、逃げた。津波の様子をみながら、さらに上に逃げた事例が複数あった。
- ・カーラジオから「大津波警報発令」と聞こえてきたため、行動を変更し

た（寝たきりの家族がいる家へと向かった（家は浸水しなかった））。

- ・ 第一報が約 3 m と聞き、5 m の防潮堤が守ってくれるものと思い、すぐに避難も想定していなかったが、「津波が来た」との声で郵便局から避難し一目散で庵寺に向かった。

○ 防災行政無線・情報について

- ・ 地震直後、避難勧告の放送は当初聞こえたが、その後聞こえなくなった。以前から天候次第で、聞こえる場所と聞こえない場所があった。

○ 水門・陸間の閉鎖

- ・ 消防団が水門閉鎖を行った。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・ 地震直後、地区の一部の住民は、屋外や路上に出て、相互に声をかけあい、高齢者等の避難を補助しつつ、高台・親類宅へ避難した。
- ・ 海岸部で働いていた住民も多数あったが、地震直後に一斉に避難せず、自宅等に戻ったりしていた。
- ・ 多くの住民は「津波はすぐ来ない」、「ここまでは来ない」という意識が強く、高台だけでなく、海側でも避難しない、避難が遅れる事例が多数あった。
- ・ 津波が来るまで、集落全体が不気味なくらい静まり返っていた。津波が来たのを確認できるまで周辺の住民は逃げなかったため、ここまで津波が来るとは住民皆思っていなかった。
- ・ 児童館の児童又は先生は、迅速に避難した。
- ・ 馬場前地域の一部、上前地域の一部では避難場所に避難したものの、それ以上の津波高さで更に上に避難した。
- ・ 事前に家族内で話し合い、発災時には裏山の高台に避難するように決めていた方もいた。
- ・ 震災で家屋等流失した方は、地元に残った親類や知人宅を頼りに、そこで一夜を過ごした。
- ・ 小中学校にいる孫が、逃げることを信じて行動した。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・寝たきりの高齢者の方が避難できずに流された。
- ・津波避難場所ではなく、親類・知人宅に避難したため津波に流された。
- ・親類のもとに避難を呼び掛けに行った方が流された。
- ・家族の救助又は物を取りに自宅に戻った方が流された。
- ・海の様子を見に行ったり、海の様子を見に行った家族を呼びに行つて流された。
- ・明治、チリの津波が来ない所に家を建てていた。波を見て急ぎ逃げたが、「ここに津波は来たことがないから、おまえたちも家の中に入れ」と言い、逃げることに間に合わなかった。
- ・車に乗せた健康上に問題がある方が、布団を取りに行っている間に津波が来て車ごと流された。

第 10 項 桑の浜地区（箱崎町第 13 地割）

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・3月3日の避難訓練には、地域で通常 15～16 名参加する程度で、同じ顔ぶれが多かった。
- ・災害発生時、消防団とともに、炊き出しなどの役割を決める動きがあったが、今回の震災時には具体化できなかった。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・避難訓練時、桑の浜高台等に避難していたことが、今回の震災時にもある程度活かされたと感じる。
- ・チリ、十勝沖地震では、養殖施設が被害を受けた程度だった。津波が来ることは完全に予想したが、防潮堤もあったので、多少油断していた。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・地震後、地域でお互いに声がけし、「逃げろ」と叫びながら避難した。海の見える位置から、下方の方に津波の襲来を知らせる方もいた。防波堤が高く、海の様子が分からなかった。
- ・要介護者宅を巡回して、避難を呼びかけた方もいた。

○ 防災行政無線・情報について

- ・震災の数日前から無線は故障していた。サイレンは鳴らなかった。車のラジオで「津波 3 m」の情報を知った。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・水門は、訓練どおり閉鎖した。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・1波目は防潮堤の半分程度まで来た。防潮堤を越えたのは2波目だった。3波目の威力が最も大きく、一瞬で潮が引いて、高波となって襲来した。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・地震発生時、浜では若布施設の復旧作業をしていた。一部の建物が傾くなど尋常な揺れではないことから、津波の襲来を予想した。水門を閉鎖後、地域の全住民は水門外の高台方向にいた。
- ・一部の住民は、地震直後から、指定避難場所のほか、それぞれ住家のある沢の高台に避難した。
- ・防潮堤から津波が溢れ出る状況により、徐々に高台に避難する住民もいた。
- ・指定避難場所も津波の危険が迫ったため、更にトンネル方向の高台に避難した。
- ・一時高台に避難したものの、逃げ遅れた方の確認、救助のため海岸方向に下りる住民もいた。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・体が不自由な方が逃げ遅れた。
- ・夜に救助された後、低体温症で亡くなった。

第4節 唐丹地区

第1項 花露辺地区

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・ 自主防災組織の設置はなかった。3月3日に実施した市の避難訓練に参加していた。訓練時、在宅している住民の避難率は高かった。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・ ソーラー発電の街路灯が役立った。
- ・ 日頃の地域のつながりが強く、当日以降も道路確保のための共同作業を実施するなど復興も早かった。
- ・ 震災の翌日、陸に未確認の船が打ち上げられていた。夜間にも地鳴りのような音がしていたため、大きな津波が襲来したと思われる。
- ・ この復興地の上方には昭和三陸津波で被災した海側の住民が移動しており、自宅を再建した方がいた。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・ 避難訓練の際にはお互いに声をかけあい、迅速に高台へ避難した。
- ・ 地震直後に屋外へ出て、避難している高齢者を補助した住民もいた。
- ・ 地震の大きさから「津波だ」とすぐにわかった。

○ 防災行政無線・情報について

- ・ 防災無線では大津波警報の放送しか聞こえなかった。予想される津波の高さが3mだという情報を聞いた記憶があるが、それ以外は記憶にない。
- ・ 防災無線が倒壊し、スピーカーが壊れた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・ 震災時、海岸では「若布の芯抜き」作業をしていた。地震後、お互いに声をかけあって、軽トラックの荷台に乗りあうなどして、高台や避難場所である漁村センターに移動した。

- ・海の仕事は昼には終わっているため海や浜に出ている人も少なく、迅速に避難は完了した。
- ・昭和8年の津波後にできた個人宅3軒を「復興地」と呼んでいる。この向かい側には昔の消防屯所があり、ここまで逃げれば安全だろうという意識があった。避難の際にも、造成地より上へ避難すれば安全であるという認識があった。
- ・家の周辺の細い通路や田畑等を通して、迅速に高台へ避難した。
- ・年に1回の訓練時には、浜の仕事を休みにし、住民全員で避難訓練を実施しているが、その通りに今回も避難を行っている。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・高齢で体の不自由な方が流された。

第2項 本郷地区（本郷・大曾根・桜峠）

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・3月3日の避難訓練に参加していた。自主防災組織は設置されていないが、町内会がその役割を果たしていた。津波災害に対する地域の意識は比較的高かった。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・各自、大きな地震が起こったら、すぐに高台に逃げるという意識は高かった。
- ・災害物資の備えはなかったが、震災後にいち早く炊き出しを行った。婦人会がガス釜で米を炊いたり、各自物資や食料を持ち寄り、被災者同士で分けあった。
- ・ラジオの感度も悪い地域だから自分の命を守るのは、自分しかないと思っている。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・消防団は、津波が来襲を叫び、消防車でサイレンを鳴らして避難を呼び

かけた。その避難の指示を聞いて、すぐに避難を開始し助かった事例があった。

- ・住民の多くが家の外に出て、高齢者等に大声で避難を呼びかけた。
- ・「3 mの津波がある」という放送を聞いて、家は高台なので安心していましたがそれでも近くの山に避難した。
- ・地鳴りに始まった大地震で「必ず今まで想像もつかない津波が襲ってくる」と感じすぐに避難を開始した。津波の様子から、身の危険を感じて20m以上高台の大杉神社へ走って逃げた。
- ・海の動きに異変を感じ「大津波が来るのでは」と予感して避難所へ急いだが、消防団からすぐ近くまで津波が来たことを大声で知らされ、再び高台へ移動した。
- ・防潮堤を超える波を見て、さらに高い所に上がった。
- ・一度避難していたが、大切な物を取りに家に戻った。その時「津波が来たぞー！」と大きな声が聞こえ、何も持たずにただ夢中で逃げた。

○ 防災行政無線・情報について

- ・無線は聞こえたが、内容を確認できなかった。パニック状態にあった。
- ・避難の最中にラジオでは「津波は3 m」と言っていた。少し経って「6 m以上」になったので、「防波堤を越えて来るぞ」と思い、さらに高い所に避難した。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・水門(2箇所)は、消防団員が通常どおり閉鎖した。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・多くの住民が地震直後に迅速に避難した。特に昭和の津波後、高台に整備された造成地より下の住民は、指定避難場所等に比較的早く、車や徒歩で避難した。海側の地区では高台等に車、徒歩で避難した。
- ・地震の時にはわかめ漁のため浜に出ている人も多かったが、迅速に避難は完了した。

○ 救助の状況

- ・津波で足をすくわれ、溺れていた方を泳いで助けた方がいた。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・車で海側へ向かった方を、周りの住民が呼び止めたが、引き返さずに流された。
- ・船を見に行って、被災した事例があった。

第3項 小白浜地区

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・平成17年10月に、自主防災組織を設立した。3月3日の避難訓練に参加するほか、特に取り組んでいることはなかった。海側の地区では避難訓練への積極的な参加が見られたが、高台の地域では避難訓練の参加者は少なかった。
- ・第1波で自分の家まで津波が来ていないのが分かっていたとしても、第2波第3波で時間があつたとしても何かを取りに行かないと、小白浜の方たちは分かっていたので、人的被害が意外と小さかった理由だと思う。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・町内でハンドマイクや毛布等を備えていたが、震災時に取り出す余裕がなかった。食料の備蓄等はなかった。
- ・東日本大震災がたまたま日中であつたからよかったものの、夜間でもすぐに避難して被害を最小限にできるように、就寝時には枕元に鞆や着替えを置いておくといった習慣を身につける必要がある。
- ・もし漁船で出ている時に地震があつたら、船を着けることができる所にすぐに着けて、高い所に上がるように決めておくといった、漁協での制度やルールを構築する。
- ・若い方が「津波が来たぞ」というのを聞いてパニックになってしまい、わざわざ低い所を通過して、余り安全ではない所に行ってしまった。近くには高い所があるのに、避難訓練では低い所を通過して唐丹中学校（避難場所）を目指していたが、自分がその時のいる場所に合った避難場所をふだんから考えておくべきだと思った。
- ・小白浜の場合は消防団に入団する者はなく、退団したくてもできない。

親が消防団員だと子どもも入団するけど、親も団員でなかった者はこの言葉でひまだれだと言って、入団する者はない。今度のような津波は1,000年に一度とか言うけど、これからは大変だと思う。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・海側の住民は高齢者の避難を誘導しながら、ともに高台を目指して避難した。
- ・国道や路上で海を見ている方がいたので、住民が上へ逃げるように呼びかけた。
- ・消防団の呼びかけで、唐丹中学校の生徒・先生が高台にある紡錘工場（旧ラリーバ）へ移動した。
- ・地震の大きさと長さから「津波が絶対にくる」と思い、家の周りの異常の確認後、すぐに近くの高台へ避難した。その後、津波が防潮堤を超えて来た（12m50cm）ので、更に高い国道45号まで駆け上がった。
- ・揺れの強さ、時間の長さから「もしかしたら津波がくるかもしれない」と思いながらも「まさかここまでは来ないだろう」と落下物の片付けをしていた。堤防があぶない、波を被りそうだ！！と叫ぶ声を聞き外に出て近所の12～13人と一緒に海を見ていた。波の状況から「ここも危ない、逃げろ！」と皆逃げたが足が悪いこともあり逃げ遅れ、波にのまれて流されたが、板等に挟まりながらなんとか土手から路上に這い上がった。
- ・いままで経験したことがない大きな揺れから「今度こそ本当に津波がくる」と思った。第一波で家が流されるのを見て、更に高い所へ避難した。
- ・家屋の倒壊は心配したが、津波のことは頭になく倒れた棚等を皆で片付けたりしていた。近所の人々が避難しているのを見て、とりあえずのつもりで全員で避難した。（大町の会社にて）
- ・水産加工会社で、海が目の前なのでとにかく高台に避難した。何度か車を取りに戻ろうかと思ったが工場長に止められて戻らなかったのも、いま生きていると思っている。
- ・私の家は旧45号線沿いにあり、自分では高台の方と思っていたので、「津波が来てもここまでは」との思いがあった。間もなく、防災無線で3mの大津波警報が発令されたが、「12mの防潮堤があるから大丈夫」

と思い、家の片付けをしていたところ海鳴りと同時に水が入って来たので、高台に逃げた。

- ・ 自宅は昭和 8 年の復興地であり、12.5m の高い防潮堤もあるので心配はないと、自宅にいたが、近くの工場の従業員が上に上がってきて「早くあがれ」と声をかけられ、急いで避難
- ・ 下校途中に地震にあい、近くにいた先輩の指示で中学校に戻る。間もなく市職員が中学校に来て「大津波が防潮堤を越えた」ことを告げられ、すぐに中学校裏の国道へ避難した。

○ 防災行政無線・情報について

- ・ 防災無線では大津波警報の放送しか聞こえなかった。
- ・ 防潮堤が高いため、海の様子が見えない分、不安を感じる住民もいた。
- ・ 防潮堤だけでなく、防災放送で流れてきた「予想津波高“3 m”」も併せて過信して安心してしまった。
- ・ 釜石の放送は、大津波と言わずに 3 m と言ったので油断したのではないかと。
- ・ 津波警報では 3 m と言ったので、小白浜の防潮堤は 12m なので、その場所に行き、海の様子を眺めていた。（消防団員なので）

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・ 水門が 4 か所あり、中央の水門については地域の企業の社員が手動で閉鎖していたが、その他は消防団が通常どおり閉鎖した。その後、消防団が防潮堤の上で海の様子を見ていた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・ 「敷地通り」より上の住民の多くは、高台のため避難せず、自宅で様子を見ていた。
- ・ 海岸付近の水産加工場にいた住民・従業員は防潮堤に上がり、海の様子を見ていた。一次避難として防潮堤に上ることは、地域で習慣化していた。その後、海の様子を見ながら更に高台へと避難した。
- ・ 3 m という波高の情報を信じ、12.5m ある防潮堤は安全だと思い、そこへ避難した方が多くいた。
- ・ 自宅は、昭和 8 年の三陸大津波の後、復興地として高台に建てられた小

白浜商店街のほぼ中央に位置していた。高い所に住んでいるという安易な考えから、「まさかここまでは津波が来ないだろう」と自分勝手に決めこんでいたが、自宅1階は浸水した。

- ・まさか津波がここまでくるとは思わずに、高台で津波を見ていた。その後津波が防潮堤を越えてくるのをみて、皆が「逃げろ」となり走ったが、パニックになっていたためかお寺の山間に逃げる人に付いて行ってしまい、おかげで津波にのまれた。（15 人くらい波にのまれたが全員助かった）

○ 救助の状況

- ・泥水とガレキの中に人が流されてきたのが見えたので、「誰か流されて来たよ」と騒いだら、一緒に津波を見ていた近所の男の人たちが助けに行って、危機一髪で救助できた。
- ・車に乗って様子を見ていたら、既に車の下まで波が来ていて、孫と2人で膝まで濡らしながら、近所の人に裏の道路に引き上げてもらった。自宅は中学校の下で商店をしていて、「ここまでは絶対来ない」と変な自信があったし、家からは海が見えないので、避難するのが遅れた。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・一部の高齢者は、避難せずに自宅にいたため、津波に流された。

○ その他

- ・神社に使い古しのローソクが 20 本ほどあり、社会福祉法人へ提供した。また、社会福祉法人から毛布を提供してもらうなど、事業所との緊密な連携ができた。

第4項 片岸地区

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・自主防災組織は設置していなかった。市の実施による避難訓練以外の取り組みはなかった。
- ・地震がきたら近くの高台に逃げるという暗黙の了解があり、各自徹底し

ていた。

- ・国道より海側では避難道路を独自に市に要望するなど避難意識は高かった。内陸側でも昭和三陸津波の痕跡や浸水実績などを町内会で地域住民からの聞き取りを行い、冊子配布などをおこない、津波避難に備えており、全体として避難意識が高かった。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・唐丹小学校の隣には堤防があったので、「越えても床下数十 cm のことだろう」と思っていたら、そのままの勢いで校舎に襲いかかり、とても驚いた。
- ・幼少時、枕元に風呂敷に衣服を畳んだものを置いて就寝していた。地震が来たら、すぐさま戸を開けていた。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・率先して避難を呼びかける方がいた。消防団では、企業の社員に避難を呼びかけた。
- ・最初、唐丹小の児童・先生は校庭にいた。消防団の呼びかけにより避難先に組織的に移動した。
- ・川目地区では近所の住民に声がけし、安全な場所に誘導する方がいた。
- ・自宅前の片岸川が茶色に濁っているのを目にして「絶対、津波がくる」と思い避難

○ 防災行政無線・情報について

- ・震災時、3 m という大津波警報の情報は聞こえたが、その後は記憶がない。パニック状態になっていた。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・地震後、消防団員が手動で水門を閉鎖し、水門の上から海の様子を見ていた。危険を感じたため、国道から駅の方へと避難した。

○ 当時の状況（目視の範囲）

- ・津波は最初、引き波から始まった。海の底が見え、身の危険を感じた。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・ 唐丹駅前広場は高台となっており、海の様子も確認できるため、当初、多くの住民が集まった。更に浸水する危険を感じて、高台に避難した。
- ・ 海沿いの危険な場所を通して指定避難場所に行くより、一旦近くの高台に逃げる必要があるとの認識が地域全体にあった。
- ・ 山側の川目地区は、水害が多発し、河川の水が氾濫するなど、生活道路も不通となることがある。
- ・ ふだんから警報が出ると、避難先である片川集会所へ避難することが、習慣化されていた。このことが、今回の災害においても迅速な避難を促した。
- ・ 震災の１～２年ほど前に、天照御祖神社への避難路を整備したのが功を奏した。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・ 一旦避難所へ逃げたが、ペットが心配になり自宅に戻り犠牲になった。
- ・ 店の従業員と客が犠牲になった。
- ・ 駅前の広場付近で５名の高齢者が避難の途中で間にあわず犠牲になった。
- ・ 市内から自宅に車で戻る途中、流された。
- ・ 地域外から転居してきたため、津波に対する知識が欠如していたことも考えられる。

○ その他

- ・ 町内会として備蓄している防災物品はなかったが、水やジュースが倉庫に何個かあり、配給することができた。

第５項 荒川地区（荒川・下荒川）

<震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他>

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・ 町内会では、自主的に各自宅近くの高台の避難場所８か所を決め、市の指定避難場所から遠い地域の住民でも避難できるようにし、平成 22 年 2 月の町内会総会等で周知を図った。

- ・平成22年3月と翌23年3月に実施した避難訓練では、各避難場所に責任者を配置するという取り組みも行った。その結果、避難者数が2倍以上に増えた。
- ・自主防災組織を平成9年2月に設置した。テント、毛布、小型発電機等の防災機資材を備え付けていた。
- ・従来から災害時にはおにぎりなどの炊き出しを行っていた。自主防災部会に給食給水班を設けていた。
- ・荒川では、東日本大震災の2年前までは2箇所の指定避難場所が設けられていたが、多くの住民にとって遠い場所だったので、東日本大震災の2年前に自治会独自に決めて避難場所を11箇所に増やした。その結果、避難訓練の参加者が倍増したという効果もあった。
- ・避難訓練では、市で指定されている場所だけではないので、自治会が各避難場所に張り付いて参加者を把握していた。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・毛布等の備蓄があったことや、おにぎりの炊き出しなど緊急の対応が出来た。
- ・備え付けの発電機は使用訓練をしていなかったため初期で使用できなかった。
- ・荒川水門が未完成のため、波の襲来が速かった。
- ・被害が甚大で広い地域内での情報伝達が困難であり、活動も制限された。
- ・明治の津波で津波に流されていない場所に家が建っていたので、こんな大津波が来るとは余り思っていませんでした。

<震災時の地域の動きと避難行動>

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・消防団では水門閉鎖後、海の様子を見ていたが、津波を確認し、住民に避難を呼びかけながら、消防屯所まで避難した。
- ・住民同士が自主的に近所に避難を呼びかけ、一部の要介護者の避難については車を利用したり、背負ったりするなどの支援をした。

○ 防災行政無線・情報について

- ・防災無線は聞こえたが、放送内容から避難の緊急性、必要性を感じなか

った。

- ・荒川の範囲が広いため、全ての地域には聞こえなかった。
- ・自宅前に海拔 18mの標識があるが、3 mや6 mの警報と聞いていたら、ここまで津波なんて来るはずないと思ってしまう。情報に流されてしまう。

○ 水門・陸閘の閉鎖

- ・消防団が水門を閉鎖した。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・指定避難場所に避難する経路が低地で、住居が危険である場合には、各自宅近くの高台に避難した。背後地が山であるため、地形的に高台への避難が容易であった。
- ・一旦各自で高台に集まり、それから町内会長、消防、民生委員等の誘導で荒川集会所へ移動した。
- ・国道・県道等の主要道路が被災を免れたため、高台へ車で移動する方が多かった。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・避難を呼びかけたが、避難しなかった。
- ・浸水域にある自宅に戻った。
- ・避難場所が浸水した。

第6項 大石地区（大石・向・屋形）

＜震災以前の備え・備えとして必要なこと・その他＞

○ 自主防災組織の設置状況・地域の取り組み・訓練の実施状況

- ・3月3日の避難訓練では消防、町内会を中心に参加を呼びかけ、多くの住民が参加していた。
- ・普段から雪かきなども地区の全世帯が一斉に取り組むなど、地区の結束が固い。

○ これまでの備え・よかった点・課題等

- ・ 備蓄していたものは特になかった。
- ・ 大きな地震が来れば津波が襲来するという認識はあった。

＜震災時の地域の動きと避難行動＞

○ 避難のきっかけ・避難誘導

- ・ 多くの住民が互いに協力しあい、体が不自由な方を車で高台に移動した。車椅子のまま避難したり、あるいは背負って避難した。
- ・ 地震後、消防団員は消防車を林業センター付近に下ろして、海の様子を見ていた。その後、高台にある消防屯所まで移動した。

○ 防災行政無線・情報について

- ・ 予想される津波の高さが3 mであるという情報で安心してしまい、あらかじめ甚大な被害を予想できなかった。無線は途中で聞こえなくなった。
- ・ 「ただごとではない」と直感した直後にラジオから、大津波警報が出た。岩手県は3 m以上、宮城県は6 m以上でした。釜石市の防災無線も「岩手県は3 m以上の大津波が来るので避難するように」との放送だった。3 m以上の津波と聞いて、一時安心したのは確かだ。その後、その放送を信じて行動した。水位がぐんぐん上がり海岸の倉庫が水没、家に戻り妻を乗せて車を発進したときに店のサッシが壊れる音を耳にした。あの時、なぜ中央からの正確な震度と、大きく訂正された10m以上の津波が来ると放送されなかったのか、悔しく感じてならない。今、家を流されて、仮設に入っているのは、放送を信じて行動をとった自分の浅はかな態度を反省している。

○ 主な避難行動の状況（特徴的な事項）

- ・ 震災時、漁が休みであったため、海に出て作業している住民はいなかった。漁港では、若布の刈取・ボイル作業を行っており、一部の住民は海の近くにいた。
- ・ 地域の住家は、海に向かった傾斜地に段々の石垣の上に築かれており、地形上、津波が平地のように急激に襲ってくる状況にはなかった。海の様子を確認しながら避難した。
- ・ 体が不自由な方で家族と同居していた方がいたが、まさかここまで津波

は来ないだろうとの思い込みがあり、避難しなかった。津波が襲来する直前、住民が危機一髪、車で救護した。

- ・ 高台に駐車場や空地があり、住民の多くは車で避難した。
- ・ 年に一回の訓練時には、浜の仕事を休みにし、住民全員で避難訓練を実施しているが、その通りに今回も避難を行っている。
- ・ 引き潮がないこと・明治の津波では自分の家まで到達しなかったことに油断をし、10 数分は自宅にいた（その後、避難誘導等）。

○ 亡くなった方・行方不明となっている方について

- ・ 犠牲者なし

第5章 地域の伝承・震災時の動き等に関するとりまとめ

地域の伝承、震災時の動き等について、震災関連資料を基に次の項目により、各地域に整理・分類した。

1 被災状況

- 各地域の震災前の人口・世帯数、犠牲者数、全壊・半壊家屋数を掲載した。
- ① 「震災前の人口及び世帯数」は、平成23年2月末現在の釜石市住民基本台帳による。
- ② 「犠牲者数」は、平成25年1月22日現在、釜石市内で遺体が収容された死亡者数並びに行方不明者で震災時の住民基本台帳の現住所の区分による。
- ③ 「全壊」は、平成25年1月1日現在、税務課で実施した家屋損壊調査（津波被災分）（以下「家屋損壊調査」という。）のうち、住家（専用住宅、併用住宅及び共同住宅）及び非住家（専用の事務所及び店舗）の合計数である。
- ④ 「半壊」は、家屋損壊調査のうち、大規模半壊を含む住家及び非住家の合計数である。

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

- 各地域に所在する津波記念碑について、国土交通省「津波被害・津波石碑情報アーカイブ」から引用して掲載した。
(<http://www.thr.mlit.go.jp/bumon/b00045/road/sekihiyouhou/index.html>)
- ① ただし、上記サイト上では碑文等の表記に実際とは異なる記述が少なからず見られたため、主なものについて修正を行ったが、画像については誤りも含めそのままの形で使用した。修正には『釜石の石碑』等を参考にした。

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 各地域の津波に関する地域の伝承等を掲載した。
- ① 震災関連資料のうち、検証報告書（平成23年度版）及び検証報告書【津波避難行動編】からの引用箇所については、文献名・引用元の記載を省略した。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

- 市地域防災計画に掲載された、各地域の一次避難場所（火災のみは除く）、拠点避難所、避難者収容施設及び各対象地域について、掲載した。

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

- 各地域の自主防災組織の設置状況、組織概要等を掲載した。

イ) 避難訓練

- 震災直前、市が実施した避難訓練（平成 23 年 3 月 3 日）について、各地域の参加者数・参加率を掲載した。

(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと

- 各地域の高齢者福祉施設等及び公共施設について、各施設の避難訓練の実施計画、避難方法及び連絡体制等を掲載した。

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個人・家族等）の行動

- 各地域の住民の避難行動については、検証報告書【津波避難行動編】及び第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

- 各地域の消防団、自主防災組織の震災当日及び〈12 日以降〉の主な動きを掲載した。

(3) 施設・団体等の行動

- 各地域の高齢者福祉施設等及び公共施設について、各施設の震災当日及び〈12 日以降〉の主な動きを掲載した。

第 1 節 東部地区

第 1 項 沿岸地区(新浜町、東前町、魚河岸、浜町)

1 被災状況

表 5-1 沿岸地区（新浜町、東前町、魚河岸、浜町）の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
新浜町	205 人	103 世帯	14 人	全壊 72 件	半壊 21 件
東前町	394 人	187 世帯	15 人	全壊 116 件	半壊 20 件
魚河岸	1 人	1 世帯	0 人	全壊 2 件	半壊 7 件
浜町	940 人	447 世帯	38 人	全壊 211 件	半壊 44 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

沿岸地区(新浜町、東前町、魚河岸、浜町)において、津波記念碑に類するものの存在は現在のところ確認できていない。

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 「津波が来たら高台に逃げる」「家も浜は高台へ建てろ」と昔の人はよく言っていました。(新浜町) (3.11 その時、わたしは 第三集)
- うちの両親から、常日頃から「津波が来る」という言葉があったので、避難するときに、すぐ持てる状態で物があつたのがよかったのかなと。
(浜町) (東日本大震災アーカイブス 明日へ～支えあおう～)
- 昭和三陸津波の跡が土壁にあつたのを小さい頃から見ていたり、父や祖父母から津波のことを聞いていたりしていた。昨今は家族の形態が変

わってきているので、そういったやりとりが難しい。（東前町）

- 小さい頃から両親に「地震が来たらすぐ津波が来るから、高い所、高い所へと逃げろ。忘れ物があっても絶対に取りに戻るな！」と教えられていたから、その様にした。（東前町）
- 祖父、父から、幼少時から津波に対する準備、行動を具体的に教え込まれ、地震発生の度に準備、避難をしていました。（浜町）
- 昔から「このあたりには津波は来ない」との話を聞かされていたので、その話を信じていました。（浜町）
- 津波の意識が薄かったのは、親からの津波の話も少なかったから。（浜町）
- 海岸部に住んでいた方の中には、明治、昭和の津波被害を受けて、比較的高台の尾崎町に移り住む方がいた。このような方は、津波に対する危機意識を常に持っていた。しかし、時間の経過とともに、再び下の海岸部に移住した方もいた。（尾崎町）
- 過去の津波では、引き波時にアワビを獲ったと聞いていた。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、沿岸地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-2 沿岸地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
岬林道	新浜町 1 丁目・2 丁目の一部 東前町の一部
滝の沢高台	
東前樋ヶ沢	東前町の一部
東前不動沢	
佐々木家稻荷神社沢	
はまっこ児童公園	東前町の一部、魚河岸 浜町 1 丁目・2 丁目 浜町 3 丁目の一部
尾崎アスレチック公園	
尾崎神社境内	

一次避難場所	対象地域
浜町避難道路⇒ア) 浜町東側口、 イ) 西園タクシー口、ウ) 天王山口、 エ) 市役所東側高架橋口	浜町1丁目・2丁目 浜町3丁目の一部 只越町1丁目・2丁目 只越町3丁目の一部 港町1丁目・2丁目
市営釜石ビル（津波避難ビル）	
旧釜石小学校校庭	浜町1丁目・2丁目 浜町3丁目の一部 只越町1丁目・2丁目 只越町3丁目の一部
旧釜石第一中学校校庭	
仙寿院境内	
寶樹寺境内	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-3 沿岸地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
釜石市民文化会館	大渡町・駒木町・鈴子町・大町・大只越町・只越町・天神町・港町・浜町・東前町・新浜町
釜石市保健福祉センター	
釜石小学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される隣接する地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-4 沿岸地区に隣接する地区の避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数	電話
第一幼稚園（天神町）	3 階	80 人	22-4109
寶樹寺（天神町）	1 階	70 人	22-3295

※沿岸地区内には、避難者収容施設は所在していない。

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

東部地区沿岸地区における自主防災組織は、

- ① 新浜町婦人消防クラブ（昭和 63 年 11 月 26 日設立）
- ② 東前町内会自主防災会（平成 8 年 10 月 30 日設立）
- ③ 浜町 3 丁目連合会自主防災会（平成 19 年 11 月 15 日設立）
- ④ 浜町 1 丁目町内会自主防災会（平成 21 年 5 月 27 日設立）
- ⑤ 尾崎町町内会自主防災会（平成 24 年 12 月 10 日設立 ※震災後の設立）

があった。

各防災会の特徴・活動状況は、次のとおりとなっている。

① 新浜町婦人消防クラブ

- 新浜町婦人消防クラブは、昭和 63 年 11 月 26 日に設立され、新浜町 1、2 丁目を活動地域とした女性による組織である。毎年 3 月 3 日に行われる市の避難訓練に参加していたが、それ以外に独自の活動をしていたわけではなかった。
- 震災前に、地域の避難道路の通行状況の調査を行っている。独自に緊急一時避難場所を確保するための交渉等を行ったりもしていた。
- 平成 22 年 12 月には、地域の災害時要援護者を把握する調査を実施し、各家庭の家族構成の把握や要介護者に関するアンケート調査を行った。

② 東前町内会自主防災会

- 東前町内会自主防災会は、平成 8 年 10 月 30 日に設立され、東前町内会加入世帯によって構成された。組織編成は町内会長以下、防災部長、防災副部長、防災委員の役員がおり、情報班、消火班、避難

誘導班、救出救護班、食料班があり役割分担が決まっていた。

- 「東前町内会自主防災部会規約」によると、
 - ・ 防災に関する知識の普及に関すること
 - ・ 地震等に対する災害予防に関すること
 - ・ 地震等の発生時における情報の収集伝達、初期消火、救出救援、避難誘導等応急対策に関すること
 - ・ 防災資機材等の備蓄に関すること
 - ・ 防災部会の目的を達成するために必要な事項が実施事業として定められていた。
- 平成 9 年度に補助金で資機材を購入しており、内容は次のとおりである。消火器、FRP 消火器格納箱、災害多人数用救急箱、ワンタッチ担架、サイレン付メガホン、組立式テント、折畳式リヤカー、発電機、ガソリン携行缶、コードリール、ハンディライト、訓練用消火器。
- （参考）震災後だが、平成 24 年度にも補助金でトランシーバー、アルカリ単 3 乾電池、雪ハネスコップを購入した。

③ 浜町 3 丁目連合会自主防災会

- 浜町 3 丁目連合会自主防災会は、平成 19 年 11 月 15 日に設立され、活動地域は浜町 3 丁目、浜町 3 丁目連合町内会にある世帯と会の目的に賛同するものをもって構成されている。事務所は浜町集会所で、役員は会長、副会長、部長（情報部長、避難誘導部長及び救出救護部長）、監事が置かれ、会長は浜町連合会会長が担当し、部長は各防災部の長として部の運営に当たることとなっていた。
- 「浜町 3 丁目連合町内会自主防災会規約（案）」によると、
 - ・ 防災活動の普及活動
 - ・ 地震等による被害を防ぐための活動
 - ・ 地震等の発生時における情報収集・伝達、避難誘導、救出救護、給食給水等の活動
 - ・ 前号に関する訓練
 - ・ 防災資機材等の整備
 - ・ その他本会の目的を達成するために必要な事項

が実施事業として定められていた。

④ 浜町 1 丁目町内会自主防災会

- 浜町 1 丁目町内会自主防災会は、浜町 1 丁目を活動地域とし平成 21 年 5 月 27 日に設立した。組織内では役割分担や避難支援体制（高齢者等）などの準備をしていた。
- 平成 21 年度に補助金により資機材（倉庫、粉末消火器、救急箱、メガホン、アルカリ単 2 電池）を購入している。

⑤ <参考>尾崎町町内会自主防災会 （震災後に設立）

- 尾崎町町内会自主防災会は、震災後の平成 24 年 12 月 10 日の設立で、浜町 2 丁目（台村地区）を活動地域としている。
- 「尾崎町町内会自主防災会規約」によると、
 - ・防災に関する普及・啓発
 - ・地震・津波等に対する災害予防に資するための地域の災害危険の把握
 - ・防災訓練の実施
 - ・地震・津波等の発生時における情報の収集・伝達及び出火防止・初期消火・避難、救出・救護、給食・給水等応急対策
 - ・防災資機材の整備
 - ・他組織との連携
 - ・その他防災会の目的を達成するために必要な事項が、実施事業として定められている。
- 平成 22 年 12 月には、地域の災害時要援護者を把握する調査を実施し、各家庭の家族構成の把握や要介護者に関するアンケート調査を行った。

地域内には指定津波避難場所のはまっこ（台村）児童公園がある。

イ) 避難訓練

表 5-5 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
66 人（11%）	対象地区：新浜町・東前町 ／合算人口：599 人
149 人（7%）	対象地区：浜町・魚河岸・只越町・港町・東前町 ／合算人口：2,168 人

(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと

ア) 「釜石市戦災資料館」

避難場所は把握しており、釜石市教育センター又は浜町避難道路となっていた。

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第 1 分団第 1 部

- 屯所に 5 名集合し 3 名がポンプに乗り水門閉鎖に出動、約 10 分後屯所到着。残り 2 名と住民の避難誘導に参加したあと、自分がポンプを高台に移動する途中、後方から津波が襲来。前方は渋滞していたため、ポンプを乗り捨て走って高台に逃げる。
- 夕方になり津波が落ち着き、辺りを警戒中、暗闇の中から「助けて」と声がし、見ると屋上から手を振る老人。周りが水だらけでどうする

こともできない自分に無力感を感じた。

<12 日以降>

- 翌日から 1 部管轄の住民のために食料調達。山道を 1 日 2 往復歩き、陸に乗り上げた大型タンカーの底を匍匐前進して物資を運んだりした。また、沢水を調達するため、がれきで遮断された道路を住民とともに車 3 台移動したりして、軽トラック 1 台通る道を作った。数週間物資を使い、自炊できない住民のために公園で炊き出しをした。

イ) 消防団第 1 分団第 2 部

- 地震後屯所に向かい、団員 2 名とポンプ車で海岸の門扉の閉鎖確認、住民への避難の呼びかけを行う。屯所の前にポンプ車を止め避難誘導をしていた。
- 屯所は完全に浸水しポンプ車も流された。避難場所はがれきで孤立し、市中心部への道は寸断された。
- 近所の料亭幸楼が、避難所ではなかったが避難者の受け入れをしてくれた。(一時 300 名位)
- 屯所が被災したため幸楼下の S さんの駐車場を借り、拠点を設け、2 ヶ月間人命救助、自衛隊・警察官の搬送してきた遺体確認、避難所の運営、炊き出し、給水、物資の調達等を行った。夜はポンプ車の中で仮眠した。(4 日間ポンプ車)

<12 日以降>

- 12 日。海水をかぶったお年寄りが家の中にいるので救助してほしいとのことで、山を越え幸楼まで搬送した。(後日死亡した)
- 12 日から避難所運営、炊き出し、物資輸送。電気・水・ガスはなく支援物資もまだ届かないため、食材は各家庭からもらい、沢水を使い火はドラム缶で用意し、炊き出しを始めた。
- 13 日頃から物資の拠点となった旧一中へ山道を通っていった。

ウ) 消防団第 1 分団本部

- 地震後、すぐに津波が来ると思い、水門閉鎖活動にむかった。2 箇所の水門閉鎖をし、それから残り 1 箇所を閉鎖する時、海岸から避難

する車が何台もあり、なかなか閉鎖するのに時間がかかった。水門閉鎖完了後、近所の住民たちに早く台村公園に避難するよう声がけ誘導した。その後消防団員 1 名に全部の水門閉鎖確認を命じ、戻ってくる間に津波が押し寄せ、ぎりぎりのところで団員が無事帰ってきた。

- 津波襲来後、高台に避難している住民たちを夕方「幸楼」に行くよう誘導し、私たち消防団は「台村公園清友会館」を借り、明日からの活動内容を話し合い、翌日から地域住民の食料・物資調達（山越え）、道路のがれき撤去、安否確認、急病人の搬送などを行った。

エ）新浜町婦人消防クラブ

- 平成 26 年 7 月に行われた自主防災会連絡協議会総会では次のような証言が出ている。
 - ・ 3.11 の時は、1 丁目全部流され、若い方々が避難道路に上がろうとして流されてしまった。滝ノ沢でもアパート等が流され、死者が出ている。
 - ・ 婦人消防では自主的に集まって食料を持ち寄り、炊き出しをした。
 - ・ 孤立し、防災無線も何も聞こえず、町の情報が一切分からなかった。
- 釜石市自主防災会連絡協議会による「東日本大震災影響調査アンケート」には、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。
 - ・ 孤立した。
 - ・ 避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、行方不明者や遺体の搜索、道路復旧作業、がれきの撤去、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、名簿作成
 - ・ 避難所運営サポート、被災者の自宅等への受入れ（受入れ 5 軒、20 人）、洗濯等の生活支援、高齢者の介護等

オ）東前町内会自主防災会

- 平成 25 年のアンケート調査では、東前町内会自主防災会が行ったこととして次の回答があった。
 - ・ ①生存者確認。②衣服の提供。③被災者を、被害を受けない民家に

分散。受け入れた家庭が被災者の面倒をみる。地域が協力して乗り切った。

○ 釜石市自主防災会連絡協議会のアンケート調査によると、次の記述がある。

- ・消防団の方々の活動により孤立化はなかった。
- ・避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、けが人の救出や手当、道路復旧作業、がれきの撤去、救援物資の配布、地域内パトロール、名簿作成。前事務局により新たな名簿作りが行われた。
- ・避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し、被災者の自宅等への受入れ（以前に調査が行われ、市に提出致して居ります）、洗濯等の生活支援、高齢者の介護等、その他（不動沢地区から飲料水の供給）

力）浜町3丁目連合会自主防災会

○ 「近隣の町内からも高齢者の方々が避難してきた。幸楼という避難所にかかなりの数が避難した。200人くらいしか入れないところに400人近くが入り、2次災害の恐れを感じた。」

○ 釜石市自主防災会連絡協議会のアンケート調査によると、次の記述がある。

- ・孤立した。
- ・食料の持ち寄り・炊き出し、けが人の救出や手当、行方不明者や遺体の搜索、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、名簿作成、その他（民間・料亭、神社等から多大な支援をいただいた。）
- ・避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し、被災者の自宅等への受入れ（受入れ個人宅10軒、30人）、ボランティア活動への参加、洗濯等の生活支援、高齢者の介護等、その他（情報の提供・伝達）
- ・自主的な民間の協力（危険が伴ったが）。集会所が活用できたこと（2箇所 海の伝承館 浜町集会所）。放送施設が応急修理されたこと

キ) 浜町1丁目町内会自主防災会

- 水門の閉鎖
- 釜石市自主防災会連絡協議会による「東日本大震災影響調査アンケート」には、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。
 - ・孤立した。
 - ・食料の持ち寄り・炊き出し、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、名簿作成
 - ・避難所運営サポート

(3) 施設・団体等の避難行動

ア) 釜石市戦災資料館

- 当日は管理責任者はおらず、一般職員（臨時職員などを含む）2名が在所していた。地震発生時は来場者は0名で、職員（臨時職員1名）は隣室にいたゲートボールのお年寄り10名ほどを避難道路に避難誘導した。そこから戻ってくると近所の方20名余りがいたので、時間的に余裕が無かったためビルの4階に案内した。
- 津波襲来の直前に職員2名は車で教育センターへと向かった。

第2項 市街地区(港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町)

1 被災状況

表 5-6 市街地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
港町	129 人	57 世帯	6 人	全壊 78 件	半壊 17 件
只越町	704 人	341 世帯	47 人	全壊 272 件	半壊 48 件
天神町	258 人	119 世帯	3 人	全壊 8 件	半壊 21 件
大只越町	825 人	388 世帯	0 人	全壊 3 件	半壊 26 件
大町	574 人	287 世帯	20 人	全壊 146 件	半壊 98 件
大渡町	594 人	282 世帯	12 人	全壊 86 件	半壊 101 件
鈴子町	92 人	52 世帯	0 人	全壊 1 件	半壊 11 件
駒木町	123 人	61 世帯	2 人	全壊 0 件	半壊 6 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

津波記念碑は、東部地区の市街地区では大只越町にある石應禅寺の境内に 6 基の石碑があり（ア）～カ））、港町に 1 基ある。（キ））

大只越町の 6 基の石碑は全て石應禅寺境内にあり、標高 6 m の位置にある。明治、昭和の津波と東日本大震災の浸水線外とされている。

平成 25 年度に釜石市により東日本大震災の津波浸水域に設置されていた石碑の状況調査が行われているが、石應禅寺境内の石碑は対象から外れており調査は行われていない。

ア) 「三陸大海嘯溺死者弔祭之碑」

明治津波の犠牲となった田中製鉄所の職員や工夫、家族の冥福を祈るために、明治 30 年 3 月に建立され、施主は田中製鉄所店員一同である。慰霊型に分類されている。

表面には漢文で図 5-1 のように刻まれている。(画像ママ)

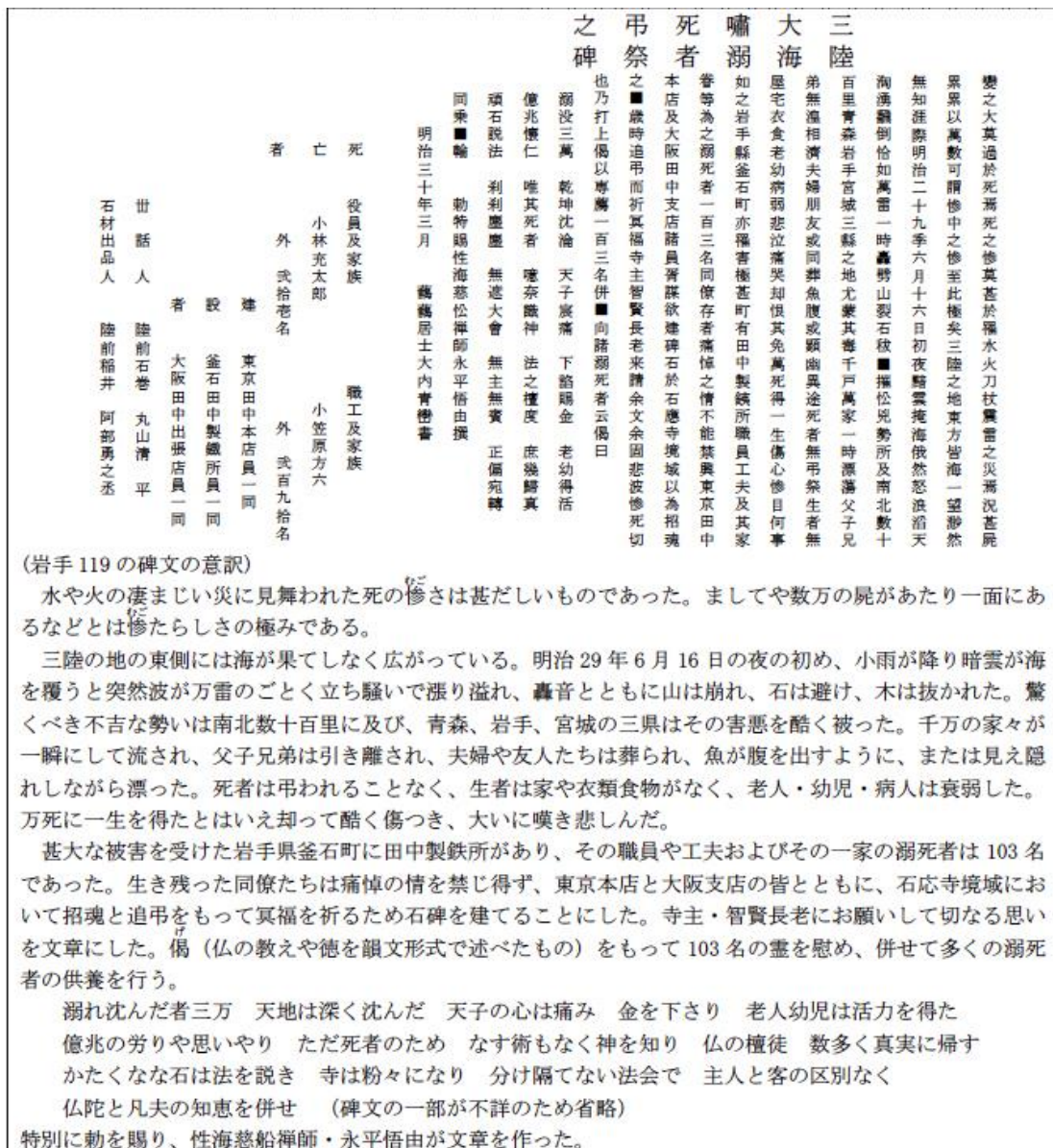


図 5-1 三陸大海嘯溺死者弔祭之碑・石碑に刻まれた内容

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

図 5-1 の碑文の意訳についてであるが、最後の部分の「特別に勅を賜り」の訳は、その部分の碑文が禅師の称号（性海慈船禅師という号を勅特賜された意味の永平寺 64 世悟由の号が「勅特賜性海慈船禅師」）であり、この訳は誤りと思われる。



図 5-2 三陸大海嘯溺死者弔祭之碑

（出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ）

イ）「海嘯記念碑」

明治津波から 7 周年の明治 35 年 6 月に建立され、施主は釜石町である。明治津波の被害状況と釜石町収入役や議院等の犠牲者が出たことを記しており、慰霊型と分類されている。碑文は、図 5-3 のように漢文で刻まれている。

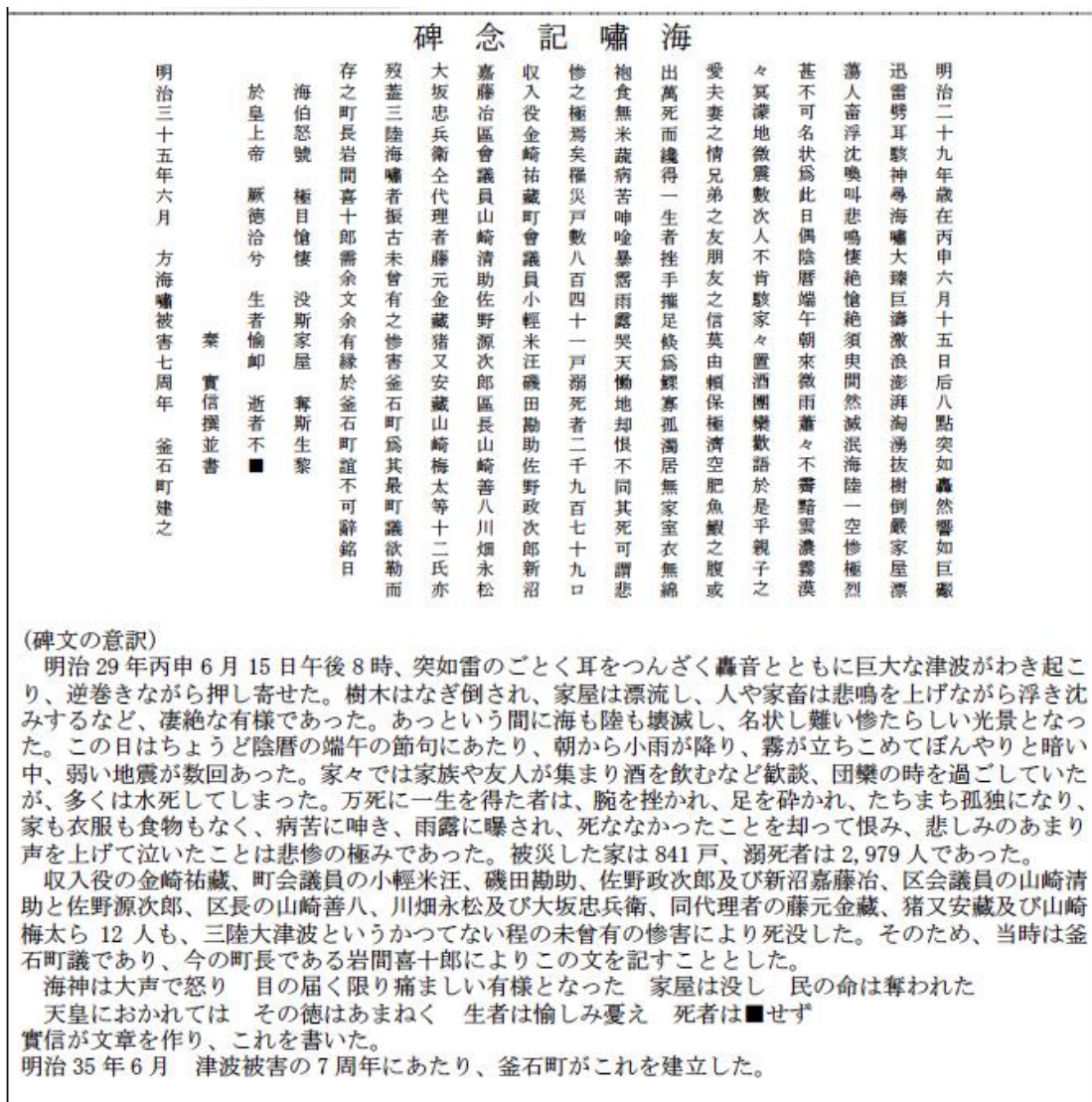


図 5-3 海嘯記念碑・石碑に刻まれた内容

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)



図 5-4 海嘯記念碑


(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

ウ) 「海嘯災死追悼」

碑銘は「海嘯災死追悼」、「明治廿九年六月十五日」と刻まれ、建立月日は不明だが明治津波の慰霊のために作られたもので、慰霊型に分類されている。

表面には図 5-5 のように刻まれ、ほかに人名も記載されていたようだが、解読できない状態になっている。

【岩手 121】



- ◆対象津波：明治三陸地震津波
- ◆類型：慰霊型
- ◆碑文が伝えるもの

記録	予兆	避難	居住	美談

- ◆建立場所：公益（大只越公園）
- ◆対象津波の浸水線との関係：線外
- ◆東日本大震災の津波の浸水：線外
- ◆大きさ：高 97 cm幅 42 cm厚 27 cm
- ◆標 高：6m

明治廿九年六月十五日

海嘯災死追悼

図 5-5 海嘯災死追悼

（出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ）

エ）「海嘯萬人供養塔」

「海嘯萬人供養塔」は、建立年月日は不明（原文ママ。ただし「釜石の石碑」では明治 30 年 7 月 10 日の日付が表面に刻まれていると記載されている。）だが、明治津波犠牲者の供養のため個人によって作られた、慰霊型の石碑である。石碑の表面には図 5-6 のように碑銘と、宿元、石工、行者の名前が書かれている。（画像ママ）

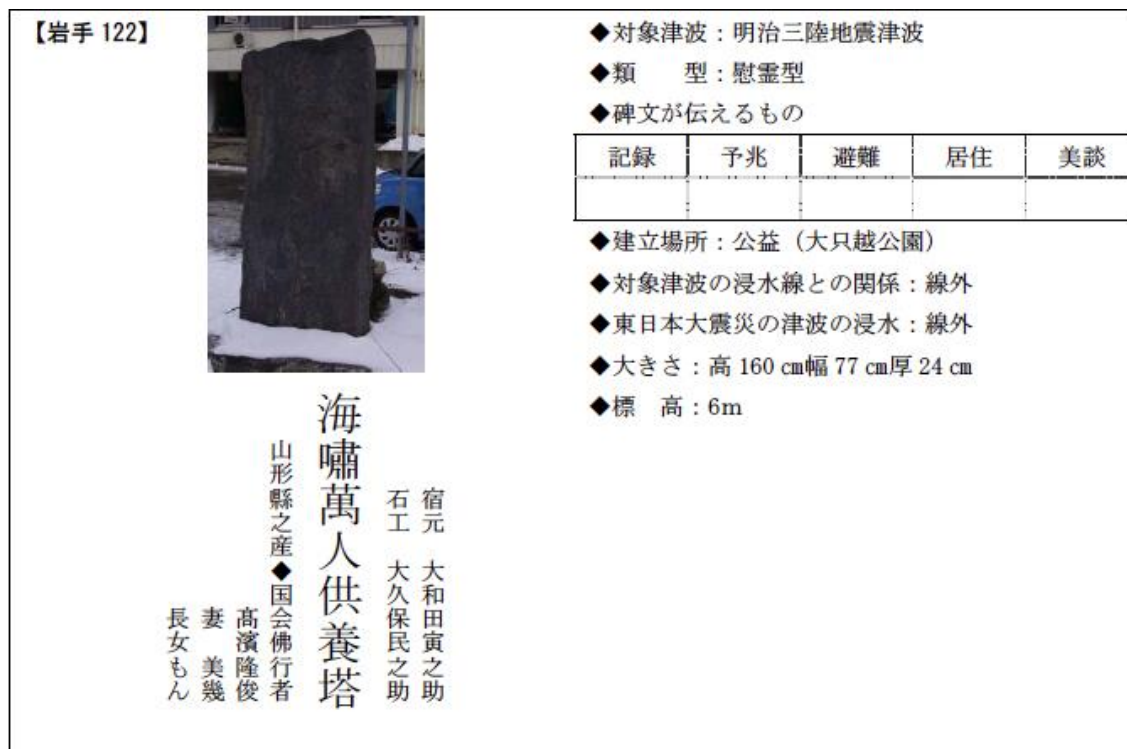


図 5-6 海嘯萬人供養塔
 （出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ）

図 5-6 において「◆国会佛行者」とある部分だが、「釜石の石碑」では「廻国念佛行者」の文字が入ると記載されている。

オ）「海嘯惨死者追吊紀念銅像之記」

碑文によると、明治津波の犠牲者を追弔するため七回忌の明治 35 年 7 月 7 日に、遺体を合葬した只越と仲町（現在の浜町 2 丁目）に 2 基の延命地藏菩薩像を鋳造した。施主は 2 名連名で個人の建立である。

図 5-7 は、その設置の経緯を碑文として記したものである。慰霊型に分類されている。「海嘯惨死者追吊紀念銅像之記」として図 5-7 のように刻まれている。

<p>鑄造海嘯慘死者追吊紀念銅像之記</p> <p>明治二十九年六月十五日海大嘯怒濤襲三陸沿岸其被害之所及南北数十里死傷無算蓋本邦未曾有之大慘事也</p> <p>然而陸中國釜石町被害最激甚曹洞宗石應寺檀信徒其他同町住民而溺死者實貳千九百六拾三人也其中一家悉諸斃而無親族姻戚之叔</p> <p>瘞其屍亦甚多矣乃新設二大合葬地</p> <p>一字唯越屬石應寺境外合葬之者七</p> <p>百余人一字仲町同寺舊境外合葬之者</p> <p>貳百廿余人今茲值其第七回忌</p> <p>之辰追懷當時之慘狀則悲哀</p> <p>之情轉不能禁也於是</p> <p>永沢龜吉金沢八弥</p> <p>和泉安五郎岩</p> <p>館記平菊</p> <p>地市蔵</p> <p>浅田弘二</p> <p>金沢トヨ</p> <p>岩館マン川畑マツホ大巻チエ岩間フジノ岩館キミ近江タケ</p> <p>長沢フクエ町崎ヤエ石応寺代僧沼田雲門等胥謀廣募於</p> <p>同志之釀金焉使東都鑄物師西村和泉鑄造青銅延命</p> <p>地藏大菩薩尊像二基焉分安之於二大合葬地以而追吊</p> <p>慘死者之遺靈并爲其紀念焉工事將成也主任石応寺住持菊地</p> <p>智賢師囑余記其事以謀不朽焉</p> <p>維時 明治三十五年七月七日</p> <p>發願助縁者</p> <p>和敬講連中</p> <p>宇大橋 宇松原 菊地チ ウ 菊地マツエ</p>	
<p>(碑文の意訳)</p> <p>大津波の惨死者を追吊する記念銅像を鑄造した記</p> <p>明治29年6月15日、大津波が三陸沿岸を襲い、その被害は南北数十里に及び、数知れない死傷者を出す未曾有の大惨事となった。陸中の国・釜石町の被害は最も激甚であり、曹洞宗石應寺の檀信徒ほか同町の住民で溺死した者は実に2,963人であった。その中には、一家全員が死亡し、親族や姻戚もない者がおり、また遺体の数も非常に多かったため、二大合葬地を新設した。一つは石應寺境外の字唯越で合葬者700人余り、もう一つは旧石應寺境外の字仲町で合葬者220人余りである。今、その第七回忌にあたり当時の惨状を思い起こし悲哀の情を禁じ得ない。ここにおいて、永沢龜吉、金沢八弥、和泉安五郎、岩館記平、菊地市蔵、浅田弘二、金沢トヨ、岩館マン、川畑マツホ、大巻チエ、岩間フジノ、岩館キミ、近江タケ、長沢フクエ、町崎ヤエ、石応寺代僧の沼田雲門らは、同志から寄せられた拠出金を使い、惨たらしく死んでいった者の慰霊の追弔、併せて祈念をするため、東京の鑄物師・西村和泉の鑄造による青銅の延命地藏菩薩像2基を二大合葬地に設置することとなり、その工事が完了した。主任が石鷹寺住職・菊地智賢師に委託してこのことを記した。</p>	

図 5-7 海嘯慘死者追吊紀念銅像之記・石碑に刻まれた内容

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

図 5-7 にある碑文の意訳についてだが、最後の行の「石鷹寺」は「石應寺」の誤植である。住職の名前も菊地ではなく菊池と思われる。



図 5-8 海嘯惨死者追吊紀念銅像之記

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

力) 「(碑銘不明)」

碑銘は欠損により不明。碑文によると、明治津波の慰霊のために明治35年7月7日、遺体を合葬した2か所に2基の延命地藏菩薩像を鑄造した。施主は9名連名で個人による建立である。慰霊型に分類される。図5-9は、その経緯を刻んだものだが一部判読できない。

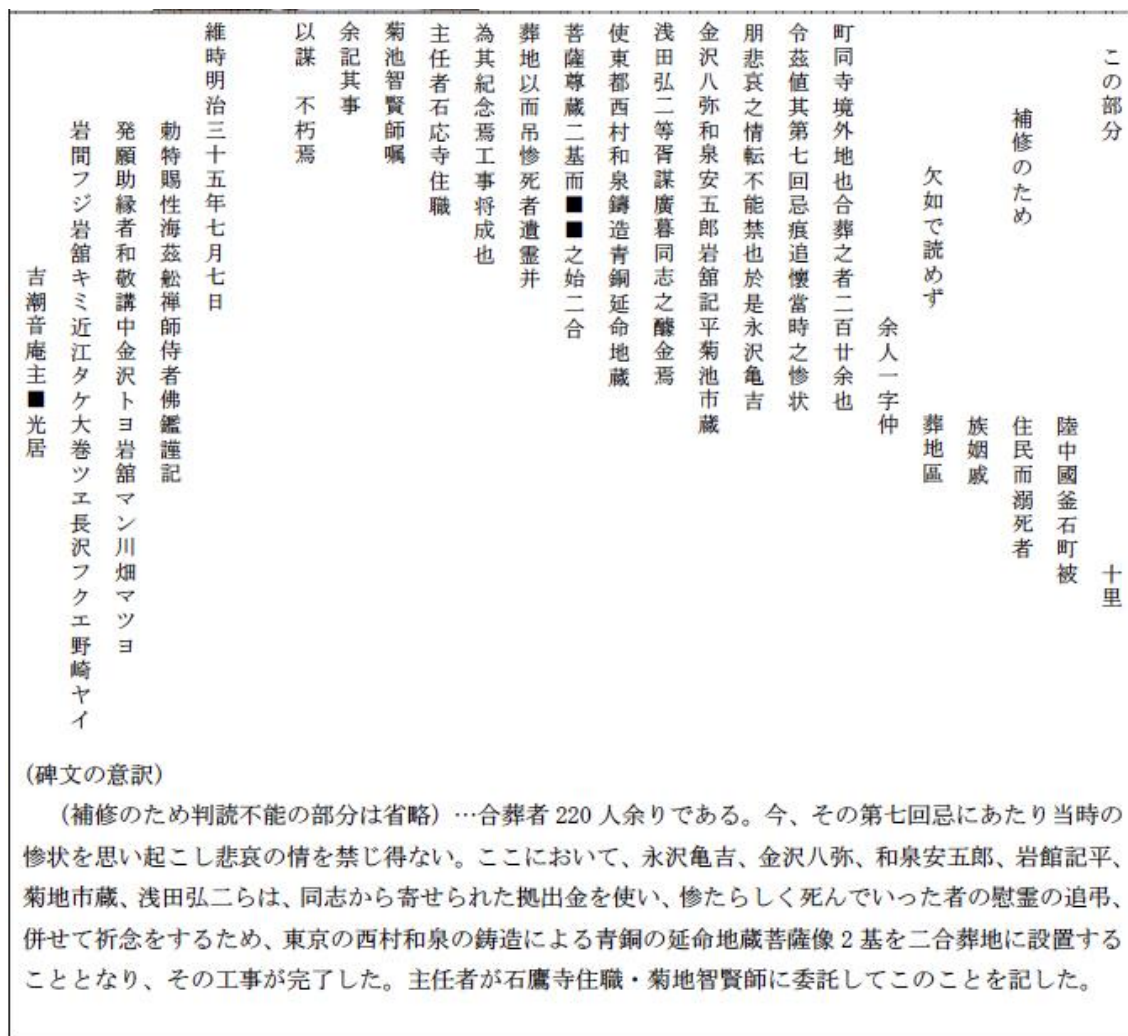


図 5-9 (碑銘不明)・石碑に刻まれた内容
(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

図 5-9 にある碑文の意訳についてだが、「石鷹寺」は「石應寺」の誤植である。住職の名前も菊地ではなく菊池と思われる。



図 5-10 （碑銘不明）

（出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ）

キ）「（碑銘不明）」

港町の標高 0 m 地点の須賀神社に石碑が 1 基ある。碑文には、明治の津波により流亡した古碑が土中から発掘されたものを元あった神社境内に戻すとともに被災した神社を復興した等の経緯が書かれており、大正 15 年に建立されたものである。祈念型に分類されている。明治津波の浸水線内にあり、東日本大震災でも線内で津波被害に遭っている。

表面には図 5-11 のように刻まれている。（画像ママ）

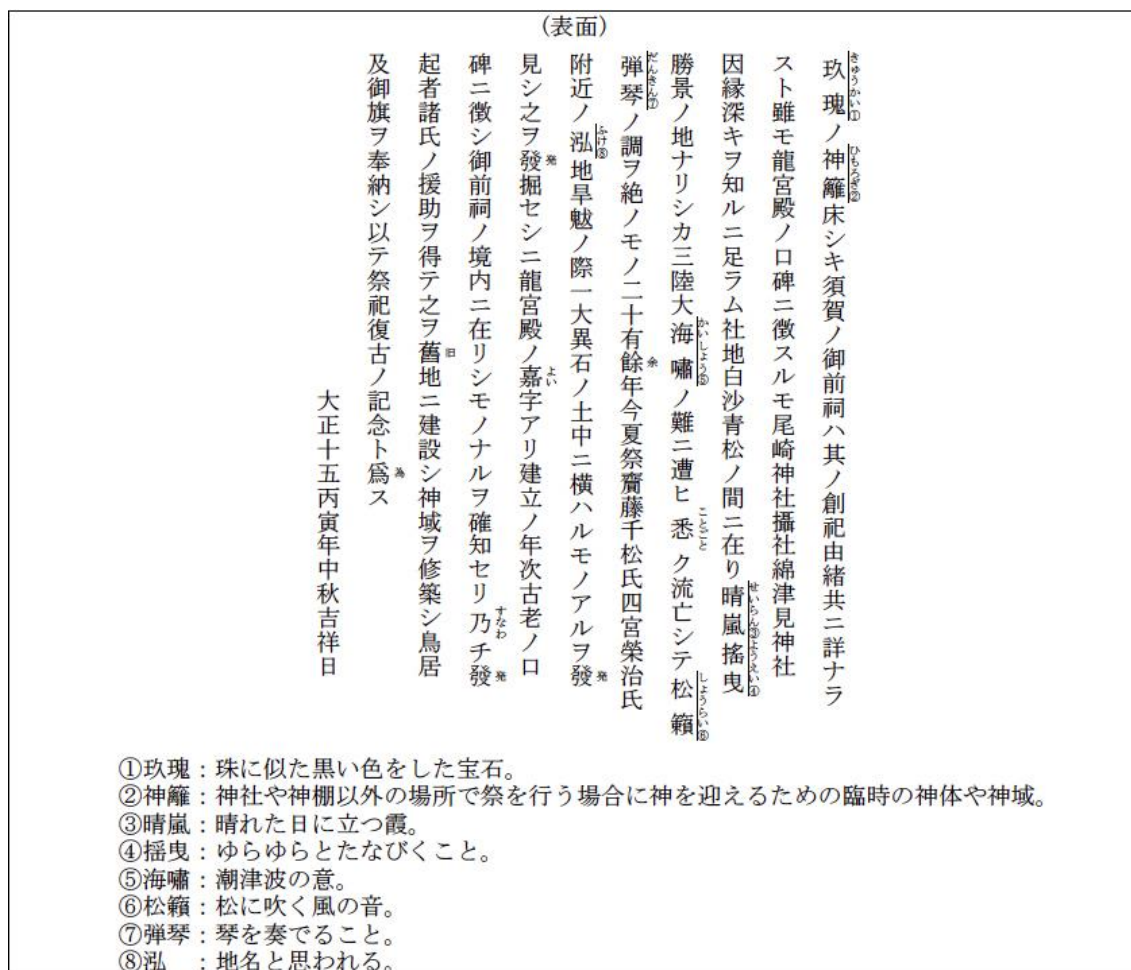


図 5-11 (碑銘不明)・石碑に刻まれた内容

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

図 5-11 の碑文についてだが、6 行目の 5 文字目の「地」は「池」の誤植であり、旱魃の際干上がった池の底に石碑が横たわっているのが発見されたという意味の記述である。

なお、平成 25 年度に釜石市によって東日本大震災の津波浸水域に設置されていた石碑の状況調査（以下、平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査）が行われており、図 5-12 の写真はその際に撮影されたもので、津波の被害を受けたことが確認されている。設置場所が震災後の復興工事範囲に入っているため、本来の位置から移設された。



図 5-12 （碑銘不明）

（出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査）

（2） 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 明治、昭和、の大津波を体験した祖父から、私が、小学生の頃に、津波の話を何度も聞かされており、「地震があったら津波が来ると思い、早く高台に避難することだ」と言われていた。（3. 11 その時、私は 第一集）
- 「大雨のときに限らず、津波のときにも川から水が来るから危ない」と祖母から聞いていた。信じていなかったけれど、今回の震災でそれが本当だと思った。
- 津波の心得は「地震が揺れて足が地に着かなかったら、学校の山に逃げなさい」と祖母から言い聞かされていた。「物に執着しては命を落とす。必ず身一つ逃げなさい。命あれば物は何時でも買える。」と言っていた祖母の言葉が忘れられない。祖母は明治 29 年の大津波の経験者であった。（只越町）
- そのうち、主人が「古井戸の管から水が吹き出ているから必ず津波が来るぞ」と言い……。 （以下略）
- この地域のプレートによる津波襲来は約 30 分後と知っていたが、地震直後、大通りに出て空を見上げる人は多かった。
- 以前に父から、「昭和 8 年の津波は道路にピシャピシャ水が来た程度

であった」と聞いていた

- 子供の頃から、明治の津波のときには、石應禪寺の境内に死体がたくさん流れ着いて、現在の青葉ビル裏山に埋葬したとのことを聞いておりました。
- 「まずは高い所に逃げること」、町内会で実施している避難訓練に毎年参加していた。子どもの頃から、津波は恐ろしいものと話に聞いていた。また、命てんでんこの言葉はすぐに思い出した。（大渡町）
- 私は子供の頃、漁師をしていた祖父から津波の恐ろしさを聞かされて育ち、大きな地震（津波注意報）のたびに必ず避難していました。その経験が体にしみついていたのでと思います。祖父は私に「大きくなって、お嫁にいき、その嫁ぎ先が海のそばでなくても川の近くだったら、必ず津波に気をつけて避難するんだよ。海の近くの人には津波に気を付けるけど、川のそばの人は川津波の本当の恐ろしさを知らないかもしれない。本当に恐ろしいのは油断している川のそばの人達なんだよ。誰がなんと言っても絶対避難すると、おじいちゃんと約束しよう」と何度も言い聞かせてくれました。今回の地震のときもこのことを思い出し、迷わず避難したから難を逃れることができました。そして、祖父からはこうも聞かされていました。「避難することに大袈裟なことはない。もし本当に大袈裟だったら、笑ってよかったと喜べばいい。」、「笑われるくらいがいい。お前が笑い者になっても、いつか必ずその嫁ぎ先の家族はみんな助かるはずだよ。幸せのためだよ。」、この言葉を何度も自分に言い聞かせました。
- 昭和の津波は児玉商店まで到達したと聞いたことがある。ただし、湾口防波堤の完成により、津波エネルギーも減じることから、まさかここまで来るとは考えなかった。
- チリ地震津波等の様子を伝え聞いていて、町内の被害が余りなく、津波とはこんなものと思い込んでしまった。今回その予想をはるかに超えた。
- 感じたこともない地震だったので、「きっと津波は来る」と思い、そばにいる娘とすぐに避難した。子どもの頃から、津波は恐ろしいものと話に聞いていた。また、命てんでんこの言葉はすぐに思い出した。
- 過去のチリ津波地震では、津波が河川を遡上して、魚や船も流れて来たと聞いていた。

- チリ地震では、津波が川を遡上したと聞いていた。多くの住民がその危険性を認識していた。
- 昭和８年の津波は、地域周辺まで来なかったと聞いていた。ここまで来るとは思わなかった。チリ地震、十勝沖地震津波被害は、海岸周辺だけだった。津波を甘く見ていた。
- 過去の津波では、家族が多数亡くなったこと、家族を背負って逃げたことを伝え聞いている。
- 親から、過去の津波は、家の前の通り（天神町と只越町の境界）まで来たと聞いたことがある。自宅はそこから数件分、高台側にあるので大丈夫だと思った。
- 井戸の水が上がってきたので、津波が来ることを確認した。津波の前兆として昔から聞いていた。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、市街地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-7 市街地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
浜町避難道路⇒ア) 浜町東側口、 イ) 西園タクシー口、ウ) 天王山 口、エ) 市役所東側高架橋口	浜町１丁目・２丁目 浜町３丁目の一部 只越町１丁目・２丁目 只越町３丁目の一部
市営釜石ビル（津波避難ビル）	港町１丁目・２丁目
旧釜石小学校校庭	浜町１丁目・２丁目 浜町３丁目の一部 只越町１丁目・２丁目 只越町３丁目の一部
旧釜石第一中学校校庭	
仙寿院境内	
寶樹寺境内	

一次避難場所	対象地域
大只越公園	只越町 1 丁目・2 丁目 只越町 3 丁目の一部 大町 1 丁目・2 丁目・3 丁目 大渡町 1 丁目・2 丁目 大渡町 3 丁目の一部
石應禪寺境内	
薬師公園	大町 1 丁目・2 丁目・3 丁目 大渡町 1 丁目・2 丁目 大渡町 3 丁目の一部 鈴子町の一部 駒木町の一部
釜石小学校校庭	
シープラザ遊前広場	
駒木沢	駒木町の一部
駒木不動沢	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-8 市街地区の拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
釜石市民文化会館	大渡町・駒木町・鈴子町・大町・大只越町・只越町・天神町・港町・浜町・東前町・新浜町
釜石市保健福祉センター	
釜石小学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される市街地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-9 市街地区の避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数	電話
第一幼稚園（天神町）	3 階	80 人	22-4109
寶樹寺（天神町）	1 階	70 人	22-3295
仙寿院（大只越町）	1 階	70 人	22-1166
大只越集会所（大只越町）	1 階	50 人	
釜石小学校（大渡町）	4 階	430 人	22-3027
釜石市保健福祉センター 9 階会議室（大渡町）	9 階	70 人	22-0179
釜石市教育センター 5 階会議室（鈴子町）	5 階	100 人	22-8832

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

東部地区の市街地区において、自主防災組織は、

- ① 港町日の出通り振興組合（平成 3 年 5 月 12 日設立）
- ② 大渡町内会自主防災会（平成 6 年 3 月 24 日設立）
- ③ 只越自主防災会（平成 17 年 11 月 30 日設立）
- ④ 鈴子町内会自主防災会（平成 23 年 2 月 15 日設立）

がある。

只越町一丁目東町内会防災会もあったが、震災前に廃止されている。

① 港町日の出通り振興組合

- 港町日の出通り振興組合は、平成 3 年 5 月 12 日に設立され、港町日の出通りに居住又は事務所等を有する振興組合員をもって構成されていた。事務所は日の出通りに置かれ、役員は会長、副会長、幹事、監査役からなり、会長は港町日の出通り振興組合長があたるこ

とになっていた。

- 「港町日の出通り振興組合自主防災会規約」によると、
 - ・ 防災に関する知識の普及に関すること
 - ・ 地震等に対する災害予防に関すること
 - ・ 地震等の発生時における情報の収集伝達、初期消火、救出救護、避難訓練等応急対策に関すること
 - ・ 防災訓練の実施に関すること
 - ・ 防災資機材等の備蓄に関すること
 - ・ その他本会の目的を達成するために必要な事項が実施事業として定められていた。
- 訓練は5年間のうちで2回行われており、内容は消火訓練、避難・誘導訓練であった。

② 大渡町内会自主防災会

- 訓練は5年間のうちで2回行われており、内容は消火訓練、避難・誘導訓練であった。
- 大渡町内会自主防災会は平成6年3月24日に設立されている。活動地域は大渡町1～3丁目で、大渡町内会に居住する世帯をもって構成され、事務所は会長宅となっている。役員は会長、副会長、監事、会計、会計監査で、防災実践組織として情報班、消火班、避難誘導班、救出救護班、給食給水班があり役割分担が決まっていた。
- 「大渡町内会自主防災規約」によると、
 - ・ 防災組織の編制及び任務分担に関すること
 - ・ 地震等に対する災害予防に関すること
 - ・ 地震等の発生時における情報の収集伝達、初期消火、救出救護、避難訓練等応急対策に関すること
 - ・ 防災訓練の実施に関すること
 - ・ 防災資機材等の備蓄に関すること
 - ・ その他本会の目的を達成するために必要な事項が実施事業として定められていた。
- 平成7年度に補助金により資機材を購入し、消火器、消火器用ボックス、救急セット、リヤカー、二つ折り式担架、組立式テント、

サイレン付きメガホン、コードリール、ハンディライト、発電機、ガソリン携行缶を備えていた。

③ 只越自主防災会

- 只越自主防災会は平成 17 年 11 月 30 日に設立され、活動地域は只越町 1 丁目で、町内組織というよりは商店街通りエリアとしての活動であった。
- 活動としては、平成 22 年 10 月には自主防災独自の防災アンケートを実施しており、ほかに防災学習会等防災知識の啓発活動などを行っていたが、スタッフの大半が商店従事者のために、訓練や講習の計画を立てることが困難であった。
- 平成 17 年度に補助金で資機材を購入し、防災マップ、災害用救急箱、ヘルメット、ゴーグル、救急用ロープ、非常用持ち出し袋、懐中電灯を備えた。震災前には 3 階以上の建物 4 か所に防災備品用具を設置していた。

④ 鈴子町内会自主防災会

- 鈴子町内会自主防災会は、平成 23 年 2 月 15 日に設立された。4 月 1 日からの活動を予定していたため、設立時点では組織のメンバーを決めていただけだった。補助金で資機材を購入したのは震災以後である。組織編成は、本部、情報班、消火班、避難誘導班、救出救護班、給食給水班となっている。
- この地区の災害特性としては、集中豪雨、浸水が挙げられる。
- （参考）補助金で資機材を購入したのは震災以後であり、平成 24 年度にヨド物置エルモ、標準組立費 1 式、建築用コンクリートブロック、束石ブロック、粉末消火器、メガホンを購入した。

イ) 避難訓練

表 5-10 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
103 人（18%）	対象地区：松原町・港町 ／合算人口：583 人
149 人（7%）	対象地区：浜町・魚河岸・只越町・港町・東前町 ／合算人口：2,168 人
102 人（8%）	対象地区：只越町・大町 ／合算人口：1,278 人
61 人（5%）	対象地区：大町・大渡町・駒木町 ／合算人口：1,291 人
14 人（15%）	対象地区：鈴子町 ／人口：92 人
61 人（5%）	対象地区：大町・大渡町・駒木町 ／合算人口：1,291 人
37 人（30%）	対象地区：駒木町 ／人口：123 人

(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと

ア) ふれあい機能訓練デイサービス（大渡町）

- ふれあい機能訓練デイサービスでは、避難訓練は津波災害と火災を想定し、避難場所（旧釜石一中校庭）が近いため車で移動する訓練を年 2 回実施していた。
- 避難場所については、津波注意報・警報が発令された時及び近隣火災が発生した時は、旧釜石一中校庭に避難するというようにしていた。
- 利用者家族等への周知方法については、利用契約時に避難方法は明記していたが、避難場所については明記していなかった。
- いざという時の連絡体制については、施設から利用者家族へはご利用者緊急時連絡先一覧表にて電話連絡、施設から市へは非常時対応手

順にて電話連絡を取ることにしていた。

- その他日頃から備えていたことは、非常持ち出し袋の整備である。

イ) すくすく親子教室（大町 青葉ビル）

- すくすく親子教室は、教室として災害別のマニュアルは整備していなかった。
- 乳幼児は保護者同伴、小学生は指導員が同伴し、それぞれ月 1 回、避難訓練を実施していた。避難先は石應禅寺境内である。
- 避難場所は、原則として日中は石應禅寺境内、夕方は石應禅寺境内・保健福祉センターとしていた。
- 祥雲支援学校から教室への送迎途中の場合には、祥雲支援学校に戻ることにしていたが、事前に学校と話し合いを持っていたわけではなかった。
- 保護者への連絡は電話連絡のみで、いざという時の連絡体制についても、施設から保護者へは電話連絡、施設から市へは電話か徒歩（保健福祉センターまで）によるものとした。
- その他日頃から備えていたことは、水・食料を持ち出せるようにしていた。

ウ) 釜石市民文化会館（大町）

- お客様・来場者の安全管理、火災時の対応、地震・津波・土砂災害等の際の対応、避難勧告・指示等が出たときの対応に関しては、市からの指示とマニュアルがあった。
- 避難訓練を実施していた。
- 避難場所は石應禅寺境内であることが把握されていた。

エ) 「大町駐車場」

- お客様・来場者の安全管理、火災時の対応、地震・津波・土砂災害等の際の対応、避難勧告・指示等が出たときの対応については、「（市との）話し合い」となっていた。

- 避難場所は、大只越集会所となっていた。

オ) 青葉ビル（大町）

- 青葉ビルでは、避難場所は大只越公園（青葉公園）と把握していた。
- 実際に避難訓練では大只越公園（青葉公園）への避難を行っていたが、寒さを理由にして平成 21 年に青葉ビルでの避難訓練を要望された。平成 22 年以降は、大只越公園（青葉公園）に避難した後に青葉ビルへの誘導を行っていた事実があった。職員からは「寒いから便宜上青葉ビルだが、実際には大只越公園（青葉公園）」という説明はなされていた。
- 青葉ビルにおける避難訓練実施の状況については、次のとおりである。
 - ・平成 20 年 4 月青葉ビル完成
 - ・平成 21 年 3 月 3 日津波避難訓練まで、大只越公園（青葉公園）で実施。寒いことを理由に青葉ビルで訓練したい旨を要望される。
 - ・平成 22 年 2 月 28 日チリ地震津波。大只越公園（青葉公園）で集合したが、①寒い②テレビ（情報）を見たいの理由で、日中で開館していた青葉ビルに移る。70 名程度
 - ・平成 22 年 3 月 3 日の避難訓練は中止
 - ・平成 22 年以降、避難場所担当職員、大町町内会が青葉ビルの鍵を持つようになる。
 - ・平成 23 年 3 月 3 日避難訓練。青葉ビルを開放する。

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第1分団第3部

- 部長他2名水門閉鎖確認へ直ちに出勤。公共埠頭水門閉鎖困難の為、補助。その後帰所、直ちに只越町周辺ポンプ車にて避難広報活動。その際歩行困難老人女性1名ポンプ車に救助収容。津波襲来の危険を感じ大只越町仙寿院へ、団員共避難する。
- 屯所で団員2名と合流し3名でポンプ車で水門閉鎖確認に向かった。港町で公共埠頭の一番大きな水門を委託された人たちが門を閉めていたが、残り30cmが閉まらなかった。それを閉める時間的余裕がないと判断し、「全部閉鎖しなくてもいいから早く逃げろ」と言って屯所に戻った。そこで部長代理と合流し、ポンプ車で管轄地域を回り広報活動を行った。仙寿院に避難するとほぼ同時に津波が押し寄せてきた。
- 屯所に向かったがポンプ車は既に出動していた。ポンプ車帰所後、同乗して避難誘導しつつ老人1名も乗せて仙寿院に上がった。
- 近所の人々に声をかけ、毛布、暖房機器等の提供を協力依頼。被災者を本堂に避難誘導（人数約数百名）。仙寿院下方がれきより出火を確認。付近消火栓より延長ホース3本にて消火活動開始。約1時間で鎮火
- がれき中より老人女性発見。団員2名にて救助。人工呼吸3～4回しながら仙寿院本堂に搬送したが身元判明できず、夕刻死亡。糖尿病患者3名判明、直ちに釜消本部へ無線入電。医師及び薬品の搬送依頼。妊婦体調不良者2名判明、直ちに市役所職員無線にて旧一中側より担架搬入要請。仙寿院上方避難道路まで車で搬送し、担架で旧一中避難所まで搬送。夕刻、青葉ビル付近より出火確認するも、直ちに消火活動できず、がれきの為ポンプ車出動不能。その後釜消本部より入電、出動指示あり。大只越町旧市営AP前貯水槽より延長ホース16本で（石應禅寺境内付近迄）届かず、火点より釜消暑員が延長したホース約5本と連結、消火活動開始。鎮火まで数時間放水。翌未明に撤収終了、帰所
- 仙寿院は避難場所であり避難施設ではなかったが、住職が本堂を開放した。浸水していない所の方に呼び掛けて、毛布や反射式石油スト

ープ等暖をとれるものを集めた。消防団員が提供してくれるお宅に訪問して運んだ。夕方、境内上がり口のがれきから出火した。仙寿院に避難した団員 6 名で消防活動を行う。消火栓 1 カ所にポンプをつけてエンジンをかけ消火栓を開放したら水が上がってきたので、それで消火することができた。無線で本部に鎮火報告をする。20 時過ぎ頃、青葉ビル付近の民家根元から出火、3 階建て民家に引火。大只越石應禪寺の沢の上に防火水槽が 2 箇所あり、そこにポンプをもっていきホースを延長した。15、6 本つないだが届かず、消防署が足りない分のホースを持ってきた。夜の 10 時頃から鎮火は夜が明ける頃まで 6 時間くらいかかった。

<12 日以降>

- 鎮火後、仙寿院に戻ると、住人から下に子供の遺体が有るとの報告が有った。団員 2 人で現場に向かった。うつ伏せで亡くなっている子供を、市職員と担架で仙寿院まで運んだ。その後市職員が遺体安置所に連れて行った。
- 12 日（土）、只越町で孤立している老人女性発見、団員 5 名にて救助搬送
- 後日、夜間防火・防犯パトロール開始。毎朝ラジオ体操実施。体調不良・負傷者救急搬送要請連絡。団員は数日ポンプ車他車中泊。他、毎日支援活動
- 消防団員は 1 ヶ月位は外の消防ポンプ車の中で待機した。避難所で調子の悪くなった妊婦さんが 2 名いて、消防署と無線連絡を取り婦人科の先生を連れてきてもらった。

イ) 消防団第 1 分団第 4 部

- 河川水門の閉鎖を指示した。その後ポンプ車に数名同乗し、住民に対し避難指示の広報・避難誘導を行う。
- ポンプ車は海水に浸かりながらも間一髪で水没を逃れた。
- 避難所（小学校）にて、町内会、先生方と今後の対応を協議した。外部との連絡手段がポンプ車の消防無線だけだったので、避難所の状況など消防本部に報告した。まもなく水が引き始め、遺体 3 体を引き上げる。近隣で火災が発生したが、道路通行不能で当日夜はポンプ車

にて一夜を明かした。

ウ) 港町日の出通り振興組合

※被災。アンケート等資料がなく詳細不明。震災後の平成 24 年 2 月解散

エ) 大渡町内会自主防災会

- 釜石小学校避難所を開設し、行政、学校と三者で対応した。
- 避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、けが人の救出や手当、行方不明者や遺体の搜索、がれきの撤去、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、名簿作成
- 避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し、被災者の自宅等への受入れ（受入れ 20 軒 45 人）、ボランティア活動への参加、洗濯等の生活支援、高齢者の介護等

オ) 只越自主防災会

- 河川水門の閉鎖を指示した。その後ポンプ車に数名同乗し、住民に対し避難指示の広報・避難誘導を行う。
- 釜石市自主防災会連絡協議会による「東日本大震災影響調査アンケート」には、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。
 - ・孤立した。
 - ・食料の持ち寄り・炊き出し、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、名簿作成
 - ・寝具、食料等差し入れ、炊き出し
 - ・被災以前の只越が学校 PTA 組織と町内区域割りが縦割りと横割りに混在していた商業地域で行政防災啓蒙があり H17. 11 に設立し商業通りとしてやむをえない地域性で活動を行ってきたが被災現状で住民、庁内組織ではない当組織弊害を感じた。地域被災の組織力が見られずそれぞれ避難場所が散在していた。被災活動が連携できなかった。せめてどこに誰が避難、安否調査するにとどまった。これから危惧し望むところは只越町 1 ～ 3 丁目区画を変革し只越町全体防災組織

の形成を考える。また、当初よりあった消防協力会、街灯会も何かしら統合すべきと思います。

カ) 鈴子町内会自主防災会

- 釜石市自主防災会連絡協議会による「東日本大震災影響調査アンケート」には、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。
 - ・ がれきの撤去、救援物資の配布、行政との連絡・要望等
 - ・ 炊き出し

(3) 施設・団体等の避難行動

ア) ふれあい機能訓練デイサービス

- 当時は職員 3 名、利用者 4 名が施設にいた。地震後利用者の安全を確認し、14 時 55 分頃送迎車に乗車させた。近隣住民 2 名も乗せ、15 時 5 分旧釜石小学校校庭に避難して車中に待機した。16 時 30 分頃旧釜石第一中学校体育館の中へ移動し、一泊した。
<12 日以降>
- 12 日、職員は利用者家族を東前方面と大只越方面の避難所へ捜索に行き、午後には利用者 2 名を家族に送り届け、残る 2 名を救急車で送り届けた。

イ) すくすく親子教室

- 地震発生当時には職員 4 名、児童 4 名（釜石祥雲支援学校の児童）がいて、直前まで相談支援事業所の相談支援員が来訪していたが地震の前にすくすく親子教室を出た。
- 地震直後、14 時 50 分に職員は児童を誘導しすくすく側の出口から外へ移動した。石応禅寺境内へ避難したが、津波に備えて高台への避難を検討していたところ、相談支援員が車で戻って来て釜石小学校へと避難することにした。相談支援員の車で児童 4 名、指導員 1 名が移動

し、指導員 2 名は徒歩で、管理者 1 名も後始末後徒歩で移動した。

- 15 時頃釜石小学校に到着し、車を校庭に停めて 17 時頃まで車中で過ごし、その後体育館へ移動した。夜には児童 2 名を保護者に引き渡した。子どもたちを休ませてもらう場所を学校・町内会と交渉し、体育館道具室を開放してもらい、児童 2 名・指導員 3 名・管理者・相談支援員で一泊した。

<12 日以降>

- 12 日、釜石祥雲支援学校に相談支援員の車で児童 2 名、指導員 3 名が移動した。管理者は釜石小学校に残り避難者対応を行った。
- 保護者への児童の引渡しが終わったのは 16 日だった。

ウ)「釜石市民文化会館」

- 地震発生時、館内には管理責任者、一般職員（臨時職員などを含む）が 15 名いた（市職員 5 名（臨時 1 名）、舞台業務 2 名（委託）、ボイラー業務 3 名（2 名委託）、警備業務 2 名、清掃業務委託 3 名）。一般来場者は 50～80 名が施設内にいて、2 階中ホールでは健康推進課の講座が行われており、1 階展示室では絵画展が開催中であった。
- 地震直後、各催事主催者が迅速に催事中止を決行し、スタッフが声をかけ、大津波警報発令前に来場者を館外へと退去・避難させた。市職員により、清掃業務委託 3 名に避難指示を、続いてボイラー職員に避難指示を行い避難させた。市職員 5 名、舞台業務、警備業務職員の避難に移ろうとした矢先に津波が襲来した。ボイラー職員 1 名は自己判断にて会館に戻り上階に避難した。市職員 5 名、舞台業務 2 名警備業務 2 名は会館上階に避難し、その際消防団員 1 名、近隣住民 1 名も会館に逃げ込み上階へと避難した。津波により館内に逃げ込んだ避難者は孤立した。
- 12 日に 1 階のがれきを抜け出すルートを見いだし、翌 13 日に教育センターに避難した。

エ)「大町駐車場」

- 地震発生時、駐車場に職員は 0 名（ただし、アンケートでは当日シ

シルバー人材センター人員 1 名がいたのかどうかの記載はない。青葉ビルへのアンケートには市営駐車場にシルバー人材センター人員 1 名がいた記載がある) で、一般の来場者は不明であった。1 階天井付近まで浸水した。

オ) 「青葉ビル」

- 地震発生時、カウンター担当の市職員 2 名と臨時職員 1 名のうち、市職員 1 名は議会に出席のため不在だった。青葉ビルへの一般の来場者数は正確には不明だが、ほかにすすく親子教室には職員 4 名と子ども 4 名、子育て支援センターには職員 2 名と 3 組の親子がいた。
- 地震後、市職員 1 名は大只越公園（青葉公園）に移動し、避難誘導にあたった。臨時職員 1 名は地震で割れたガラスの安全対策を行い青葉ビルに残っていた。議会にいた職員は地震後すぐに大只越公園（青葉公園）に移動した。
- すくすく親子教室の職員は子どもたちを誘導し、建物から出て石應禅寺境内へと避難を開始した。子育て支援センターは親子 2 組が帰宅し、職員は親子 1 組とともに「市営アパートの上」への避難を行った。

第3項 嬉石・松原・大平地区

1 被災状況

表 5-11 嬉石・松原・大平地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
嬉石町	856 人	402 世帯	45 人	全壊 137 件	半壊 7 件
松原町	454 人	230 世帯	22 人	全壊 102 件	半壊 35 件
大平町	822 人	379 世帯	4 人	全壊 4 件	半壊 20 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

当該地域には、嬉石に 1 基、松原に 1 基ある。

ア) 「嘯没者追弔塔」

松原の共同墓地に設置され、標高は 11m の位置にある。明治や昭和の津波においては浸水線外の場所だが、東日本大震災の浸水線上に位置する。

明治津波による松原住民の犠牲者追悼のために三回忌に当たる明治 31 年旧 5 月 5 日に建てられ、施主は個人で 37 名の連名（原文ママ。ただし「釜石の石碑」では 40 名と記載されている。）となっている。慰霊型に分類されている。表面には図 5-13 のように刻まれている。（画像ママ）

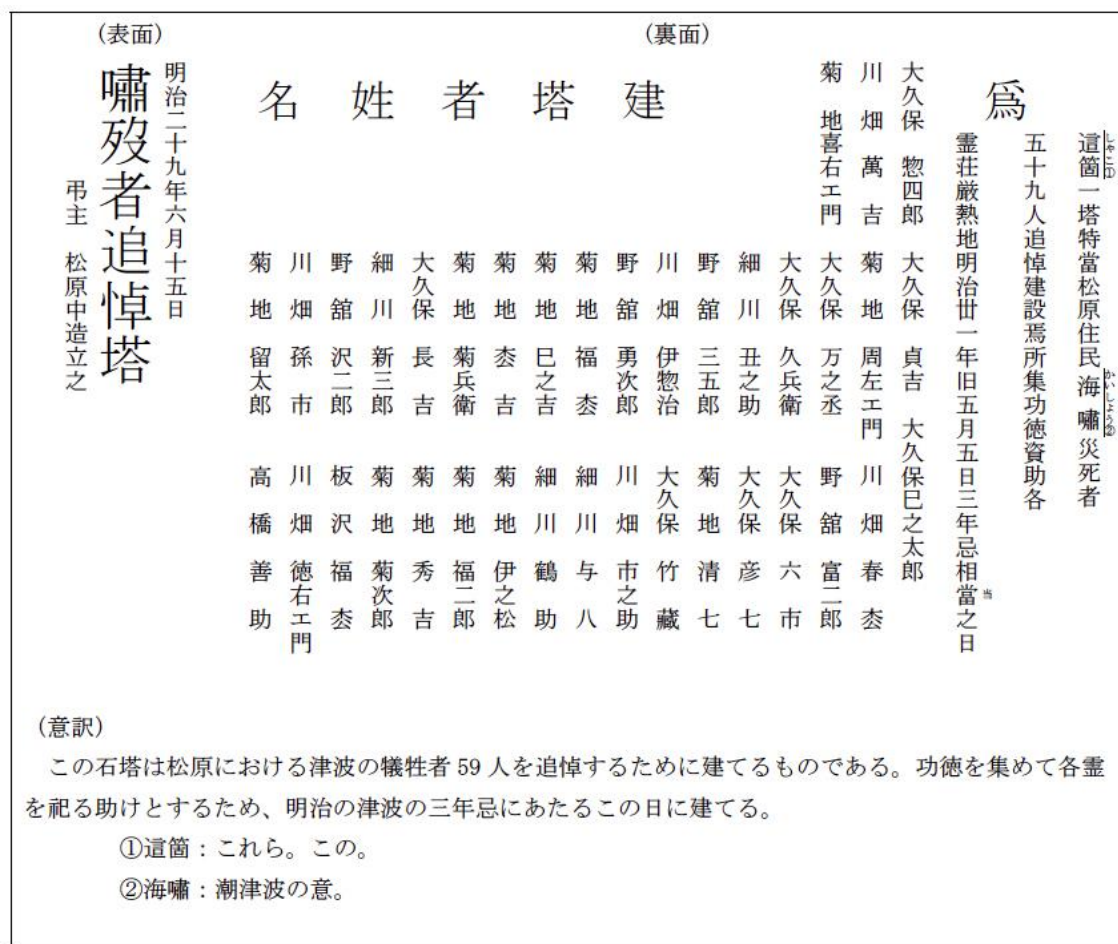


図 5-13 嘯没者追弔塔・石碑に刻まれた内容

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

上記の図 5-13 についてだが、左上の表面碑文「嘯歿者追悼塔」は「嘯歿者追弔塔」の誤植である。裏面の 3 行目 4 文字目も「熱」ではなく「報」の誤植である。裏面の建塔者姓名は「釜石の石碑」では 40 名刻まれているとあり、この図には 37 名しか無いが、ほかに「大久保若泰」の名前も石碑に刻まれていることが報告されている。



図 5-14 嘯没者追弔塔

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

なお、平成 25 年度に釜石市によって東日本大震災の津波浸水域に設置されていた石碑の状況調査が行われているが、当石碑は調査対象から外れていたため調査されていない。

イ) 「海嘯横没精霊」

嬉石町にある碑銘「海嘯横没精霊」の石碑は、国土交通省「津波被害・津波石碑情報アーカイブ」によると、標高 10m の個人宅裏に百万遍等の供養碑 4 基と並べられて建てられており、施主は嬉石衆中、明治 31 年旧 5 月 5 日の建立である。明治津波による嬉石地区の犠牲者の慰霊のために建てられたもので慰霊型に分類されている。明治の津波、東日本大震災の浸水線上にある。

石碑表面には、図 5-15 のように刻まれている。

[illegible]

図 5-15 海嘯横没精霊・石碑に刻まれた内容
(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

なお、平成 25 年度に釜石市によって東日本大震災の津波浸水域に設置されていた石碑の状況調査が行われており、図 5-16 の写真はその際に撮影されたものである。縦に割れるなど損傷が激しく、上部にはかすがいが打たれ接合され、セメントで補強されている部分もある。



図 5-16 海嘯横没精霊

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 小さい頃から「地震があったときは川や海に近づくな、とにかく逃げろ」と母から家訓のように言い聞かされてきた。
- 今になって父から耳にタコができるほど聞かされていた「地震が起きたら、まず逃げろ」が、まさに的を射た一言だと思います。
- 過去の津波により町内が浸水したことは伝え聞いていたが、アパートなどの居住者で認知している者は少ないと思われる。
- 過去の津波が、地域に襲ってきたのは聞いていた。湾口防波堤も完成したので、津波が来ても床上程度と思っていた。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、嬉石・松原・大平地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-12 松原・嬉石・大平地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
松原公園	松原町 1 丁目・2 丁目の一部 松原町 3 丁目
松原神社境内	
釜石市民交流センター広場	嬉石町 1 丁目の一部 嬉石町 2 丁目 嬉石町 3 丁目の一部
白山小学校校庭	
釜石商工高校校庭	大平町 3 丁目の一部 大平町 4 丁目
大平中学校校庭	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-13 松原・嬉石・大平地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
釜石市民交流センター体育館	松原町・嬉石町・大平町
大平中学校体育館	
白山小学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される嬉石・松原・大平地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-14 松原・嬉石・大平地区における避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数	電話
松原地区コミュニティ消防センター（松原町）	1 階	120 人	
白山小学校体育館（嬉石町）	3 階	440 人	22-3834
釜石市民交流センター（嬉石町）	3 階	500 人	24-2241

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数	電話
嬉石地区集会所（嬉石町）	2 階	80 人	
大平中学校（大平町）	4 階	500 人	22-4158
釜石商工高校（大平町）	3 階	1,200 人	22-3029
望洋ヶ丘集会所（大平町）	1 階	30 人	
大平集会所（大平町）	1 階	110 人	
釜石市鉄の歴史館（大平町）	4 階	500 人	24-2211

（4） 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア）自主防災組織

嬉石・松原・大平における自主防災組織としては

- ① 松原町自主防災会（平成 9 年 1 月 18 日設立）
 - ② 大平望洋ヶ丘町内会自主防災会（平成 16 年 7 月 1 日設立）
- がある。

嬉石町では平成 23 年 4 月に自主防災会の設立を予定し準備していたが、震災のため未だ設立に及んではない。

① 松原町自主防災会

- 松原町自主防災会は、平成 7 年の阪神・淡路大震災を契機として平成 9 年 1 月 18 日に設立された。松原町内会の世帯によって構成され、事務所は会長宅としていた。組織編成は、会長・総括、副会長、救出・救護班、避難・誘導班、避難所班、現場救護班、情報班の役割分担が決まっていた。
- 「松原町自主防災会規約」によると、
 - ・防災に関する知識の啓蒙に関する事
 - ・災害予防と備えの学習に関する事
 - ・災害発生時における緊急対応等に関する事
 - ・防災避難訓練の実施に関する事
 - ・その他、本会の目的を達成する為に必要な事項

が実施事業として定められていた。

- 平成 14 年に町内で土砂災害が発生し被害を受けていることから、独自に防災マニュアルを作成し、平成 19 年には土砂災害防災訓練（災害要援護者の避難訓練・住民の避難誘導等）に参加するなど、地域全体で防災活動に取り組んでいた。
- 避難訓練や防災学習会は毎年実施し、3 月 3 日の津波避難訓練では松原公園、松原神社への避難を行っていた。また、平成 21 年 8 月には奥州市の自治会を受け入れ松原コミュニティセンターにおいて自主防災活動研修会を行い、松原町自主防災会がその対応をしている。
- 平成 13 年度に補助金で資機材を購入しており、消火器、FRP 消火器格納箱、災害多人数用救急箱、ワンタッチ担架、ヘルメット、腕章、組立式テント、折畳式リヤカー、毛布、発電機、ガソリン携行缶、ハロゲン投光器セット、コードリール、防水シート、トラロープ、訓練用消火器、ミニエアコンプレッサーを整備した。

② 大平望洋ヶ丘町内会自主防災会

- 大平望洋ヶ丘町内会自主防災会は、平成 16 年 7 月 1 日に設立された。この地域の災害特性は火災、土砂崩れが想定されている。備えとしては、物資を備蓄していた。

イ) 避難訓練

表 5-15 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
114 人（13%）	対象地区：嬉石町 ／人口：856 人
103 人（18%）	対象地区：松原町・港町 ／合算人口：583 人
0 人（0%）	対象地区：大平町 3 丁目 ／3 丁目人口：不明（大平町 822 人）

(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと

ア) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第4章を参照のこと

イ) 地域の動き

① 消防団第3分団第1部

- 全水門を閉鎖するのに10分位かかり、その後ポンプ車で管轄地域を2～3回位廻って避難を呼びかけた。
- 団員2名……地震発生後、水門閉鎖作業に従事中、津波に巻き込まれた。
- 約400人がコミュニティセンター、エヴァホール、一般の家等に避難していた。寒い日だったので、屯所の前に焚き火をして、その薪を運んだり、食料、飲み物、ローソク、懐中電灯、石油ストーブ等を探し歩いた。無線機がポンプ車ごと流されたり、電話が通じなかったりで、外部との連絡はまったく取れなかった。

<12日以降>

- 次の日からは、がれきを乗り越え、救助活動、その他、薪・燃料・食料等の確保作業を行いました。

② 消防団第3分団第2部

- 水門閉鎖、避難誘導
- 家に残された人の救助を行う。夕方に1名、暗くなってから1名救助

<12日以降>

- 12日より、救助活動、遺体の探索を行い、大体ゴールデンウィーク前まで続いたと思う。
- 白山小学校と交流センターが避難所となり、町内会と連絡を取り

合いながら活動した。避難所で具合を悪くする人が相次ぎ、ポンプ車で病院まで搬送した。

③ 松原町自主防災会

- 当日より炊き出し、避難所設営、保健活動、安否確認、食料関係、防災本部（町内）を立ち上げ避難所及び避難者の対応・食料・物資及び搬送、住民の窓口となる。8月9日まで続いた（仮設などへ移動）。内容が多すぎて書ききれない。
- 釜石市自主防災会連絡協議会による「東日本大震災影響調査アンケート」には、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。
 - ・孤立した。
 - ・避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、けが人の救出や手当、行方不明者や遺体の捜索、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、名簿作成、その他（地域から離れた人の行き先を把握した）
 - ・避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、被災者の自宅等への受入れ（受入れ13軒、50人）、ボランティア活動への参加、高齢者の介護等、その他（避難者の生活支援）

④ 大平望洋ヶ丘町内会自主防災会

- 釜石市自主防災会連絡協議会による「東日本大震災影響調査アンケート」には、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。
 - ・避難所運営、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール
 - ・寝具、食料等差し入れ

第2節 平田地区

第1項 平田地区（大字平田第1～6地割）

1 被災状況

表 5-16 平田地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
平田	1,219 人	497 世帯	18 人	全壊 171 件	半壊 93 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

ア) 「海嘯記念碑」

「海嘯記念碑」の設置場所は県道桜峠平田線脇の館山神社の前で、標高 18m の位置である。

国土交通省「津波被害・津波石碑情報アーカイブ」によると、昭和 32 年 11 月、阿部 匏（個人）によって建立されたもの（原文ママ。ただし「釜石の石碑」では阿部松雄刻と刻まれているが建立者は不明となっている）で、裏面に平田漁業協同組合はじめ数人の寄付者名や寄付金額が刻まれていることから、地域からの寄付を集めての建立と思われる。

明治・昭和津波の浸水線外だが、東日本大震災の浸水線上に位置し、碑文によると、最初に明治津波の犠牲者遺族により明治 35 年 3 月 15 日に慰霊碑が建てられたが、自然石のため風化し修理不能となったため、新たにこの石碑を建てることになったということのようである。その際に昭和津波の記述を加え、後世に伝える意味を持たせている。ゆえに教訓型に分類されている。

である。



図 5-18 海嘯記念碑

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 「命てんでんこ」と言われ三陸地方の教えの偉大さであった。昭和の大津波の年に生まれた私は両親から徹底して津波避難を躰られた。まさに「おしつけ」である。寝るときの服のたたみ方、「揺れたら逃げろ」言い訳や妥協を許さない指導であった。(3. 11 その時、私は 第二集)
- 昔の人たちの話を聞くと「ここまでは来ないんだよ」って、なんか地震のあるたびに聞いているんですね。(東日本大震災アーカイブス 明日へ～支えあおう～)
- さらに高いところにある旧商業高校へ避難した。そのとき、「津波のときには、川沿いには行っちゃいけない」と言われていたので、浪竹山の林道を通して移動した。
- 明治 16 年生まれと明治 19 年生まれ祖母から、「地震がゆれたら、二回揺れ返しが来たら、津波が来ると思え」「逃げるときは、竹の根で地割れしないから竹やぶに逃げろ」と教えられてきた。
- 祖母の話の中に、津波の前には、「いわしの大漁」、「沖合いからドーンと共鳴する発破のような音」などがありました。

- 明治三陸津波で高台に避難したという話を先祖から聞いたことがあり、津波が来たら、とにかく高いところへ逃げるという意識はあった。
- 明治、昭和の津波で家を流されたり、亡くなった人がいたことを聞いていたため、津波避難の備えを意識しており、震災時にも役立った。
- 祖母から「強い地震によって、海の方で音がしたら、津波が来るから逃げるように」と聞いていた。当時も海のほうで「ドガン」という音を3回聞いたので、「津波がくる」と思って逃げた。
- 津波のときには、川沿いには行ってはいけないと言われていたので、浪竹山の林道を通して移動した。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、平田地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-17 平田地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
平田幼稚園園庭	大字平田第1・2地割の一部 大字平田第3地割 大字平田第4・5・6地割の一部
平田小学校校庭	
館山神社境内	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-18 平田地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
平田小学校体育館	平田

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される平田地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成22年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-19 平田地区における避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数	電話
平田集会所（平田）	2 階	180 人	
上平田集会所（平田）	1 階	80 人	
上平田ニュータウン集会所（平田）	1 階	130 人	
平田幼稚園（平田）	2 階	300 人	26-5353
平田小学校（平田）	3 階	170 人	26-5230
平田公園クラブハウス（平田）	1 階	30 人	26-7577

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

平田地区の自主防災組織は、

- ① 上平田ニュータウン町内会自主防災会（平成 6 年 4 月 1 日設立）
- ② 平田町内会自主防災会（平成 21 年 10 月 1 日設立）
- ③ 上平田町内会自主防災会（平成 24 年 9 月 1 日設立）

がある。

① 上平田ニュータウン町内会自主防災会

- 上平田ニュータウン町内会自主防災会は、大字平田第 2 地割の高台に位置する上平田ニュータウンにおいて、平成 6 年 4 月 1 日に設立した組織である。組織編成は、本部（会長、副会長）、総務（情報班）、消火班、救出救護班、避難誘導班、給食給水班となっており、役割分担が決まっていた。
- 「上平田ニュータウン町内会自主防災規約」によると、
 - ・ 防災組織の編制及び任務分担に関すること
 - ・ 防災に関する知識の普及に関すること
 - ・ 地震等に対する災害予防に関すること
 - ・ 地震等の発生時における情報の収集伝達、初期消火、救出救護、

避難誘導等応急対策に関すること

- ・防災訓練の実施に関すること
- ・防災資機材等の備蓄に関すること
- ・その他本会の目的を達成するために必要な事項

が実施事業として定められていた。

- 震災以前に行った訓練は、平成 12、13、15 年に、初期消火訓練、119 番通報訓練、心肺蘇生法実技等を行った記録がある。平成 12 年 11 月、消火訓練、119 番通報訓練、応急手当訓練、発電機等取扱い訓練等の訓練を実施した。平成 13 年 10 月、23 人参加により、初期消火訓練、119 番通報訓練、心肺蘇生法実技等の訓練を実施した。平成 15 年 2 月 23 日、25 人参加により、初期消火訓練、119 番通報訓練、心肺蘇生法実技等の訓練を実施した。
- 平成 12 年度に補助金で次の資機材を購入し整備した。消火器、FRP 消火器格納箱、災害多人数用救急箱、ワンタッチ担架、ヘルメット、腕章、組立式テント、折畳式リヤカー、毛布、発電機、ガソリン携行缶、ハロゲン投光器セット、コードリール、防水シート、トラロープ、訓練用消火器、ミニエアコンプレッサー

② 平田町内会自主防災会

- 平田町内会自主防災会は、平成 21 年 10 月 1 日に設立され、活動地域は大字平田（下平田）である。組織編成は、本部、情報班、避難誘導班、初期消火・救出救護班、給食給水班があり、役割分担が決まっていた。
- 平成 21 年に自主防災訓練を行っている。避難所は平田集会所と決まっていた。（証言より）
- 平成 21 年度に補助金により次の資機材を購入した。メガホン、担架、避難 21 点セット、毛布、防水トランシーバー、中継装置、消火用バケツ

③ <参考>上平田町内会自主防災会 （震災後に設立）

- 上平田町内会自主防災会は、震災後の平成 24 年 9 月 1 日に設立さ

れた。活動地域は大字平田（上平田）で、災害特性としては、水害（上平田川の氾濫）や土砂災害（桃山地区からの土石流）が想定されている地域である。

- 「上平田町内会自主防災会規約」によると、組織編成は本部、情報班、消火班、救出救護班、避難誘導班、給食給水班の役割分担があり、実施事業として、
 - ・ 防災に関する普及啓発
 - ・ 地震等による被害を防ぐための活動
 - ・ 地震等の発生時における情報収集・伝達、初期消火、避難誘導、救出救護、給食給水等の活動
 - ・ 前号に関する訓練
 - ・ 防災資機材等の整備
 - ・ その他本会の目的を達成するために必要な事項
 が定められている。

イ）避難訓練

表 5-20 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
110 人（9%）	対象地区： 大字平田第 3～6 地割 ／人口：1,219 人

(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと

ア）特別養護老人ホームあいぜんの里

- あいぜんの里では、避難訓練は火災を想定しており、「通報・消火・避難」の訓練を年 2 回実施していた。地震、津波、土砂災害などを想定した訓練は実施していなかった。
- 火災発生場所によって、敷地内の第 1 避難場所から第 5 避難場所のいずれかへ避難することとしており、それ以外の避難については検討していなかった。

- 避難方法についての利用家族等への周知は、施設敷地内避難のみのため、特に行っていなかった。
- いざというときの連絡体制の整備状況は、施設への連絡は電話・徒歩によるものとし、施設から市への連絡は、電話、徒歩としていた。
- 日頃から備えていたことは特になかった。
- 震災当日の午前中、業者から向こう1週間分の食材が届いたばかりであったため、数日はしのげた。運がよかっただけであり、それが無ければ状況が変わっていたと思われる。

イ) グループホームもみじ苑

- もみじ苑での避難訓練の状況は、火災を想定して、消火訓練・避難訓練を年2回実施していた。そのうち1回は、釜石消防署、家族や運営推進委員、近所にも参加してもらい一緒に行っていた。
- 事前にあいぜんの里と災害時の協力を締結していた。津波の想定ではなく、主として火災を想定し、近火の場合も含めて避難することになっていた。苑の火災の場合は、近所の方にとりあえず避難させてもらうこともお願いしていた。
- 利用者家族等への周知方法（避難方法等について）は、入所時に説明し、運営推進会議や避難訓練の際にも説明していた。
- いざというときの連絡体制については、施設から家族へは電話での連絡とし、入所時に緊急時の連絡先を利用者代理人とその他にも記録していた。施設から市への連絡は、電話での連絡を考え、緊急時連絡網を作成していた。
- 日頃から備えていたことは、食料の備蓄、災害時備品の準備（懐中電灯・ヘルメット・防災ずきん・ろうそく・非常持ち出しリュック等）である。近所との交流や町内会行事を通して、協力依頼を呼びかけていた。

ウ) 平田地区生活応援センター

- 避難場所としては、平田幼稚園（平田集会所）に逃げることを把握していた。

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第4章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第3分団第3部

○ 水門を閉鎖し上から様子を見ていたら波が引き、平田湾の中は水がすっかりなくなり、湾口防波堤に波がぶつかっていて白くなっていた。マイク放送をしながら地域を巡回して避難誘導をしている最中に津波が来た。

○ 住民の方々の救助、孤立した方を旧釜石商業高校の体育館へ避難誘導した。毛布や食料、飲料水、暖房器具をかき集め避難所へ運び、夜が明けてからは取り残された住民の救助、遺体捜索を行った。

<12日以降>

○ 夜間には地域の見回りを行う。国道までがれきがあったので、重機を借りて撤去等行い、道路の確保をした。

イ) 消防団第3分団本部

○ 平田漁港内で作業中に地震があり、水門を閉鎖した。前任の部長が別の水門を閉めて合流した。その後浜にいた人たちに避難を促し、団員には住民を高台へ避難させるように指示した。私は歩きながら避難するよう叫び、その後自分の軽トラックに住民を乗せて平田幼稚園の裏へ上がり館山神社へ登った。いつもは埋立地の方まで避難勧告させるが、その日の地震は尋常ではない大きさだったので距離的・時間的なことを考慮してそちらには団員を行かせなかった。従来通りに行かせていたら団員たちが避難できない可能性があった。津波が来た後は、神社にいた住民たち、怪我をした人たち、また平田小学校に避難して

いた小学生を旧釜石商業高等学校避難所へ誘導した。

- 12 日、行方不明者の搜索、道を空けるためのがれき撤去を行った。
搜索は大体 1 週間程行った。

ウ) 上平田ニュータウン町内会自主防災会

- 集会所に 80 人以上の人が避難して来た。

<12 日以降>

- 3 月 12 日より炊き出しを行った。町内 766 戸の電気・水道・ガスが止まったため、避難者役員研修 80 名が集会所に避難をした。
- 「次の日から炊き出しを行った。たまたま 10 日にスーパーが開店したので食料を調達できたが、それがなかったら大変だった。」
- 「透析、インシュリン患者の救急要請、亡くなった方の対応を行った。実質 3 日間孤立した。」
- 「道路が開通してから食料をもらいに行ったら、『ニュータウンは被災していないから』『指定の避難所がないから』と言われ苦労した。」
- 釜石市自主防災会連絡協議会による「東日本大震災影響調査アンケート」では震災後の活動について次のように回答している。
 - ・孤立した。
 - ・避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、がれきの撤去、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、名簿作成（避難した人のみ）
 - ・避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し、ボランティア活動への参加、透析患者の救急車への連絡・インシュリン注射の為・怪我人の県立病院への搬送・薬の依頼受け取り、死亡者の警察への届け

エ) 平田町内会自主防災会

- 「平田集会所まで津波が来たので、旧釜石商業高校第 2 体育館に避難した。来られなかった人もいた。」

- 地域の証言によると、「自主防災会（平田町内会自主防災会と推定も要確認）は機能しなかったので、漁協の人たちが中心となり、毎朝体育館（避難所）の前でそれぞれの役割分担を指示して動いていた。遺体を別の体育館（第1体育館）に運び込んだり、津波で壊れた家屋の廃材を軽トラックで燃やして暖をとったりした。」
- 別の方からは、「21 年度に整えた防災組織は、当日みんな平田地区おらずバラバラであったことと、商業高校で防災訓練をやっていたものの、慣れていなかったり経験がなかったりしたために機能しなかった」という証言があった。
- 釜石市自主防災会連絡協議会による「東日本大震災影響調査アンケート」では震災後の活動について次のように回答している。
 - ・孤立した。
 - ・避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、けが人の救出や手当、行方不明者や遺体の搜索、道路復旧作業、がれきの撤去、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、名簿作成、その他（交通整理、水の運搬、トイレ等の設置）
 - ・避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し、被災者の自宅等への受入れ、義援金等の募集や寄付、ボランティア活動への参加、洗濯等の生活支援、高齢者の介護等、その他（町内会、漁業者の方々と行方不明者搜索）
- また、2013 年の調査では、次のように答えている。
 - ・①町内会の自主防があったが、3.11 の際には活動できなかった。
 - ②仮の自主防を立ち上げ、実施した。（町内会、漁協、婦人会など）

(3) 施設・団体等の避難行動

ア) 特別養護老人ホームあいぜんの里（特養あいぜんの里指定居宅サービス事業所 あいぜんの里デイサービスセンター）

- 当時、あいぜんの里の施設内には職員 40 名と、長期入所者 71 名、短期入所者 17 名、デイサービス利用者 18 名がいた。
- 地震の揺れが収まった後、職員は安否確認と施設内の破損状況の確認を行った。地震直後に状態の悪かった利用者 1 名が地震のショックから死亡した。
- 停電のため自家発電が作動したが、ガス供給はストップし、水道は貯水槽の水が 1 時間程してなくなり使用できなくなった。ユニット棟のスプリンクラーの破損で居住スペースが水浸しになったため、ユニット棟利用者 20 名を既存棟に移動した。また、停電でケアコールが使えない状態であり、長期的災害対応を予測して、施設中央の居室に利用者ベッドを集め対応することとした。デイサービス利用者はそのままデイホールで待機してもらった。
- 利用者の移動を完了し、15 時 30 分、職員は地域住民の受け入れ準備作業を行った。地域住民のほかに、災害応援協定を結んでいた 2 施設（グループホームもみじ苑・釜石保育園平田分園）が避難して来た。時間を追うごとに避難者は増え、津波後はけが人も運ばれて来て看護師が処置に当たるなどした。
- デイサービス利用者もそのまま泊まることになり、その夜、施設内は利用者、避難者、職員で 350 名前後になった。見守りが必要な利用者は食堂ホールにベッドを移し職員とともに過ごした。夜勤の職員は 1 名出勤してきたが、ほかの職員は途中の道路が寸断されたこともあって当日出勤できなかった。

<12 日以降>

- 施設にいる職員で 24 時間を 3 つに区切り簡易シフトを作成し、できるだけ交替で休む時間を作った。水の確保のため、男性職員や避難者で手分けして湧水を施設車両で運び、13 日以降は三陸カントリークラブの湧水を使わせてもらった。食事は 1 日 2 食、利用者と地域住民を優先して提供し、炊飯器のみ非常用電源を使用し、汁物等は中庭で炭

を起こして食事を作った。施設から避難者の移動はあったが把握しきれなかった。

- 13 日には非番だった職員が歩いて施設に来はじめた。上平田ニュータウンの炊き出し、医師の訪問があった。施設の状況報告や死亡診断書の提出のため、8 時に事務職員が徒歩で市役所に向かった。避難者 120 名程度、施設利用者 100 名前後、職員 4、50 名前後。食料不足になり、地域住民に協力を依頼し食料の提供を受けた。10 時 15 分に市職員 2 名が状況調査に訪れた。上平田町内会からも、市対策本部にあいぜんの里の状況を知らせたと報告があった。14 時 30 分、発電機用重油を確保した。夜には食料、水などの支援物資が届きはじめた。
- 14 日に自衛隊調査班が来所。発電機が故障した。釜石保育園平田分園ともみじ苑が退所し、17 時の時点で一般避難者 29 名、犬 2 匹が地域交流ホールに残っている状態だった。

イ) グループホームもみじ苑

- 当時、ホーム内には職員 3 名、長期入所者 9 名がいた。施設の代表と管理者は市民会館で研修中だったが、地震の後に施設へと戻った。
- 地震発生後の 15 時頃には職員の判断で、入所者を避難させるために車へ誘導し、まもなくあいぜんの里に避難を開始した。15 時 30 分頃にあいぜんの里に到着し、改めて協力を依頼し相談した。16 時 30 分頃に近所のスーパーで食料を購入しあいぜんの里に提供した。職員 1 名もこの頃駆けつけ、職員たちはあいぜんの里で高齢の避難者のお世話を手伝うなどしつつ、車のテレビで情報を収集した。夜は交替で入所者の見守りを続けた。

<12 日以降>

- 12 日、職員は交替で休憩を取りながら利用者の見守りを続けた。8 時頃と 20 時頃にあいぜんの里施設長と今後の協力について相談した。
- 米が不足していることを聞き、10 時頃にはもみじ苑に米やりハパンを取りに行って、米をあいぜんの里へ提供した。
- 13 日、被害や道路状況を確認したあと、今後の対策を話し合った。
- 14 日 6 時頃、職員 2 名が職員の安否確認に向かう。午前中には入所者と職員は全員帰苑した。

ウ) 平田地区生活応援センター

- 地震発生時は、職員 3 名のうち 1 名は休み、1 名は他地区で活動中であり、施設にいたのは 1 名だけであった。来所者はおらず、職員は施設に施錠し敷物を持って平田幼稚園へ徒歩で向かった。近所の高齢者 2 世帯に避難の呼びかけを行った（1 世帯は留守だった。もう 1 世帯も不在だったのでたまたま来ていた孫に声をかけた）。平田幼稚園では町内会の方々と行動し、園庭でシートを利用して風よけを作った。消防団の方から「津波が来たので、もっと上に上がれ」との指示があり、地元の方にしか分からない様な道を通って旧商業高校まで避難した。中国人研修生の方々も避難した。

第2項 尾崎白浜地区（第7～8地割）

1 被災状況

表 5-21 尾崎白浜地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
尾崎白浜	340 人	124 世帯	2 人	全壊 26 件	半壊 2 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

尾崎白浜には、4 基の津波石碑がある。

ア) 海嘯横没者供養塔

「海嘯横没者供養塔」は、標高 30m の共同墓地に設置されている。明治 30 年旧 7 月 15 日、和親講中により建立されたものである。明治津波の浸水線内だが、東日本大震災では線外になっている。

碑文の内容は、尾崎白浜地区における明治津波の犠牲者を追悼・供養するもので、慰霊型に分類されている。裏面には施主の個人名、寄付者や寄付金の記載がある。

表面の碑文は、次のように刻まれている。

緒言 海嘯の変化ハ明治廿九年六月十五日午後八時二十分頃尔して横没する者三百三十九人其中十六年以上の男六十三人同十六歳以上の女百〇人十五歳以下の男児三十三人同女児四十二人流漬家屋七十戸なり此嘯害に罹らざる者庵室と外壺戸あるのみ。茲に災死者追悼記念のため

水戸金作の外卅八人の施主相共に謀りて此碑石を建立し永久■■■を■■■
■■■。

石應寺十五代 大拙書



図 5-19 津波記念碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

イ) 三陸大津波犠牲先祖供養塔

「三陸大津波犠牲先祖供養塔」は、沿道に建てられ、標高 15m の位置にある。

昭和 47 年春の彼岸に、堀川豊弘（個人）（原文ママ）により建立された石碑である。尾崎白浜における明治 29 年の津波の犠牲者を供養するために建てられ慰霊型に分類されている。明治津波の浸水線内で、東日本大震災では線上に位置する。

表面には次のように刻まれている。

往昔から尾崎白浜の地は毎々大津波の災害を蒙っているが、特に明治二十九年六月十五日の如きは一瞬の間に全部落が大津波に吞まれ、家屋はわずか一戸を残すのみ。実に 375 人の生霊を失い、生存者は辛うじて 20 人を数えるという稀なる大惨事となり、まことに痛恨を禁じ得ないものがあつた。右に鑑み、大津波の襲来で非命をとげられた多くの先祖なら

びに海難事故による遭難者の御霊を久しく御慰籍したい。微哀をもって今回部落民一同の意志りここに供養塔を建立した。



図 5-20 津波記念碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

ウ) 大津波犠牲先祖霊位

「大津波犠牲先祖霊位」は、五輪塔の形状で、沿道にあり標高 15m に位置する。対象の津波は不明だが、昭和 40 年春彼岸、尾崎白浜町内会一同による建立となっている。東日本大震災では浸水線上である。

表面には「大津波犠牲先祖霊位」の文字と建立年月日等が刻まれており、慰霊型に分類されている。



図 5-21 大津波犠牲先祖霊位

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

エ) 中村重兵衛閼歴

「中村重兵衛閼歴」は、共同墓地にあり、標高は 22m である。建立者は不明、昭和 44 年に建てられたものとされている。

明治津波の浸水線内で、東日本大震災では線外である。

中村重兵衛氏は数え 117 歳（満 116 歳）で亡くなったが、昭和 44 年当時は長寿日本一だった。碑文には、明治 29 年の津波で家族を失ったことなどが書かれていて、石碑は祈念型に分類されている。

表面には次のように刻まれている。

嘉永五年六月十日誕辰、八歳ノ折海難ニテ父ヲ喪ウ。廿歳ヲ満タズニ家業ヲ継グ。明治廿九年六月十五日突如襲来ノ大津浪ニ家屋諸共家族全員ヲ失イ一人助カル。爾来千辛万苦ノ末一家復興成ル。後ニ漁業ト共ニ植林ニ精励ス。歳九十迄海ニ陸ニ労ヲ惜シマズ努力。昭和四十四年五月五日午前七時五十五分数ニ年百十七歳ニテ天寿ヲ全ウス。明治期ノ大飢饉ノ際未ダ大津浪ノ傷痕癒エザルニ流浪ノ難民ヲ救ウ。一家言「家ヲ離レテ働ク時不愉快ナル事アルモ帰ル跡ハ必ズ笑顔ニテ敷居ヲ跨ギ家人ヲ安心サセル事」



図 5-22 中村重兵衛関歴

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

なお、平成 25 年度に釜石市によって東日本大震災の津波浸水域に設置されていた石碑の状況調査が行われたが、当石碑については調査リストになく調査は行われていない。

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 佐須に住む先代から「大津波のときは山が鳴る」と聞いていた。今回も山が鳴った。
- 父親からは「津波は 3、40 年周期で襲来してくる」と聞かされていた。
- 明治三陸津波で高台に避難したという話を先祖から聞いたことがあり、津波が来たら、とにかく高い所へ逃げるという意識はあった。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、尾崎白浜地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-22 尾崎白浜地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
旧尾崎小学校校庭	大字平田第 7・8 地割の一部（尾崎白浜）

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-23 尾崎白浜地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
平田小学校体育館	平田

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される尾崎白浜地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-24 尾崎白浜地区における避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数	電話
旧尾崎小学校（尾崎白浜）	3 階	240 人	26-5131

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

尾崎白浜地区における自主防災組織としては、

- ① 尾崎白浜婦人消防協力隊
- ② 尾崎白浜町内会自主防災会

がある。

① 尾崎白浜婦人消防協力隊

- 尾崎白浜婦人消防協力隊は、漁業協同組合女性部により構成され、

消防屯所（尾崎白浜地区コミュニティ消防センター）を拠点に大字平田第7～9地割までを活動範囲とし、昭和62年7月7日に設立された。

- 震災以前の活動としては、防災学習会等防災知識の啓発活動の実施、防災訓練の実施、組織内外の会議、打合わせ等の会合、心肺蘇生法に係る講習などである。防災訓練（避難・誘導訓練、消火訓練、心肺蘇生法等）は毎年実施していた。

② 尾崎白浜町内会自主防災会

- 尾崎白浜町内会自主防災会は、大字平田第7～8地割を活動地域とし、平成22年10月25日に設立された。尾崎白浜町内会会員及び会の目的に賛同するものをもって構成され、事務所は尾崎白浜地区コミュニティ消防センターに置かれた。組織編成は、本部、情報班、消火班、救出救護班、給食給水班で、役割分担が決まっていた。
- 「尾崎白浜町内会自主防災会規約」によると、
 - ・ 防災活動の普及啓発
 - ・ 地震等による被害を防ぐための活動
 - ・ 地震等の発生時における情報収集・伝達、初期消火、避難誘導、救出救護、給食給水等の活動
 - ・ 前号に関する訓練
 - ・ 防災資機材等の整備
 - ・ その他本会の目的を達成するために必要な事項が実施事業として定められていた。

イ) 避難訓練

表 5-25 避難訓練参加者数・参加率（平成23年3月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成23年2月現在）
60人（18%）	対象地区：大字平田第7～8地割 ／人口：340人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第4章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第3分団第4部

- 水門の閉鎖活動。避難場所への指示
- 安否確認。見回り警戒

イ) 尾崎白浜婦人消防協力隊

- 避難所への避難者数は、400人にも上り、当日から約1か月半の間、炊き出しを行った。また、物資の受け付け、配給を行った。
- 釜石市自主防災会連絡協議会による「東日本大震災影響調査アンケート」では、震災後の活動について次のように回答している。
 - ・孤立した。
 - ・避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、名簿作成
 - ・避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し、被災者の自宅等への受入れ（受入れ2軒、3人）、義援金等の募集や寄付、高齢者の介護等

ウ) 尾崎白浜町内会自主防災会

- 釜石市自主防災会連絡協議会による「東日本大震災影響調査アンケート」では、震災後の活動について次のように回答している。
 - ・孤立した。
 - ・避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、行方不明者や遺体の搜索、道路復旧作業、がれきの撤去、救援物資の配布、行政との連絡・要

望等

- ・避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し

第3項 佐須地区（第9地割）

1 被災状況

表 5-26 佐須の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
佐須	98 人	26 世帯	0 人	全壊 12 件	半壊 3 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

佐須には津波石碑が 3 基ある。

ア) 海嘯記念碑

「海嘯記念碑」は、防潮堤から北西の位置にあり、標高は 3 m である。明治津波から 17 回忌の明治 45 年に建立され、慰霊型に分類されている。明治、昭和の津波、東日本大震災の浸水線内にある。

表面には「海嘯記念碑」の文字、裏面に複数の世話人名等がある。

(表面)		(裏面)	
海嘯記念碑		世話人	
石應十五世壯智賢書		佐々木	萬之助
明治四十五年十七回忌之辰建碑		佐々木	惣八
		佐々木	宇之助
		佐々木	猪又
		佐々木	佐々木 惣次郎
		佐々木	留之助
		佐々木	作兵衛
		勘之助	
		喜十郎	
		陸前井内	
		石材師	
		遠山義淳	

図 5-23 海嘯記念碑・石碑に刻まれた内容

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)



図 5-24 海嘯記念碑

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

なお、平成 25 年度に釜石市によって東日本大震災の津波浸水域に設置されていた石碑の状況調査が行われたが、当石碑についての調査は行われていない。

イ) 佐須浜海嘯記

「佐須浜海嘯記」は、防潮堤から北西の位置にあり、標高 3 m である。明治、昭和の津波、東日本大震災の浸水線内である。明治 29 年の津波による佐須の被害が記載され後世に伝えることとあり、教訓型に分類されている。建立年月日や施主等の名の記載はない。

表面には、図 5-25 のように刻まれている。

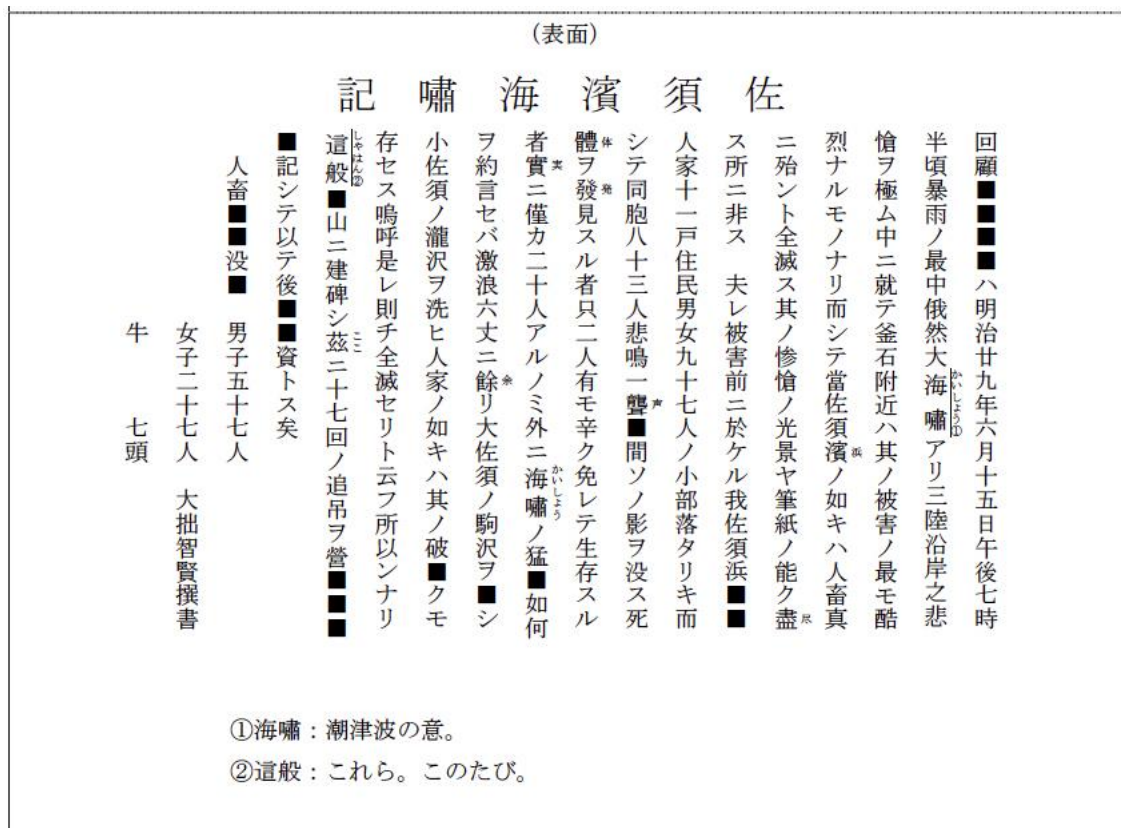


図 5-25 佐須浜海嘯記・石碑に刻まれた内容

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

図 5-25 の碑文だが「釜石の石碑」によると、9 行目の「二人」が「三人」、後ろから 2 行目の「女子二十七人」が「女子二十六人」となっている。



図 5-26 佐須浜海嘯記

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

なお、平成 25 年度に釜石市によって東日本大震災の津波浸水域に設置されていた石碑の状況調査が行われたが、当石碑についての調査は行われていない。

ウ) 海嘯罹災者之墓

海嘯罹災者之墓は、防潮堤近傍の西側、佐須神社の山裾にあり、標高は 8 m である。明治 30 年 6 月建立、施主は 3 名の連名（個人）である。石の左面に石碑建立の経緯、右面に明治 29 年の津波の犠牲となった者の氏名が刻まれており、慰霊型に分類されている。明治、東日本大震災の浸水線内である。

刻まれている文字は図 5-27 のようなものである。

死亡者

(右面)

番頭	大謀	岩井
岩間 勝次郎	西山 三之助	久保 内助
太田 傳四郎	竹本 清次郎	黒沢 松助
全 まつ	岩間 徳太郎	阿部 幸左衛門
小林 留之助	高沢 千代吉	佐々木 長次郎
森古 幸吉	前川 由松	全 松之助
竹沢 直吉	全 徳右衛門	全 庄左衛門
中村 吉太郎	全 仁左衛門	久保 内助
	陸中紫波郡 石工 藤尾	
	陸前桃生郡 石工 桜井	

明治二十九年

(表面)

海嘯羅災者之墓

申六月十五日 施主 古館 武兵衛

全 專 藏 岩 間 竹 藏

(左面)

大槌街古館武兵衛等以二三
 爲之大謀而竹本清次郎爲之顧勿外數十名
 從事於捕獲際此
 十有九名也嗚呼烈哉終爲海底之藻屑焉天窮海之
 必成益顧而至茲斯榮意慘憺不能措也頃者今堅我子相謀

請文余之不顧不文幸以塞責云尔

明治三十年夏六月 仲院建之

華山 樹 并書

(左面の碑文の意訳)

大槌の古館武兵衛ら 2〜3 名は…佐須の浜で…西山三之助、竹本清次郎ら十数名…この機会をとらえようと…。…19 名もの人が海の藻屑となってしまった、前代未聞の大津波の激しさを忘れることはできない。…この出来事を顧みることはいつか必ず益を成し、この場所をこの惨憺たる状態のままに放置しておきはしないだろう。私の子の縁者が相談し…私は幸いにもこの文を作ることを頼まれた。

* 碑文の一部が不詳のため、不明な部分を…で表現した。



図 5-28 海嘯罹災者之墓

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

なお、平成 25 年度に釜石市によって東日本大震災の津波浸水域に設置されていた石碑の状況調査が行われたが、当石碑については調査対象リストに記載がなかったこともあり、調査は行われていない。

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 明治、昭和の津波で家を流されたり、亡くなった方がいたことを聞いていたため、津波避難の備えを意識しており、震災時にも役立った。
- 津波は明治・昭和津波と同じくらいの所まで来た。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、佐須地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-27 佐須地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
佐須集会所	大字平田第 9 地割の一部（佐須）
佐須神社	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-28 佐須地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
平田小学校体育館	平田

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される佐須地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-29 佐須地区における避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数
佐須集会所（佐須）	1 階	50 人

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

- 佐須地区における自主防災会としては、佐須町内会自主防災会が平成 22 年 8 月 20 日に設立されている。活動地域は大字平田第 9 地割（佐須）で、事務所は佐須集会所に置いていた。組織編成として消火・救出救護・避難誘導・給食給水などの班があり役割分担が決まっていた。
- 「佐須町内会自主防災会規約」によると、
 - ・防災活動の普及啓発
 - ・地震等による被害を防ぐための活動

- ・地震等の発生時における情報収集・伝達、初期消火、避難誘導、救出救護、給食給水等の活動
- ・前号に関する訓練
- ・防災資機材等の整備
- ・その他本会の目的を達成するために必要な事項

が実施事業として定められていた。

- 平成 22 年度に補助金で資機材（作業ラジオ、LED ライト、ハンド型メガホン、アルカリ乾電池（単 3 型、単 2 型））を購入し整備した。

イ）避難訓練

表 5-30 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
53 人（54％）	対象地区：大字平田第 9 地割 ／人口：98 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア）佐須町内会自主防災会

- 釜石市自主防災会連絡協議会による「東日本大震災影響調査アンケート」では、震災後の活動について次のように回答している。
 - ・孤立した。
 - ・避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、道路復旧作業、がれきの撤去、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、名簿作成
 - ・避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し

第3節 鵜住居地区

第1項 鵜住居地区（鵜住居町第1～19・23・24地割）

1 被災状況

表 5-31 鵜住居地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成23年2月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成25年 1月22日)	全壊・半壊家屋数 (平成25年6月現在)	
神ノ沢 新田 上通 仲町 川原 新川原 日向	3,276 人	1,338 世帯	348 人	全壊 757 件	半壊 112 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

ア) 吊祭碑

常楽寺敷地内の標高 11m の位置に 1 基建てられており、碑銘に「吊祭碑」と刻まれている。明治 41 年 6 月 15 日に常楽寺 15 世を施主（原文ママ）として建立されており、碑文からも明治津波の犠牲者の十三周忌に慰霊を企図して建てられたものと読み取れ、慰霊型に分類されている。

明治、昭和津波の浸水線の外であるが、東日本大震災では浸水線上の位置となっている。

表書きは漢文で図 5-29 のように刻まれている。

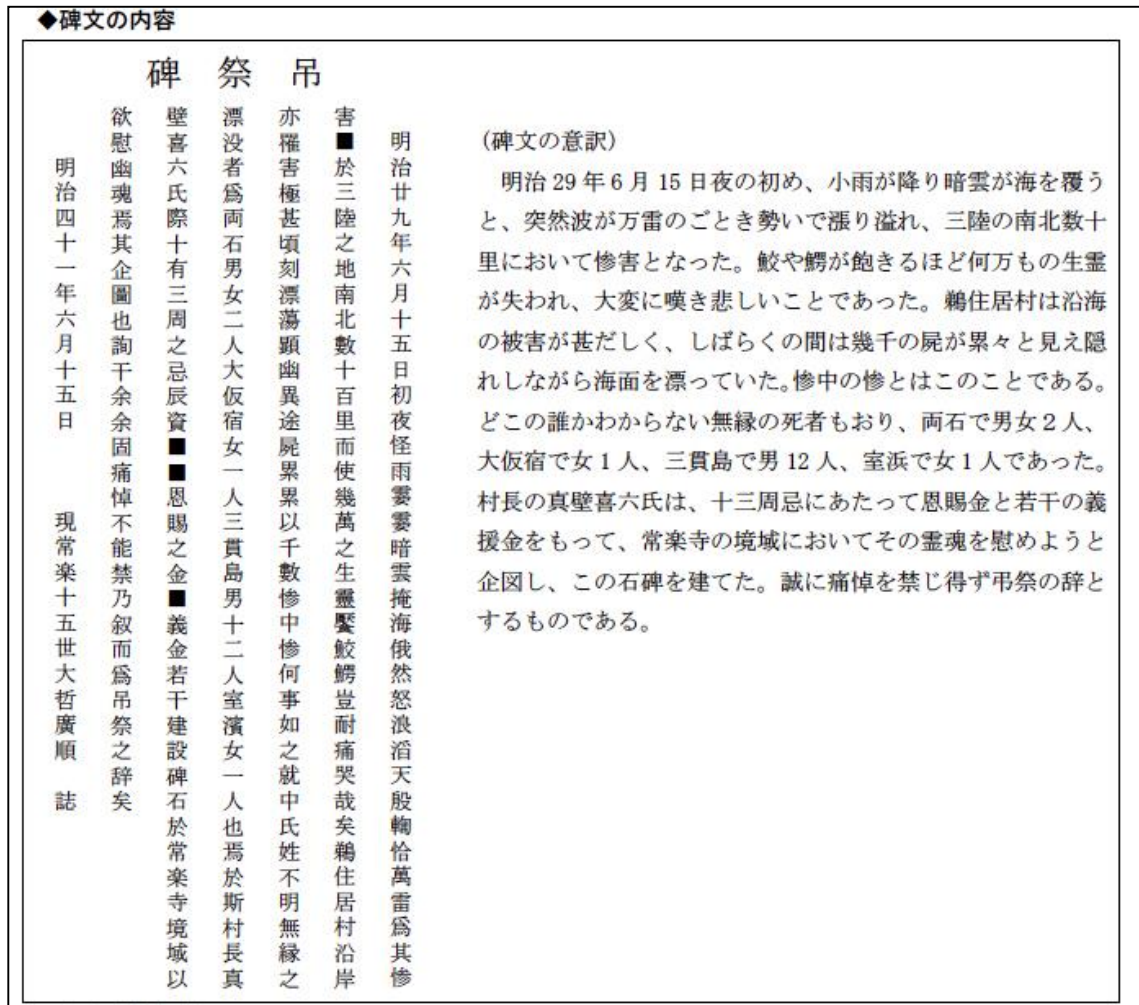


図 5-29 吊祭碑・石碑に刻まれた内容

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)



図 5-30 吊祭碑

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

なお、平成 25 年度に釜石市によって東日本大震災の津波浸水域に設置されていた石碑の状況調査が行われているが、当該石碑の所在は確認できず行方不明となっている。

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 大津波の場合、第 1 波より第 2 波の方が遥かに大きいのが来ると聞いた事がある。(3. 11 その時、私は 第二集)
- 大槌町の海岸近くで生まれ育ち、津波の話は何度も聞かされ、大地震の度に避難していました。三陸津波は地震から約三十分後。とにかく「逃げる」そして「戻るな」、物より命を守る事を深く身につけさせられて来たと思います。(3. 11 その時、私は 第一集)
- 母は「山田線に上がって高い方に逃げろ」と教えられていたと聞いた。
- 過去の津波(チリ地震)では、みのすけ沼付近まで浸水したと聞いた。今回の地震では、多くの住民は、まさかここまで来るとは思わなかった。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、鵜住居地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-32 鵜住居地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
やまざき機能訓練デイサービスホーム 前広場（旧 JA 集配センター広場）	鵜住居町第 11・12 地割の一部 鵜住居町第 14・15・16・17・18・19 地割
鵜住神社境内	
本行寺	
常楽寺裏山	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-33 鵜住居地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
鵜住居生活改善センター （鵜住居地区防災センター）	鵜住居町 片岸町 箱崎町
鵜住居小学校体育館	
釜石東中学校体育館	

※『釜石市鵜住居地区防災センターにおける東日本大震災津波被災調査報告書』（平成 26 年 3 月 釜石市鵜住居地区防災センターにおける東日本大震災津波被災調査委員会）の次の記述を踏まえ、本検証報告書では、「鵜住居生活改善センター」（鵜住居地区防災センター）と表記する。以下同じ。

○（24 頁）調査委員会が市の防災計画を調査したところ、〈中略〉（防災計画上は拠点避難所の欄に「鵜住居生活改善センター」と表記されているが、建て替え後の防災センターに機能が引き継がれていたと考えられ

る。一般に市の公共施設は災害時の避難所に指定されることが通常である。))

- (26 頁) 市が住民に対し、防災センターが拠点避難所である旨告知したのは、防災センター竣工直前となる平成 21 年 12 月発行のかまいし生活便利帳である。その他には平成 22 年 2 月 1 日の広報かまいしで、防災センターが地域防災拠点施設になる旨、紹介された。

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される鵜住居地区及び隣接する内陸の地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-34 鵜住居地区における避難者収容施設

避難者収容施設 (地区名)	階数	収容人数	電話
鵜住居上集会所 (鵜住居)	1 階	30 人	
鵜住居地区防災センター (鵜住居)	2 階	400 人	28-2470
鵜住居幼稚園 (鵜住居)	2 階	300 人	28-1733
新田神ノ沢集会所 (神田)	2 階	120 人	
長内集会所 (鵜住居)	1 階	110 人	

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

鵜住居町第 1 地割から第 24 地割の地域において、自主防災組織としては、

- ① 鵜住居仲町内会自主防災会
- ② 新田・神の沢町内会防災会
- ③ 長内自主防災会
- ④ 鵜住居上町内会自主防災会

⑤川原町内会自主防災会
がある。

① 鵜住居仲町内会自主防災会

- 鵜住居仲町内会自主防災会は平成 7 年 5 月 1 日に設立され、活動地域は鵜住居町第 16 地割の一部（国道 45 号、JR 山田線、長内川を境界とした区域）で、仲町内会によって構成されている。組織内には会長、情報班、消火班、救出救護班、避難誘導班、給食給水班等、役割分担が決まっていた。
- 「鵜住居町仲町内会自主防災組織」によると、
 - ・ 防災組織の編成及び任務分担に関すること
 - ・ 防災知識の普及に関すること
 - ・ 情報の収集、伝達に関すること
 - ・ 出火防止、初期消火に関すること
 - ・ 救出、救護に関すること
 - ・ 避難、誘導に関すること
 - ・ 給食、給水に関することが実施事業として定められていた。
- 自主防災訓練は震災前の 5 年の間に 2 回実施している。

② 新田・神の沢町内会防災会

- 新田・神の沢町内会防災会は、平成 15 年 4 月 1 日に設立され、活動地域は鵜住居町第 7～8、10、12 地割及び第 13 地割の一部（常楽寺参道を境とする区域）で、新田・神の沢町内会により構成されている。組織編成は、本部及び本部付、消火班、避難・誘導班、救出・救護班、情報・伝達班、給食・給水班があり役割分担が決まっていた。
- 「新田・神の沢町内会自主防災規約」によると、
 - ・ 地域の防災に関する知識の普及
 - ・ 災害発生時における情報収集・伝達、初期消火、救出・救護、避難誘導、応急手当に関すること

- ・防災訓練に関すること
- ・防災資材、機器に関すること

が実施事業として定められていた。

- 平成 15 年 11 月には、鶴住居町 13 地割内（常楽寺・五葉寮付近）で、（常楽寺裏山付近から近辺の五葉寮にかけての）林野火災を想定した訓練を実施した。

③ 長内自主防災会

- 長内自主防災会は、平成 21 年 7 月 23 日に設立され、活動地域は鶴住居町の日向・新川原で、日向振興会と新川原町内会に加入する世帯をもって構成されている。組織編成としては、本部、情報班、避難誘導班、初期消火・救出救護班、給食給水班があり役割分担が決まっていた。

- 「長内自主防災会会則」によると、
 - ・防災に関する知識の普及
 - ・災害に対する予防
 - ・災害の発生時に情報収集・伝達、避難誘導、初期消火などの応急対策
 - ・前号に関する訓練
 - ・資機材などの整備
 - ・その他本会の目的を達成するために必要な事項
 が実施事業として定められていた。

- 住民の安否確認体制、避難支援体制（高齢者等）なども備えていた。

- 自主防災訓練は、毎年行っており、市の防災訓練に併せて情報伝達訓練（電話）も行った。また、釜石東中学校の生徒とともに安否札の配布を行うなどしていた。

- その他に、断水に備えての地下水調査を行った。平成 22 年 10 月 3 日には、240 人が参加し独自で防災運動会を実施している。

- 平成 21 年度に補助金で資機材を購入し、ABC 粉末消火器、消火器格納箱、レスキューセット、ウルトラエコライト、トランシーバー、メガホンを整備した。また、震災の 10 日前に炊き出し訓練を実施し、

日赤の方の指導を受けて炊き出し袋 2,000 枚を購入し備えていた。

④ 鵜住居上町内会自主防災会

- 鵜住居上町内会自主防災会は、平成 21 年 6 月 28 日に設立され、活動地域は上町で鵜住居上町内会に加入する世帯により構成されている。組織編成は、本部、情報班、避難誘導班、初期消火・救出救護班、給食給水班がある。消火訓練、救助救護訓練、避難誘導訓練、給食給水訓練などの自主防災訓練を行っていた。
- 「鵜住居町上町内会自主防災会規約」によると、
 - ・防災に関する知識の普及
 - ・地震などに対する予防知識
 - ・地震などの発生時における情報収集・伝達、避難誘導、初期消火などの応急対策
 - ・前号に関する訓練
 - ・資機材などの整備
 - ・その他本会の目的を達成するために必要な事項が実施事業として定められていた。
- 平成 21 年度には補助金で資機材として発電機を購入した。
- 平成 22 年 8 月 8 日に 130 人参加の防災訓練を実施、10 月 24 日には上町内会独自で防災運動会を行った。

⑤ 川原町内会自主防災会

- 川原町内会自主防災会は平成 21 年 9 月 3 日に設立され、活動地域は鵜住居町の川原地区で、川原町内会に加入する世帯によって構成されている。組織編成は、本部、情報部、避難誘導・初期消火・救出救護部、給食給水部があった。
- 「鵜住居町川原町内会自主防災会規約」によると、
 - ・防災に関する知識の普及啓発に関すること
 - ・災害予防と備えの学習に関すること
 - ・災害発生時における緊急対応等に関すること
 - ・防災避難訓練の実施に関すること

・その他本会の目的を達成するために必要な事項
が実施事業として定められていた。

- 平成21年10月12日の自主防災会発足式において、51人が参加し、初期消火訓練、AED（除細動器）操作・心肺蘇生法、応急炊出し訓練等の防災訓練を実施した。
- 平成22年7月10日、30人参加で、鵜住居町鵜住神社道路向かいの祭場で、応急手当手法に係る講習、テント・拡声器等の紹介、参集した各班長から異常の有無を会長に報告、津波・土砂災害への備え等の訓練を実施した。
- 平成21年度に補助金で次の資機材を購入した。ヘルメット、手回しライト・ラジオ、安全ベスト、軍手、ウォータータンク、ろ過フィルター、丸型コンロ、固形燃料、メタルホイッスル、シート、ショベル、バチツル、かけや、頑丈箱、ワイドストッカー、拡声器、テント

イ) 避難訓練

表 5-35 避難訓練参加者数・参加率（平成23年3月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成23年2月現在）
330人（24％）	対象地区：鵜住居町第11～12、14～19地割 ／合算人口：1,399人

(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと

ア) 養護老人ホーム 五葉寮

- 五葉寮では、火災訓練のみ実施し津波訓練は実施していなかった。
この場所まで津波が来ないという思い込みがあり、施設外避難は考えていなかった。
- 避難方法の検討状況の保護者への周知方法については、特に記述がない。
- いざというときの連絡体制について、特に記述がない。

- その他、日頃から備えていて災害時にあって役立った物は、毛布、カイロ、懐中電灯、ラジオ、着替え、水、反射式ストーブ、自転車、新聞紙、筆記用具などである。

イ) グループホームございしょの里

- 火災・地震を想定して、年2回避難訓練を実施していた。
- 施設内庭が避難場所になっていたこともあって、どこに避難ということは考えていなかった。
- 避難方法については、利用者家族への周知は行っていなかったようである。
- いざという時の連絡体制は、電話連絡としていた。
- その他、日頃から備えていたことは、緊急時用の食品、水、毛布、緊急時用家族一覧表である。

ウ) やまざき機能訓練デイサービスホーム

(ただし、第25地割で対象地域から外れているが、参考として掲載した。)

- 消防署立ち会いの下での火災訓練を年2回、津波避難訓練を年1回実施していた。
- 送迎時の避難経路の確認は全職員で行っていた。施設からの避難方法のマニュアルを作成して訓練を行っていた。
- この施設は高台にあるため、保育園、小学校、中学校や近隣住民の避難所としての指定を受けていたので、避難所を想定して全職員で検討会を行っていた。
- 利用者家族などへは、避難方法等に関して、連絡帳にて報告していた。
- いざというときの連絡体制は、携帯よりいつでも電話連絡ができるように、車に連絡先一覧表を置いていた。送迎時に施設内で待機している職員に連絡をして、待機職員から全職員に連絡ができるように連絡体制を話し合っていた。
- その他、日頃から備えていたことは、備品の整備（備蓄品）確認を

行っていた。内容は、飲料水、米、オムツ、尿とりパット、リハパン、ティッシュ、トイレットペーパー、ウェットティッシュ、ポータブルトイレ、アルコール、手袋、マスク、汚物物入れ袋、ホッカイロ、懐中電灯、電池、衣服、下着、タオル、灯油、リヤカー

エ) 障害者福祉サービス事業所 わらび学園（鶺住居分園）

- わらび学園鶺住居分園では、地震や火災を想定しての避難訓練を年に各2回実施していた。
- 内容は、地震・火災ともに園庭への脱出、園舎から遠い場所で、すぐに広い県道に出られる場所への一次避難の訓練であった。
- 余り歩けない利用者のために、組立式のアルミ製リヤカーを準備していた。
- 津波の場合の避難場所に関しては、特に記載がない。
- 周知に関しては、訓練について保護者に連絡していなかった。
- いざというときの連絡体制は、施設から保護者（家族）へ、施設から市へ、電話連絡を考えていた。
- その他日頃から備えていたことは、地域の広報が定期的に配布され津波の時の避難場所も書いてあったので、目を通していた。また、地域の人たちと日頃から親しくするよう努力していた。
- 震災当日も、地域の方にも声を掛けていただいた。

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第4章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第6分団第1部

- 屯所から根浜地区の水門に向かう途中、鶺住居小学校に寄ると、校

門付近にはスクールバスが待機していた。自動車のラジオから大津波警報を知り、学校へ行くと生徒が避難をしていなかったの、職員室の前に行き、すぐに避難をするように強く職員に指示を出した。生徒や職員が避難を始めたのは消防の半纏の力だと思う。その後、また根浜地区の水門に向かうと、水門は部長他数人の団員により閉鎖されていたので、小学校の避難誘導に向かうと言うと、部長より「行け」との指示があり、すぐに学校へ戻った。小学校へ戻ると、山側の門より避難をしていたが、保健室に男の子が一人残っていた。靴がなく、先生もいないということなので、はだしで走って避難をさせた。ございしょの里に着き小学校と中学校の児童・生徒全員無事を確認し、消防無線を使い全員避難を消防車（6-1）に伝えた。裏山が崩れていた、余震で岩が崩れてくるのではと思い、教師に更に上に行くべきことを伝えた。次の場所へは中学生が小学生の手を引いて避難をしていた。やまざきデイサービスに集合した時、すぐ近くに津波が来ていたので、近くの山に登るよう小学校の副校長に指示をした。副校長はハンドマイクを使い、近くの山へ向かうように呼びかけたが、約半数の子供たちは恋の峠に避難した。

その後恋の峠に集合をし、釜石市内の学校に避難するというので、近くの自動車工場よりペンチを借りて三陸道のネットを切り、登り場所を確保した。その後は消防団員や地元の人々と協力して多くの人を救助した。

- 地震後屯所に駆けつけるとすでにポンプ自動車はいなかった。サイレンを鳴らしたが鳴らなかった。ほかの団員も行っているはずなので担当の水門3カ所が有る根浜に車で向かった。うちの管轄の水門まで行ったら団員がいて水門閉鎖の報告を受けた。6、7mの大きい津波がくると今放送されているから学校（鶴住居小学校・釜石東中学校）に行って避難させろと、団員4、5名にポンプ車で向かわせ、自分だけ軽トラックでその場に残った。根浜の旧道と箱崎に行く道路や海端にできる道路を通らないように工事用の4mくらいのパイプに足がついたもので塞いだ。それから20分くらいしたらだんだん潮が引き、逃げる準備をして様子を見ていた。根浜の町内の方々もきていた。

第1波が来た。その間に本部のポンプ自動車（2名乗車）が来た。そのポンプ自動車と自分の軽トラックで頂上まで行き、車を頂上に置い

て3人で箱崎方面に歩いていったら第2波が来た。16時半過ぎには鵜住居に行こうと、車に有った懐中電灯を持ち3人で箱崎寄りから山に上がった。山中で大槌町赤浜から室浜に山林作業に入っていた方3名と出会い、一緒に鵜住居まで移動した。さらに行くと根浜の避難者20人位がいた。根浜の避難者のことは本部に連絡することにし、それから4時間歩き峠から赤浜で火が出ているのをみた。山を越えて鵜住居側に来ると、何人かが火を燃やして濡れた体を暖めていた。そこから神社へ、恋の峠の道路を回りがれきを乗り越えてむかい、その途中に大槌の3人とは三陸道の所で分かれた。神社につくと火を燃やしていたが、既に何人かは山を越えてお寺などに移動していた。お寺につくと、消防団の第6分団第8部か、あと町内会の方々もいたので、お墓のところで火を燃やしながら過ごすことになった。

<12日以降>

- お寺の近くにある老人ホームが被災し上の方の建物に避難していたが、明け方救助隊が来るということで、高齢者の方を部落の人たちと担架で運んだり、裏山を歩いて救助活動を行った。第6分団第5部に身を寄せて消防団活動を行った。
- 大槌の山火事が片岸に延焼してきたのでその消火活動。長内集会所を基地として活動。出動したが水利がなく、トンネルの中から消火器を6本位持ってきて消火作業にあたった。翌日には家が一軒焼けてしまった。
- 防災センターで遺体の身元確認作業。
- 見回り。怪しい車のナンバーをメモして警察に届けた。
- 各分団から何人かずつ、朝の2時に紀州造林に集合し遺体の搬送。
11トンの保冷車に11体から15体位を乗せて秋田と青森に運んだ。
- 各地にバラバラになった鵜住居町の避難者に、今の状況などを知らせて歩いた。

イ) 消防団第6分団第5部 (川目)

- 団員2名と直ちに町内のパトロールに出動した。3時20分頃、日ノ神橋から鵜住居川が黒い激流とともに高さ3m位となって逆流してきたのを目にし、すぐに県道を封鎖してこれより先に行かないよう交通

誘導にあたった。橋から先は水とがれきに埋め尽くされた。

<12 日以降>

- 12 日、五葉寮から入所しているお年寄りを背負い、山道を廻り、トラックで避難所となった栗林小学校までピストン輸送した。また、警察、市民から遺体収容の要請があり、紀州造林跡地まで輸送した。身元確認後の遺体を棺に入れる作業にも従事し、その数は数百人にのぼった。また、大槌町から発生した火災が片岸山を越え延焼してきたため、不動沢から 4 部の中継を受け、消火活動にあたった。西に 1 キロ程離れた所に LP ガスの大型貯蔵タンクが 2 基あり、大惨事を招く恐れがあり、昼夜を通して警戒し、数日後に自衛隊の空からの消火も加わり、鎮火することができた。

ウ) 消防団第 6 分団第 8 部 (新田)

- 鵜住居川の堤防の防水扉 3 ヶ所を閉め、東中学校裏の水門、次は長内川の成ヶ沢水門へと走行している時、小学生の列が恋の峠へ向かって走っている様子を確認しながら、成ヶ沢水門を閉め、次は恋の峠へ向かうルートだったが、小学生が走って避難していたのでルートを変更して、鵜住居駅裏、防災センター横の市道を通り日向の水門へ向かった。日向の水門を閉め、国道 45 号線へ。最後に旧北高校前の水門を閉め終わるとゆっくり走りながら屯所へ到着し、消防署へ水門を閉めた時刻の電話連絡をしたが、電話が不通で報告はできなかった。
- 日ノ神橋で、川を遡ってくる家、すさまじいがれきの光景。そばにいた人たちで 2 人の人を助けた。

エ) 消防団第 6 分団本部

- 第 6 分団は地震発生後には水門閉鎖、避難喚起・避難場所への誘導をし、津波襲来後は避難場所への誘導・搬送、12 日からは行方不明者の搜索を町内会と協力しながら行った。片岸の山火事にも対応した。
- 屯所（鵜住居地区防災センター）に行き、ポンプ車を運転し 6 分団の部長と 2 人で根浜の水門に向かった。根浜のカーブで津波がくるのを目にして上に逃れた。15 時 40 分、対岸の赤浜等で煙が出ていた。ポ

ンブ車を置いて歩いて山を越え、17 時半頃に根浜の人たちが焚き火をしている所に出た。東の沢、西の沢を通り宝来館も見て行こうと下がったら津波が来て山に上がった。山中で 3 名の方と国道まで同行することになった。峠を目指し山裾を恋の峠の方まで行き、そこから 45 号線をそのまま下った。神社に行くと、民生委員の 0 さんが一生懸命やっていた。大槌の 3 人とは三陸道で分かれた。常楽寺に行く途中、鶯住居郵便局の屋上から助けを呼ぶ声がしたが、浸水しており、がんばってくれと声をかけるしかなかった。22 時半頃、常楽寺は本堂が水没し皆はお墓の所で火を焚いていた。養護老人ホーム五葉寮の避難者は流されなかった民間の建物に入れてもらっており、我々は野宿をした。大槌の山火事、ガスの爆発音が聞こえていた。

<12 日以降>

- 12 日、五葉寮の人たちを集会所に運んだりしているうちに、紀州造林に遺体が 3 体運ばれてきたので身元確認を行った。
- 屯所に寝泊まりしたが、発電機の油が不足し、避難所ではないから物資の支給もほとんどなかった。
- 大槌の山火事が延焼した時、大分の消防車 30 台位がきて川から水を引いて消火を行った。また、水がなく、消火器 4 本をトンネルから持ってきて家の回りの火を消したが、その後家が一軒焼けてしまった。

オ) 鶯住居仲町内会自主防災会

※被災。震災後のアンケート等資料がなく詳細不明。

カ) 新田・神の沢町内会防災会

- 東日本大震災後のアンケートには、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。

※被災

- ・避難所運営、道路復旧作業、がれきの撤去、救援物資の配布
- ・避難所運営サポート、ボランティア活動への参加
- ・交通整理

キ) 長内自主防災会

- 「被災当日は孤立し、無政府状態。血眼で消息を探し歩いた。」
- 東日本大震災後のアンケートには、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。

※被災

- ・震災で新川原地区は約 90%被災。以下、日向地区を中心に記入する。
- ・孤立した（避難者含め 150 世帯 450 人の食料品不足 物資集め 4 日目～ 1 週間後市長陳情 孤立につき支援願）
- ・避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、けが人の救出や手当、行方不明者や遺体の搜索、道路復旧作業、がれきの撤去、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、防犯・消防、名簿作成、その他（消防車無線にて救急車要請）
- ・避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し、被災者の自宅等への受入れ（受入れ 20 軒、40 人）、その他（医者 of 定期巡回願⇒震災 3 月中 3 回受診）
- ・お米の提供があり 3 日間おにぎりづくり続けた。震災 10 日前炊き出し訓練実施（日赤 4 名の方々の指導受） 炊出し袋(2,000 枚)購入・入荷直後の震災で大活躍した。がれき除去、道路復旧、おにぎり提供などとなり隣の町内会の支援があった。食料物資の分配・配達 約 1 か月続けた。在宅避難者へ、さらに 1 か月続けた。
- ・①炊き出し活動。直前の訓練が役立った。炊き出し班 30 名。災害直後 3 日：10,000 個のおにぎり作り。②がれき撤去作業。救命救急班。(30 名) 近隣自主防（外山）の協力を受けた。

ク) 鶴住居上町内会自主防災会

※被災。震災後のアンケート等資料がなく詳細不明。

ケ) 川原町内会自主防災会

- 鶴住神社避難場所で避難者（負傷者、高齢者）への介護、治療などを日中行った。自主防の資機材がとても役立った。

(3) 施設・団体等の避難行動

ア) 養護老人ホーム五葉寮（五葉寮いきいきデイサービスセンター）

- 地震発生時、入浴中だった 3 名は直ちに着替えさせ居室へと誘導した。停電のため館内放送が使えず、職員は入所者に対し居室で待機するように指示した。避難して来た地域住民を集会室に案内した。
- 職員はカーラジオで大津波警報が発令された情報を得て、津波だと大声で叫びながら避難を促した。施設長の指示で建物裏山の作業所へ避難誘導を開始したが、誘導中に施設内への浸水がはじまり、途中で入所者 1 名が死亡した。
- 地域住民と合わせ 130 名くらいで作業所に避難したが、建物に入りきれなかった人は外で焚き火をして寒さをしのいだ。果物の缶詰、自動販売機の飲み物を入居者と地域住民に提供した。

<12 日以降>

- 12 日、作業所から移動することとなり、消防団、地域住民の協力により担架、車椅子、キャタピラなどで山道を 30 分ほど歩き、その後、バスにて 5～8 km 離れた 3 か所に分散して避難した。13 日には基幹集落センターの一か所に一元化し入所者 48 名デイサービス利用者 20 名職員 21 名で避難生活が始まった。22 日に岩手県内陸の養護老人ホームに分散し入所することになった。

イ) グループホームございしょの里（ございしょの里デイサービスセンター）

- 当日施設にいたのは、グループホームの職員 3 名と長期入所者 18 名、デイサービスは職員 7 名利用者 18 名である。
- 地震後、職員は入所・利用者の安全確保を行い、入所・利用者はその場で待機した。15 時頃に職員が入所・利用者を 2 階に避難誘導した。
- 近隣住民（鵜住居小学校・釜石東中学校生徒も含む）が施設内や庭に避難して来たが、その後、敷地内で岩が崩れて危険だということで移動した。

- 津波が襲来し、16 時頃に職員は施設内のヘドロ等の除去を行った。
入所・利用者は2階で待機した。

<12 日以降>

- 12 日 8 時頃、職員 2 名が近隣施設に行き状況を話すと、主治医から甲子へ避難するように言われた。9 時頃施設近くに来た消防団員に助けを求め、グループホーム入所者 18 名、デイサービス利用者 18 名を職員と消防団員で三陸道に誘導、自力歩行困難者は担架等で運んだ。釜石小学校へ避難し一晩過ごした後、13 日に甲子小学校へバスで移動した。

ウ) 障害者福祉サービス事業所わらび学園鶴住居分園

- 当時施設には職員 1 名、園舎内作業中の利用者 6 名がおり、施設外作業で市内新日鐵構内に職員 1 名と利用者 5 名がいた。
- 園舎では地震後、職員は作業を中断させ、利用者を園舎の外に誘導し避難のために送迎バスに乗せた。
- 施設外作業から園に戻る途中に地震にあった利用者と職員は、そのまま園に戻って避難準備に当たった。のぞみ病院で行われた研修会に参加していた職員 2 名は、地震後に園に戻った。あわせて職員 4 名利用者 11 名で、3 台の車に分乗して避難することになったが、公園に避難するというのを「本園」と聞き間違えて 2 台が大槌町の本園に行き、1 台が近隣の日向にある公園に向かうという分散避難となった。
- 日向に避難した職員 2 名と利用者 1 名は、公園に避難したが周辺に他の 2 台が見当たらず、更に奥の県営アパート付近に移動して車で一晩過ごした。本園へ向かった職員と利用者は「蕨打直集会所」（大槌）に避難した。

<12 日以降>

- 本園にむかった職員と児童は「蕨打直集会所」に 2 泊して 3 日目帰宅した。日向に避難した職員 2 名と利用者 1 名は、翌日（12 日）利用者を家に送り届けた。

第2項 根浜地区（鵜住居町第20～22地割）

1 被災状況

表 5-36 根浜地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成23年2月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成25年 1月22日)	全壊・半壊家屋数 (平成25年6月現在)	
根浜	173人	67世帯	14人	全壊75件	半壊1件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

根浜地区において、津波記念碑に類するものの存在は現在のところ確認できていない。

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- お父さんから「津波は3倍で来る」と聞いていたので、当日には「津波警報が3mと聞いたら、9m来るぞ」とみんなで話し合っていた。
- 根浜の人たちは、海の状況を見ながら、高いところ高いところへ移動する、「海を見ることが重要」と認識していた。
- 津波てんでんこの言い伝えは知っており、てんでばらばらに高台に避難することを徹底した。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、根浜地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-37 根浜地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
根浜富王姫神社境内	鵜住居町第 20 地割の一部（根浜） 鵜住居町第 21 地割（根浜） 鵜住居町第 22 地割の一部（根浜）
東の沢	
宝来館（避難ビル）	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-38 根浜地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
鵜住居生活改善センター （鵜住居地区防災センター）	鵜住居町 片岸町 箱崎町
鵜住居小学校体育館	
釜石東中学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される根浜地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-39 根浜地区における避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数	電話
根浜レストハウス（根浜）	2 階	90 人	28-1757
根浜海岸健康福祉センター（根浜）	2 階	120 人	28-1757
根浜集会所（根浜）	1 階	60 人	

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

根浜における自主防災組織としては、「根浜親交会防災部」がある。

- 根浜親交会防災部は、平成 15 年 1 月 3 日に設立され、活動地域は鵜住居町第 20～22 地割（根浜）で、根浜親交会に加入する世帯によって構成されている。組織編成は、防災部長、防災副部長、防災部事務局、一班、二班、三班となっていた。
- 「根浜親交会防犯防災部（自主防災）の規約」によると、
 - ・防災に関する知識の普及に関すること
 - ・災害予防に関すること
 - ・この部の目的を達成するために必要な事項
 - ・その他必要な事項が実施事業として定められていた。
- 避難・誘導訓練は、毎年実施していた。
- 防災部では、事前に各家庭に乾パンなどを配布していた。

イ）避難訓練

表 5-40 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
17 人（10%）	対象地区：根浜 ／人口：173 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア）根浜親交会防災部

- 被災した。
- 高台に避難場所が無いので、木の枝を集めて焚き火をした。要援護者の見守り。夜が明けてから高齢者 3 人をタンカで宝来館まで運んだ。
- 釜石市自主防災会連絡協議会による「東日本大震災影響調査アンケート」には、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。
 - ・ 孤立した。
 - ・ 避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、行方不明者や遺体の搜索、道路復旧作業、がれきの撤去、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、名簿作成
 - ・ 避難所運営サポート、炊き出し、被災者の自宅等への受入れ（受入れ 80 軒、100 人）、洗濯等の生活支援、高齢者の介護等
- 平成 25 年 7 月に行われた自主防災会連絡協議会総会では次のような証言が出ている。
 - ・ 震災当日は全滅。避難場所もダメで、奥の墓地で 1 晩過ごし、水が引いてから宝来館で 1 週間くらい過ごした。
 - ・ 高齢の方が、宝来館での避難所生活で、雑魚寝のため体調を悪くした方がいて、家族が来て大槌の避難所に引き取った。

第3項 両石（両石町第1～3地割）

1 被災状況

表 5-41 両石の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
両石	614 人	261 世帯	45 人	全壊 231 件	半壊 3 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

両石には3基の津波記念碑があり、恋の峠付近の国道 45 号脇に並んで建っている。標高 20mで、かつては更に海に近い位置（昭和津波の浸水線）にあったが、移転して現在の位置になったということである。移転前も後も明治津波の浸水線上であったが、移転後は東日本大震災の浸水線上に位置している。



図 5-31 3基の津波記念碑

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

ア) 「両石海嘯記念碑」 (「紀」は石碑の写真ママ)

明治 35 年 7 月に建立されたもので、碑文の内容は明治の津波についてであり、津波の災禍を子孫に伝えていくために作られたものと思われる。慰霊型に分類されている。

表面には漢文で図 5-32 のように刻まれている。

【岩手 116】	大きさ：高 167 cm幅 75 cm厚 14 cm	標高：20m
	<p>明治三十五年七月 北海居士廣田忠藏撰并書</p> <p>離生死岸 棹無底船 塊兮其瞑 月朗海天</p> <p>一踢踢翻 這邊那邊 碧波萬頃 好箇墓田</p>	<p>両石海嘯記念碑</p> <p>此碑可滅矣此恨不可滅也縱令雨洗苔蝕碑字摩滅 子孫傳之口碑長語明治二十九年六月十五日海嘯 之災當時災水之所波及涉干三陸沿海百里之地以 両石一邨猶喪七百九十人其全生於狂瀾之中者僅 二百四人而已何其慘也強弩射潮而難殺海若之威 精衛填海不能滅冤鬼之恨今也生者之淚凝成貞珉 刻文設祭以修冥福石雖小而其功德也大然則此恨 可滅矣此碑不可滅也銘日</p>

図 5-32 両石海嘯記念碑・石碑に刻まれた内容

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

(碑文の意訳)

この碑が滅しようとも、この恨みは消えない。たとえ雨に洗われ、苔に蝕まれ、文字が摩滅しようとも、明治 29 年 6 月 15 日の津波災害を昔からの言い伝えとして子孫に伝えよ。

当時、津波災害を受けた所は三陸沿海百里の地に及んだ。両石一村においてもやはり荒れ狂う大波の中で 790 人が命を落とし、生き延びた者はわずか 204 人という痛ましいものであった。強い石弓をもって海水を射ても海の神の力を封じることが難しく、今もって死んだ者の恨みを減ずることはできない。

涙にくれて生き残った者は、文を刻んで弔うことで冥福を祈る。石は小さいけれど大きな功德である。

恨みは消え去ってもこの碑が消えることはない。

一切のものは掃き尽くされ あちらこちらに 青い波が広々と広がり 墓にはちょうど良い

生死の岸を離れ 底なしの船に棹差し 土塊（つちくれ）は暗く 月は明るく海は果てしない

図 5-32 の碑銘の部分だが「記念碑」となっている、実際は「紀念碑」である。また碑文 6 行目「精衡填海」は誤植で実物は「精衛填海」である。



図 5-33 両石海嘯紀念碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

イ) 「海嘯記念碑」

建立年月日等は不明であるが、石碑の表面には次のように刻まれ、明治津波を対象にして建てられたものと推察されている。慰霊型に分類されている。

表面には以下のように刻まれている。

海嘯記念碑

従三位伯爵南部利恭書

明治二十九年六月十五日



図 5-34 海嘯記念碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

ウ) 「津浪記念碑」

昭和津波を祈念し東京朝日新聞社読者の義援金によって建てられたもので教訓型に分類されている。建立は昭和 10 年 3 月 3 日、施主は鵜住居村である。

石碑には次のように刻まれている。

表面：大地震の後には津浪が来る 英彦

裏面：地震ノ時午前二時三十分

津浪襲来午前三時

本碑ハ東京朝日新聞社読者ヨリ寄托サレタル義捐金同社ガ各町
村ニ分配シタル残金ヲ以テ建立シタルモノ也

昭和十年三月三日建設 鵜住居村長 古川徳次郎

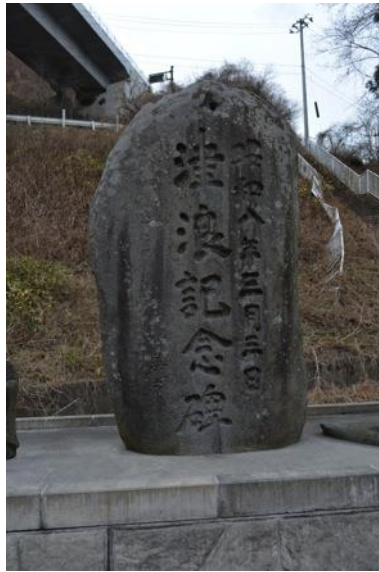


図 5-35 津浪記念碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 縦揺れが来たら、津波が来るっていうことを昔から教えられていた。
縦揺れはともかく逃げろって。(岩手県釜石東部漁協管内 東日本大震災に関わる聞き取り調査報告書)
- 恋の峠を津波が越えたために「越えの峠」が語源となったことについても、学者の方々は誰もそのことをいいませんでした。
- 命てんでんこはてんでばらばらになって逃げろという意味ではなく、率先して即逃げろ、あるいは共倒れ防止という意味です。てんでばらばらになって逃げろという意味ではありません。
- 昭和 8 年以降、私の人生で戦争という出来事がありましたので、現実的に教訓の風化というよりも教訓が不毛であった、育つような土壌がなかったということを私はずっと言ってきました。政府によって、軍隊によって止められた経緯がありましたので、そういう状態において、我々が生きてきた結果として、津波の教訓は語られてこなかったわけです。
- 明治・昭和三陸大津波後に造成された場所（2 号地から 4 号地まで）の住民は自宅が高台にあるため、津波を甘く見ていた部分があった。また、国道沿いや海岸付近の住民のうち約 30 名が 2 号地にある実家や親戚のもとへ避難し、犠牲となった。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、両石・水海地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-42 両石・水海地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
旧両石保育園	両石町第 1 地割の一部（両石） 両石町第 2 地割の一部（両石） 両石町第 3 地割の一部（両石） 両石町第 4 地割の一部（水海） 両石町第 5 地割（水海）
あさひ公園	
千島墓地前広場	
水海高台	
厳島神社境内	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-43 両石・水海地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
両石漁村センター	両石町 箱崎町の一部（桑の浜）

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される隣接する内陸の地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-44 両石・水海地区における避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数
女遊部集会所（女遊部）	1 階	20 人

※両石・水海地区内には、避難者収容施設は所在していない。

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

両石においては、自主防災組織として、

- ① 両石婦人消防クラブ
- ② 両石町自主防災組織

がある。

① 両石婦人消防クラブ

- 両石婦人消防クラブは、昭和 58 年 7 月 3 日に設立され、両石町第 1 ～ 5 地割を活動地域としていた。取り組みとしては組織内の役割分担、避難訓練の実施などをしていた。
- 両石婦人消防クラブは両石町自主防災組織の防災委員になっており、初期消火班に組み込まれている。

② 両石町自主防災組織

- 両石町自主防災組織は平成 22 年 12 月 1 日に設立され、活動地域は両石町第 1 ～ 4 地割、両石町内会（水海、女遊部地区を除く）の世帯をもって構成されている。組織編成は、本部、情報収集伝達班、初期消火班、避難誘導班、緊急搬送班、救出・救護班、炊き出し班、避難所管理班などとなっており、他に要援護者搬送委嘱者を 12 班に分けて決めていた。両石婦人消防クラブも両石町自主防災組織の中に組み込まれていた。活動拠点は通常は両石漁村センター、大津波罹災時は旧両石保育園跡地に決めていた。
- 「両石町自主防災組織規約」によると、
 - ・ 防災に関する知識の普及・啓発に関すること
 - ・ 地震等に対する災害予防に資するための地域の災害危険箇所の把握及び各班ごとの要援護者名簿の作成に基づく避難支援体制の即

応に関すること

- ・緊急車両体制（担当者の委嘱）に関すること
- ・防災訓練、津波避難訓練の実施に関すること
- ・地震等の発生時における情報の収集・伝達、避難誘導、出火防止並びに初期消火、救護、炊き出しの応急対策に関すること
- ・防災資材・機材等の備蓄に関すること
- ・他組織との連携に関すること
- ・その他、本会の目的を達成するために必要な事項

が実施事業として定められていた。

- 防災の日、春季及び秋季火災予防運動期間等、防災関係諸行事の実施する時期に併せて防災知識の普及啓発を行ってきた。組織内で物資の備蓄、住民の安否確認体制、避難支援体制（高齢者等）、ワイヤレスハンドマイク等を備えていた。

イ) 避難訓練

表 5-45 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
99 人（16%）	対象地区：両石町 ／人口：614 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第 6 分団第 2 部

- 両石港水門の閉鎖確認。水海水門操作室に行き水門閉鎖作業を行う

が、停電の為、遠隔操作ができず、発生直後に来ていた団員がポンプ車にて直接現地で閉鎖作業を行った。町内に戻り避難誘導後、屯所から逃げる際、寝たきりの父の救助を求めて娘2人が来た為、団員3人で軽トラの荷台にマットごと乗せて旧両石保育園まで避難した。

○ Tさんが津波が来たことを教えてくれて、軽トラに親子を乗せ避難を開始した。道中、避難者を乗せていき避難所へ向かう。第2波で避難所である旧両石保育園まで津波が来たことから、山の上に避難した。

○ 屯所へ行き、津波警報のサイレンを鳴らそうとしたが停電のため鳴らなかった。2人でポンプ車を出して出動した。手動の水門を閉めにいったが、消防OBや漁師の方が閉めてくれていたので、水海水門を閉めるために水海の遠隔操作室に向かった。遠隔操作室は停電のため自家発電に切り替わっていたが、機械自体がエラーを起こし遠隔操作ができない状態だった。他の人も駆けつけて遠隔操作室付近に4人いた。手動で閉めるために水門に直接向かったが、手動での訓練はした事が無く、どうにか動かしたが、4つの門全てで同じように機械の所まで階段を上って作業して下りてを繰り返すうちに海の水が引いてきたので、作業を終えた時点ですぐポンプ車に乗り込んだ。国道に向かう途中で整備工場の従業員が川の状況を見ていたため避難させるため車を降りたが、既にいなくなっていたので、三陸道に上がった。

○ 地震発生から10分頃、両石第一水門へ向かったがすでに閉鎖済みだった。屯所に向かって車を走らせる途中でポンプ車とすれ違い、水海水門遠隔操作盤へ向かえとの指示があり操作盤へ向かった。ポンプ車に乗っていた2人と操作室に入ったが、故障し警報機が鳴っており遠隔操作できなかったため、手動で水海水門を閉鎖しようと3人でポンプ車に乗り向かった。水海水門操作室へ向かう間も海面の水が引き、海底が見えていた。操作室へ入ってから地震（余震）が続いていた。部長も合流し2人ずつに分かれ、手動で閉鎖する作業を行った。3カ所（4カ所？）（原文ママ）あった門のうち、1カ所（もしくは2カ所）は、地震で門自体が壊れていたのか半分ほどしか閉まらなかった。これ以上閉鎖は困難ということで、もう一度遠隔操作盤に向かおうとポンプ車へ乗り走らせたが、ホリデー車検やユニオンに水門を見ている人がいたため、一度45号線に上がり水門操作室の川向いにあったユニオン近辺を避難を促しながら走り、45号線に上がろうと折り返した

ところ、水門を越え津波が押し寄せてきた。

- 水海水門に向かうポンプ車を発見し、水海水門へ向かう。ポンプ車に乗っていた班長より、両石の水門・門扉・遠隔操作室の件などの事情をききながら、手動で水海水門の閉鎖を行った（４名）。左右の陸閘は半分ほどしか閉まらなかったが津波がいつ来てもおかしくない状態にあったため避難した。途中、ユニオン付近で人が水門方向を見て集まっていたため、ポンプ車が避難を促すためそちらに向かい、私は水海地区の避難誘導に向かった。釜石レミコン、八幡建設、小野食品の従業員に避難を促し、国道 45 号線に上がり遠隔操作室まで避難した。
- 遠隔操作盤付近でこれ以上車が通行できないように車を横に止め、山へ駆け上がった。
- 45 号線に上がり遠隔操作室まで避難したが、第一波が襲来し前を走っている車が見えなくなったので、道路を封鎖するため自分の車を横付けに停める様指示し、ポンプ車に移り女遊部の方に避難した。
- 避難場所も 1 m ほどの波を受け、避難してきた車 20 台が波により流れ、1 名が逃げ遅れ車にはさまれる。その後救助したが胸部圧迫の為、翌日亡くなる。
- 恋の峠付近のがれきの上に 1 名発見し、部長ら 3、4 人で救出して医者に見てもらうが、その日のうちに亡くなった。夜はあさひ公園へ避難した。ポンプ車にあったトランシーバー 4 台を各避難所に分けた。

<12 日以降>

- 消防団は解散することなくそれぞれの避難所で待機している状態だった。
- 12 日、消防団の誘導で、女遊部の集会所で移動（消防団の拠点に）

<13 日以降>

- 女遊部へ避難後、大槌町の火事が、管轄内に入ってきたと消防無線で連絡が入った。震災から 3 日目の夜、古廟坂に、鶴住居と両石、片岸地区の 6 分団の消防団員が集まった。消防服がないので、消火には行かせられないというのが条件だったが、ホースの延長を頼まれ、ホースの先を 2 つに分けたが伸ばした先に消防職員がいなかったので結果的に消火活動を行う。
- 女遊部の集会所に 1 ヶ月程待機。自衛隊と一緒に合同捜査と立ち会い遺体確認をした。消防団員は来れる範囲で集まって活動した。自分

の会社の社長から消防活動を優先するようにも言われていた。遺体確認は顔の確認が困難だった。

- 消防団は人数を把握し、消防団の車で、両石の避難者全員分（200 人分）を貰いに行く。

<日付不明>

- 片岸町山林火災の消火活動を行う。頂上付近では安全帯のないままの消火活動となり落下の危険と隣り合わせの作業だった。

- 室浜の火災消火活動。ポンプ車車載品以外の消防活動用具一切を失った中、応援での出動だったが、消防服もないまま消火活動を行った。

- 紀州造林の遺体安置所での応援を行った。

イ) 両石婦人消防クラブ

- 東日本大震災後のアンケートには、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。

- ・避難所運営
- ・避難所運営サポート、炊き出し

ウ) 両石町自主防災組織

- 東日本大震災後のアンケートには、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。

- ・孤立した。
- ・避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、けが人の救出や手当、行方不明者や遺体の搜索、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、名簿作成、その他（大震災記録書作成（個人による））

第4項 水海地区（両石町第4地割）

1 被災状況

表 5-46 水海地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成23年2月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成25年 1月22日)	全壊・半壊家屋数 (平成25年6月現在)	
水海	61人	31世帯	0人	全壊12件	半壊13件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

水海地区において、津波記念碑に類するものの存在は現在のところ確認できていない。

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

明治の津波の際に、地域に住家が約100戸あった中で僅かしか助からなかったという話を先祖から聞いたことがあった。

過去の津波は、この地域まで上がって来たことは聞いたことがある。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

前述の第3項両石地区を参照のこと

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

設立されていなかったが、両石婦人消防クラブ（前述の第3項両石地区を参照のこと）の活動地域に水海地区も入っている。

イ) 避難訓練

表 5-47 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
記載なし	対象地区：水海 ／合算人口：61 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第4章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

消防団第6分団第2部の管轄は、水海地区を含む両石町全域であるため、消防団の動きに関しては、第3項両石地区の記載を参照のこと

第5項 片岸地区（片岸町第1～9地割）

1 被災状況

表 5-48 片岸地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
片岸	662 人	275 世帯	33 人	全壊 181 件	半壊 18 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

片岸町の津波石碑は2基あり、国道45号脇の、館稲荷神社山裾標高10mに隣接して設置されている。



図 5-36 2基の津波石碑

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

ア) 「南無妙法蓮華經八大竜王鎮座」

碑銘「南無妙法蓮華經八大竜王鎮座」は、表面に「天長地久国土安穩、海上安全村内繁栄」「維持明治二十九大海嘯之年」と刻まれており、建立は明治津波のあった明治 29 年、施主は木川榮吉（個人）で、慰霊型に分類されている。

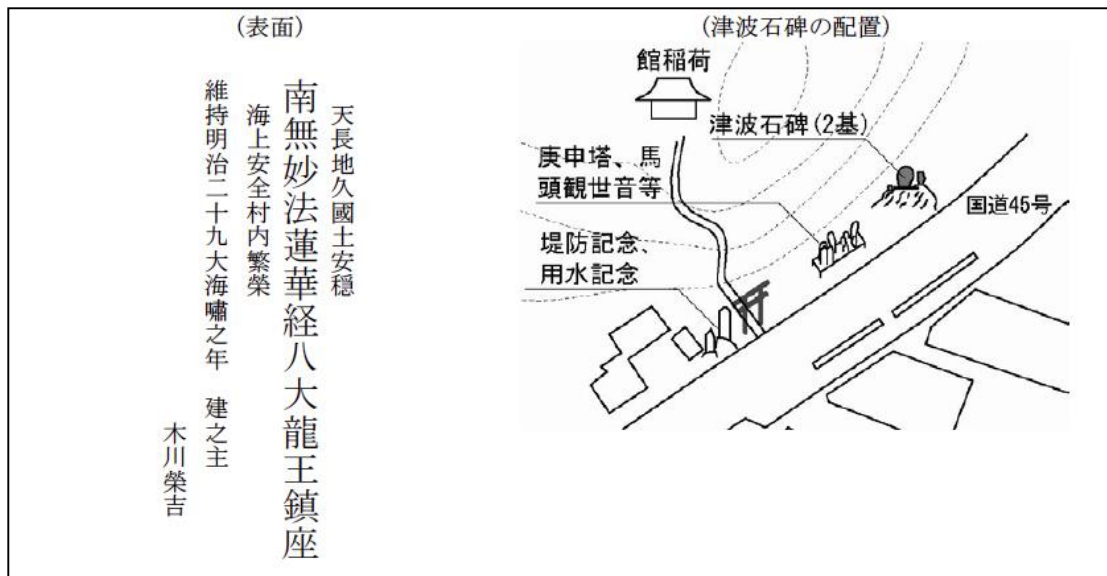


図 5-37 南無妙法蓮華經八大竜王鎮座・石碑に刻まれた内容・津波石碑の配置

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)



図 5-38 南無妙法蓮華經八大竜王鎮座

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

イ) 「津浪記念碑」

もう 1 基は昭和津波後の建立で、碑銘に「津浪記念碑」、昭和 10 年 3 月 3 日建立、施主は鵜住居村で、次のように刻まれていることから、東京朝日新聞社義援金により作られたものである。教訓型に分類されている。

表面：大地震の後には津浪が来る 英彦

裏面：地震ノ時午前二時三十分

津浪襲来午前三時

本碑ハ東京朝日新聞社読者ヨリ 寄托サレタル義捐金同社ガ各町村

ニ分配シタル残金ヲ以テ建立シタルモノ也

昭和十年三月三日建設 鵜住居村長 古川徳次郎



図 5-39 津浪記念碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- ここから上栗林に行く途中、「田郷」という場所がありますが、それは昔、そこまで波が入ったことがあって「タコ」が出たから「田郷」、それから「カラゲイ」という地名も、ここら辺でエイのことなんですが、昔の人の話ですけれど、嘘じゃなかったんだなあと。昔、津波が来ていたんですね、すぐそこまで。私が以前、年取った人から聞いた話ですけれどね。(岩手県釜石市片岸地区東日本大震災に関わる聞き取り調査報告書)
- 昔、小さい時から、「二波、三波のほうが大きいよ」と教えられてきました。(岩手県釜石市片岸地区東日本大震災に関わる聞き取り調査報告書)
- ただ、海が濁ったときはもう大津波が来る、このことはよ〜くお袋から聞いていた。(岩手県釜石市片岸地区東日本大震災に関わる聞き取り調査報告書)
- (言い伝えでは) 沖さ行っても、(海が) 濁っている渦になっている所は危険、青い海だったら大丈夫。
- 田んぼを代かき(しろかき)したような濁り。海底の泥が濁ってるの。「ああこれではダメだ。津波来る」としゃべって。

- （海が）濁っている渦になっている所は危険、青い海だったら大丈夫。（岩手県釜石市片岸地区東日本大震災に関わる聞き取り調査報告書）
- 1892 年（明治 25 年）、1933 年（昭和 8 年）の 2 回の津波、特に昭和 8 年の津波のことは、ばあちゃんから聞いていてよくわかっていました。昔は観世音神社の鳥居のところまで行けば大丈夫だから、そこまでは逃げねばって、子どもころから教わっていたし、室浜の人もそれをほとんど知っていたんです。（岩手県釜石市片岸地区東日本大震災に関わる聞き取り調査報告書）
- これまでの津波（昭和三陸津波やチリ津波）で、堤防の決壊場所が同じで、その都度高くしていたのだが、そこだけに注意していた。
- 幼い頃教わったのは、命てんでんことという言い方でした。
- それと我が地域にも、ケイバイというところがあります。仮設の小中学校が建ったところがケイバイというところ、あのあたりまで津波が到達したということです。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、片岸地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-49 片岸地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
道地沢団地	片岸町第 1 地割 片岸町第 2 地割の一部 片岸町第 3・4・5・6・7 地割 片岸町第 8・9 地割の一部
不動沢	
片岸稻荷神社境内	
下片岸沢	
古廟坂高台	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-50 片岸地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
鵜住居生活改善センター (鵜住居地区防災センター)	鵜住居町 片岸町 箱崎町
鵜住居小学校体育館	
釜石東中学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される隣接する地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-51 片岸地区における避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数	電話
鵜住居上集会所（鵜住居）	1 階	30 人	
鵜住居地区防災センター（鵜住居）	2 階	400 人	28-2470
鵜住居幼稚園（鵜住居）	2 階	300 人	28-1733
新田神ノ沢集会所（神田）	2 階	120 人	
長内集会所（鵜住居）	1 階	110 人	

※片岸地区内には、避難者収容施設は所在していない。

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

片岸町における自主防災組織としては、「片岸町自主防災会」がある。

- 片岸町自主防災会は、平成 16 年 4 月 1 日に設立され、活動地域は片岸町第 1 ～ 9 地割で片岸町内会により構成されていた。事務所は片岸集会所に置いていた。組織編成としては、本部の下に消火班、避難誘導班、救出救護情報班、給食給水班があり役割分担が決まっていた。

消火班の中には消防団第 6 分団第 4 部部員全員も組み込まれていた。
ほかに、住民の安否確認体制、避難支援体制（高齢者等）の備えがあった。

- 「片岸町自主防災会規約」によると、
 - ・ 防災の知識の普及に関すること
 - ・ 地震等に対する災害予防に関すること
 - ・ 地震等の発生時における情報の収集伝達、初期消火等の初期処置、
救援、避難誘導等の応急対策に関すること
 - ・ 防災資機材の備蓄に関すること
 - ・ 防災会の目的を達成するために必要な事業
が実施事業として定められていた。
- 平成 21 年度には補助金で次の資機材を購入した。トランシーバー、
ポリタンク、携行缶、毛布、救急箱、発電機、ドラム、土嚢袋、腕章。

イ) 避難訓練

表 5-52 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
105 人（16%）	対象地区：片岸町 ／人口：662 人

(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと

ア) あお空グループホーム釜石 あお空小規模多機能センター釜石

- あお空グループホーム釜石では、津波避難の訓練は実施していなかった。火災・地震の想定では、年 2 回屋外への避難訓練を実施していた。
- 津波の避難場所に関しても、高台で避難場所に隣接した施設だったため、移動の想定はしていなかった。
- これらの状況を利用者家族等へは口頭、施設だよりで全員に周知していた。

- いざという時の連絡体制は、電話連絡にて行うことを検討していた。
- その他、日頃から備えていたことは、飲料水用の水缶の用意、石油ストーブの用意などで、震災時に実際役に立っている。

イ) かまいしワーク・ステーション

- かまいしワーク・ステーションでは、火災を想定した避難訓練を年2回、1回は消防署員立会いの下で毎年実施していた。
- 避難を要するような災害時は、職員の誘導により、片岸町第2地割の高台に避難することとしていたが、高台というのみで場所は特定していなかった。
- いざという時の連絡体制は、施設から保護者への連絡及び市への連絡については、全て電話で行うこととしていた。

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第4章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第6分団第4部

- 水門閉鎖、避難誘導
- 水門閉鎖、避難誘導、地域警戒
- 屯所のシャッターを開け待機していると、消防団員が一人来たのですぐに消防車を動かし2人で水門の閉鎖に向かった。
- 片岸の河口に1か所、堤防沿いにスライド式ゲート3か所、計4か所の水門を閉鎖することになっていた。車で水門に向かうと、消防ポンプ1台に2名（1名は消防団OB）が乗り駆けつけており、自動で閉鎖する水門が動かなかったので手動に切り替え水門を閉鎖した。消防団OBの1名を避難させ、自分はポンプ車に乗って他のゲートの閉鎖を

行った。途中、消防団員と合流し3名で、残っている人に避難を呼びかけるため片岸漁港に向かった。漁港にいた3名が避難してくるのを確認し、室浜に向かおうとする人へ戻るように呼び掛けるうちに潮が上がって来た。

- 集落の中に入り避難を呼びかけている途中で波が堤防を越えて来た。道地沢団地まで避難した。鵜住居から流されてきた方を救助し、あお空グループホーム釜石の建物へ入れてもらった。自分たちは消防団の仕事へ戻る。
- 生存者、遺体の捜索を行い、6名亡くなっている方を発見した。職業訓練機関の教員住宅近く（屋外）に消防団は待機し、外で赤色灯を回していた。4日以降そこに構えていた。
- 避難して来た人に名前と住所を書いてもらう。

<12日以降>

- 12日（土） 朝から行方不明者の捜索を行い、見つかり次第道地沢団地のアパートの一室を借り収容した。
- 13日（日） 夕方から、4ヶ所に避難している人たちを道地沢団地に集め、上栗林集会所に避難させた。
- その夜から大槌で発生した火災の火が山を伝って片岸側に回ってきた為、夜を徹して消火活動を行った。その後消火活動は19日まで続いた。
- 職業訓練機関の教員住宅に5体のご遺体を収容した。
- がれきを燃やして暖をとる。ポンプ車はガソリンもなかったので、エンジンはなるべくかけないようにしたが、救出した女性の方で半身浸かった方がいたので、ポンプ車に入れ、エンジンをつけたり消したりした。
- 室浜から2名の病気の方が担架（戸板ベニヤ様のもの）で運ばれてきて、ポンプ車の無線で中継し救急車に引き渡した。
- インシュリンが無くて大変な状態だったので、救急車に中継した。
- 古廟坂トンネルの出口より煙が見えたので住民の方に山から離れるように指示し、道地沢まで移動した。
- 釜石市消防署の署長さんの消防車は鵜住居で動いていた。その消防車の指示で、こちらの消防団は動いていた。しかし、消火活動をするにも水がない。当初は遠野市からもポンプ車が来ていたので、何十台

かで中継して消火をした。7班、ガード下あたりから水源をとってトンネル手前まで、道路わきをずっとポンプ車で並んだ。その途中で津波警報が出されたので、放水をやめて、皆、撤収。残っている住民に避難を呼びかける。

- 片岸の住民が避難所に入った後も、消防団の仕事として夜の巡回があった。残っている地域の巡回も実施。片岸地域の土建業者が事務所を提供し、拠点とする。（避難所だと迷惑がかかるから）

イ) 片岸町自主防災会

- 東日本大震災後のアンケートには、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。
 - ・ 孤立した。
 - ・ 避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、行方不明者や遺体の搜索、道路復旧作業、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、名簿作成
 - ・ 避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し、
 - ・ 炊き出し、避難誘導、消火活動

(3) 施設・団体等の避難行動

ア) あお空グループホーム釜石（あお空小規模多機能センター釜石）

- 当時在所していた職員は介護員 10 名、入所・利用者はグループホーム 9 名、登録ショートステイ 6 名、通所 13 名、自宅 4 名で、施設管理者は市内にて研修会に参加しており留守だった。
- 地震発生直後、施設では一時室内で待機した。外では、企業の職員・住民・通行中の人が続々と高台に避難してきていた。
- 15 時 18 分頃には所長が来所し、直後津波が襲来した。職員と利用者は数m高い避難場所に全員避難した。避難して来た一般の方が避難を手伝った。16 時過ぎには全員施設に戻ったが、一般者及びけが人なども施設内に受け入れ、夜までに 50 名以上になった。

<12 日以降>

- ライフラインが遮断され、職員は施設内にて利用者及び住民避難者への食事提供に追われた。入所・利用者は、職員の介護の元全員ホールで過ごしていた。
- 3月13日には山林火災が広がり、近くの山まで来ているということで、施設の者はほとんど橋野地区の集会所に移動したが、一部移動困難な入所・利用者は救急車で病院に搬送された。施設閉鎖となり、その他一般の避難者は各自の判断で移動した。

イ) かまいしワーク・ステーション

- 地震発生時の利用者は29名で、14時55分、事業所内にいた職員10名の誘導で全員北側駐車場に避難した。
- 15時10分、5名の職員は歩行困難な利用者（車椅子利用者2名と歩行困難な利用者10名）を車に分乗させ、3名の職員は他の利用者（15名）と徒歩で、利用者1名は自己所有車で、高台の介護施設「あお空グループホーム釜石」に避難した。大槌町の利用者1名は所有する車で帰宅した。
- 2名の職員は避難が遅れたことで介護施設への避難は困難となり、施設車両で三陸自動車道から旧釜石第一中学校へと避難した。施設外にいた職員1名が通行止めになる前に事業所に帰着したが、その後旧釜石第一中学校へ避難した。

<12日以降>

- 12日、介護施設に避難した職員と利用者は引き続きそこに避難を続けた。
- 13日、2名が家族の迎えで帰宅し、1名は自己所有車で避難所へ向かった。大槌在住職員は大槌町からの利用者6名を自宅や避難所に送り、釜石市在住職員は旧釜石第一中学校避難所で合流後、市内利用者を自宅まで送り届けた。道路が通行止めで帰宅できない利用者が1名いたが、14日に職員が自宅まで送り届けた。

第6項 室浜地区（片岸町第10地割）

1 被災状況

表 5-53 室浜地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成23年2月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成25年 1月22日)	全壊・半壊家屋数 (平成25年6月現在)	
室浜	197人	78世帯	21人	全壊83件	半壊3件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

室浜地区では、県道吉里吉里釜石線の脇（沿道）の標高10m地点に2基の津波記念碑が隣接して建っている。どちらの石碑も明治・昭和津波の浸水線外だが、東日本大震災では浸水域内となり被災している。

ア) 「海嘯記念碑」

1基は明治津波後に建てられた「海嘯記念碑」で、碑面には「明治廿九年旧五月五日 海嘯記念碑」とのみ刻まれ、建立年月日や施主等是不明である。同サイトでは、「慰霊型」に分類されている。



図 5-40 海嘯記念碑

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

なお、平成 25 年度に釜石市によって東日本大震災の津波浸水域に設置されていた石碑の状況調査が行われているが、所在地は津波の被害を受けており、この石碑の所在を確認することができなかった。

イ) 「津浪記念碑」

もう 1 基は碑銘に「津浪記念碑」と刻まれ、施主は鵜住居村、昭和 10 年 3 月 3 日に建立とある。表面、裏面には次のように刻まれていることから、昭和 8 年の津波後に東京朝日新聞社による義援金で建立されたものと思われる。同サイトでは「教訓型」に分類されている。

表面：大地震の後には津浪が来る 英彦

裏面：地震ノ時午前二時三十分

津浪襲来午前三時

本碑ハ東京朝日新聞社読者ヨリ寄托サレタル義捐金同社カ各町村
ニ分配シタル残金ヲ以テ建立シタルモノ也

昭和十年三月三日建設 鵜住居村長 古川徳次郎



図 5-41 津浪記念碑

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

平成 25 年度に行われた釜石市の調査では、転倒した状態で確認されている。



図 5-42 津浪記念碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 観世音神社の鳥居まで行けば大丈夫と、祖父母から聞いていた。
- 室浜ではすぐ裏手に山があるので、「地震が来たら遠くに行くのでは

なく高いところに駆けあがること」と聞いていたし、話をしていた。

- 私の家はいくらか高い場所に建っていましたので、「津波はここまで来た事はない」と両親から聞いていました。
- 震災の１年前に鰯が大量に捕れた。明治三陸津波の際にも、来襲前に大漁の日が続いたという逸話があった。
- 明治、昭和の津波について、先祖から聞いていたが、防潮堤が完成していたので、まさか津波は来ないと油断していた。
- 昭和８年の津波の話はよく聞いてた。散歩している時も、他の沿岸の町に行っても、「どこに避難すればよいのか」をいつも感じ、考えていた。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、室浜地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-54 室浜地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
室浜稻荷神社境内	片岸町第 10 地割の一部（室浜）
一本松公園	
観世音神社境内	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-55 室浜地区の拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
鵜住居生活改善センター (鵜住居地区防災センター)	鵜住居町 片岸町 箱崎町
鵜住居小学校体育館	
釜石東中学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される隣接する地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-56 室浜地区に隣接する地区の避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数	電話
鵜住居上集会所（鵜住居）	1 階	30 人	
鵜住居地区防災センター（鵜住居）	2 階	400 人	28-2470
鵜住居幼稚園（鵜住居）	2 階	300 人	28-1733
新田神ノ沢集会所（神田）	2 階	120 人	
長内集会所（鵜住居）	1 階	110 人	

※室浜地区内には、避難者収容施設は所在していない。

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

室浜地区における自主防災組織としては、室浜自主防災会がある。

- 平成 22 年 7 月 1 日に設立され、活動地域は、片岸町第 10 地割（室浜）、室浜町内会会員及び会の目的に賛同するものをもって構成するとしていた。事務所は、鵜住居公民館室浜分館に置いていた。組織編成は、本部、情報班、消火班、避難誘導班、救出救護班、給食給水班となっており、役割分担を決めていた。
- 「室浜自主防災会規約」によると、
 - ・ 防災活動の普及啓発
 - ・ 地震等による被害を防ぐための活動
 - ・ 地震等の発生時における情報収集・伝達、初期消火、避難誘導、救出救護、給食給水等の活動
 - ・ 前号に関する訓練
 - ・ 防災資機材等の整備

・その他本会の目的を達成するために必要な事項
が実施事業として定められていた。

- 防災訓練は毎年実施しており、平成 22 年 11 月 7 日には消防署鶴住居出張所の対応の下で 86 人参加の避難訓練、消火訓練等を実施した。
- 平成 22 年度には補助金で資機材を購入し、クセノン集散光強力ライト、ヘッドライト、非常用液体ローソク、拡声器、災害少人数用救急箱、防水シート、担架、腕章を整備した。公民館の倉庫を資機材置き場とした。

イ) 避難訓練

表 5-57 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
80 人（41％）	対象地区：室浜 ／人口：197 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第 6 分団第 7 部

- 室浜地区の入り口、高台に消防車をはじめ多くの地区住民が避難をしていた。
- 水門 3 か所閉鎖後、ポンプ車の団員に避難誘導を指示し、家に帰り半纏とヘルメットを持ち又海岸へ来た。釜石吉里吉里線の片岸側の方に避難し、途中 3、4 人に高台に避難するよう声をかけた。避難後 5 分位して海の水が引け、第 1 波が来た。

- 避難した場所の下の方にポンプ車を置いていたが、30m位上に流された。第2波が避難場所まで上がり、引き波の時に女の人が倒れて流された。私が左側から腕をとって支えたが、膝下位の水で支えきれず一緒に流されそうになり、もう一人の消防団員と2人で救出した。
- 消防車からハンド無線を取り出し情報収集を行うも、なかなか分団本部、他部への交信ができない状態が長く続いた。夜遅くなってから、少しずつ他部と交信ができるようになる。その夜は地区内の避難住民の確認作業となった。

<12日以降>

- 12日（土） 朝から避難者の安全な場所への誘導が始まる。大槌町からの山火事が広がってきており、危険な状況になってきた為である。倒壊した家の中から高齢の女性を消防団員と地域住民の協力の下で運び出し、がれきの中での作業は困難を極めた。孤立状態が続き、食料を確保するため他地区へ炊き出しをがれきの中を何キロも歩くことになったことも困難であった。
- 道路のがれき撤去。食料確保。道路整備。避難者で山中を1時間かけて移動。
- 13日の日は自衛隊のヘリで50人位避難し、1回目のヘリは病人を優先して釜石県立病院等へ運んでもらった。あと3機位は大槌方面へ運んでもらった。
- 13日（日）、大槌町からの山火事が室浜地区内にも発生。自衛隊のヘリコプターにて、それぞれの避難所へ地区住民が避難となった。
- 3日目（原文ママ）、火事が心配で消防団員5名と部落へ戻る。火は海岸まで来ていた。ポンプ車は水をかぶったためエンジンがかからず、可搬ポンプを降ろして消火活動を行う。
- 震災4日目、仙台から室浜に戻り消防団の下活動。シーサイド民宿の下に火が入ってきたので、水を張る。県外の消防署に託し釜石小学校に避難し一晩泊まった。室浜に戻ったあと、大分の消防署員と片岸で消火活動をし（山に水18～19kgを背負っていく）、大体5日目に鎮火した。その後、遺体確認を行った。警察からは手をつけないようにと言われていたので確認のみだが、4体くらい確認した。

イ) 室浜自主防災会

○ 津波当日は家にいた。すごい地震で、津波が来ると思った。外に出たら消防団が水門を閉めたところで、消防団に避難の呼びかけを行った。

○ 当日は、旧道、稲荷神社、観音神社、一本松など、6～7箇所に分散して逃げた。津波が終わって、シーサイドという民宿に集まった。

<12日以降>

○ 私の家は1階は浸水したが2階が残っており、親戚と1晩泊まった後、食べ物のあったシーサイドに集まった。シーサイドに1晩泊った翌朝、ヘリコプターが海岸に降り、子ども、高齢者から順に大槌の弓道場に避難した。弓道場に2晩宿泊し、炊き出しを朝晩いただき、その後釜石の副市長が来て、バスで釜石に移ることとなり、小川の働く婦人の家に移った。物資も食べ物もたくさんあり、救われた。

○ 70世帯200人くらいいた他の人たちがどこに行ったか分からなくなり、町内会で手分けして探して、大体は住所を把握した。

第7項 箱崎白浜地区（箱崎町第1～3地割）

1 被災状況

表 5-58 箱崎白浜地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成23年2月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成25年 1月22日)	全壊・半壊家屋数 (平成25年6月現在)	
箱崎白浜	387人	133世帯	42人	全壊52件	半壊13件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

箱崎白浜地区において、津波記念碑に類するものの存在は現在のところ確認できていない。

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 私は父から昔の津波の話を聞いていました。例えば、「チリ津波の時はどこまで波が来た」とか「海は勿論のこと、川を逆流するから川に近付くな」とか。
- チリ津波では津波襲来中に漁師が鮑をとったという逸話があった。
- 私の家では宮城県沖地震が必ず来るだろうということで常に津波の話はしていた。子供たちは学校で「てんでんこ」を学び、私は父から昔の津波の話を聞いていた。（それでも高台にある我が家まで津波が上がってくるとは想定外）

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、箱崎白浜地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-59 箱崎白浜地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
旧白浜小学校校庭	箱崎町第3地割の一部（箱崎白浜）
旧箱崎白浜へき地保育所園庭	
白浜星の宮神社境内	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-60 箱崎白浜地区の拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
鵜住居生活改善センター (鵜住居地区防災センター)	鵜住居町 片岸町 箱崎町
鵜住居小学校体育館	
釜石東中学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される箱崎白浜地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-61 箱崎白浜地区の避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数
旧白浜小学校（箱崎白浜）	3 階	220 人

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

箱崎白浜における自主防災組織としては、「白浜町内会自主防災部」がある。

- 白浜町内会自主防災部は、平成 14 年 8 月 2 日に設立され、活動地域は箱崎町第 1 ～ 3 地割で白浜町内会に加入する世帯をもって構成されている。事務所は釜石市消防団第 6 分団第 6 部屯所内に置かれた。組織編成は、部長、副部長、総務（情報）班、消火班、救護救出班、避難誘導班、給食給水班となっていて、役割分担が決まっていた。
- 「白浜町内会自主防災部規約」によると、
 - ・ 防災に関する知識の普及に関すること
 - ・ 災害の発生時における情報の収集伝達、初期消火、救出救護、避難誘導等応急対策に関すること

- ・防災訓練の実施に関すること
- ・防災資機材等の備蓄に関すること
- ・この防災部の目的を達成するために必要な事項
- ・避難所の開設及び運営の協力に関すること

が実施事業として定められており、これら事業は必要に応じ釜石市消防団及び地区消防（6部）と連携して行うこととしていた。

- 物資の備蓄、住民の安否確認体制等の備えがあった。
- 平成 18 年度には補助金で次のような資機材を購入した。災害多人数用救急箱、毛布、防災用ラジオ、防水・防塵ライト、蓋付ウォーターバケツ、小型除雪機、救護用担架、ハロゲン投光器、小型発電機、灯油ストーブ、ガソリン携行缶、電源コード、灯油ポリタンク、エンジンチェーンソー

イ) 避難訓練

表 5-62 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
66 人（17%）	対象地区：箱崎白浜 ／人口：387 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第 6 分団第 6 部

- 水門、門扉の閉鎖活動を行った。その後ポンプ車で仮宿地区を見回り、避難の呼びかけを行って、白浜地区に戻り、その後防潮堤の後ろ

の高台付近で、海岸に残っている人に避難の呼びかけを行った。津波襲来時は高台の後ろの山に逃げた。

- 水門閉鎖は 10 分あればできたので、5 ヶ所あるが、閉鎖のため死んだ人はいない。
- 津波で亡くなった消防団員は市民誘導していた人、なかなか誘導どおりにいかない。部長と団員 2 名死亡。
- 部長 1 名……地震発生後、所属部の団員とともに水門を閉鎖し、住民の避難誘導の後ポンプ自動車で移動中に津波に巻き込まれた。
- 団員 1 名……地震発生後、所属部の部長とともに水門を閉鎖し、住民の避難誘導の後ポンプ自動車で移動中に津波に巻き込まれた。
- 流された人の救助活動を行った。町内会と共に避難場所（3 ヵ所）から避難所（小学校）に住民を移し、生存者、行方不明者の名簿作り等を行った。

イ) 白浜町内会自主防災部

- 震災時、避難場所の（旧）白浜小学校体育館に避難した。全戸 110 戸のうち 50 戸の住民が泊った。

<12 日以降>

- 翌日より小学校教室を開放。共同生活。15 日からヘリコプターで 2 日間にわたり市内の市民体育館へ避難した。
- 東日本大震災後のアンケートには、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。
 - ・孤立した。
 - ・避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、けが人の救出や手当、行方不明者や遺体の搜索、道路復旧作業、がれきの撤去、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、名簿作成、その他（搜索、道路復旧、がれきの撤去、作業活動計画表作成、人員の配置指示）
 - ・避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し、被災者の自宅等への受入れ（受入れ 2 軒、10 人）、高齢者の介護等、その他（白浜地域の行方不明者の搜索。がれき撤去、道路整備）

・震災後、釜石市民体育館に避難したとき、小川町内会、桜木町内会の皆様の避難者に対する支援活動に感謝 北九州市役所、東京都北区職員の方にも感謝 東海市職員 震災時、白浜の急患者の救援活動された兵庫県医療チーム、又、自治外、アメリカ海軍、保安庁、警察官の被災地での活動真心にありがとう。 震災後から現在も我々被災地に支援物資（食料品）を運んできてくれている、栃木県宇都宮市「飛行船」に感謝

第 8 項 仮宿地区（箱崎町第 4 地割）

1 被災状況

表 5-63 仮宿地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
仮宿	80 人	28 世帯	7 人	全壊 11 件	半壊 2 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

大仮宿に 3 基あり、場所は海岸近傍の山腹で標高 15m の位置にある。大仮宿は、度重なる津波被害により現在では居住者のいない地域となっている。石碑は全て明治津波関係のもので、慰霊型に分類されている。明治津波の浸水線外であるが、東日本大震災においては線上に位置する。

平成 25 年度に行われた釜石市の調査では、3 基とも転倒した状態で確認された。



図 5-43 津波記念碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

ア) 「明治廿九年六月十五日海嘯横死」

表面には、「明治廿九年六月十五日海嘯横死」として死亡者名が刻まれている。

裏面には「明治三十年旧五月五日設立」とあり、施主 7 名の名も刻まれており個人による建立である。刻まれている文字は、図 5-44 のようなものである。



図 5-44 明治廿九年六月十五日海嘯横死

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

図 5-44 の碑文には、表面に刻まれた海嘯横死者の名前の 3 人目（三浦春吉）と 4 人目（三浦喜助）の間に「同 植田善助」が入る。



図 5-45 明治廿九年六月十五日海嘯横死

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

イ) 「明治廿九年六月十五日 海嘯溺死小林勝蔵精昊」

表面には、「明治廿九年六月十五日 海嘯溺死小林勝蔵精昊」と刻まれている。（ただし、昊の字の部分に実際彫られている文字は、霊の異体字と思われる）

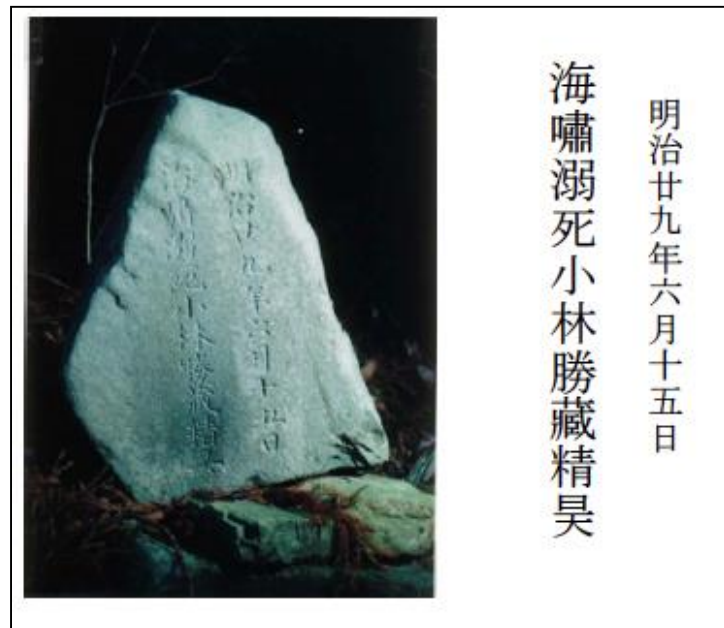


図 5-46 明治廿九年六月十五日 海嘯溺死小林勝蔵精昊

（出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ）



図 5-47 明治廿九年六月十五日 海嘯溺死小林勝蔵精昊

（出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査）

ウ) 「明治廿九年六月十五日 海嘯横死無縁塔」

表面には「明治廿九年六月十五日 海嘯横死無縁塔 夏鮪建網」とあり、施主は7名連名で個人による建立である。（原文ママ）

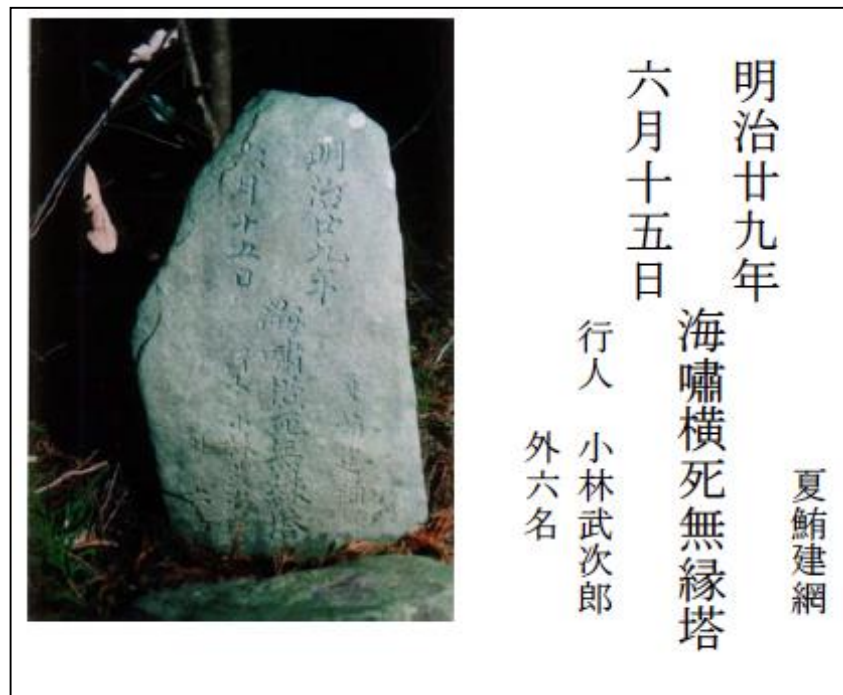


図 5-48 明治廿九年六月十五日 海嘯横死無縁塔

（出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ）



図 5-49 明治廿九年六月十五日 海嘯横死無縁塔

（出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査）

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- (地震の後、沖に船を出すという対応は) 子供の頃から聞いていた。
(岩手県釜石東部漁協管内 東日本大震災に関わる聞き取り調査報告書)
- 過去の津波(主にチリ地震津波)では、潮が引いた後にウニを採り、津波が来襲してからもうゆっくり避難することができたという逸話があった。そのため、津波に対して油断していたところがあった。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、仮宿地区における一次避難場所(火災のみは除く)及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-64 仮宿地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
仮宿高台	箱崎町第4地割の一部(仮宿)

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-65 仮宿地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
鵜住居生活改善センター (鵜住居地区防災センター)	鵜住居町 片岸町 箱崎町
鵜住居小学校体育館	
釜石東中学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される仮宿地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成22年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-66 仮宿地区の避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数
鵜住居公民館仮宿分館（仮宿）	1 階	30 人

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

仮宿地区における自主防災組織としては、「仮宿町内会自主防災会」がある。

- 仮宿町内会自主防災会は平成 22 年 10 月 12 日に設立され、活動地域は箱崎町第 4 地割（仮宿）で、仮宿町内会によって構成されている。事務所は釜石市立鵜住居公民館仮宿分館に置いていた。組織編成としては、本部、仮宿分館管理担当、救護班、給食給水班、消火・災害復旧班があり、役割分担が決まっていた。
- 「仮宿町内会自主防災会規約」によると、
 - ・ 防災活動の普及啓発
 - ・ 地震等による被害を防ぐための活動
 - ・ 地震等の発生時における情報収集・伝達、初期消火、避難誘導、救出救護、給食給水等の活動
 - ・ 前号に関する訓練
 - ・ 防災資機材等の整備
 - ・ その他本会の目的を達成するために必要な事項
 が実施事業として定められていた。
- 市実施による 3 月 3 日の避難訓練に参加していたほか、町内会、消防団で自主的に避難訓練をしていた。
- 平成 22 年度に補助金により資機材を購入し、枝打ち鋸、チェーンソー、刈り払い機、小型除雪機を備えた。

イ) 避難訓練

表 5-67 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
25 人（31%）	対象地区：仮宿 ／人口：80 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 仮宿町内会自主防災会

○ 東日本大震災後のアンケートには、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。

- ・ 孤立した。
- ・ 避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、行方不明者や遺体の搜索、道路復旧作業、がれきの撤去、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール
- ・ 避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し
- ・ 公民館への避難誘導、避難所運営

第9項 箱崎地区（箱崎町第5～12地割）

1 被災状況

表 5-68 箱崎地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成23年2月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成25年 1月22日)	全壊・半壊家屋数 (平成25年6月現在)	
箱崎	734人	273世帯	61人	全壊208件	半壊27件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

箱崎地区には津波に関係する石碑が3基ある。「忠烈永芳」と「津波記念碑」の2基は隣接して設置されている。



図 5-50 津波記念碑

(出典：平成25年度 津波浸水域の石碑現況調査)

ア) 「忠烈永芳」

碑銘は「忠烈永芳」、設置場所は沿道で、標高 15mの位置にある。碑文の内容は明治津波に関わるもので、建立は昭和3年6月15日、施主は箱崎講中である。慰霊型に分類されている。明治津波、東日本大震災ともに浸水線上に位置する。

表面には図 5-51 のような文が刻まれている。

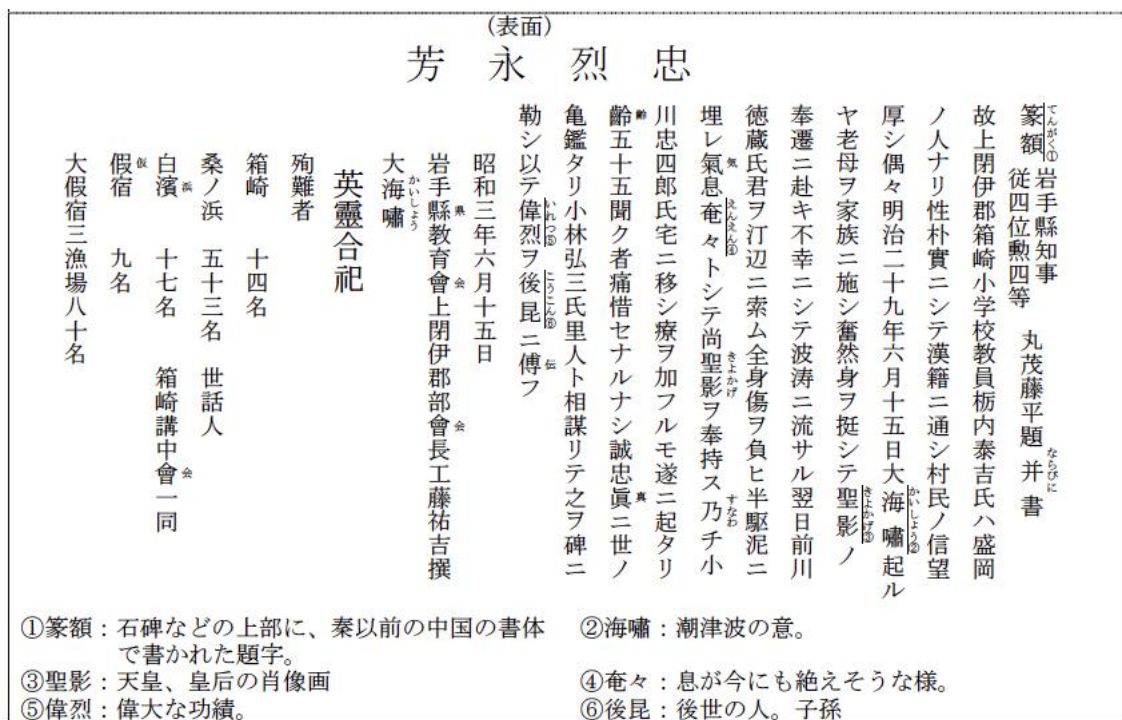


図 5-51 忠烈永芳

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

図 5-51 の碑文だが、「釜石の石碑」によると右から5行目「施シ」は「托シ」、9行目「起タリ」は「起タス」、10行目は「痛惜セナル」は「痛惜セザル」であるものと思われる。



図 5-52 忠烈永芳

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

イ) 「津浪記念碑」

碑銘「津浪記念碑」は沿道にあり、標高 15m に位置する。昭和津波のあと東京朝日新聞社の義援金により昭和 10 年 3 月 3 日に建立され、施主は鵜住居村である。教訓型に分類されている。昭和津波では浸水線外であるが、東日本大震災では浸水線上となっている。

碑の表裏には次のように刻まれている。

表面：昭和八年三月三日

大地震の後には津浪が来る 英彦

裏面：地震ノ時午前二時三十分

津浪襲来午前三時

本碑ハ東京朝日新聞社読者ヨリ 寄托サレタル義捐金同社カ各町村
ニ分配シタル残金ヲ以テ建立シタルモノ也

昭和十年三月三日建設 鵜住居村長 古川徳次郎



図 5-53 津浪記念碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

ウ) 「津波海難歿死無縁者追善供養塔」

碑銘は「津波海難歿死無縁者追善供養塔」、設置場所は個人宅で標高 11m である。昭和 51 年 6 月 27 日の建立で、施主は個人 2 名の連名である。対象の津波は不明である。慰霊型に分類されている。東日本大震災では浸水線内である。

石碑の表面の文字等は、図 5-54 のようなものである。

【岩 112】

田中太郎石材店

りん

発起人

建立

小林利七郎

昭和五十一年六月廿七日

蓮華化生

若生佛前

殃死無縁者追善供養塔

海津難波

若生人天中 受勝妙樂

◆対象津波：不明

◆類型：慰霊型

◆碑文が伝えるもの

記録	予兆	避難	居住	美談

◆建立場所：その他（個人宅）

◆対象津波の浸水線との関係：不明

◆東日本大震災の津波の浸水：線内

◆大きさ：高 221 cm幅 65 cm厚 34 cm

◆標高：11m

*殃死（おうし）：思いがけない死。非業の死。

図 5-54 津波海難殃死無縁者追善供養塔

（出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ）



図 5-55 津波海難殃死無縁者追善供養塔

（出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査）

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 家を建てる時（平成 7 年）、義父母から「ここまで津波は来たこと

がない」と言われていたが、日ごろから地震がきたときは裏山の氏社で会おうと決めていた。

- 私は、昨年（平成 22 年）10 月に箱崎に移ってまいりました（母が高齢のため）。実家は高台にあり、「ここに津波が来たらこの村は全滅だよ」と小さい頃から聞かされていたので、あの大きな地震のときも、揺れが少なくなってから倒れた物を直したり、向こう岸の水面の具合を見て、高みの見物をしておりました。
- 先輩や親からは、「大きい地震が来たら逃げろ」「明治・昭和の津波はここまで来襲した」という言い伝えを聞いていた。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、箱崎地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-69 箱崎地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
森古広場（平成 23 年 1 月に「森長根」より変更）	箱崎町第 7 地割の一部 箱崎町第 8 地割の一部 箱崎町第 9 地割 箱崎町第 10 地割の一部
大家の山	
ヨコゼ沢	
箱崎神社	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-70 箱崎地区の拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
鵜住居生活改善センター (鵜住居地区防災センター)	鵜住居町 片岸町 箱崎町
鵜住居小学校体育館	
釜石東中学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される隣接する地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-71 箱崎地区に隣接する地区の避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数	電話
根浜レストハウス（根浜）	2 階	90 人	28-1757
根浜海岸健康福祉センター（根浜）	2 階	120 人	28-1757
根浜集会所（根浜）	1 階	60 人	

※箱崎地区内には、避難者収容施設は所在していない。

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

箱崎地区における自主防災組織としては、「箱崎町自主防災会」がある。

- 箱崎町自主防災会は、平成 22 年 7 月 17 日に設立され、活動地域は箱崎町第 5 ～12 地割、箱崎町内会に加入する世帯及び会の目的に賛同するものをもって構成されている。事務所は箱崎漁村センターに置かれていた。組織編成は、対策本部、避難・誘導班、消火班、救出班、救護班、給食・給水班で、役割分担が決まっていた。
- 「箱崎町自主防災会規約」によると、

- ・防災活動の普及啓発
- ・地震等による被害を防ぐための活動
- ・地震等の発生時における情報収集・伝達、初期消火、避難誘導、救出救護、給食給水等の活動
- ・前号に関する訓練
- ・防災資機材等の整備
- ・その他本会の目的を達成するために必要な事項

が実施事業として定められていた。

- 平成 22 年 11 月 13 日、計 35 名の参加により箱崎町自主防災会防災訓練を実施し、旧箱崎小学校校庭で初期消火訓練、箱崎漁村センター 1 階で応急手当訓練、心肺蘇生・AED 訓練、講話等を行った。

イ) 避難訓練

表 5-72 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
74 人（10%）	対象地区：箱崎 ／人口：734 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第 6 分団第 3 部

- 箱崎町の水門の閉鎖。高台避難指示。部長と消防ポンプ車で横瀬前地区の道路をサイレンとマイクで高台避難指示しながら、箱崎郵便局前を通り、旧 6-3 消防屯所方面に向かうと、川より津波の襲来が見え、

引き返して旧箱崎小学校方面に避難指示しながら向かう。

- 両石のアワビセンターの臨時職員を避難させようとセンターに戻り、避難を確認後、箱崎に水門を閉めに行ったが、すでに閉まっていた。防潮堤の外側で作業している人に避難の呼びかけを行ったが、沖の堤防が倒壊したため、部長と一緒にポンプ車に乗って、サイレンを鳴らし避難誘導をしつつ津波から逃げた。
 - 野村商店側の道路から津波が襲来し、旧箱崎小学校校庭へ消防ポンプ車で乗り入れた際、避難しているおばあさんが校門付近におり、ポンプ車を乗り捨て救助に向かい、おばあさんを背負い小学校裏の畑まで上がったとき、班長がおり、助けを求め3人でおばあさんを救助中津波に飲まれ、がれきに挟まれたが、何とか抜け出し民家の屋根に這い上がったとき、引き波が起きた。すぐ班長を屋根の上から探し、おばあさんの安否を確認したが、おばあさんの行方はわからなかった。屋根から飛び降り、野川前地区の高台に避難している町民にもっと高い場所に避難し、寒さ対策をするよう指示しながら、前田地区で避難指示している部長の指示を仰ぎ、上前地区に山を越えて向かう。
 - 山の中にも避難している町民がおり、寒さ対策を指示し上前地区についたところ、崩れた家の中に人がいると住民が救助活動をしており、協力して救助を行う。救助終了後、横瀬前地区に向かい、避難、寒さ対策の協力をお願いする。
 - 残った民家で一晩
- <12日以降>
- 消防団がバラバラになったことから、地元の人達とともに行動
 - がれきの片付け作業。4体の遺体の搬送を行った。近くの寺に安置することに決めて運んだ。

イ) 箱崎町自主防災会

- 東日本大震災後のアンケートには、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。
 - ・避難所（個人宅）3部落指定、物資受入れ、支援
 - ・ヘリ緊急要請、搬送
 - ・3部落仮代表による情報交換ミーティング

第 10 項 桑の浜地区（箱崎町第 13 地割）

1 被災状況

表 5-73 桑の浜地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
桑の浜	121 人	52 世帯	3 人	全壊 43 件	半壊 6 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

桑の浜地区において、津波記念碑に類するものの存在は現在のところ確認できていない。

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

(新規情報は、特になし)

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、桑の浜地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-74 桑の浜地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
桑の浜高台	箱崎町第 13 地割の一部（桑の浜）

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-75 桑の浜地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
両石漁村センター	両石町 箱崎町の一部（桑の浜）

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される隣接する地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-76 桑の浜地区に隣接する地区の避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数	電話
根浜レストハウス（根浜）	2 階	90 人	28-1757
根浜海岸健康福祉センター（根浜）	2 階	120 人	28-1757
根浜集会所（根浜）	1 階	60 人	
女遊部集会所（女遊部）	1 階	20 人	
旧白浜小学校（箱崎白浜）	3 階	220 人	

※桑の浜地区内には、避難者収容施設は所在していない。

（4）地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア）自主防災組織

設立されていなかった。

イ）避難訓練

表 5-77 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
30 人（25%）	対象地区：桑の浜 ／人口：121 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

（新規情報は、特になし）

第4節 唐丹地区

第1項 花露辺地区

1 被災状況

表 5-78 花露辺地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
花露辺	211 人	71 世帯	1 人	全壊 22 件	半壊 10 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

花露辺地区では津波石碑が 1 基ある。県道桜峠平田線脇にあり、標高 30 m に位置する。

ア) 「大海嘯・遭難者追哀碑」

「大海嘯・遭難者追哀碑」は、県道桜峠平田線の脇にあり、標高 30m に位置する。

国土交通省「津波被害・津波石碑情報アーカイブ」によると、昭和 3 年旧 5 月 5 日に明治津波の犠牲者を弔う形で建立され、慰霊型に分類されている。明治・昭和津波では浸水線上、東日本大震災では線外になっている。

表面には「明治廿九年陰暦五月五日 大海嘯 遭難者 追哀碑 青松 四十一世鍔額書」と刻まれ、裏面には次のような言葉と建立年月日が刻まれている。

明治廿九年陰曆五月五日午後八時頃■然大海嘯起■瞬時ニシテ激浪■■
此地ヲ襲ヒ■■生ヲ失フ者数ヲ知ラズ 死屍累々海浜ニ■■見ル者目ヲ
覆フ 本邨流失戸数三百六十八死者一千七百八十六人■部落全戸数卅八
被害卅六死者二百二人 弔祭■■■シハ精魂依ル無ケシ 乃チ三十三回
忌■■■■■■厚ク茲ニ之ヲ弔フ

昭和三年大陰五月五日



図 5-56 大海嘯・遭難者追哀碑

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

(新規情報は、特になし)

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、花露辺地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-79 花露辺地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
花露辺漁村センター	唐丹町字花露辺の一部

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-80 花露辺地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
唐丹中学校体育館	唐丹町
唐丹小学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される花露辺地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-81 花露辺地区の避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数
花露辺漁村センター（花露辺）	2 階	50 人

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

設立されていなかった。

イ) 避難訓練

表 5-82 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
95 人（45%）	対象地区：花露辺 ／人口：211 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第 8 分団第 3 部

- 県道桜峠平田線（高台）より、住人とともに消防団員が花露辺漁村センターに避難
- S さんが持病の薬を自宅へ置いてきたことから、S さんの孫とともに消防団員が薬を取りに行く。

第2項 本郷地区（本郷・大曾根・桜峠）

1 被災状況

表 5-83 本郷地区（本郷・大曾根・桜峠）の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
本郷 大曾根	450 人	175 世帯	4 人	全壊 49 件	半壊 10 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

本郷地区では津波石碑が 3 基ある。この地は昭和津波後に集落ごと高地移転を行っており、石碑はいずれもその集落の縁を通る道路（県道桜峠平田線）際にある。そのうち「海嘯遭難記念之碑」と「昭和八年津浪記念碑」の 2 基は隣接して設置されている。

ア) 「海嘯遭難記念之碑」

「海嘯遭難記念之碑」は県道桜峠平田線脇に山を背にして、後述の「昭和八年津浪記念碑」と隣接して建っており、標高は 12m である。昭和の高台移転地の近くにある。（ただし、隣接する石碑「移転碑」によると、元来は防潮堤南端に設置されていたものだったが、平成 20 年に道路工事で「昭和八年津浪記念碑」が移設されるのに併せて当碑も現在地に移設されたとある。）

明治津波から三十三回忌となる昭和 3 年の建立で、施主は 12 名連名（個人）（原文ママ）、内容は明治津波の惨禍を伝え犠牲者の霊を弔うもので慰霊型に分類されている。設置場所は明治、昭和津波、東日本大

震災でも浸水線内になっている。表面には次のように刻まれている。ただし、図 5-57 の中で裏面に刻まれている名前の字だが、右から 2 人目は「佐々木忠六」、7 人目は「千葉千蔵」、12 人目は「平館三太郎」、15 人目は「佐々木徳太郎」である可能性がある。



(表面)

海嘯遭難記念之碑

明治廿九年六月十五日邦俗端午ノ故ヲ以テ
 間里交賀シ家族互ニ歎願ス此日朝來陰晴不定
 昔微雨ヲ伴フ暮天地震フコト兩三次午後八
 時ニ及ビ海上ニ突如般雷ノ如キ響ヲ聞ク須臾
 ニシテ狂瀾洪濤天ヲ衝テ襲ヒ來リ部内八百ノ
 生靈ヲ奪ヒ三百ノ屋舎ヲ壊滅シ去ル為メニ部
 民ノ拮据經營ニ依リテ成レル我本郷ノ街衢忽
 焉トシテ荒陬ト化シ又幽闇ノ裡濁浪ニ漂ヒシ
 同胞ノ叫喚今尚々ノ聲アルヲ疑ノ疲憊ノ餘
 身ヲ以テ免レタルモノ僅ニ廿名悽慘亦謂フ可
 シ
 カラズ衆庶後昆宜シク協同輯睦民風ヲ振肅
 以テ先靈ヲ弔ヒ追遠ノ誠ヲ致ス可シ昭和三年
 第廿三回忌辰ニ丁リ有志齊謀リテ茲ニ記念ノ
 碑ヲ建テ永ク世ニ誌グ

①邦俗：国の風俗や習慣。

②間里：しばらくの間。ほんの少しの間。

③須臾：大きな波。

④狂瀾：人家の立ち並ぶ土地。町。

⑤洪濤：小聲でしくしく泣く様。

⑥街衢：一般の人々。庶民。

⑦忽焉：和らぎ睦まじくすること。

⑧衆庶：一般の人々。庶民。

⑨輯睦：和らぎ睦まじくすること。

⑩振肅：緩んだ気風などを奮い起し、引き締めること。

⑪間里：村里。村落。

⑫狂瀾：荒れ狂う大波。

⑬拮据：忙しく働くこと。仕事に励むこと。

⑭忽焉：にわかに。たちまち。

⑮疲憊：疲れ果てて弱ること。

⑯後昆：後の世の人。子孫。

⑰民風：一般民衆の風俗や習慣。

⑱誌：忠告の意。

(裏面)

發起者
區長

佐々木三内

當建碑敷地寄附

世話人

鈴木金之丞	佐々木	千田	三浦	佐久間	山崎	上野	佐久間	平根	曾根	佐々木	熊谷茂助
金之丞	木	木	木	市	市	市	市	市	市	市	市
金之丞	木	木	木	市	市	市	市	市	市	市	市

図 5-57 海嘯遭難記念之碑

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)



図 5-58 海嘯遭難記念之碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

イ) 「昭和八年津浪記念碑」

標高 12m 県道桜峠平田線脇に、前述した「海嘯遭難記念之碑」と並んで建っており、昭和 9 年旧 3 月 3 日の建立である。(隣接する石碑「移転碑」によると、元来は現在地より南南西約 10m の位置にあったが、平成 20 年に県道工事のため現在地に移設されたものとある。)

施主は 2 名連名(原文ママ)で、裏面には寄付者 3 名(東京朝日新聞社と他 2 名は個人)の名と、世話人 11 名ほか部落一同、石工 2 名の名などが刻まれている。

明治、昭和津波、東日本大震災でも浸水線内になっており、東日本大震災の津波のため流失し、国交省調査時には所在不明となっていた。

(ただし、平成 25 年度釜石市による調査時には元の場所に建てられている) 当時の岩手県知事・石黒英彦の津波に関する詩を刻んでおり、祈念型に分類されている。

表面に刻まれている文言は次のようなものである。

昭和八年津浪記念碑

大津浪くぐりてめげぬ雄心持ていざ追ひ進み参る上らまし

題額并歌銘岩手縣知事

石黒英彦閣下

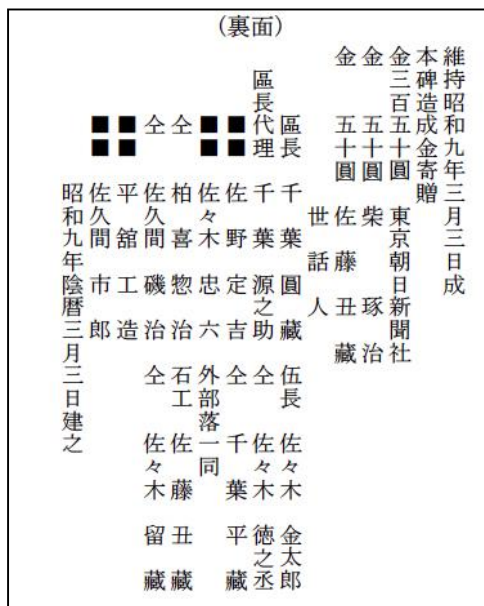


図 5-59 昭和八年津浪記念碑

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)



図 5-60 昭和八年津浪記念碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

ウ) 「海嘯遭難者納骨之所」

県道桜峠平田線脇にあり、昭和の高台移転地の西側に位置し、標高 15 m の地点である。いずれの津波からも線外となっている。

昭和 3 年、邨内一同による建立である。明治 29 年の津波犠牲者の納骨場所を示すもので、慰霊型に分類されている。

表面に刻まれている文字は次のとおりである。

明治廿九季旧五月五日

海嘯遭難者納骨之所

昭和三年邨内一同建之



図 5-61 海嘯遭難者納骨之所

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)



図 5-62 海嘯遭難者納骨之所

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 昭和 8 年の津波の時、大きな揺れにどこの家でも皆が家から飛び出したそうです。しかし、地震も落ち着き寒さに耐えながら不安でいる所へ長老が来て「こんな無風晴天、星空の夜に津波は来ない」と言われ皆家

に戻り床についたところで流された。だから津波警報の解除があるまで絶対家へは戻るなど言い聞かされてきました。（千年後への伝言）

○ 私の家は、明治、昭和、平成と三度の津波で被災した。明治と昭和では、合わせて 16 名の人達が死亡した。それだけに、子どもの頃より母から津波の怖さ恐ろしさは折にふれ聞いて育った。（千年後への伝言）

○ 昔、部落の役員会で明治・昭和の大津波の話を聞いていたので、大津波の恐さは身にしみるほどわかっていました。（千年後への伝言）

○ 昭和 8 年の際には本郷では 320 人の人が亡くなった。その教訓を生かし、まず逃げなくてはいけないと思うことができた。（千年後への伝言）

○ 避難している時に「ドーン、ドーン、ドーン」と 3 回爆発したようなものすごい音が、海の沖の方から聞こえてきた。一緒にいた人たちが、「今の音は何だべ」と言っていた。母親から「昭和 8 年の津波のとき、大きな爆発がした音がした」と聞いていたので、3 回も花火を上げる時のような音がしたので、「これは大きな津波が来るかも」と思った。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、本郷地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-84 本郷地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
本郷元青年クラブ集会所広場	唐丹町字本郷 唐丹町字大曾根の一部

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-85 本郷地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
唐丹中学校体育館	唐丹町
唐丹小学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される本郷地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-86 本郷地区の避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数
本郷地区コミュニティ消防センター（本郷）	1 階	50 人

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

設立されていなかった。

イ) 避難訓練

表 5-87 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
105 人（23%）	対象地区：本郷・大曾根 ／合算人口：450 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第4章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第8分団第2部

- 水門を閉めるよう指示を受ける
 - 若い消防団員が、津波が防潮堤を越えたのですぐ避難するようにと叫びながら危険の迫っていることを周りに伝えながら駆け抜けて行った。
 - 消防団員がSさんに対し、怪我人を運んでくるので見てほしいと依頼。
 - 津波に流され浮遊したがれきにつかまっている高齢者を発見、救助した。更にがれきと車両に挟まれた男性を救出したが重症であった。
 - 夜片岸地区で車両火災発生との連絡を受け、出動消火にあたった。第1部・第5部のポンプ車・積載車が被災したため、同地区と所属地区の夜を徹しての警戒を開始すると共に、所属地区住民の安否確認を行った。
- <12日以降>
- 12日朝、重症者を県立大船渡病院へ搬送、ライフライン確保活動を行う。

第3項 小白浜地区

1 被災状況

表 5-88 小白浜地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
小白浜	548 人	224 世帯	4 人	全壊 82 件	半壊 47 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

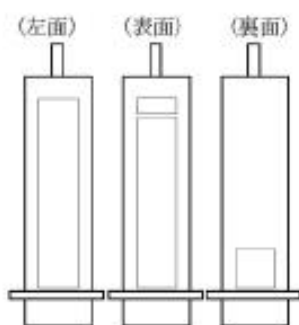
(1) 津波記念碑

小白浜には津波石碑が 3 基あり、いずれも盛巖寺の敷地内にある。標高 20m で、明治と昭和の津波では浸水線外の場所だが、東日本大震災においては浸水線上で津波の被害を受けている。

ア) 「昭和八年津浪記念碑」

昭和 9 年 3 月 3 日に建立され、施主は不明だが、建立費は東京大阪朝日新聞社が寄贈した。内容は昭和 8 年の津波とその後の援助について書かれており、祈念型に分類されている。

正面に当時の岩手県知事による「大津浪くぐりてめげぬ雄心もていざ追ひ進み参み上らまし」の文字が刻まれているが、左面のほうに長い文章が彫られている。図 5-63 がその文で、図 5-64 がその意識である。



(表面)
昭和八年津浪記念碑
大津浪くわりてめけぬ雄心もて
いさ追ひ進み参み上らまし
題額并歌銘岩手縣知事
石黒英彦閣下

維持昭和八年三月三日午前二時廿一分突如トシテ激震アリ約廿餘分ヲ経テ海面退潮甚シク懸テ遠東方洋上ノ彼方ニ巨煩ノ響アリ次テ漸次第二暴風ニモ紛ラハシキ轟々タル音響ヲ伴ヒ大津浪襲來ス一瞬ニシテ人寰悉く溺ニ吞マレ暗黒ノ夜陰ニ阿鼻叫喚凄惨ノ鬼氣迫テ宛ラ修羅ノ地ト化シヌ次第二黎明ニ及ブ一望唯荒寥比屋ハ碎ケ樹木ハ轟倒サレ死屍ハ黒々トシテ目ヲ掩フ僅ニ死ヲ免タルモノ杳然渺乎トシテ自ラ失ヒ或ハ肢體ヲ傷リ弊衣ヲ寒氣ニ晒シテ戦キ慄ヒ親ヲ呼ビ兒ヲ探シヌ大自燃ノ暴威水魔ノ一瞬三百五十九ノ生靈ト二百六十三ノ家屋ヲ拉シ去ル其ノ被害亦舉ケテ數フルニ遠アラズ悲憤慟哭血涙ヲ吞ミテ唯執手アルノミ慘禍筆舌ニ盡スコトヲ得ズ悲報一度ビ天聰ニ達スルヤ畏クモ天皇皇后兩陛下ニ於カセラレテハ被害ノ甚大ナルニ痛ク御軫念被為在御内帑開カセラレテ御教恤ノ資ヲ御下賜アラセラレ三月七日大金侍從ヲ御差遣親シク罹災民ヲ慰問セシメラル各宮家ヨリモ種々御手厚キ御沙汰ヲ拜戴セリ億兆ノ感激何モノカ之ニ如カム我が石黒明府ハ災害ノ報ニ接セラレルヤ慨然非常ノ機敏ト英断ノ下ニ史僚ヲ督勵シ或ハ陸海軍部當局ノ戮力ヲ得或ハ政府要路ノ協心ヲ得テ應急救援ニ奔命シ衣食ニ醫藥ニ機宜ノ措置ヲ輪サレ或ハ復舊大業ノ方途ヲ確立セラレ復興ノ指針ヲ示サル又全國同胞ハ勿論遠ク海外ヨリ寄セラレタル同情鴻誼ハ實ニ無邊ナルモノアリ災後幾旬汀渚ノ邊茶罷ノ烟縷々トシテ續キ感傷ノ情盡クルナカリシモ救援教授ノ手篤ク民心漸ク其ノ靖ニ安ンジ爾來當局ノ施設ニ呼應シテ華村一致復舊ノ事業ニ精進ス時ニ同年十一月廿九日第二師團長陸軍中將大勲位東久運宮秘蔵王殿下ノ御巡視ヲ忝ウシ村民御慈愛ノ深キニ感シ意氣彌々昂ル惟フニ災禍ノ激甚ナリシニ逸早く復舊復興ノ旺盛ナル氣運ニ向ヒタルハ皇恩ノ鴻大ナルト親愛ナル同胞ノ同情ト周知ナル政府並縣其他關係當局ノ施設トニ基クモノニ外ナラス村民ノ永ク牢記シテ須臾モ忘ルベカラザル所ナリ蓋シ自然ノ災禍ハ人爲ノ抗シ難キ所ナリト雖モ之ガ影響被害ノ滅殺ヲ圖ルハ人力ノ敢テ能クサル所ナリ本村ハ近世明治廿九年六月十五日津浪ノ災厄ヲ蒙リ慘禍今次ニ勝ル奇蹟ニ生クル者當時克ク災變ニ備フル所アリシカド時遷リ人心漸ク緩ミテ警ムル所ナシ是今次ノ災難ヲ大ナラシメタル所以ノモノト謂フベシ後生克ク懃ヲ之ニ到シ覆轍ノ悔ヲ招カザラムコトヲ期スベシ茲ニ災變後一周年ヲ迎ヘ復舊事業略完成スルニ際リ災禍ヲ銘記シテ後昆ニ傳イテ鑑戒ト為ス

皇紀二千五百九十四年
昭和九年三月三日當一周季 建立

碑表撰文揮毫 岩手縣知事 從四位 勲三等 石黒英彦閣下
碑陰 揮毫 元大石小學校長 菅野松洞殿
建立費 寄贈 東京大阪朝日新聞社殿

図 5-63 昭和八年津浪記念碑

(出典：津波被害・津波石碑情報アーカイブ)

ここに災害後一周年を迎え復旧事業が完了するに至り、この災禍を後世の人に伝え戒めとするために銘記するものである。

災害當時關係職員錄	岩手縣知事	從四位	勳三等	石黑英彦
內務部長	正五位	勳四等	前田慎吾	
警察部長	從五位	勳六等	森部隆	
學務部長	從五位	勳六等	湯本二郎	
警務課長	從七位		中野四郎	
土木課長	正五位	勳五等	上野節夫	
衛生課長	從五位	勳五等	東海林豊治	
山林課長	從五位	勳五等	山本清治	
耕地整理課長	正六位	勳六等	坂部重遠	
水產課長	正六位	勳六等	一ノ瀬福巳	
都市計劃地方委員會技師	從六位		渡部幸三郎	
縣水產試驗場長	正六位		小安正三	
土木技師兼道路技師	正六位		佐々信治	
道路技師兼土木技師	正七位		佐藤清治	
道路主事	正七位	勳六等	村里長太	
道路技師兼土木技師	正七位		畠山英三郎	
道路技師兼土木技師	從七位		奥田豊古	
土木技師兼道路技師	從七位		坂本昇	
地方農林主事	從七位		佐藤公一	
釜石警察署長	正七位		齋藤光雄	
臨時釜石土木管區主幹	勳七等	功七級	新田留古	
岩手縣農林主事補			西條七郎	
唐丹村長			柴琢治	
唐丹村助役			木村養松	
釜石			平松永次郎工	

317

務課長、庶務課長、社会課長の名前も入っている。



図 5-65 昭和八年津浪記念碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

イ) 「海嘯溺死霊供養碑」

「津波被害・津波石碑情報アーカイブ」によると、この石碑は明治 29 年 5 月の建立（原文ママ）とされており、六地藏の横に建てられていたが、東日本大震災により転倒した。

表面には、「海嘯溺死霊供養碑」「明治二十九年」「有縁無縁合葬塔」「大陰五月五日遭難」と刻まれ、慰霊型に分類されている。

なお、平成 25 年度に釜石市によって東日本大震災の津波浸水域に設置されていた石碑の状況調査が行われており、図 5-66 の写真はその際に撮影されたものである。釜石市の調査時には、国交省の記述している設置場所から数m離れた位置に建てられていた。



図 5-66 海嘯溺死霊供養碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

ウ) 「海嘯記念碑」

表面には「海嘯記念碑」「明治貳十九年大陰五月五日遭難」とだけ刻まれている、明治 29 年の津波を受けて作られたものと考えられ、慰霊型に分類されている。



図 5-67 海嘯記念碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 自宅は昭和8年三陸津波の復興地として、大きな沢を埋め戻し造成した所なので、常々親から「地震のときはこの造成地が崩れることがあるかも知れないから、とにかく盛巖寺の境内に逃げるように」言われていた。このことは妻にも子供たちにも言っていた。(千年後への伝言)
- 津波に対しての心得は、昔のお姑さん達の話で、昭和八年の津波も三十五年のチリ津波の時もここまで来なかったから安心だよと聞かされていたので安心していました。(千年後への伝言)
- 夫がいつもの口癖で「明治29年、昭和8年の津波も、海岸の近くにある夫の実家までは来なかった。」と言っていたので、今度も防潮堤を越えても、夫の実家までは来ないと考えていました。(千年後への伝言)
- 子供の頃から、大きな地震の後には津波が来ると教えられて育ちました。(千年後への伝言)
- 津波のことは小さい時からお話を聴いたり、本で読んだりしていました。(千年後への伝言)
- 昔の人は津波の時の火事は怖い、各家のイロリにはスリバチをかぶせるようにと言い伝えられていました。津波あがりのタコ、タラ、ウニは食うなとも言い伝えられております。(千年後への伝言)
- 三度の雷の様な爆音を聞いたとき、以前祖母が話していた昭和八年の津波の話と同じだと思い、大変な事が起きたんだなぁと緊張が増した。(千年後への伝言)
- 「大きい地震が来たら、津波が来るから高い所に逃げるんだよ」といつも父に言われていました。(千年後への伝言)
- 私は昔、明治昭和の津波のときも、この地域で川に魚が多く登ったよという話を、おばあさんから聞いていました。
- 地域には、昭和8年津波後の造成地があり、造成地を縦断する道路は、地域で「敷地通り」と呼ばれている。この「敷地通り」より下の海岸側に住む住民の多くは、「この敷地通りまで避難すれば安心」という意識があり、今回の震災でも比較的早く「敷地通り」まで避難し、海の様子を見ていた。
- 現在、私の家は海に見える高台にありますが、小さい頃は海の近くに家があったので、地震が来たら裸足で高い所に避難したものです。「津

波はおっかない」と言い聞かされきました。今はテレビ、ラジオ等で情報がわかるけど、昔はなかったので、「地震が来たらすぐ津波が来るもの」と思っていました。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、小白浜地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-89 小白浜地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
唐丹中学校校庭	唐丹町字小白浜の一部

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-90 小白浜地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
唐丹中学校体育館	唐丹町
唐丹小学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される小白浜地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-91 小白浜地区の避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数	電話
唐丹公民館（小白浜）	2 階	60 人	55-2111
唐丹中学校（小白浜）	3 階	520 人	55-2106

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

小白浜地区における自主防災組織としては、

- ① 小白浜町内会自主防災会（平成 17 年 10 月 1 日設立）
- ② 唐丹駐在所連絡協議会防災部会（平成 15 年 4 月 1 日設立）

がある。

① 小白浜町内会自主防災会

- 小白浜町内会自主防災会は、平成 17 年 10 月 1 日に設立された。ふだんの活動は防災学習会、防犯知識の啓蒙活動の実施などである。住民の安否確認体制を整えていた。
- 消防団員に漁師が多いので、日中動ける消防団員がいない。その際に自主防災会で対応できるよう、市の助成金を活用し、消火栓を整備した。
- そのほか、震災後の平成 25 年度に、補助金によりトランシーバーやホース格納箱などの資機材を購入した。

② 唐丹駐在所連絡協議会防災部会

- 唐丹駐在所連絡協議会防災部会は、平成 15 年 4 月 1 日に設立され、釜石警察署唐丹駐在所（所在地：小白浜）に事務局を置き、唐丹駐在所管内の町内会（片川町内会・荒川町内会・花露辺町内会・山谷町内会・大石町内会・本郷町内会・小白浜町内会）自治会（官公署等を含む）で構成され、唐丹駐在所勤務員が運営担当者となっている。
- 部会制となっており、防犯部会・交通部会・防災部会・社教部会・事務所部会の 5 部編成で組織されていた。防災部会には消防団第 8 分団が入っている。
- 「唐丹駐在所連絡協議会会則」によると、
 - ・防犯活動の推進と青少年の健全育成

- ・交通事故防止活動の推進と啓蒙宣伝
- ・広報資料の発行等による安全情報の提供
- ・その他「協議会」の目的達成に必要な事項（活動）

が実施事業として定められていた。

- この組織は対象地域が小白浜地区だけではなく唐丹駐在所管内と思われるが、活動拠点が小白浜にあるということでここに記載した。

イ) 避難訓練

表 5-92 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
45 人（8%）	対象地区：小白浜 ／人口：548 人

(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと

ア) いきいき唐丹デイサービスセンター

- いきいき唐丹デイサービスセンターの避難訓練の実施状況は、消防署立ち会いで、地震による火災発生を想定した防災訓練を 1 ～ 2 回実施している。
- 避難方法の検討状況は、法人で津波防災マップを作成し、防災五箇条を掲げた。
- 利用者家族等への周知方法としては、実態調査及び担当者会議の時に、震災になったと想定した注意、行動計画を説明している。
- いざというときの連絡体制は、通信が不通になり、双方の連絡がとれない場合、「小佐野応援センター」の一角に法人の伝言板を設置して対応する。
- その他、日頃から備えていた事は、職員一人ひとりに対し、特に送迎時、状況にあった行動を取るよう指示している。

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第4章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第8分団第1部

- ポンプ車で水門閉鎖に行った。その後高台で避難活動を行う。
 - 急いで消防屯所につける。みんな屯所に集まり、水門を閉めに行く。
 - 唐丹町漁業協同組合職員の消防団員が水門閉鎖に向かう。
 - 唐丹町漁業協同組合の脇に消防車待機
- <12日以降>
- 消防団員が破損した水源地より海水混じりの水を上げ、水道が通るまで使用

イ) 消防団第8分団本部

- 本郷海岸で仕事中地震があり、すぐに水門2ヵ所を1人で閉め、海岸で作業をしていた人たちに避難するよう指示した。防潮堤後ろの県道で津波監視、団員数名に老人世帯を見回るよう指示、また防潮堤奥の低地住宅の人の確認、高台に避難するよう積載車で呼びかけ、そのうち引き潮が大きくなったので現場にいる人たちに逃げるよう声をかけ、自分も高台に避難した。老人6人を高台に避難させ夕方までその場に待機

ウ) 小白浜町内会自主防災会

- 当日は自主防災会の組織はあったが、機能しなかった。
- 高台から堤防で水門を閉めるのを見ていたが、閉鎖直後に津波が水

門を越え、消防車が被災した。200 戸のうちの 91 戸が浸水、完全に流失したのが 60 戸くらいあった。その日のうちに消防団員が被災世帯をすべて回ったのがよかった。

○ 学校の下まで津波が来たので、唐丹中学校に避難したのは5人かそこらで、皆国道に上がった。

○ 東日本大震災後のアンケートには、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。

- ・孤立した。

- ・避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、けが人の救出や手当、道路復旧作業、がれきの撤去、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、名簿作成

- ・避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し、被災者の自宅等への受入れ（受入れ 20 軒、60 人）、高齢者の介護等

○ 第8部、第1分団員（原文ママ）による震災直後震災家屋の1軒毎の安否確認 小白浜地区は昔から地震のあるたび、海岸近くの人たちは高台に自主的に避難しており今回も人的被害は少なかった。死者2名、内1名は低体温による。1名は5日後に自宅で遺体でみつかった。

エ) 唐丹駐在所連絡協議会防災部

※震災後のアンケート等資料がなく詳細不明

(3) 施設・団体等の避難行動

ア) いきいき唐丹デイサービスセンター

○ 当日は職員6名、利用者は11名いた。

○ 15 時頃、職員は、二次避難を考え送迎車を避難路付近に配置した。16 時頃、近隣住民約 40 名、負傷者約 10 名を受け入れ、負傷者への処置を交替で実施した。

○ 17 時 30 分頃、避難して来た移動販売車から食料を購入。18 時頃、利用者や近隣の方々へパン、りんご、おにぎり少量を提供した。職員は利用者の見守り、避難者への対応に当たった。20 時頃 2 名の利用者の

家族が迎えに来て帰宅した。施設内ではストーブを設置して夜を明かした。

<12 日以降>

○ 12 日、朝と夕食はおにぎりを食した。9 時に在宅利用者をあいぜんの里へ搬送。11 時、利用者 3 名を家族のもとへ送り届けた。22 時 30 分に、利用者 1 名が胸の苦しみを訴えたため、職員 2 名が大船渡病院まで搬送した。（翌朝死亡した）

○ 13 日、職員は負傷者を大船渡病院に搬送した。3 月 11 日の利用者 3 名が施設で避難して過ごした。

第 4 項 片岸地区

1 被災状況

表 5-93 片岸地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
片岸	288 人	104 世帯	7 人	全壊 74 件	半壊 28 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

ア) 「海嘯溺死碑」

国土交通省「津波被害・津波石碑情報アーカイブ」によると、標高 20 m の天照御祖神社参道脇に「海嘯溺死碑」が建っている。表面に「海嘯溺死碑」のほか「發起者河東栄太郎」「片岸ヶ所衆中」とも刻まれており、明治津波を受け作られた慰霊型に分類されている。明治津波、東日本大震災の浸水線上にある。



図 5-68 海嘯溺死碑

(出典：平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査)

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 何かものを取りに行く時間があると思ったが、亡くなったおばあさんから「一度避難したら絶対戻るな」と言われていたから戻りませんでした。（千年後への伝言）
- 「1 回目の地震より、2 回目の地震の方が大きく揺れると、揺れ返しと言ってただ事ではないから、津波が来ると思って高台に行くんだよ」と聞かされていた。すぐ母親の言葉が頭に浮かんだ。（千年後への伝言）
- 幼少時、枕元に風呂敷に衣服を畳んだものを置いて就寝していた。地震が来たら、すぐさま戸を開けていた。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、片岸地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-94 片岸地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
天照御祖神社境内	唐丹町字片岸の一部

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-95 片岸地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
唐丹中学校体育館	唐丹町
唐丹小学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される隣接する内陸の地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-96 片岸地区における避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数
片川集会所（川目）	1 階	70 人

※隣接する唐丹字川目の一部については、避難対象地域となっているが、一時避難場所の対象地域にはなっていない。

※片岸地区内には、避難者収容施設は所在していない。

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

設立されていなかった。

イ) 避難訓練

表 5-97 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
43 人（15%）	対象地区：片岸 ／人口：288 人

(5) 施設等の備え・避難先等の決めごと

（新規情報は、特になし。）

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第 8 分団第 5 部

- 急いで水門を閉めに水門へ向かう。
- 唐丹駅前バス停留所にて、消防の方々は既に水門を閉めて様子を見ていた。
- 胸まで水に浸かって助けを待っている高齢女性を救助
- 唐丹駅に津波が襲来した時に、「もっと上に上がれ！」と叫ぶ

第5項 荒川地区（荒川・下荒川）

1 被災状況

表 5-98 荒川地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
荒川 下荒川 上荒川	342 人	125 世帯	4 人	全壊 28 件	半壊 3 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

荒川地区において、津波記念碑に類するものの存在は現在のところ確認できていない。

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 昔の人からは、「津波が来るときは揺れ返しがくるから、地震が小さくても逃げろ」と言われていたことを思い出します。（千年後への伝言）
- 幼い頃に普段から祖母に 2 回大きな揺れがあったら必ず恐ろしい津波が来るから逃げろと言われていた。（千年後への伝言）
- 「津波までは時間があつたのに……」とも思ったのですが、昭和八年の唐丹の津波の際に位牌を取りに戻った人がほとんど流されたということを知っていたのを思い出し、これで良かったのだと思うことにした。（千年後への伝言）
- 昔は“家”というのを大事にしていたから、「家を途絶えさせないために親子であろうとてんでに逃げる」という話（てんでんこ）を聞かさ

れていた。

- 過去の津波の浸水域等の言い伝えはあったが、今回はここまで来ないだろうとの思い込みから避難行動を鈍らせる結果となった。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、荒川地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-99 荒川地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
熊野神社境内	唐丹町字下荒川の一部
荒川消防屯所	

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-100 荒川地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
唐丹中学校体育館	唐丹町
唐丹小学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される荒川地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-101 荒川地区における避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数
荒川集会所（上荒川）	1 階	150 人
荒金集会所（上荒川）	1 階	20 人

※荒川地区の一次避難場所の対象地域はいずれも下荒川の一部のみが対象となっているが、避難対象地域は下荒川のほか、荒川の一部、上荒川の一部も含まれる。

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

荒川地区の自主防災組織は、「荒川町内会防災部会」が平成9年2月23日に設立された。

- 活動地域は唐丹町字荒川・上荒川・下荒川で、メンバーは荒川町内会加入世帯でもって構成されている。
- 組織編成は、防災部長、防災副部長、防災部事務局、防災部会計、会計監査、防災本部、情報班、消火班、避難誘導班、救出救護班、給食給水班となっており役割分担が決まっていた。
- 「荒川町内会防災部会規約」によると、
 - ・防災に関する知識の普及に関すること
 - ・地震等に対する災害予防に関すること
 - ・地震等の発生時における情報の収集伝達、初期消火、救出救護、避難誘導等応急対策に関すること
 - ・防災資機材等の整備に関すること
 - ・その他本防災部会の目的を達成するために必要な事項が実施事業として定められていた。
- 平成14年度には補助金で次の資機材を購入している。消火器、FRP消火器格納箱、災害多人数用救急箱、ワンタッチ担架、ヘルメット、腕章、組立式テント、折畳式リヤカー、毛布、発電機、ガソリン携

行缶、ハロゲン投光器セット、コードリール、防水シート、トラロープ、訓練用消火器、ミニエアコンプレッサー

- 震災前まで行って来た訓練の内容としては、次のような記録が残っている。
- 平成 14 年 11 月 17 日、荒川地区集会所で、計 26 人参加により、初期消火訓練、今年度配備の防災資機材の説明、心肺蘇生法実技等の訓練を実施した。
- 平成 18 年 6 月 25 日、平成 19 年 6 月 24 日（計 50 人参加）、平成 20 年 11 月 30 日、平成 21 年 6 月 21 日（計 25 人参加）には、初期消火訓練、消火器・AED の使用法、家具の転倒防止、住宅用火災警報器、土砂災害防止月間等の訓練を実施した。（平成 21 年は雨天により初期消火訓練を縮小する形で実施）

イ）避難訓練

表 5-102 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
53 人（15%）	対象地区：荒川・下荒川・上荒川 ／合算人口：342 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア）消防団第 8 分団第 6 部

- 積載車で水門閉鎖をした。住民にはすぐ高台に避難するようマイクで何回も叫んだ。一人暮らしの方・海岸に近い家々を回り、声をかけ

る。

- 波が襲ってくる前に国道沿いに避難させた。幸い誘導中は無事故だった。
- 当日、三鉄唐丹駅近くで建物車両火災が発生し消火活動
<12日以降>
- 部では3月11日から4月のはじめまで、屯所に宿直当番、日中の当番、夜間の見回り等、交替で行った。

イ) 荒川町内会防災部会

- 東日本大震災後のアンケートには、当時の状況や自主防災組織の対応について次の記述がある。
 - ・孤立した。
 - ・避難所運営、食料の持ち寄り・炊き出し、けが人の救出や手当、行方不明者や遺体の搜索、道路復旧作業、がれきの撤去、救援物資の配布、行政との連絡・要望等、地域内パトロール、名簿作成、その他（ガソリン他生活必需品の確保）
 - ・避難所運営サポート、寝具、食料等差し入れ、炊き出し、被災者の自宅等への受入れ（受入れ10軒、34人）
 - ・炊き出し。道路などライフラインの確保作業。人命救助。搜索活動

第6項 大石地区（大石・向・屋形）

1 被災状況

表 5-103 大石地区の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数 (平成 23 年 2 月現在)		大震災の被害		
			犠牲者数 (平成 25 年 1 月 22 日)	全壊・半壊家屋数 (平成 25 年 6 月現在)	
大石 向 屋形	122 人	52 世帯	0 人	全壊 12 件	半壊 6 件

2 震災以前の地域の伝承・備え

(1) 津波記念碑

大石地区において、津波記念碑に類するものの存在は現在のところ確認できていない。

(2) 津波に関する地域の伝承・意識、家族間等での決めごと

- 祖母から津波時の避難経路を教わっていたが、自分の娘には話していませんでした。（千年後への伝言）
- 林業センターに避難していた年配の方が、「明治の津波の時も同じような大きい音がした（沖の方からドーン、ドーンとすごい音）」と言ったので、避難所より安全な高台へ避難を開始しました。（千年後への伝言）
- 明治三陸津波・昭和三陸津波の話を聞いており、津波に対する危機感があつた。多くの住民が、少しでも高い場所に逃げるという意識を持っていた。

(3) 市指定の避難場所他と対象地域

市地域防災計画によると、大石地区における一次避難場所（火災のみは除く）及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-104 大石地区における一次避難場所及びその対象地域

一次避難場所	対象地域
大石地域交流センター広場	唐丹町字向の一部 唐丹町字大石の一部 唐丹町字屋形

また、避難が長期化することを想定した場合の拠点避難所及びその対象地域は、次の表のとおりである。

表 5-105 大石地区における拠点避難所及びその対象地域

拠点避難所	対象地域
唐丹中学校体育館	唐丹町
唐丹小学校体育館	

拠点避難所の収容能力を上回る状況になった時に開設される大石地区の避難者収容施設は、次の表のとおりである。なお、平成 22 年度に釜石市が策定した「釜石市津波避難計画」の避難者収容施設にも記載があった施設を載せている。

表 5-106 大石地区における避難者収容施設

避難者収容施設（地区名）	階数	収容人数
大石地域交流センター（大石）	1 階	20 人

(4) 地域の備え—自主防災組織と避難訓練

ア) 自主防災組織

設立されていなかった。

イ) 避難訓練

表 5-107 避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月実施）

避難訓練参加者数・参加率	震災前の人口（平成 23 年 2 月現在）
63 人（52%）	対象地区：大石・向・屋形 ／合算人口：122 人

3 震災時の地域の動きと避難行動

(1) 住民（個々人・家族等）の行動

検証報告書【津波避難行動編】と第 4 章を参照のこと

(2) 消防団・自主防災組織を中心とした地域の動き

ア) 消防団第 8 分団第 4 部

- ラジオを持って消防屯所へ行った。消防車を海岸に置き、見回りをした。ラジオから「4 m の津波が来る。」と聞こえたので、すぐに消防車を屯所に上げた。
- 消防車を下に下げて警戒に当たる途中、防災無線で津波 3 m の放送が有った。林業センターが避難所だったので、鍵を持っていた自分が施設を開放したが、避難してきた人たちは中に入らずに外で波の状態を見ていた。この避難場所から海岸に行く途中で、2 回ドーンドーンと大砲が鳴ったような音が聞こえた。大きな津波が来る時はそういう音がすると親から聞いていた。海岸に下りて行こうとする人を制止し

て、海岸において警戒に当たっていた時、防浪堤先端で潮が渦巻き始め、潮がフッと引いたあとすぐ上がり始めて防浪堤を一気に越えた。海岸に待機していた消防車をすぐ上の方にあげた。

- 3名を屯所へ避難させる。
- 住民の方々を避難所（林業センター）に誘導した後、そこで年配の方の進言があり、更に高台へ避難した。
- 海面観察をしながら高台への避難誘導、家々の避難確認、年配者や歩行困難者を手伝いながら避難所の交流センターに誘導。発生時に大石にいた住民全員が無事避難を終えた。
- 屯所から津波の様子を見る。
- 避難の呼びかけ
- 林業センター付近の住人を高台の自宅へ避難させている時に、家の隙間から波が来たので、更に上の屯所へ避難した。屯所から、年配の方をもっと上の交流センターに避難させた。
- 団員や町内会の人々と共に寒い避難所の石油ストーブ・毛布・ローソク等々の準備をし、水道を使えるようにし、電気の無い余震の中ラジオ等で情報を確認し、海面観察を続けながら交替で夜間の見回りや避難所の人たちの手伝いをした。
- 旧道を通り大石に着き、消防団の準備をして家族を避難させ、屯所へ向かう。大石地域交流センター（避難所）と屯所を行き来しながら動き回。婦人部からの炊き出しのおにぎりをいただく。夜はポンプ車内で過ごす。
- 無線で消防署、本部を呼び出したが応答せず。花露辺だけが応答に答えてくれたがここも大石と同じ状態で他の状況がわからなかった。

<12日以降>

- 午前2時半頃みんなが仮眠していたが、住人1人を連れ、荒川までの道路を見に行った。地震で道路には石が崩れ落ちていてそれを避けながら進んだが、電柱が横になっていてそれ以上は車で進めず引き返した。夜が明けてから、消防団員、或いは町内会で行ける人たちを募り、3、4人で道路の確保に行った。道路は午前中で通れるようになり、次に片岸や小白浜の状況を見に行った。唐丹公民館に被害状況の報告をする。2、3日後から支援物資が届くようになり、町内会で分配した。

- 消防団で国道へ出る道作り。そして、避難所の人々の世話、家族の様子を見ながら1日中動き回った。
- 12日以降、荒川のがれきで遮断されていた道路をみんなで通れるようにするなど、各所の地震被害を自分たちで可能な限り維持活動をした。

根 拠 資 料 一 覧

- (1) 証言・証言集・インタビューに関する根拠資料
- (2) 石碑・伝承・自主防災会・消防団等に関する主な根拠資料

1 証言・証言集・インタビューに関する根拠資料

【凡例】

※ 各資料の冒頭番号は、検証報告書【津波避難行動編】の 2. 根拠資料一覧に掲載した末尾資料番号に連続する番号である。

2.21 東日本大震災・津波体験集 3.11 その時、私は 第三集

1) 実施主体

釜石・東日本大震災を記録する会

2) 発行年月

平成 26 年 3 月 11 日

3) 概要

対 象：「大震災・津波体験を書き残しておきませんか」（釜石・東日本大震災を記録する会）の呼び掛けに応じて寄せられた 35 編

目 的：「大地震の風化を防ぎ、語り継がれる資料となることを願い、後世の人々への警鐘」とすること。（p2～3『はじめに』より抜粋）

内 容：東日本大震災の体験についての自由記述

4) 引用または参考とした箇所

- | | |
|------------|----------|
| ・ p16～19 | 桑の浜 |
| ・ p19～22 | 中妻 |
| ・ p24～29 | 小槌（大槌町） |
| ・ p36～40 | 鈴子 |
| ・ p44～58 | 吉浜（大船渡市） |
| ・ p73～77 | 鵜住居 |
| ・ p89～92 | 鵜住居 |
| ・ p95～98 | 中妻 |
| ・ p103～106 | 尾崎白浜 |
| ・ p116～118 | 東前 |
| ・ p119～121 | 嬉石 |
| ・ p122～127 | 市内（病院） |
| ・ p128～130 | 大只越 |
| ・ p134～135 | 御社地（大槌町） |
| ・ p136～138 | 只越 |
| ・ p138～141 | 市内 |

2.22 未来へ語り継ぐ証言 東日本大震災・大津波

1) 実施主体

岩手県老人クラブ連合会

2) 発行年月

平成 25 年 9 月 17 日

3) 概要

対 象：岩手県老人クラブ連合会が募集した体験記 50 編

目 的：「後世のためにその様子を記録しておくので、遺言はもちろんのこと、折に触れてはこの記録を朗読して、譬えとして孫や曾孫に語り伝え、くれぐれもこの時の惨状を忘れることのないよう気をつけてほしい」
(p152『編集後記』より抜粋)

内 容：東日本大震災の体験についての自由記述

4) 引用または参考とした箇所

- ・ p29～34 松原
- ・ p118～122 只越
- ・ p131～135 浜町

2.23 東日本大震災の教訓

1) 著者

村井俊治

2) 発行年月

平成 23 年 8 月 10 日

3) 概要

対 象：生存者

目 的：「子孫に教訓として記録に残すのが目的である。」 (p i『はじめに』より抜粋)

内 容：生存者がテレビ、新聞、雑誌、インターネットで語った話を参考にまとめたもの。

4) 引用または参考とした箇所

・ p6～7	市内
・ p9～10	鵜住居
・ p10～11	大渡
・ p31～32	浜町
・ p35	平田
・ p51～52	大町
・ p77～81	港町
・ p84～85	市内
・ p118～119	鈴子

2.24 3・11 慟哭の記録

1) 実施主体

東北学院大学 震災の記録プロジェクト

2) 発行年月

平成 24 年 2 月 20 日

3) 概要

対 象：大震災の体験者

目 的：「被災者同士、そして被災者と全国および世界の方々をつなぐ希望の
架け橋となり、東北復興のひとつの試みとなるとともに、地震国日本
から発信する震災研究として学問的寄与を果たすことを切に願って」
(p iii 『出版に寄せて』より抜粋)

内 容：東日本大震災の体験についての自由記述

4) 引用または参考とした箇所

・ p259～269	鈴子
・ p270～275	浜町
・ p276～280	上中島

2.25 つなみ 被災地の子どもたちの作文集

1) 実施主体

文藝春秋

2) 発行年月

平成 24 年 6 月 15 日

3) 概要

対 象：保育園児・幼稚園児・小学生・中学生・高校生

目 的：「いかにこの地震と津波の凄まじさや怖さを伝えるか。それを考えたとき、『子供の眼』つまり震災を体験した子供たち自身の手で作文を書いてもらうことこそ一番ではないかと思いついた。」（p 3『「つなみ」完全版に寄せて』より抜粋）

内 容：東日本大震災の体験についての作文

4) 引用または参考とした箇所

- ・ p138～143 鵜住居
- ・ p153～154 鵜住居
- ・ p154～155 鵜住居
- ・ p157～158 鵜住居

2.26 未来へ伝える 私の 3.11 語り継ぐ震災声の記録①

1) 実施主体

IBC 岩手放送

2) 発行年月

平成 25 年 8 月 9 日

3) 概要

対 象：手記「未来へ伝える～私の 3.11」の寄稿の呼び掛けに応じて寄せられた 31 編

目 的：「辛い思いを後世の人たちに味わせたくない」（p10『はじめに』より抜粋）

内 容：東日本大震災の体験についての寄稿

4) 引用または参考とした箇所

- ・ p131～133 市内
- ・ p134～136 鵜住居
- ・ p137～138 大槌町
- ・ p139～143 鵜住居
- ・ p144～147 市内
- ・ p150～152 甲子

- ・ p157～160 松原
- ・ p161～164 市内
- ・ p165～168 甲子
- ・ p172～175 魚河岸

2.27 証言記録 東日本大震災Ⅱ

1) 実施主体

NHK 東日本大震災プロジェクト

2) 発行年月

平成 26 年 2 月 25 日

3) 概要

対 象 : NHK の取材を受けた証言者

目 的 : 「この番組の証言が、いつか来る大震災のときに被災を少しでも防ぐ
助けになることを、そして、被災地の人たちにとって少しでも前に進
む力となってくれること」 (p517-518『おわりに』より抜粋)

内 容 : 東日本大震災の体験についての取材に対する証言

4) 引用または参考とした箇所

- ・ p14～40 箱崎
- ・ p152～155 市内

2.28 東日本大震災アーカイブス 明日へ～支えあおう～

1) 実施主体

NHK 東日本大震災プロジェクト

2) URL

<http://www9.nhk.or.jp/311shogen/>

3) 概要

2.27 証言記録 東日本大震災Ⅱの概要と同じ。

2（石碑・伝承・自主防災会・消防団等に関する主な根拠資料）

※ 検証報告書【津波避難行動編】根拠資料と一部重複

〔津波記念碑〕

- ・国土交通省「津波被害・津波石碑情報アーカイブ」
(<http://www.thr.mlit.go.jp/bumon/b00045/road/sekihiyouhou/index.html>)
- ・平成 25 年度 津波浸水域の石碑現況調査
- ・「釜石の石碑」釜石市教育委員会

〔市指定の避難場所他と対象地域〕

- ・「釜石市地域防災計画」（平成 22 年度）

〔避難訓練〕

- ・「釜石市東日本大震災検証報告書（案）【津波避難行動編】」平成 26 年 3 月、釜石市

〔地域の動き〕

- ・「東日本大震災消防課消防団係資料（修正後）」釜石市
- ・「東日本大震災－釜石市消防団活動記録 ふるさとを守る」釜石市消防団
- ・「震災の記録 東日本大震災 次の世代へ」大石町内会
- ・「千年後への伝言 唐丹町の人々が伝えつなぐ大津波の記録」唐丹の歴史を語る会・唐丹公民館
- ・「岩手県釜石市片岸地区東日本大震災に関わる聞き取り調査報告書」都留文科大学
- ・「岩手県釜石市片岸地区東日本大震災に関わる聞き取り調査報告書」都留文科大学
- ・2011 年 8 月 17 日付朝日新聞記事
- ・被災者の声映像化事業（消防団団員）

〔施設〕

- ・「釜石市__5. 養援護者支援施設の避難実態 東日本大震災発生時の各施設における避難行動等の調査（高齢介護福祉課）」釜石市

- ・「釜石市__東日本大震災発生時の各施設における避難行動等の調査（地域福祉課）__平成 25 年 11 月 28 日」釜石市
- ・「釜石市__20113. 11 保育園幼稚園等児童施設の避難行動調査 ver2」釜石市
- ・「岩手県内における自主防災組織の現状と将来可能性」に関わるアンケート調査より、伊香歩美、2013 年岩手大学

〔自主防災組織〕 ※市の内部資料を含む。

- ・「自主防災組織の現況（平成 25 年 7 月 25 日現在）」
- ・「東日本大震災影響調査アンケート」釜石市自主防災会連絡協議会
- ・「自主防災組織に関するアンケート」
- ・「自主防災組織育成助成事業補助金交付団体一覧表」
- ・「平成 25 年度釜石市自主防災会連絡協議会総会意見交換結果概要 H26. 7. 25」
- ・「釜石市東日本大震災検証報告書（案）【津波避難行動編】」平成 26 年 3 月、釜石市
- ・「東前町内会自主防災部会規約」
- ・「浜町 3 丁目連合町内会自主防災会規約（案）」
- ・「尾崎町町内会自主防災会規約」
- ・「港町日の出通り振興組合自主防災会規約」
- ・「大渡町内会自主防災会規約」
- ・「鈴子町内会自主防災会防災計画」
- ・「松原町防災会規約」
- ・「松原町自主防災会規約」
- ・「松原町内会自主防災会の概要について」平成 21 年 8 月
- ・「自主防災活動研修会の開催結果について（報告）」平成 21 年 8 月
- ・「上平田ニュータウン町内会自主防災規約」
- ・「上平田ニュータウン町内会 自主防災会組織と任務分担」
- ・「上平田ニュータウン町内会自主防災会の防災訓練実施結果について（平成 12 年 11 月 13 日付）」
- ・「上平田ニュータウン町内会自主防災組織防災訓練実施結果について（平成 13 年 10 月 29 日付）」
- ・「上平田ニュータウン町内会自主防災組織防災訓練実施結果について（平成 15 年 2 月 24 日付）」
- ・「平田町内会自主防災会防災計画」

- ・「上平田町内会自主防災会規約」
- ・「尾崎白浜町内会自主防災会防災計画」
- ・「尾崎白浜町内会自主防災会規約」
- ・「佐須町内会自主防災会規約」
- ・「鵜住居町仲町内会自主防災組織」
- ・「新田・神の沢町内会自主防災規約」
- ・「平成 15 年度 火災防備訓練実施計画書（案）」
- ・「長内自主防災会会則」
- ・「長内自主防災会防災計画」
- ・「鵜住居上町内会自主防災会規約」
- ・「鵜住居町上町内会自主防災会防災計画」
- ・「鵜住居町川原町内会自主防災会規約」
- ・「鵜住居町川原町内会自主防災会防災計画」
- ・「鵜住居町川原町内会自主防災会発足式への出席について（報告）」
- ・「鵜住居町川原町内会自主防災会防災訓練の開催結果について（報告）」
- ・「根浜親交会防犯防災部（自主防災）の規約」
- ・「両石町自主防災組織規約」
- ・「両石町自主防災組織防災計画」
- ・「片岸町自主防災会規約」
- ・「室浜自主防災会規約」
- ・「室浜自主防災会役員来庁について（報告）」平成 22 年 10 月 18 日
- ・「白浜町内会自主防災部規約」
- ・「仮宿町内会自主防災会規約」
- ・「箱崎町自主防災会規約」
- ・「箱崎町自主防災会防災訓練の結果について（報告）」
- ・「唐丹町駐在所連絡協議会会則」
- ・「荒川町内会防災部会規約」
- ・「荒川町内会自主防災会主催の防災訓練への職員の派遣について（依頼）」平成 18 年 6 月
- ・「荒川町内会防災部自主防災訓練の開催結果について（報告）」平成 19 年 6 月
- ・「荒川町内会自主防災部主催 防災訓練の開催結果について（報告）」平成 21 年 6 月

釜石市東日本大震災検証報告書【地域編】
(平成 26 年 度 版)

2015 年 3 月 発行

釜石市

〒026-8686 岩手県釜石市只越町 3 丁目 9 番 13 号
TEL (0193) 22-2111 (代表)
